45-37

法醫學大成

奧國維也納大學教授醫學博士甫布滿氏原著
日本醫科大學教授醫學博士片山國嘉譯述

明治二十九年刊行
秋南書院藏梓

第四冊

法醫學大成下卷第壹册　目次

第四章　暴力的健康傷害及暴力的致死

法律上ノ規定

第一　狹義ノ損傷ニ因スル健康傷害及暴力的致死

(甲)　損傷ヲ生シタル器具ノ確定

(一)　鈍器或ハ鈍稜器ヲ以テセル損傷

(イ)　皮膚剝傷　一丁

(ロ)　皮下溢血　一丁

(ハ)　創傷　二十三丁

(ニ)　重要ナル神經中樞ノ震盪　二十三丁

(ホ)　內臟ノ破裂　二十四丁

(ヘ)　骨ノ斷裂及轉位　二十五丁

(ト)　局處全部ノ摧爛及扯裂　三十丁

(二)　切創及割創　三十八丁

(三)　刺創　三十八丁

四十三丁

四十五丁

四十七丁

五十一丁

自殺　百九十丁
血痕ノ檢查　二百四十七ノ
毛髮ノ檢查　二百七十七丁

法醫學大成下卷第壹冊目次了

（二）損傷ト最近死因トノ區別　百四十四丁
（a）生活時損傷及死後損傷ノ區別　百五十丁
（b）死ノ死因ノ除外　百五十五丁
（三）最近ノ死因　百五十五丁
致死的傷害　百五十五丁
（A）獨逸刑法及奧國改正刑法第百五十六條ノ加重情狀　百五十六丁
（B）獨逸刑法及奧國改正刑法第百五十六條ノ加重情狀ノ意義ニ於ケル非致死的傷害　百五十六丁
法醫學上ノ意義ニ於ケル非致命的傷害ノ法醫學上判定　百五十七丁
（四）統論　百五十七丁
（乙）刑法上ノ意義ニ於ケル非致命的傷害ノ種別　百五十八丁

法醫學大成

埃國維也納府大學教授醫學博士　甫布滿氏原著

日本帝國醫科大學教授醫學博士　片山國嘉譯述

第四章　暴力的健康傷害及暴力的致死

Die gewaltsame Gesundheitsbeschädigung und der gewaltsame Tod.

埃國刑法

第百三十四條　人ヲ殺スノ意ヲ以テ其人若クハ他人ヲ死ニ致シタル者ハ其結果單ニ被害者ノ個人的性質ニ基因シ又ハ特ニ其所爲アリタル時ノ偶然ノ情況ニ基因シ又ハ特ニ偶然生起シタル中間事由ニ基因スト雖モ之ヲ要スルニ該所爲ニ由テ之ヲ招キタルモノナルトキハ謀殺ノ罪ヲ犯シタルモノトス

第百四十條　人ヲ死ニ致シタルノ所爲第百三十四條之ヲ殺スノ意ニ出デザルトモ別ニ敵意ヲ含ミテ犯シタルトキハ其罪ヲ故殺トス

埃國刑法中殺傷ニ關スル條項

第百四十三條　數人間ニ於テ起リタル鬪毆若クハ一人又ハ數人ニ對スル暴行ニ因テ人ヲ死ニ致シタルトキハ之ニ致死ノ傷害ヲ加ヘタル者各自故殺ノ罪アリトス、然レドモ致死ノ原因單ニ總テノ傷害又ハ暴行ノ綜合ニ在ルトキ若クハ何人ノ致命傷ヲ加ヘタルヤヲ決シ難キトキハ故殺ヲ以テ論セズ被殺者ニ手ヲ下シタル者ヲ悉ク重キ身體傷害ノ罪トシテ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百五十二條　人ヲ殺スノ意アラザルモ別ニ敵意ヲ含ミテ之ヲ毆ヒ爲メニ二十日以上ニ渉リテ健康ヲ障害シ若クハ職業ヲ營ムコト能ハザラシメ、精神病ヲ發シ若クハ重ク之ヲ障害シタルノ所爲アル者ハ重キ身體傷害ノ罪ヲ以テ論ス

第百五十三條　實父母若クハ教師證人又ハ鑑定人ニ對シ其職ヲ行フノ際若クハ其職ヲ行フガ爲メニ故意ヲ以テ身體ヲ傷害スル者ハ第百五十二條ニ記スル條件ヲ具備セザルモ仍ホ本罪ヲ以テ論ス

第百五十四條　第百五十二條及第百五十三條ニ規定スル罪ノ刑ハ六月以上一年以下ノ禁錮トス但シ情狀重キニ於テハ增シテ五年ニ至ルコトアルベシ

第百五十五條　若シ

(イ)傷害ハ輕易ナルモ通常致命ノ虞アリトスル兇器及手段ヲ以テシ若クハ其他ノ手段ニ依リ第百五十二條ニ記スル重キ結果ノ一ヲ招致スヘキ意ニ出デタルコトヲ證明スルトキ但シ豫備ニ止マルモ亦同シ又ハ

(ロ)傷害ニ依リ三十日以上ノ健康障碍若クハ營業休止ヲ招致シタルトキ又ハ

(ハ)被傷者ノ特ニ痛苦ヲ感スベキ所爲アリタルトキ又ハ

(ニ)他人ト共謀シ若クハ奸計ヲ以テ要擊シ因テ第百五十二條ニ記スル結果ノ一ヲ生シタルトキ又ハ

(ホ)重キ傷害危篤ニ陷リタルトキ

ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百五十六條　若シ犯罪ニ由リ

(イ)被害者ニ言語視聽ノ喪失若クハ永ク其滅耗ヲ招キ、生殖機能、一眼、一肢又ハ一手ノ亡失若クハ他ノ顯著ナル不具畸形ヲ誘致シタルトキ又ハ

(ロ)永キ羸弱不治ノ疾病若クハ治癒ノ見込ナキ精神病ヲ誘起シタルトキ又ハ

(ハ)被傷者ノ永キ營業不能ヲ生起シタルトキ

ハ重禁錮ノ刑ハ五年以上十年以下トス

第百五十七條　數人間ニ發生シタル鬪毆若クハ一人又ハ數人ニ對スル暴行ニ於テ重ク身體ヲ傷害セラレタル者アルトキ(第百五十二條ハ此等ノ傷害ヲ加ヘタル所ノ各人ハ前記第百五十四條ヨリ第百五十六條ニ至ル諸條ニ據リ處斷ス然レドモ其重キ身體傷害ノ特ニ數人ノ加害若クハ暴行ノ綜合作用ニ因由シ又ハ何人カ此等ノ傷害ヲ加ヘタルヤヲ證明シ能ハサルトキハ被害者ニ手ヲ下シタル者ハ悉ク重キ身體傷害ノ罪アリトシ六月以上一年以下ノ禁錮ニ處ス」

第百五十八條　事由ノ何タルヲ問ハス人ヲ兇器ヲ用井ル鬪爭ニ挑發スル者及此等ノ挑發ニ應スル者ハ決鬪ノ罪ヲ犯スモノトス

第百五十九條　此罪ハ負傷ヲ生セサルトキハ一年以下ノ禁錮ヲ以テ處斷ス

第百六十條　決鬪ニ於テ負傷アリタルトキノ刑ハ一年以上五年以下ノ禁錮トス但シ決鬪ニ由リ第百五十六條ニ記スルガ如キ結果ヲ生シタルトキハ五年以上十年以下ノ重禁錮ヲ以テ處斷ス

第百六十一條　決鬪ニ由リ其一人ノ死ヲ致シタルトキハ殺害者ハ十年以上二十年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十五條　人ノ生命健康若クハ身體ノ安全ニ危害ヲ誘起シ若クハ增大スヘキ諸行爲又ハ怠慢ニシテ其犯者カ何人ニモ容易ニ辨識シ得ラルヘキ自然ノ結果若クハ特ニ公布セラレタル規則若クハ其身分、職務、職業、生業、操業要スルニ其特殊ノ關係ニ據リ然ル所以ヲ察知シ得ヘキモノナルトキ若シ之ニ因リ人ノ重キ身體傷害(第百五十二條)ヲ生起スレハ該犯者ヲ違警罪トシテ一月以上六月以下ノ拘留ニ處シ若シ之ニ由リ人ヲ死ニ致ストキハ輕罪トシテ六月以上一年以下ノ重拘留ニ處ス

第三百三十六條　本條ニハ此等特殊ノ事項ヲ列記ス、又第三百四十一條及第三百四十二條(乘馬及行車ノ馳走、第三百七十二條(禁制兵器ノ製造、第三百七十三條(裝塡銃器格納ノ怠慢、第三百七十六條及第三百七十八條(幼兒監護ノ怠慢、第三百八十條(建築工事ノ際警標設置ノ怠慢)、第三百八十二條及第三百八十四條(建物及機架等ノ崩壞、第三百八十七條乃至第三百九十二條(動物ニ因由スル損害、第四百二十四條及第四百二十五條(夜間街路ノ妨礙、第四百二十六條(窓等ヨリ顚墜スル物體ニ因由スル損害亦同シ

第四百十一條　故意ニ出テ及毆打ノ際ニ生起シタル身體ノ傷害ニシテ重ク處斷スヘキ所爲(第百五十二條)ヲ認メサルモ少クトモ目視スヘキ徵候及結果ヲ貽スモノナルトキハ違警罪トシテ之ヲ處斷ス

第四百十二條　違警罪ノ刑ハ所爲ノ危險及兇惡ノ度ニ準據シ就中習慣關聯者ニ在リテハ再犯ノ度數被害ノ大小及被害者ノ特質ニ準據シテ三日以上六月以下ノ拘留トス

第四百十三條ヨリ第四百二十一條ニ至ル諸條モ亦之ニ屬ス即チ父母ノ其子女ニ於ケル、後見人ノ其被後見人ニ於ケル、一方ノ配偶者ノ他ノ配偶者ニ於ケル、數育者及教員ノ其被數育者及生徒ニ於ケル、授職者ノ其徒弟ニ於ケル及儲主ノ其傭人ニ於ケル如キ家族的懲治ノ虐待ニ關スルモノ是ナリ

墺國刑法草案

第二百十九條　故意ヲ以テ人ヲ殺ス者若シ同一ノ激昂ニ際シ殺意ヲ決定シ且ツ實行スルトキハ故殺ノ罪ヲ犯スモノトス、故殺罪ノ刑ハ三年以上十五年以下ノ徒刑若クハ三年以上ノ禁錮トス

犯者ノ自ラ招ク所ニ非ズシテ被殺者ノ爲メニ自己若クハ近親ノ人ニ暴行又ハ重キ侮辱ヲ加

ヘラレ因テ恐怒ヲ激發シ現場ニ於テ此罪ヲ犯セシトキハ一年以上ノ禁錮ニ處ス

第二百二十一條　被殺者ノ明確且ツ眞實ナル希望ニ因リ之ヲ殺ス者ハ二年已上ノ禁錮ニ處ス

第二百二十三條　若シ第二百十九條乃至第二百二十二條ニ記載スル場合一モ之アルニアラズシテ故意ニ人ヲ殺ス者ハ謀殺ノ罪ヲ犯スモノトス、謀殺ノ刑ハ死刑トス

第二百二十八條　自助ノ力ナキ人ヲ放棄スル者或ハ其保護ヲ爭リ又ハ其居住輸送收容ヲ處辨スベキ者ニシテ自助ノ力ナキ人ヲ斯ノ如キ情狀ニ委却スルトキハ三月以上ノ禁錮ニ處ス（中畧）

此所爲ニ因リ放棄若クハ遺却セラレタル人ノ重キ身體傷害ヲ生起シタルトキハ十年以下ノ徒刑ニ處スルコトヲ得若シ其所爲ニ因リ死ニ致シタルトキハ十五年以下ノ徒刑若クハ二年以上ノ禁錮ニ處ス

第二百二十九條　意慢ニ因リ人ヲ死ニ致ス者ハ三年以下ノ禁錮若クハ二千「フロリン」以下ノ罰金ニ處ス

若シ犯人其職務職業又ハ營業ニ依リ特ニ義務ヲ有スル所ノ注意ヲ懈怠シタルトキハ五年以下ノ禁錮ヲ宣告スルコトヲ得

第二百三十條　他人ニ對シテ暴行シ若クハ身體又ハ健康ヲ障害スル者ハ身體傷害ヲ以テ論シ六月以下ノ禁錮若クハ五百「フロリン」以下ノ罰金ニ處ス

第二百三十一條　左ノ場合ニハ身體傷害ノ刑ヲ禁錮トス

一、傷害ノ結果一週間以上繼續スル健康障害若クハ休業ノ生起シ又ハ特ニ痛苦ヲ加ヘタルトキ

二、兇器ヲ以テ身體ヲ傷害シ若クハ生命ノ危險トナルコトアルベキ情狀ニ於テ犯罪シタルトキ

三、尊系親屬ニ對シテ犯罪シタルトキ

第二百三十二條　身體傷害ノ結果被傷者ノ一聲、一手、一脚、一足、一眼若クハ兩眼ノ視能聽能言語又ハ生殖機能ヲ亡失シ若クハ贏弱痲痺又ハ精神病ニ陷リ若クハ永ク不具畸形ヲ生スルトキハ重キ身體傷害トシテ一月以下ノ禁錮ヲ以テ處斷ス

第二百三十三條　若シ第二百三十二條ニ記スル結果ノ一ヲ招致スヘキ故意ニ出テ身體ヲ傷害スルトキハ十年以下ノ徒刑若クハ六月以上ノ禁錮ニ處ス

第二百三十四條　身體傷害ノ結果被傷者ヲ死ニ致ストキハ致死傷害ノ罪トシテ十五年以下ノ徒刑若クハ十年ニ下ラサル禁錮ニ處ス

第二百三十六條　鬪毆ニ由リ又ハ數人ノ暴行ニ由リ一人ヲ死ニ致シ若クハ第二百三十一條第一號及第二百三十二條ニ記スル結果ノ一ヲ生起スルトキハ鬪毆又ハ暴行ニ關與シタル者ハ單ニ其關與ノ故ヲ以テ各三年以下ノ禁錮ニ處ス

此規定ハ左ニ記スル者ニ之ヲ適用セズ

一、自ラ招ク所アルニアラズシテ鬪毆ニ混入シタル者

二事ヲ圖畧ヲ止メントノ目的ヲ以テ行動シタル者

三傷害ヲ受ケタル者

前記結果ノ一ヲ幾多ノ暴行ニ起因スルモノト認ムベクシテ一々之ヲ判明スル能ハズ特ニ其綜合ニ因リ生起シタルモノナルトキハ此等暴行ノ一ノ責アル者ヲ各一月以上ノ禁錮ニ處ス」

第二百三十八條　怠慢ニ依リ人ノ身體若クハ健康ヲ傷害スル者ハ過失傷害ノ罪トシテ三月以下ノ「フロリン」以下ノ罰金ニ處ス

過失傷害ニシテ第二百三十一條第一號及第二百三十二條ニ記スル結果ノ一ヲ招致スルトキハ二年以下ノ禁錮若クハ一千「フロリン」以下ノ罰金ヲ宣告スベシ犯者若シ其職務職業又ハ工業ノ爲メニ特ニ義務アル所ノ注意ヲ怠リタルトキハ三年以下ノ禁錮ニ處スルコトヲ得

第二百三十九條　凡ソ暴行及身體傷害ノ塲合ニハ被害者ノ請求ニ依リ刑ノ外被害者ニ付與スベキ三千「フロリン」以下ノ賠償ヲ科スルコトヲ得

第二百四十條　凡ソ第二百三十一條第三號及第二百三十八條第一段ニ記スル犯罪ハ特ニ告訴ニ依リ訴追ニ着手ス

第二百三十一條　第三號ニ記スル輕罪ハ特ニ告訴ニ依リ訴追ス

第二百四十一條　本章ノ規定ハ懲戒權ノ踰越ニモ之ヲ適用ス

第二百四十七條　違法ニ人ヲ監禁シ若クハ其他ノ方法ヲ以テ人身ノ自由ヲ拘束スル者ハ禁錮又ハ五百「フロリン」以下ノ罰金ニ處シ若シ自由ノ奪却一週日ヲ超過スルトキハ一月ニ下ラザル禁錮ニ處ス

自由ノ奪却三月ヲ超過シ若クハ自由ノ奪却ニ由リ又ハ其間ノ處過ニ由リ被害者ノ重キ身體傷害ヲ招致シタルトキハ十年以下ノ徒刑ヲ宣告スルコトヲ得自由ヲ奪却セラレタル者之ガ爲メニ若クハ其間ノ處過ニ由リ死ニ至ルトキハ十五年以下ノ徒刑若クハ三月ニ下ラザル禁錮ヲ宣告スベシ

第二百五十一條　左ノ塲合ニハ二年以上十五年以下ノ徒刑ヲ宣告スベシ

四強盜人ノ身體ニ暴行ヲ加ヘタルトキ

第二百五十六條　犯罪ノ結果被害者ノ重キ身體傷害若クハ死ヲ招致シタルトキハ五年以上徒刑ヲ宣告スベシ

埃國民法

第一千三百二十五條　人ノ身體ヲ傷害シタル者ハ被害者ノ治療費ヲ支辨シ、失フ所ノ收入ヲ補償シ若シ被害者業務ヲ營ムコト能ハザルトキハ尙ホ將來失フベキ所ノ收入ヲ補償シ其外要求ニ依リ情狀ヲ調査シテ相當ノ報償ヲ交付スベシ

第一千三百二十六條　被害者暴行ニ由リ不具畸形トナリ殊ニ被害者婦女ナルニ依リ爲メニ其佳良ナル將來ノ生活ヲ妨ゲラルヽトキハ此事情ニ顧念スルコトヲ要ス

第一千三百二十七條　身體傷害ニ因リ死ヲ招致スルトキハ管ニ諸般ノ費用ノミナラス死者

寡婦孤兒ニ對シ之ガ爲メニ失フタル所ヲモ賠償セザル可カラズ

墺國刑事訴訟法

第百二十七條　人ノ死シタルトキ其重罪又ハ輕罪ニ因由スト雖疑アルトキハ埋葬前ニ檢屍及解剖ヲ施行セザル可カラズ

屍體ノ埋葬ヲ了シタル後事情ニ因リ仍ホ顯著ナル成績ヲ期シ得ベク而シテ檢屍ニ關與スベキ諸員ノ健康上緊切ナル危害アルニ非ザルトキハ此目的ヲ以テ之ヲ發掘スルヲ要ス

屍體ノ解剖ニ着手スル前詳細ニ之ヲ記述シ死者ヲ知リタリシ人ヲ訊問シテ其異同ヲ辯明スベシ時宜ニ由テハ之ヲ認定スル前知人ヲシテ死者ノ相貌ヲ詳細ニ記述セシムベシ若シ死者ヲ知リタル者アラザルトキハ屍體ノ詳細ナル記述ヲ公報ニ依リ廣告スベシ

豫審判事ハ檢屍ノ際屍體ノ位置及狀況之ヲ發見シタル場所及其服裝ヲ詳悉シ並ニ情狀ニ因リ豫審ニ緊切ナルベキ諸事項ヲ周密ニ記註セシムベシ就中創傷及其他被傷ノ痕跡ヲ其數及形狀ニ據テ詳記シ之ヲ生起シタルベシト思ハルル所ノ手段及器具ヲ明記シ若シ之ニ使用シタルベキヤノ器具ヲ發見スレバ之ヲ損傷ト較照スベシ

第百二十九條　鑑定書ニハ此場合ニ於テ何ヲ以テ致死ノ近因トナスヤ且ツ如何シテ死ヲ招致シタルヤヲ損傷ヲ目擊スルトキハ殊ニ左ノ諸項ヲ判明スベシ

(一)或ル他人ノ行爲ニ由リ傷害ヲ死者ニ加ヘタルモノナルヤ而シテ此疑問ヲ是認シタルトキハ

(二)此行爲ノ

(イ)通性ニ因リ

(ロ)被害者ノ個人的特質若クハ其特狀ト相須チ

(ハ)犯サレタルトキノ偶然ナル情狀ニ由リ

(ニ)偶然ニ生起シタリトハ云ヘドモ之ニ起因シ若クハ之ニ由リテ發生シタル中間原因ト相須チテ死ヲ招致シタルヤ及

(ホ)時機ヲ愆ラズ適當ノ救護ヲ加ヘタランニハ死ニ至ルベカラザリシヤ

鑑定書ニ記スル所判決ニ必要ナル諸件ヲ網羅セザルトキハ豫審判事ヨリ鑑定人ニ對シテ特ニ質問ヲ發スベシ

第百三十二條　身體傷害ニ在テモ亦鑑定人二名ヲシテ被傷者ヲ檢視シ損傷ヲ詳細ニ記述スル外殊ニ現在ノ身體損傷若クハ健康障害ノ何レヲ以テ各自ニ又ハ合同作用ニ依リ絕對的ニ又ハ其場合ノ特別事情ニ由リ輕易重劇若クハ危篤ナリト認ムベキヤ此等傷害ノ通常如何ナル效果ヲ貽スヤ而シテ此場合ニ於テハ如何ナル效果ヲ現ハシタルヤ並ニ何等ノ手段及器具ヲ以テ如何ナル方法ニ依リ之ヲ生起シタルヤノ意見ヲ具陳セシムベシ

獨國刑法

第二百十一條　故意ニ人ヲ殺ス者若シ思慮ヲ以テ殺害ヲ行ヒタルトキハ謀殺ノ罪トシテ死

寡婦孤兒ニ對シ之カ爲メニ失フタル所ヲモ賠償セザル可カラズ

墺國刑事訴訟法

第百二十七條　人ノ死シタルトキ其重罪又ハ輕罪ニ因由スト ノ嫌疑アルトキハ埋葬前ニ檢屍及解剖ヲ施行セザル可カラズ

屍體ノ埋葬ヲ了シタル後事情ニ因リ仍ホ顯著ナル成績ヲ期シ得ベク而シテ檢屍ニ關與スベキ諸員ノ健康上緊切ナル危害アルニ非ザルトキハ此目的ヲ以テ之ヲ發掘スルヲ要ス

屍體ノ解剖ニ着手スル前詳細ニ之ヲ記述シ死者ヲ知リタリシ人ヲ訊問シテ其異同ヲ辯明スベシ時宜ニ由テハ之ヲ認定スル前知人ナシテ死者ノ相貌ヲ詳細ニ記述セシムベシ若シ死者ヲ知リタル者アラザルトキハ屍體ノ詳細ナル記述ヲ公報ニ依リ廣告スベシ

豫審判事ハ檢屍ノ際屍體ノ位置及狀況之ヲ發見シタル場所及其服裝ヲ詳悉シ並ニ情狀ニ因リ豫審ニ緊切ナルベキ諸事項ヲ周密ニ記註セシムベシ就中創傷及其他被傷ノ痕跡ヲ其數及形狀ニ據テ詳記シ之ヲ生起シタルベシト思ハルル所ノ手段及器具ヲ明記シ若シ之ニ使用シタルベキヤノ器具ヲ發見スレバ之ヲ損傷ト較照スベシ

第百二十九條　鑑定書ニハ此場合ニ於テ何ヲ以テ致死ノ近因トナスヤ且ツ如何シテ死ヲ招致シタルヤヲ言明スルヲ要ス

損傷ヲ目擊スルトキハ殊ニ左ノ諸項ヲ判明スベシ

（一）或ル他人ノ行爲ニ由リ傷害ヲ死者ニ加ヘタルモノナルヤ而シテ此疑問ヲ是認シタルトキハ

（二）此行爲ノ

（イ）通性ニ因リ

（ロ）被害者ノ個人的特質若クハ其特狀ト相須チ

（ハ）犯サレタルトキノ偶然ナル情狀ニ由リ

（ニ）偶然ニ生起シタリトハ云ヘドモ之ニ起因シ若クハ之ニ由リテ發生シタル中間原因ト相須チテ死ヲ招致シタルヤ及

（ホ）時機ヲ愆ラズ適當ノ救護ヲ加ヘタランニハ死ニ至ルベカラザリシヤ

鑑定書ニ記スル所判決ニ必要ナル諸件ヲ網羅セザルトキハ豫審判事ヨリ鑑定人ニ對シテ特ニ質問ヲ發スベシ

第百三十二條　身體傷害ニ在テモ亦鑑定人二名ヲシテ被傷者ヲ檢視シ損傷ヲ詳細ニ記述スル外殊ニ現在ノ身體損傷若クハ健康障害ノ何レヲ以テ各自ニ又ハ合同作用ニ依リ絕對的ニ又ハ其場合ノ特別事情ニ由リ輕易重劇若クハ危篤ナリト認ムベキヤ此等傷害ノ通常如何ナル效果ヲ賠スヤ而シテ此場合ニ於テハ如何ナル效果ヲ現ハシタルヤ並ニ何等ノ手段及器具ヲ以テ如何ナル方法ニ依リ之ヲ生起シタルヤノ意見ヲ具陳セシムベシ

獨國刑法

第二百十一條　故意ニ人ヲ殺ス者若シ思慮ヲ以テ殺害ヲ行ヒタルトキハ謀殺ノ罪トシテ死

刑ニ處ス

第二百十二條　故意ニ人ヲ殺ス者若シ思慮ヲ以テセズシテ殺害ヲ行ヒタルトキハ故殺ノ罪トシテ五年已上ノ徒刑ニ處ス

第二百二十一條　奧國草案ノ第二百二十八條ト同文

第二百二十二條　意慢ニ由リ人ヲ死ニ致ス者ハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

第二百二十三條　故意ニ人ノ身體ニ對シテ暴行ヲ加ヘ又ハ健康ヲ障害スル者ハ身體傷害ノ罪トシテ三年以下ノ禁錮若クハ三百「ターレル」以下ノ罰金ニ處ス

尊系親屬ニ對シテ此罪ヲ犯ストキハ一月以上ノ禁錮ヲ以テ處斷ス

第二百二十三條a　兇器就中小刀若クハ其他ノ危險ナル器具ヲ以テ又ハ詭計ヲ以テ又ハ數人共同シテ又ハ生命ヲ危フスルニ足ル行爲ヲ以テ傷害ヲ加フルトキハ二月以上ノ禁錮ニ處ス(千八百七十六年追加)

第二百二十四條　傷害ノ結果被傷者ノ身體ノ貴重ナル一部、一眼若クハ兩眼ノ視能聽官、言語又ハ生殖機能ヲ亡失シ又ハ著シク永久ノ不具畸形ヲ貽シ又ハ孤弱麻痺若クハ精神病ニ陷ルトキハ五年以下ノ徒刑若クハ一年以上ノ禁錮ヲ以テ處斷ス

第二百二十五條　前記ノ結果ノ一ヲ豫期シ且ツ招致シタルトキハ二年以上十年以下ノ徒刑ヲ以テ處斷ス

第二百二十六條　身體傷害ニ由テ被傷者ヲ死ニ致ストキハ三年以上ノ徒刑若クハ三年以上ノ禁錮ヲ以テ處斷ス

第二百二十七條　鬪毆若クハ數人ノ要擊ニ由リ人ヲ死ニ致シ又ハ重キ身體傷害ヲ招キタルトキハ(第二百二十四條)――――(奧國草案第二百三十六條ト同文)

第二百三十條　意慢ニ由リ人ヲ傷害スル者ハ

――――

第二百三十九條　故意且違法ニ人ヲ監禁シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ人身ノ自由ヲ奪却スル者ハ禁錮ニ處ス自由ヲ奪却セラレタル者自由ノ奪却ニ由リ又ハ其間ノ處遇ニ由リ重キ身體傷害ヲ生起スルトキハ三年以上ノ徒刑(酌量スベキ情狀アルトキハ三月以上)ヲ以テ處斷ス

第二百五十一條　强盜人ニ暴行ヲ加ヘ若クハ人ニ對シテ威力ヲ縱ニシ由リテ之ヲ重キ身體傷害若クハ死ニ致ストキハ徒刑ヲ以テ處斷ス

◎◎◎◎◎(日本法律參照)　刑法

第三編　身體財產ニ對スル重罪輕罪

第一章　身體ニ對スル罪

第一節　謀殺故殺ノ罪

第二百九十二條　豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス

第二百九十三條　藥物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二百九十四條　故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス

第二百九十五條　支解折斷其他慘刻ノ所爲ヲ以テ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十六條　重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ共罪ヲ免カレン爲メ人ヲ故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

第二百九十七條　人ヲ殺スノ意ニ出テ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ死ニ致シタル者ハ故殺ヲ以テ論シ共謀シタル者ハ謀殺ヲ以テ論ス

第二百九十八條　謀殺故殺ヲ行ヒ謀テ他人ヲ殺シタル者ハ仍ホ謀故殺ヲ以テ論ス

第二節　毆打創傷ノ罪

第二百九十九條　人ヲ毆打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス

第三百條　人ヲ毆打創傷シ共兩目ヲ瞎シ兩耳ヲ聾シ又ハ兩肢ヲ折リ及ヒ舌ヲ斷チ陰陽ヲ毀壞シ若クハ知覺精神ヲ喪失セシメタル廢疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處ス

其一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他身體ヲ殘廢シ癒疾ニ致シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百一條　人ヲ毆打創傷シ二十日以上ノ時間疾病ニ罹リ又ハ職業ヲ營ムコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

其疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

疾病休業ニ至ラスト雖モ身體ニ創傷ヲ成シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百二條　誤メ謀テ人ヲ毆打創傷シ休業癒疾又ハ死ニ致シタル者ハ前數條ニ記載シタル各一等ヲ加フ

第三百三條　重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ共罪ヲ免カレン爲メ人ヲ毆打創傷シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百四條　毆打ニ因リ謀テ他人ヲ創傷シタル者ハ仍ホ毆打創傷ノ本刑ヲ科ス

第三百五條　二人以上共ニ人ヲ毆打創傷シタル者ハ現ニ手ヲ下シ傷ヲ成スノ輕重ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ共毆シテ傷ヲ成スノ輕重ヲ知ルコト能ハサル時ハ其重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス但數唆者ハ減等ノ限ニ在ラス

第三百六條　二人以上共ニ人ヲ毆打スルニ當リ自ラ人ヲ傷セストモ雖モ幇助シテ傷ヲ成サシメタル者ハ現ニ傷ヲ成シタル者ノ刑ニ一等ヲ減ス

第三百七條　健康ヲ害ス可キ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ殘忍謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第三百八條　人ヲ殺スノ意ニ非スト雖モ詐稱誘導シテ危害ニ陷レ因テ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス

第三節　殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

第三百九條　自己ノ身體ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十條　毆打シテ互ニ創傷シ其手ヲ下スノ先後ヲ知ルコト能ハサル者ハ各其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第三百十一條　本夫其妻ノ姦通ヲ究知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十二條　靈間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入リ若クハ門戶牆壁ヲ踰越毀壞セントスル者ヲ防止スル爲メ之ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第三百十三條　前數條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス

第三百十四條　身體生命ヲ正當ニ防衛シ已ムコトヲ得サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス其罪ヲ論セス但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ハ此限ニ在ラス

第三百十五條　左ノ諸件ニ於テ已ムコトヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者ハ共罪ヲ論セス

一財產ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タル時

二盜犯ヲ防止シ又ハ盜贓ヲ還取スルニ出タル時

三夜間故ナク人ノ住居シタル邸宅ニ入リ若クハ門戶牆壁ヲ踰越毀壞スル者ヲ防止スルニ出タル時

第三百十六條　身體財產ヲ防衛スルニ出ルト雖モ已ムコトヲ得サルニ非スシテ害ヲ暴行人ニ加ヘ又ハ危害已ニ去リタル後ニ於テ恐ニ乘シ仍ホ害ヲ暴行人ニ加ヘタル者ハ不論罪ノ限ニ在ラス但情狀ニ因リ第三百十二條ノ例ニ照シ共罪ヲ宥恕スルコトヲ得

第四節　過失殺傷ノ罪

第三百十七條　疎虞解怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十八條　過失ニ因テ人ヲ創傷シ癈篤疾ニ致シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三百十九條　過失ニ因テ人ヲ創傷シ疾病休業ニ至ラシメタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五節　自殺ニ關スル罪

第三百二十條　人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其他自殺ノ補助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

第三百二十一條　自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ重懲役ニ處ス

第六節　擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第三百二十二條　擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但監禁日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第三百二十三條　擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ又ハ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三百二十四條　前條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三百二十五條　擅ニ人ヲ監禁シ水火震災ノ際其監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第九節　幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪

第三百三十六條　八歲ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

自ラ生活スルコト能ハサル老者疾病者ヲ遺棄シタル者亦同シ

第三百三十七條　八歲ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寥闃無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條　給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養ス可キ者前二條ノ罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加フ

第三百三十九條　幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ癈疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百四十條　自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルコトヲ知テ之ヲ扶助セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルコトヲ知テ扶助セス又ハ申告セサル者亦同シ

第四編　違警罪

第四百二十五條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

九、人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者

第四百二十六條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

五、人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サヽル者

六、路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ嗾シ又ハ驚逸セシメタル者

七、發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者

八、狂犬猛獸等ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者

第四百二十七條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

一、濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者

二、制止ヲ肯セスシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者

三、夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者

四、木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケス又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者

五、瓦礫ヲ道路家屋園囿ニ投擲シタル者

決鬪罪（明治二十二年法律三十四號）

第三條　決鬪ニ依テ人ヲ殺傷シタル者ハ刑法ノ各本條ニ照シテ處斷ス

改正刑法草案

第三編　私益ニ關スル重罪及ヒ輕罪

第一章　身體ニ對スル罪

第一節　謀殺故殺ノ罪

第二百八十二條　豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス（現第二百九十二條）

第二百八十三條　故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期懲役ニ處ス（現第二百九十四條）

第二百八十四條　性質、用方又ハ時會ニ因リ人ヲ死ニ致シ得ヘキ物品ナルコトヲ知リ之ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ豫メ謀ルニ非スト雖モ死刑ニ處ス（現第二百九十三條）

第二百八十五條　重罪、輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ逃走ヲ便ニシ若クハ刑ヲ免カレン爲メ其犯罪ノ當時人ヲ殺シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス死刑ニ處ス（現第二百九十六條）

第二百八十六條　重罪、輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ逃走ヲ便ニシ若クハ刑ヲ免カレン爲メ其犯罪ノ當時人ヲ殺シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス死刑ニ處ス（現第二百九十五條）

第二百八十七條　人ヲ殺スノ意ヲ以テ詐稱、誘導シテ危害ニ陷レ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ豫メ謀ルト否トニ從ヒ謀殺、故殺ヲ以テ論ス

其危害ニ陷レタルモ死ニ致サヽル者ハ未遂犯ヲ以テ論ス（現第二百九十七條）

第二節　毆打創傷ノ罪

第二百八十八條　人ヲ毆打シテ其身體若クハ精神ニ疾病、創傷ヲ生セシメ因テ死ニ致シタル者ハ二等有期懲役ニ處ス（現第二百九十九條）

第二百八十九條　人ヲ毆打シテ五官ノ一ヲ失ハシメ又ハ四肢ノ一若クハ陰陽ノ使用ヲ失ハシメ其他重大ナル不治ノ疾病、創傷ヲ生セシメタル者ハ三等有期懲役ニ處ス（現第三百條）

第二百九十條　人ヲ毆打シテ前條ニ記載シタルヨリ輕キ疾病、創傷ヲ生セシメタル者ハ三月以上五年以下ノ有役禁錮ニ處ス

其疾病ノ時間二十日ニ至ラサルトキハ十一日以上二月以下ノ有役禁錮ニ處ス但被害者ノ告訴アルニ非サレハ訴追スルコトヲ得ス（現第三百一條）

第二百九十一條　豫メ謀テ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ又ハ已ニ犯シテ逃走ヲ便ニシ若クハ刑ヲ免カレン爲メ其犯罪ノ當時前三條ノ罪ヲ犯シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス亦各一等ヲ加フ（現第三百二條第三百三條）

第二百九十二條　二人以上共ニ毆打シテ人ヲ疾病、創傷ニ致シタルトキハ其疾病、創傷ニ從テ各自ニ其刑ヲ科ス若シ其輕重ヲ知ルコト能ハサルトキハ重病、重傷ノ刑ニ照シ一等ヲ減ス

共犯人豫メ通謀シテ毆打シタルトキハ各自ニ重病、重傷ノ刑ヲ科ス（現第三百五條）

第二百九十三條　詐稱、誘導シテ人ヲ危害ニ陷レ因テ疾病、死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ヲ以テ論ス（現第三百八條）

第三節　殺傷ニ關スル宥恕

第二百九十四條　未夫其妻ノ現ニ姦通スルヲ覺知シ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ其姦通ヲ縱容シタル者ハ此限ニ在ラス（現第三百十一條）

第二百九十五條　一家ノ祖尊ヲ被フカ爲メ又ハ養育ヲ爲ス能ハサルコトヲ恐ルヽ爲メ父母、祖父母其初生ノ兒孫ヲ殺シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス

第二百九十六條　前二條ニ記載シタル宥恕ス可キ罪ハ各本刑ニ照シ二等又ハ三等ヲ減ス（現第三百十三條）

第二百九十七條　左ノ場合ニ於テ已ムヲ得サルニ非スシテ人ヲ殺傷シタル者ハ情狀ニ因リ前條ノ例ニ照シ其罪ヲ宥恕スルコトヲ得

一　財產ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スルニ出タルトキ

二　盜犯ヲ防止シ又ハ盜贓ヲ取還スルニ出タルトキ

三　故ナク家宅ニ侵入シ若クハ門戶、牆壁ヲ踰越、損壞スル者ヲ防止スルニ出タルトキ（現第三百十五條）

第四節　過失殺傷ノ罪

第二百九十八條　疎虞、懈怠ノ爲メ又ハ規則、習慣ヲ遵守セサルニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ一月以上六月以下ノ無役禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス（現第三百十六條）

第二百九十九條　疎虞、懈怠ノ爲メ又ハ規則、習慣ヲ遵守セサルニ因リ第二百八十九條ニ記載シタル疾病、創傷ヲ生セシ

メタル者ハ十一日以上二月以下ノ無役禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ第二百九十條ニ記載シタル疾病、創傷ヲ生セシメタルトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ノ罪ハ被害者ノ告訴アルニ非サレハ訴追スルコトヲ得ス(現第三百十八條第三百十九條)

第五節　自殺ニ關スル罪

第三百條　人ヲ教唆シテ自殺セシメ又ハ囑託ヲ受ケテ自殺人ノ爲メニ手ヲ下シタル者ハ六月以上三年以下ノ有役禁錮ニ處ス

其他自殺ノ幇助ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス(現第三百二十條)

第三百一條　自己ノ利ヲ圖リ人ヲ教唆シテ自殺セシメタル者ハ三等有期懲役ニ處ス(現第三百二十一條)

第三百二條　教唆者又ハ幇助者ノ意外ノ舛錯、障碍ニ因リ自殺者自殺ヲ遂ケサルトキハ前二條ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第七節　幼者老者又ハ病者ヲ遺棄スル罪

第三百十一條　自ラ生活スルコト能ハサル幼者、老者又ハ病者ヲ遺棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ有役禁錮ニ處ス

其幼者、老者、病者ノ保護ヲ爲ス可キ責任アル者之ニ必要ノ保養ヲ與ヘサルトキ亦同シ

第三百十二條　給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養ス可キ者前條ノ罪ヲ犯シタルトキハ一等ヲ加フ

第三百十三條　幼者、老者、病者ヲ遺棄シ又ハ必要ノ保養ヲ與ヘス因テ疾病、死傷ニ致シタルトキハ毆打創傷ノ各本條ニ擬シ重キニ從テ處斷ス

若シ死ニ致スノ意アリテ死ニ致シタルトキハ死刑ニ處ス

第三百十四條　幼者ノ父母、祖父母一家ノ恥辱ヲ蔽フ爲メ又ハ養育スルコト能ハサル爲メ幼者ヲ遺棄シタルトキハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ二等又ハ三等ヲ減ス

第二章　自由ニ對スル罪

第一節　擅ニ人ヲ制縛、禁監スル罪

第三百十五條　擅ニ人ヲ制縛シタル者ハ十一日以上二月以下ノ有役禁錮ニ處ス

第三百十六條　擅ニ人ヲ監禁シタル者ハ一月以上一年以下ノ有役禁錮ニ處ス

監禁日數二十日ヲ過クルトキハ一等ヲ加フ

第三百十七條　擅ニ人ヲ制縛、監禁シテ重キ脅迫ヲ行ヒ又ハ陵虐ノ所遇ヲ爲シタル者ハ前二條ノ刑ニ各一等ヲ加フ

第三百十八條　前數條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病、死傷ニ致シタル者ハ豫謀毆打創傷ノ例ニ擬シ重キニ從テ處斷ス

第三百十九條　擅ニ人ヲ制縛、監禁シ其制縛、監禁ノ爲メ不虞ノ變災ヲ避クルコト能ハサラシメ因テ疾病、死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ擬シ重キニ從テ處斷ス

制縛、監禁ヲ受ケタル爲メ又ハ陵虐ノ所遇若クハ脅迫ヲ受ケタル爲メ被害者自殺シ又ハ自ラ創傷シタルトキ亦同シ

(改正刑法ノ説明)

第五十　毆打創傷ノ輕キモノハ被害者ノ告訴ヲ要スルコトヽ爲シタルコト

人ヲ毆打シテ疾病ヲ生セシメ其時間二十日ニ至ラサルモノヽ如キハ直チニ之ヲ罪トシ處罰スルハ穩當ノモノニアラス實際是等ノ場合ニ於テハ犯人ト被害者ノ間ニ私和スルヲ常トスルヲ以テ改正法ノ如ク此罪ニ付テハ被害者ノ告訴ヲ要スト爲シタルハ事理ニ適シタルモノナリトス(改刑第二百九十條)

第五十二　過失創傷ノ罪ハ被害者ノ告訴ヲ要スルコトヽ爲シタルコト

過失ニ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ其事重大ナルヲ以テ被害者ノ告訴ヲ待タス直ニ之ヲ罪トシテ處罰スト雖モ之カ爲メニ疾病創傷ヲ生セシメタル者ノ如キハ被害者ノ告訴アルニ非サレハ法律ニ於テ敢テ之ヲ處罰スルノ必要ナカル可キナリ且實際此罪ニ付テハ犯者ト被害者ノ間ニ私和シテ以テ事ノ落著ニ歸スルモノ比々皆然ルヲ以テ改正法ハ現行刑法ノ規定ヲ改メ此罪ニ付テハ被害者ノ告訴ヲ要スルコトヽ爲セリ(改刑第二百九十九條)

第五十四　幼者老者病者ヲ遺棄スル罪ニ改正ヲ加ヘタルコト

現行刑法ニ依レハ幼者ノ遺棄ニ付テハ其幼者ノ八歳未滿ナルコトヲ要スルモ其八歳以上ノ者ト雖モ仍ホ自活ノ途ニ就ク能ハサル者實際多キニ居ル然ルニ其八歳以上ノ幼者ヲ遺棄シタル者ヲ罪トセサルノ理得テ知ル可カラス又現行刑法ニ所

裁判所ニ於テ人ノ往來スルコトヲ得

第一　狹義ノ損傷ニ因スル健康傷害及暴力的致死

Von der Gesundheitbeschädigung und dem gewaltsamen Tod durch Verletzung (Trauma) im engeren Sinne.

(甲)　損傷ヲ生起スル器具ノ檢定　*Bestimmung des verletzenden Werkzeuges.*

器械的ノ手段ニ由テ或ル一定ノ器官若クハ其器官組織ノ聯結或ハ官能ノ障碍ヲ誘起シタル損傷ヲ狹義ニ於ケル損傷ト云フ

此種ノ損傷ハ生體上ニ於テモ死體上ニ於テモ共ニ檢査及鑑定ノ物體トナルコアリ、死體ニ在テハ當該ノ損傷ガ死亡ノ原因タルカノ疑アルキハ殊ニ然リトス

以上兩般ノ場合ニ於ケル法醫ノ任務ハ第一ニ當該ノ損傷ヲ與ヘタル器具ヲ確定スベク、第二ニ刑法上ノ意義ニ於テ、第三ニ刑非訴訟法ノ意義ニ於テ其損傷ヲ種別命名スルニ在リ

器具及損傷ノ種別

一般ニ器具ヲ區別シテ鈍器、鋭器、剌器及射撃器トナス而ノ之ニ一致シテ損傷ヲ(一)鈍器或ハ鈍穢器ヲ以テセル損傷、(二)切創、(三)剌創及(四)射創トナス

鑑定ニ於ケル法醫ノ任務

損傷ノ定義及損傷

(第六)精神的ノ侵襲ニ依テ生起スルコヲ得

暴力的健康傷害及暴力的致死ノ原因

(第一)狹義ノ健康傷害ニ於ケル暴力的ノ作用ノ物質

(第二)氣管ノ閉塞

(第三)營養物ノ攝取ノ障碍

(第四)不潔ナル飮食物ノ攝取

(第五)毒物及ヒ之ニ均シキ作用ヲ有スル物質

暴力的健康傷害

暴力的ノ健康傷害ハ致死ノ原因

第百三十五條

醫師ハ死體ノ解剖ヲ命シ又ハ既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スルノ爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

檢視ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又ハ既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スルノ爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

刑法　非訴訟法

(舊刑第三百十四條)

父母祖父母又ハ幼者ヲ溺愛スル罪ノ宥恕ハ其生兒ヲ殺ス者ノ宥恕ノ理由ト同シキヲ以テ茲ニ之ヲ削除ス

父母祖父母又ハ幼者ヲ溺愛スル罪ノ宥恕ハ其生兒ヲ殺ス者ノ宥恕ノ理由ト同シキヲ以テ茲ニ之ヲ削除ス(舊刑第三百十四條)

本條ハ殺ニ過クルヤノ嫌アリ故ニ此規定ヲ普通罪中ニ移シタリ

本條ハ殺ニ過クルヤノ嫌アリ故ニ此規定ヲ普通罪中ニ移シタリ

又自己ノ所有地内又ハ管守スル地内ニ遺棄セラレタル幼者老者等ノ救助ヲ之ヲ扶助セス若クハ官署又ハ市

又自己ノ所有地内又ハ管守スル地内ニ遺棄セラレタル幼者老者等ノ救助ヲ之ヲ扶助セス若クハ官署又ハ市

法ハ此點ニ付キ現行刑法ニ修正ヲ加ヘタリ

法ハ此點ニ付キ現行刑法ニ修正ヲ加ヘタリ

重ヲ設クルハ擧ロ法律ニ於テ其刑期ノ範圍ヲ廣クシ以テ刑ノ輕重ヲ裁判官ニ一任スルノ弊レニ如カサルナリ故ニ改正

重ヲ設クルハ擧ロ法律ニ於テ其刑期ノ範圍ヲ廣クシ以テ刑ノ輕重ヲ裁判官ニ一任スルノ弊レニ如カサルナリ故ニ改正

少キモノアリ又反之山間ノ地ト雖モ人ノ往來頻繁ナル場所ヲ以テ幼者老者等ヲ遺棄シタル場所ノ如何ニ因テ即ノ輕

少キモノアリ又反之山間ノ地ト雖モ人ノ往來頻繁ナル場所ヲ以テ幼者老者等ヲ遺棄シタル場所ノ如何ニ因テ即ノ輕

罰ニ過キス

罰ニ過キス

罰ヲ犯ス者ノ如キハ人類相救フノ本分ヲ誼クサヽルモノナリト雖モ現行刑法ノ如クニ之ヲ處罰トシテ處罰スル

罰ヲ犯ス者ノ如キハ人類相救フノ本分ヲ誼クサヽルモノナリト雖モ現行刑法ノ如クニ之ヲ處罰トシテ處罰スル

ハ過ニ過クルヤノ嫌アリ故ニ此規定ヲ普通罪中ニ移シタリ

ハ過ニ過クルヤノ嫌アリ故ニ此規定ヲ普通罪中ニ移シタリ

又父母祖父母又ハ幼者ヲ溺愛スル罪ノ宥恕ハ其生兒ヲ殺ス者ノ宥恕ノ理由ト同シキヲ以テ茲ニ之ヲ削除ス(舊刑第三百十四

又父母祖父母又ハ幼者ヲ溺愛スル罪ノ宥恕ハ其生兒ヲ殺ス者ノ宥恕ノ理由ト同シキヲ以テ茲ニ之ヲ削除ス(舊刑第三百十四

（一）鈍器或ハ鈍稜器ヲ以テセル損傷 *Verletzungen mit stumpfen oder stumpfkantigen Werkzeugen.*

損傷ヲ生起スル鈍器或ハ鈍稜器

凡ソ法醫的ノ判定ヲ要求セラルヽ損傷中本題ノモノヲ以テ最モ頻繁ナル損傷トナス、此場合ニ於テ應用セラルヽ器具ハ其性質極メテ種々ナリ、之ニ屬スルハ人體若クハ動物ノ四肢（蹄）ノ外一部分ハ眞ニ襲撃若クハ防禦ノ目的ヲ以テ製作セラレタル或ル一定ノ器具、即ヲ所謂防禦及亞兒伯山住民ノ擊輪ノ如キモノ、一部分ハ本來他ノ目的ヲ有スルモ種々ノ闘爭ニ於テ臨時ノ武器トノ襲撃ニ利用セラルヽ器具、例之ハ杖、椅脚、石塊等ノ如キモノ是ナリ、而ノ斯ノ如キ器械及一般ニ特別ノ準備ナクシテ闘毆ヲ侵スル所ノ場合ニ於テハ何品ヲ論セス總テ強大ニシテ且ツ把持シ易キ物體ヲ利用スルニ至ルベキヤ言ヲ俟タズ、其他鈍體或ハ鈍稜體ノ作用ヲ逞ウスルハ轢傷ノ際、搗臼間ニ墜落スル際、建築物建前等ノ崩倒スル際幷ニ高處ヨリスル顚墜ノ場合ニ於ケル如シ、最後ノ場合ニ於テハ他ノ場合ニ於ケル如ク其損傷ヲ加フル器具ハ當該ノ人體ニ向テ襲來スルモノニアラズシテ彼ノ堅硬物體ニ對シテ身體部分ヲ打撲スルノ際亦小規模ニ於テ起ル如ク其反對ヲ見ルモノナリ

凡ソ鈍器及鈍稜器ノ作用ハ多少急劇及卒然ナル多少强烈ナル組織ノ移動ヲ兼ヌル身體部分ノ壓迫ニ歸スベシト雖モ之ニ應用セラレタル器具ノ種々ナルト其性質ノ全ク相異ナレルトニ由リ殊ニ之ニ屬スル力ノ大小非常ニ差異アルガ爲メ設トヒ之ヲ變形シ得ベキ作用ア ル多般ノ傍況ヲ措キテ論セザルモ其人體上ニ生起シ得ベキ結果ノ如何ニ多般ナルベキヤハ推知スルニ餘リアリ、然レ𪜈吾人ハ概シテ此種ノ暴力ヨリ來ル結果ヲ最モ僅微ナルモノヨリ始メテ左ノ如ク區別スルヿヲ得、即ヲ(イ)皮膚剝傷、(ロ)皮下溢血、(ハ)創傷、(ニ)中樞神經系統ノ震盪、(ホ)體內軟部ノ破裂及位置變化、(ヘ)骨ノ破折及位置變化、終リニ(ト)全キ身體部分ノ摧碎及離斷ナリ

(イ)皮膚剝傷 *Die Hautaufschürfungen.*

皮膚剝傷（擦傷）ハ主トシテ鈍器或ハ鈍稜器ノ觸線的作用ニ由テ起リ之ニ由テ表皮ハ皮膚部分ヨリ剝除セラレ而ノ其下ニ位スル眞皮ヲ露出セシムルモノトス、皮膚損傷ハ或ハ特自ニ或ハ他ノ損傷ニ伴ヒ殊ニ同一損傷ノ部分現景トシテ發見スルヿアリ、即ヲ溢血上或ハ深在部分ノ重傷上ニ於ケル皮膚ノ剝脫セラルヽヲ見ルヿ極メテ多シ、其他亦鈍器或ハ鈍稜器ヲ以テ生起シタル創傷ノ邊緣ハ通常皮膚剝脫ヲ呈スルモノナリ、皮膚剝脫自己ハ多クハ身體全皮膚ノ一小部分ニ限局セル僅微ノ損傷ナルニ過キサルガ故ニ外科學上ノ意義ニ於ケル價値例之ハ唯傳染病毒ノ侵入スルトキニ於ケル如ク全ク破格的ニ重要視セラルヽヿアルノミ、然レ𪜈法醫學上ノ關係ニ於テハ極メテ重要ナルモノトス、何トナレバ此剝傷ハ暴力ノ働作セル局處ヲ標示シ且ツ斯ノ如キ剝傷ノ輕重及排列ト共ニ其位置ヲ考察スルヲハ其暴力ノ精密ナル性質ヲ認識スルヲ極メテ確實ナルヿヲ得ルヿ稀ナラザレバナリ、是レ殊ニ頸部ニ於ケル呼吸口及呼吸道ノ近圍ニ生シタル皮膚剝傷ニシテ或ル襲撃ノ斷定上ニ價値ヲ有シ就中其形狀ヨリ明カニ指爪又ハ繩索ノ形ヲ認取シ得ベキ場合ニ於テ然リトス、吾人ハ後文他

法醫學上ニ於ケル皮膚剝傷ノ價値

ノ章項ニ於テ此種ノ現象ヲ詳論スルヲアルベシ、皮膚剝傷ハ鬪毆若クハ防禦ヲ遂行シタル
ノ徵候トシテ均シク重要ナルモノニシテ之ノ檢定ハ屍體ト生體トニ論ナク多數ノ場合ニ於テ頗ル
重大ノ價値ヲ有スルヲアリ

皮膚剝傷ハ之ヲ享受シタル直後僅微ノ出血アルカ或ハ全ク之レナキヲ常トス、其出血スルヤ●是レ乳頭尖ノ毛細管破傷スルヨリ來ルモノニシテ之ヨリ血點ヲ湧出セシム、其人體生命ヲ保存スルトキハ露出セル眞皮ハ既ニ最初一二時間ノ經過中纖維素性ノ滲出物ノ一層ヲ以テ掩ハレ其局部若シ空氣ニ曝露スルトキハ乾燥シテ固層ヲナシ通例二三日內ニ於テ其下ニ瘢痕ヲ形成セスシテ治癒ヲ來タス、皮膚剝傷ヲ受ケタル際或ハ其直後ニ於テ死ヲ致ストキハ露出セル眞皮ヨリスル出血ハ前ノ場合ニ於ケルヨリモ稀有ナルカ或ハ少量ナリ、蓋シ眞皮毛細管ノ空虛ハ皮膚蒼白色トナルヨリ認知シ得ベキ如ク瀕死第一現象ノ一ヲ形成スルヲ以テナリ、而シテ此皮膚蒼白ハ死戰期ニ際シ殆ト定規的ニ（設ト之ニ隨處同時ナラサルモ）發生スルヲ常トス、是故ニ斯ノ如キ皮膚剝傷ハ若シ血液ノ沈下シ來ルベキ低位ノ身體部分ニ在ラサルトキハ死亡ノ直後眞皮ハ貧血性ノ色ヲ呈シ且ツ濕潤ノ觀アリ、其局部若シ空氣ニ曝露セラレシトキハ死後暫時ニシテ乾涸ヲ初メ（低位ノ部分或ハ衣服ニ掩ハレタル部分ニ比スレバ上位ノ部分或ハ裸出セル部分ニ於テハ速ニ乾涸ス）、而ノ已ニ數時間ニ於テ眞皮ハ黃褐色乃至褐赤色、堅硬ニシテ切開シ難キ部位ニ變化シ、或ハ通例稱言セラル、如ク羊皮紙狀又ハ鞣革狀ニ乾涸ス、此乾涸ハ純粹ナル死體現象ニシテ表皮ガ器械的已外ノ方法例之バ

皮膚剝傷ノ出血

仝上ノ乾涸

火傷、發泡藥等ニ由テ奪失セラレタルトキニ於テモ亦現出ス、是レ皮膚剝傷ガ死亡前少時ニ或ハ死亡中、或ハ死亡後ニ生起セラレタルニ關セス均シク法醫學上特別ノ重價ヲ有スルモノナリ、是故ニ吾人ハ皮下組織ニ於テ溢血ノ存在セサル場合ニ在テハ斯ノ如キ皮膚乾涸ノ性質ヨリシテ其原因タル皮膚剝傷ハ生活中ニ起リタルヤ或ハ否ラサルヤヲ判決シ能ハサルヲ常トセリ、乾涸セル局部ノ色ハ舊時ノ學者ノ意見ニ反シ斯ノ如キ判決ニ利用スルコトヲ得ス、何トナレバ死後ニ生起シテ爾後乾涸セル皮膚剝傷ノ色モ亦最モ種々ナル色彩ヲ呈シ且ツ死體ニ於テモ均シク多少ノ差アルベキ眞皮ノ血液含量ノミナラス已ニ經過セル時間及乾涸ノ程度モ亦斯ノ如キ局部ニ淺色或ハ暗色ヲ呈セシムルノ因由タレバナリ、乳頭ノ尖端ニ因スル細小乾涸性血點ノ發見モ亦絕對的證明ノ力アルモノニアラス、何トナレバ死後皮膚剝傷ニ於テモ亦乳頭ヲ損傷シ其局部若シ身體ノ低垂部分ニ位スルトキハ被傷乳頭ヨリスル血液初メテ死體ニ於テ流出スルヲアレバナリ、是レ適當ノ試驗ニ由テ容易ク證明シ得ヘキモノトス

皮膚剝傷部ノ色

其他已ニ茲ニ記載スヘキハ表皮ヲ奪除セラレタル皮膚部分ニ於テ發見スル如キ類似ノ死後乾涸ガ表皮ノ剝脫ナクシテ生起シ得ルヲ是ナリ即チ表皮ノ通常濕潤シテ存スル皮膚部分例之バ鼻丸其他露出セル粘膜殊ニ唇ニ強キ壓迫ヲ受クルガ故ニ血液及佗ノ液分ヲ搾出セラレ爲メニ周圍ノ皮膚ヨリモ乾涸シ易キ皮膚部分例之バ縊死者ノ繩索凹痕ニ於テ見ルガ如キ局部終リニ種々ノ創傷殊ニ挫創ノ邊緣ニシテ通常存在スル皮膚剝傷ニ因由スルノ外亦斷離セ

皮膚剝脫ナキ局部ノ乾涸

ラレタル組織部分ヨリ其中ニ含有セル濕氣ヲ殊ニ容易ク蒸發シ得ルニ由リ早ク乾涸ヲ來スモノト如キ是ナリ

(ロ)皮下溢血 *Die Blutunterlaufungen.*

茲ニ主トシテ着目スヘキハ通常皮下細胞組織或ハ其下ニ位スル軟部ノ皮下的挫傷ニ由テ形成セラルヽ所ノ溢血ナリ、此溢血ハ小血管ノ斷裂及之ガ爲メ周圍ノ組織ニ血液ノ流出スルヨリ來ルモノニシテ或ハ之ニ伴フテ現ハル、殊ニ斷裂創傷及挫壓創傷ナク或ハ其他ノ損傷ノ區域內ニ發スルヲ以テ最モ通常トス、其發生ヲ促スノ要因ハ絃ニ襲來スル暴力ノ强度ノ外、近ク當該皮膚部分ノ表面下ニ存スル硬固ノ支壁ト壓迫若クハ衝突ヲ受ケタル組織ノ離斷セラレ易キ性質トニ在リ、第一ノ關係ニ於テハ其皮膚直ヲニ骨質上ヲ掩フ所ノ局部就中頭顱ニ於テハ他處ヨリモ溢血ヲ生シ易キハ人ノ通知スル所ナリ、而メ第二ノ關係ニ就テハ小兒ニ在テハ大人ニ於ケルヨリモ容易ク皮下溢血ヲ形成シ比較的甚ダ僅微ナル暴力ノ襲來ニ由テモ已ニ之ヲ生起スルヿ多シ、嬌柔ナル婦人及皮膚內及皮膚下ノ血管極メテ破裂シ易ク僅微ノ誘因ト雖モ已ニ溢血ヲ起スニ足レル所ノ高老者ニ於テモ亦然リトス

皮下溢血ノ廣袤

皮下溢血ノ廣袤ハ當該血管ノ口徑及性質(動脈管ノ損傷ハ大ナル溢血ヲ起スト盖シ其血液靜脈管ヨリモ高壓ノ下ニ流出スレバナリ)、其佗亦溢血ノ生起セル組織層ノ多少緊疎ニシテ且ツ大網眼ヲ有スルノ性質ニ基ツクモノトス、例之ハ頭皮ニ於ケル溢血ハ概シテ頭蓋骨ト頭蓋骨膜トノ間ニ於ケル緊疎ノ結締織中ニ於ケルモノヨリ遙ニ狹小ナル廣袤ヲ有スル理由幷ニ眼瞼及陰嚢若クハ陰唇ノ溢血ハ往々著大ノ廣袤ニ達スルヿアルノ理由ハ此事態ニ基因スルモノナリ

皮下溢血ノ形狀

最モ屢〻現ハル、溢血ノ外形ハ類圓形ナリ、其原因ノ一部ハ之ヲ生起セシメタル器具ガ多少ハ圓滑或ハ平坦ナル表面ヲ以テ襲來シ且ツ身體部分ノ形狀多クハ圓形ナルガ爲メ通例該器具ニ對シテ只限廓的ノ接觸ヲナスニ歸スベシ、而メ更ニ此事情ヨリ惹起セラル、結果ハ最モ種々ナル器具ヲ以テ同一若クハ類似ノ形狀ヲ有スル溢血ヲ生スルヿ是ナリ、然ルニ他ノ場合ニ於テハ溢血ハ之ヲ生起セシメタル器具ノ形狀ヲ著明ニ現呈スルヿアリ、例之ハ杖ヲ以テ打擊セル後(殊ニ背部ニ於ケル如ク)杖ノ長徑ノ大部分ガ身體表面ト接觸シ得ヘキ位置ニ存留スル線狀ノ皮下溢血ノ形狀ノ外其排列及數モ亦溢血ノ生起セラレタル狀況ヲ察知セシムルニ足ルヿアリ、其他溢血ノ存在スル局處モ亦然リ、是レ亦殊ニ杖打ニ由テ生起セラレテ線狀ヲ呈シ且ツ多クハ並行ニ通走シ然ラサレバ種々ニ錯綜シ多クハ紅斑樣ノ腫脹ヲ伴フ所ノ溢血ニモ適用セラレ、一層適切ニハ絞殺未遂及實際成功セル絞殺ノ後ニ發見セラレ通例同時ニ存在シ且ツ指爪ニ因スル皮膚剝脫ニ參照スレバ已ニ侵襲ノ方法若クハ死因ヲ明知セシムルニ足ル所ノ喉頭兩側前頸部ノ溢血ニモ通用スヘキ理由ナリトス

全上ノ排列數及局處

各箇ノ溢血ハ自ツカラ健康上重篤ナル性徴ヲ具フルヿ稀ナリ、例之ハ其廣袤殊ニ著大ナルカ或ハ其原因タル軟部ノ挫傷劇甚ナリシ等ノ如キ然リトス、此場合ニ於テハ間〻壞疽及偶

生體ニ於ケル皮下溢血ノ結果

骸ノ側瘍病赤堪ヤ伯也場合ヤ中ヤ容易ヤリトス之ニ反シ其各個ニテハ唯輕微ノ損傷タルニ過キサルヘキ多數ノ溢血一齊ニ共働スルキハ（此被害ニ關聯セル强劇ナル末梢神經端ノ刺戟及一部ハ反射的ニ一部ハ直接ニ震盪ニ由テ生起セル神經中樞ノ刺戟ハ措テ論セサルモ）强烈ナル反應現象及永ク持續スル健康障害ヲ誘致スルコトナキニアラズ是レ殊ニ多數ノ杖打ヲ以テスル虐待（所謂「リンチ」*Lynch* 即チ私刑）ニ由テ屢〻實見セラレタル所ナリ※

*ドルパート市ノキヨルベル Körber 氏(Vierteljahrsschr. für ger. Med. 1883. pag. 266) ハ「リンチ」ヲ被リタル二名ノ馬盜ヲ剖檢シタル際溢血ヲ呈スル無數ノ線條ヲ發見セリ、其一名ニ於テハ亦頭蓋裂及顱頂ニ於ケル腦膜間ノ出血ヲ認メ而シテ謂ヘラク斯ノ如キ場合ニ於テ死亡ハ第一ニ皮下ニ於ケル廣キ溢血ニ基因スル失血ヨリ來ルモノナラント

生體ニ於ケル皮下溢血部ノ狀態

溢血セル皮膚部分ハ其新鮮ナル際限劃性ニメ間〻少シク隆起シ類青色若クハ類赤色ヲ呈シ通例少シク痛感性ヲ有スル斑點ヲナシ特別ニ大ナル廣袤ヲ有セザルキハ已ニ二十四時ノ經過後溢出物ノ液狀部分ノ吸收セラルヽガ爲メ自カラ縮小シテ平坦トナリ、爾後斑點ノ色ハ其邊緣ヨリ始マリテ靑灰色、次ニ類綠色、終リニ類黃色ニ變化シツヽ、少時ノ後全ク消失スヽ此變色ハ初メハ血液ノ濃稠トナルニ基因シ後ニハ血色素ノ一部褐色ノ「メトヘモグロビン」トナリ、稍〻後レテ一部ハ無晶形、一部ハ結晶性ノ色素（「ヘマチーン」及「ヘマトイヂーン」）ニ變化スルニ由ルモノトス

死體ニ於ケル溢血ノ法醫的假值

死體ニ於テハ皮下溢血ハ前文ニ記載セル關係ノ外、一般ニ暴力ヲ受ケ若クハ防禦ヲ試ミタル痕跡トシテ法醫學上ノ價値ヲ有スルノミナラズ、或ル新ラシキ損傷ガ生活間ニ或ハ死後ニ發起シタルカノ疑問ヲ答フル最モ主要ノ憑據點トシテ重要ナルモノナリ、此疑團ハ更ニ後文ニ於テ詳細ニ論述スル所アルベシ、斯ノ如キ死體現象ニ就テハ常ニ先ツ事實上溢血ノ存在スルヤ否ヤヲ考察スルヲ要ス、此關係ニ於テ法醫ハ每回單一ナル外部的及內部的ノ死體檢血並ニ其結果（血性漿液ノ浸潤及漏出）ヲ溢血ト誤ラサルコヲ確認セサル可カラス、此注意タルヤ不幸ニモ甚ダ屢〻輕忽視セラレ爾後法醫ハ爲メニ最モ困難ノ位置ニ陷ルコアルモノナリ、或ル皮膚部分ノ單一ナル外部的狀況ハ剖檢者ヲシテ之ヲ溢血ト明言セシムルニ足ルコ嘗テ之レアラズ、寧ロ墺國檢屍規則幷ニ普國ノ條例ニ規定セル如ク當該ノ局部ヲ切開シ、其實際溢血ニ一致スルヤ或ハ單ニ屍體變色ニ基因スルカヲ證明セサル可カラス、法醫ハ曾ニ甲或ハ乙ノ現象ヲ檢定スルニ止マラス其現象ト共ニ己レノ執行シタル全般ノ手續ヲ申述シ之ヲ調書ニ筆記セシメ以テ豫メ佗日ノ異議ヲ防止スヘシ、深部ニ於ケル血液溢出ノ檢查及證明ニ於テモ亦然リ、茲ニ尙ホ記載スヘキハ屍體鬱血ガ溢血ト誤認セラルヽノミナラス、死後仍ホ壓迫ヲ受ケツヽアリシ皮膚部分ハ一部ハ皮膚自己ノ壓迫ノ爲メ、一部ハ皮膚部分ノ非薄トナレルヨリ筋肉ノ透見セラルヽガ爲メ類靑色ヲ呈シ（是レ殊ニ絞索ノ凹痕ニ於テ證明シ得ベキガ如シ）亦以テ此錯誤ヲ來スコトアリ

※往々之ニ類スル著明ノ靑色皮膚部分ハ贏瘦セル人體ニ於テ表層ノ筋膜上ニ非薄ナル皮膚ヲ被布シ從テ其筋肉ヲ透見セシムル局處ニ於テモ亦之ヲ發見スルコトアリ、即チ前膊背筋、短腓趾伸張筋ノ筋膜及點頭筋ニ一致スル局處ノ如キ是ナリ

終リニ臨ンテ尙ホ記載スヘキハ皮膚ト內部ノ器官トニ論ナク外來暴力ノ作用ナキモ亦溢血

外來暴力ニ因セサル溢血

死體ニ於ケル溢血ノ新陳

ヲ生起シ得ルヿ是ナリ、之ニ屬スルハ矢苟兒陪苦病機ニ於ケル皮膚及內部器官ノ溢血斑斯ノ如キ皮下出血ハフォン、コーゲレルマ Kogerer 氏之ヲ Zeitschr. für klin. Med. x, 234 ニ於テ記述セリハ血友病幷ニ亦燐中毒ニ於ケル溢血斑トス、燐中毒ニ在テハ末梢血管多クハ脂肪變性ニ由テ甚シク破裂シ易クナレルガ爲メ之ヲ形成スルモノトス、斯ノ如キ溢血斑ト外傷性ノ溢血トノ誤認ハ絕無ナリトスル能ハス、吾人ハ上文ニ於テ明ラカニ燐中毒ノ部分現象トノ發起セル腹膜下ノ著大ナル溢血斑ヲ下腹挫傷ノ結果ト認取シタル一例ヲ記述セリ、斯ノ如キ誤認ハ剖檢ノ現景ヲ精密ニ考察スルトキハ之ヲ避クルニ難カラズ或ル一定ノ紅斑殊ニ結節性紅斑或ハ挫傷性紅斑(!)ハ溢血ノ如ク現ハレ後者ガ殊ニ年少者加之ノミナラズ哺乳兒及小兒ニ發見スルニ於テ益〻然リトス、此紅斑ハカポシー Kaposi 氏 (*Hautkrankheiten*, 1880, *pag.* 284) ニ據レバ甚タ疼痛性ナル榛實大乃至胡桃大ノ腫瘍或ハ結塊ノ狀ニ於テ極メテ急性ニ一夜間ニ發生シ、時トシテハ兩下腿及足跗、稀ニハ前膊、上腿及臀部ニ來ル、其結塊ハ中央ニ於テ青赤色、周邊ニ於テ薔薇紅色ヲ呈シ二三日間變化セスシテ止マリ、爾後八乃至十數日間內ニ鮮紅色ハ青赤色、黃色及綠色ニ變化シツヽ消褪ス、發疹ノ結塊狀ヲナスヿ、其發生ノ時トシテ定型性若クハ段落性ナルヿ、並ニ初メ其表面ニ薔薇紅色ヲ呈スルヿハ共ニ類症鑑別ヲ容易ナラシムルノ効アリ

死體ニ於テ溢血ノ新陳ヲ檢定スルノ要アルトキハ當該ノ皮膚部分ニ於ケル前記ノ外徵ノ外亦漏出セル血液ノ精細ナル性質ヲ參考セザルヘカラズ、溢血愈〻陳舊ナルニ從テ當該ノ血液ハ愈〻濃厚トナリ其本來ノ色ハ愈〻甚シク變化セル者トス、初メノ日子間ニ在テハ血液ハ爹兒樣稠度ヲ有シ且ツ厚層ニ於テハ殆ト黑色、薄層ニ於テハ尙ホ尋常ノ血色ヲ呈スルヲ見ルヘシ、後ニ至レバ其色漸ク類褐色ニ傾キ愈〻汚色トナリ多少著シキ銹色ノ浮彩ヲ帶フルニ至ル、赤血球ハ初メ完全ニ保存セラレ、變色ノ始マルト共ニ其崩壞ヲ起シ其數亦減少シテ同時ニ夥多ノ收縮性細胞ヲ發生ス、赤血球ハ其細胞中ニ包圍セラレテ顆粒狀ノ色素ニ分解ス、斯ノ如キ溢出物中ニハ早クヨリ「ヘマトイヂン」結晶ヲ發見シ其數ハ溢出物ノ稠化及變色ノ進歩スルト同一ノ程度ニ於テ增加ス、新鮮ナル屍體ニ於テハ斯ノ如キ現景殊ニ「ヘマトイヂン」結晶ハ能ク概畧的ノ時日測算ニ利用スルヲ得ヘシ、但シ腐敗セル屍體ノ檢査ニ於テハ然ルヿ能ハズ、蓋シ「ヘマトイヂン」結晶ハ腐敗組織中亦(殊ニ速ニ)形成スルヿアレバナリ、初生兒殊ニ死產兒ノ腐敗屍體中ニ於ケル血液ニハ通例夥シク「ヘマトイチン」結晶ヲ發見ス而メウヰルヒヨー Virchow 氏ハ死了セル切斷瓣ニ於テ已ニ第四日ニ當リ、溢出物中ニ於テハ第十七日ニ當リ此結晶ヲ發見セリ※

※本件ニ關シテハ法醫學上重要ノ屍體現象ニ就キ吾人ノ論述セル所 (Vierteljahrsschr. f. ger. Med. 1877, XXVI, pag. 264) 幷ニラングハンス Langhans 氏 („Beobachtungen über Resorption der Extravasate" Virchow's Archiv. 49. Bd. 及コルヅワ Cordua 氏 („Ueber den Mechanismus der Resorption von Blutergüssen," Med. Centralbl. 1877. pag. 952) ノ說ヲ見ヨ、其他ロキタンスキー Rokitansky 氏ノ病理解剖學書 (Handbuch der pathol. Anatomie, 3 Aufl. I, 216) 及エシュワイレル Eschweiler 氏 (Deutsche Zeitschr. f. Chirurg. 1885, XXIII, pag. 94) ノ說ヲ參觀スヘシ、エシュワイレル氏ハ佗ノ諸說ニ反シ溢血ニ於テ生スル皮部ノ變色ハ血液色素ノ變化ト何等ノ關係ナク唯着色層ノ多少淺表ナル位置ト染色層厚度トノミニ屬スルモノナルコトヲ云ヘリ

(ハ)創傷 *Wunden.*

鈍器ニ由テ生シタル創傷(挫創)ノ形狀

鈍器或ハ鈍稜器ニ由テ生起セル創傷ノ性質ハ主トシテ其器具ガ當該ノ表面ニ抵突セシ處ノ方向ニ關ス、其方向若シ垂直性ナリシトキハ皮膚ノ單一ナル挫壓的斷裂ヲ生ス、是レ或ハ皮膚ノ破綻ニ由リ或ハ其器具ガ實際軟部ニ擾入セシニ由テ起ルモノナリ、然ルニ其體部若シ斜メニ衝突セラレタルカ或ハ其器具該局部ヨリ滑走セシトキハ多クハ瓣裂創ヲ生ス、是レ該器具ガ管ニ皮膚ヲ斷裂セシムルノミナラス、亦其基底ヨリ之ヲ剝離セシムルニ由ルモノトス、挫壓セル幷ニ斷裂セル創傷ハ多數ノ場合ニ於テ其不正ナル形狀即チ挫摧セル、剝脫セル及多般ニ錯綜セル且ツ多クハ廣キ範圍ニ於テ溢血セル邊緣幷ニ其基底ノ大抵不整ニ挫摧セラレタル形狀ニ由テ認識スルヲ得ヘシ

線狀ノ挫斷創

鈍器或ハ鈍稜器ニ由テ間、皮膚上ニ線狀斷離ヲ生シ其外見上切創或ハ割創ト區別シ難ク或ハ全ク區別ス可カラサル如ク平坦銳截ノ邊緣ヲ有スルヲアリ、斯ノ如キ創傷ハ殊ニ鞏固ナル殊ニ凸隆セル基底上ニ皮膚ノ緊展セラレタル局部ニ於テ形成シ易シ即チ通例ハ其皮膚ガ器械ノ作用ニ由リ(後文ニ記載スヘキ)局處的分裂方向ニ最モ好ク符合シテ破裂セラルヽヨリ生スルモノトス、斯ノ如キ佳適ノ狀態ハ殊ニ頭皮ニ於テ現存シ玆ニハ尙ホ其組織ノ平等ナル造構ト輕微ナル移動性トアリテ之ニ加ハレリ、此部分ニ於テハ實際亦斯ノ如キ現景ヲ見ルヲ極メテ多シ、骨稜上ニ通走スル皮膚部分ニ於テモ亦同種ノ創傷ヲ來スヲアリ例之ハ壓死セル死體ニ於テ脛骨ノ稜角ニ沿フテ皮膚ノ線狀且ツ銳緣性ナル斷裂ヲ見タルヲアリ、而ノ壓死者ノ第二例ニ於テモ亦斜メニ恥骨縫際上ニ走ル所ノ全ク直線形且ツ銳

所謂破裂創 Platzwunden 及其種別

破裂創ト切創及割創トノ區別

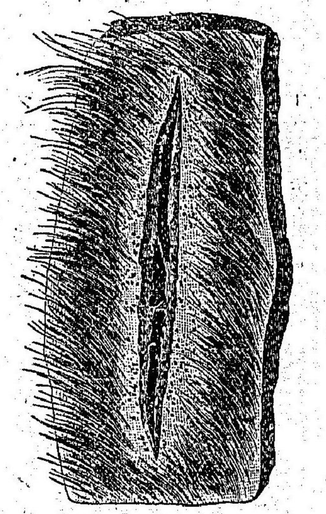
緣性ナル長サ十五「センチメートル」ノ腹皮創傷ニノ恥骨縫際並ニ恥骨地平枝ニ於ケル影響頗ル著明ナルモノアリキ、斯ノ如キ『破裂創』中特ニ區別スヘキハ破折セル骨ノ稜若クハ角ノ擾入且ツ穿通スルヨリ生シタルモノナリ、四肢ニ於テハ斯ノ如キ現景ヲ一般ニ複雜骨折ト稱ス、然ルニ頭部ニ於テモ亦斯ノ如キ狀態ヲ來スヲアリ即チ頭蓋骨ノ甚タシク破摧セラレタル際骨ノ碎片ニ由テ頭蓋破ヲ穿孔スルトノ如シ、茲ニ此事實ハ特別ニ注意スヘキノ價値ヲ有スル蓋シ第一ニハ斯ノ如ク續發的ニ生シタル創傷ヲ原發的ノモノト認メ、第二ニハ此種ノ創傷ヲ頻回反復セル暴力ニ原因スルモノト認ムルヲ少カラザレバナリ

破裂創ト切創或ハ純粹ノ割創トハ殊ニ其基底ノ狀況ニ由テ之ヲ區別シ得ヘシ、即チ切創或ハ割創ニ於テハ創傷基底ニ向テ楔狀ニ深陷シ其徑路ニ當レル一切ノ組織ヲ均等ニ且ツ一平面ニ於テ割裂スルノ際鈍器ニ由テ生シタル線狀創ニ於テハ通例其邊緣ノ形狀銳ク且ツ正直ナルニ拘ハラス不整ニ挫摧セラレタル基底アルヲ見ルヘシ、而ノ其創傷ハ通例皮膚ノ破裂ニ由テ生起スルガ故ニ基底ニ於テ輦固性ノ組織部分殊ニ脈管ガ創傷ノ一側ヨリ他側ニ向テ橋梁狀ニ通過スルヲ發見スルヲ稀ナラス、即チ之ノミヲ以テ損傷ノ發生方法ヲ確定スルニ足ルヘキ現景ナリトス(第四十六圖)、右ニ同シク鈍器ニ由テハ常ニ著大ニ生起セラルヽ所ノ創傷ニ一致スル溢血ノ範圍ト多般ノ方向ニ渉リテ其基底ヨリスル創緣ノ分離トハ亦此鑑別ニ參取スルヲ得ヘシ、而ノ創緣ノ單一ナル一側性分離ハ鈍器ニ由テモ割創ニ於テモ均シク發見スルヲアルモノナリ

挫創ノ轉歸

咬傷

第四十六圖



ハ主トシテ其經過ノ長短ヲ左右シ且ツ所謂偶發性創傷病即チ慢性化膿、蜂窠織性炎、丹毒、膿流注等ノ發生ニ對シ佗ノ場合ヨリモ佳適ノ狀況ヲ與フルモノトス、斯ノ如キ創傷ハ同一ノ理由ヨリシテ稀ニ線狀、多クハ不整ノ瘢痕ヲ遺シ、其瘢痕ハ壞死部分ノ剝脫及之ニ繼起セル化膿ノ愈、廣大ナリシニ隨テ愈、著シキ範圍ヲ有スルモノナリ

咬傷ハ挫傷ノ一則種ヲ形成ス、是レ人ニ由テモ動物ニ由テモ誘起セラレ人ニ由テハ通例齒ヲ以テ容易ク咬着シ得ヘキ突出セル身體部分即チ指及鼻等ニ負傷ス、嫉妬或ハ復讐ヨリスル此部分ノ咬鬪ハ屢實見セラルヽ所ナリ、チロール州ノ或ル山谷地方ニ於テハ爭鬪ノ際耳輪ヲ咬斷スル習慣アリ、吾人ガインスブルクニ滯留セル際三回其鑑定ヲ托セラレタリ、斯ノ如キ創傷ノ邊緣淺クシテ更ニ小ナル身體部分ノ斷裂ハ壓溢血ヲ呈シ齒牙ノ壓痕ヲ認ムルコト稀ナラス、而シテ現

平面ノ地床上ニ墜落スルニ由テ後頭部ニ生シタル殆ド銳緣性ノ線狀創傷、深部ニ組織橋梁ヲ有スル或ル旅館ニ於テ卒然倒死セル心臟肥大患者ニ於テ發見セル者

斷裂シ且ツ挫壓セル創傷ハ第一癒合ヲ以テ治癒スルヿ稀ニノ肉芽及瘢痕形成ノ方法ニ於テ治スルヿ比較的不整ニ多シトス、被傷部分ノ挫壓ノ程度若クハ其後ニ殘留スル該部分ノ生活能力

動物咬傷ノ例

最ハ創傷原因ノ認定ヲ容易ナラシムルノ効アリ

動物ノ咬傷ハ最モ種々ナル身體部分ニ享受セラレ得ベシ、而シテ犬馬等ノ如キ大動物ニ因スル者ハ人ノ咬傷ニ比シテ適ニ廣大ナル創傷ヲ起ス、犬ニ由テ十三歲ナル一女子ノ甚タシク咬噬セラレタル恐ルヘキ一例ハ千八百七十八年ニ於テ法醫上ノ剖見ヲ經タリ、其女子ハ或ル過失ノ爲メ歸宅スルヲ恐レシガ爲メ夜間晩ク或ル建築場ノ外構ヲ超エテ登攀セシニ二頭ノ巨大ナル肉舖犬ト一頭ノ小ナル雜種犬アリテ其建築物ヲ看守シタリ、而シテ劇シキ犬吠ト救助ヲ乞フノ聲近隣ニ聞エタル後少時ニシテ其女子ハ多數ノ創傷ノ爲メ失血シ且ツ已ニ死亡シテ發見セラレタリ、剖檢ノ際其全頭皮ハ頭蓋ヨリ剝離セラレ右頸部ノ皮膚ハ多々挫壓セラレ且ツ處々點頭筋及右外頸靜脈ヲ合セテ不整ニ斷裂セラレ、其他右上膊ノ內上部ニ於ケル皮膚及淺筋肉ハ、サフェナ靜脈ノ負傷ヲ除テ亦均シク斷裂セラルヽヲ見タリ、右ノ外一部分ハ不整ニシテ一部分ハ類圓形ヲ呈シ處々弓形ノ列ヲナシテ存スル皮膚剝脫及皮膚小分裂ヲ有ス、是レ明ラカニ齒ノ印痕ヲ認取セシムルモノナリ、此創傷ノ各個ハ類圓形ノ入口ヲ有シ而シテ唯皮膚ノミヲ穿透シ圓錐形ニ通走スル短キ溝管ヲ連續ス、是レ明ラカニ犬ノ圓錐形ナル角齒ニ由テ生起セルモノニシテ殊ニ始メヨリ刺創ト誤認セラレシガ爲メ一層ノ興味ヲ有スルモノナリ☆

☆犬ノ咬傷ニ由テ生シタル創傷ノ外觀ハアシュグータン H. Coutagne 氏 (Note sur les morsures des animaux domestiques considérées au point de vue de la rechercle médico-légale de l'indentité "Ann. d'hyg. publ. 1879. pag. 508) 之ヲ精細ナル檢査ノ物體トナセリ、是レ一男子暴掠ヲ企スノ際被害者ノ小犬ニ由テ咬傷セラレ其捕縛後無罪ヲ證明セ

ンガ爲メ該咬傷ハ實際同時ナルモ或ル他ノ場處ニ於テ巨大ナルニューファウンドランド犬ニ由テ得タルモノナリト構言セシ例アリシ機會ニ於テ行ヒタルモノナリ

動物ニ由テ生起セラレタル咬傷ニ於テハ創傷自己ノ外亦狂犬毒ヲ以テスル傳染ノ歿アルコトヲ考察スヘシ狂犬病ニ於テハ特徴性ノ剖見的現象ヲ呈スルコトナシト雖モパストヨール Pasteur 氏ノ初メテ論セシ如ク穿顱セル動物ノ硬腦膜下ニ其延髓部分ヲ接種スルヰハ能ク其診斷ヲ確定スルコトヲ得吾人ノ教室ニ於テハ此有益ナル補助手段ヲ反復シ常ニ陽性ノ成功ヲ以テ之ヲ利用セリ、ハーバルタウフ H. Paltauf 氏 (Vierteljahrsschr. f. ger. Med. 1889. LI., 312) ハ之ニ關スル報告ヲナシ衆テ此接種法ノ證明力ニ對シテ起レル疑難ニ就キ同氏ノ擧行セル試驗ヲモ記述スル所アリキ

(ニ)重要ナル神經中樞ノ震盪

此震盪中殊ニ着目スヘキハ腦震盪、脊髓震盪及上腹神經叢ノ震盪ナリ、其細說ハ後文各身體部分ノ損傷ヲ記スル際之ニ論及スヘシ

(ホ)內臟ノ破裂 *Rupturen innerer Organe.*

內臟破裂ハ或ハ直接ノ衝突ニ由テ起リ或ハ反擊ニ由テ生スルヿアリ、其成立ニハ一ノ强大ナル暴力ナカラサル可カラス、此故ニ最モ屢〻之ヲ見ルハ非常ノ高處ヨリスル墜落ノ後、壓死者、轢死者、瀧車ノ衝突球間ニ陷落セシ人體及類似ノ劇シキ暴力作用ヲ受ケタル時ニ在リ、稀ニハ稍〻輕微ノ暴力ニシテ之ヲ生起スルニ足ルヿアリ例之ハ足ノ蹂躙、搗杵ノ衝突、床板上ニ於ケル投擲等ノ如シ、吾人ハ一醫師ガ正ニ急步ヲ初メントシテ其近眼ナルガ爲メ一ノ木柵ヲ看過シ之ニ對シテ劇シク衝突セシ際腎臟ノ致死的破裂ヲ受ケタル一例ヲ知レリ殊ニ破裂ノ害ヲ受ケ易キハ蜂窠織性ノ器官ニシテ就中其大サ及脆碎性ト其位置ノ保庇セラルヽヿ少ナキトニ基ツク、肝臟ハ最モ之ニ罹リ易キ臟器ナリトス、之ニ次キテハ脾、更ニ其次ニハ腎臟、肺臟及心臟ナリ、而シテ胃、腸或ハ膀胱ハ稍〻稀ニノ、最モ稀ナルハ腦トス、外傷ナキ頭蓋ニ於テ腦質ノ破裂セル例ハクーパー Cooper、アダムス Adams、カスペル、リーマン Casper-Liman ノ諸氏之ヲ實驗セリ※、頭蓋骨折傷ニ於ケル腦ノ中心的破裂ハ屢〻見ル所ニシテ其佗ノ狀況全ク同一ナル際當該器官ノ個人的抵抗力ハ斯ノ如キ破裂ヲ發生スルノ難易ニ關シテ影響アルヘキヿ固ヨリ言ヲ俟タズ、是レ殊ニ脾臟ニ於テ然リトス、蓋シ肥大セル殊ニ急性ニ腫脹セル脾臟ハ正常ノ脾臟ヨリモ遙ニ容易ノ且ツ既ニ僅微ノ誘因ニ由テモ破裂スルヿアレバナリ

※ベルヒマン Bergmann 氏著 Die Lehre von den Kopfverletzungen. ヒタ、セルロート Pitha-Billroth 兩氏著 Handb. d. Chirurgie. III. 245 ヲ看ヨ、前記ノ器官ノ外殆ント一切ノ諸器官モ亦破裂ニ罹リ得ヘキハ固ヨリナリ、殊ニ壓死者ニ於テハ往々同時ニ最モ種々ナル破裂ヲ發見ス、肝臟稀ニハ他ノ器官ニ於テ問〻中心的或ハ漿液膜下ノ破裂ヲ見ル、吾人ハ一回肝管ノ破裂ヲ見、次ノ一回ニハ轢死ノ後膽管ノ特立的破裂ヲ見タリ、最後ノ場合ニ於テハ十日後始メテ死ヲ致セリ、剖見ノ際腹腔中ニ於テ甚タシク胆汁色ヲ帶ベル滲出物ト十色ノ糞便トヲ發見セリ

此等ノ事實ハ殊ニ熱病地方ニ於テ注目スヘキ所トス、有名ノ熱病地タルマツリナツス島、ボル

重要ナル神經中樞ノ震盪

損傷ニ繼起スル內臟破裂

各內臟破裂ノ難易

外傷ニ因スル內臟破裂ノ例

トルイノ警察醫ナルペルロー Pellereau 氏 (Ann. d'hyg. publ. 1882. Nr. 3. pag. 223) ハ一千八百七十九年ノ始メヨリ一千八百八十一年ノ九月ニ至ル間ニ十三回ノ脾臟破裂ヲ實驗セシニ其八回ハ疑ヒナク外傷ニ基因シ、而シテ皆熱病ニ罹リ重キ脾腫ヲ具有セシ男子ニ關スルモノナリキ、此實例中二回ハ拳ヲ以テスル打擊ヨリ、第三ノ一例ハ蹂躪ヨリ破裂ヲ起セリ、斯ノ如キ場合ニ於テハ亦脾臟ノ自然的破裂ヲ來スヿ是レアリ法醫學上極メテ重要ナル者ナリ、ペルロー氏ノ實驗中其四回ハ確然自然的破裂ニシテ更ニ一回ハ蓋シ之レナラント信スヘキモノナリキ、ガデルップノコル Corre 氏 (Arch. de l'anthrop. crim. 1889) 之ニ類スル發見ヲ報告セリ、吾人ノ教室ニ於テモ亦脾臟自然破裂ノ場合ヲ剖見ニ附セシ一例アリ、又シュレムメル Schlemmer 氏 (Allg. Wr. med. Ztg. 1878. Nr. 11 u. ff.) ハ戴籍中ヨリ佗ノ六例ヲ擧ケテ之ヲ記述セリ、其佗ノ實例ハ Med. Centralbl. 1878. pag. 686 (マルカム Markham 氏) 及 1879 pag. 127 (シドニー、ストーン Sidney Stone 氏) 並ニマシュカ Maschka 氏 (Allg. Wr. med. Ztg 1877. pag. 348 (forensischer Fall, angebliche Misshandlung; in der Milz multiple Angiome, wovon eines geborsten) 及シュウヰング Schwing 氏 (Ueber Milztumoren während der Schwangerschaft und Geburt. Centralbl. für Gyn. 1880. Nr. 13) ノ說ヲ看ヨ、茲ニ注目スヘキハ哺乳兒加之ノミナラス初生兒ニ於テモ亦脾臟腫大ヲ發見シ時宜ニ由リテハ自然的并ニ外傷的破裂ヲ誘起スルコトアルノ事情是ナリ、ビルヒ、ヒルシュフェルド Birch-Hirschfeld 氏ハ分娩ノ際小兒ノ脾臟破裂セシ一例及ステフェン Steffen 氏 (Jahrb. für Kinderheilk. XVII, 1. Heft) ハ其二例ヲ實見シ、吾人ハ又急性腫脹ニ罹リ極メテ血液ニ富メル脾臟ノ包膜破裂ニ繼起セル體內失血ヲ以テ死因ト認メ得タル二哺乳兒ヲ

肝臟破裂ノ實例

內臟破裂ノ轉歸

剖見シタリ、然レトモ特ニ明言セザル可カラサルハ極メテ柔嫩且ツ緊張セル脾臟包膜ガ死後ニ於テ間〻頗ル不明ノ破裂ヲ起セシ實例ノ吾人ニ由テ反復實見セラレタル件ニシテ是レ腹腔ニ發見セル血液ノ液狀ニシテ容易ク洗去セラルヘキ性質ト失血現象ノ存在セサルトニ由テ判定シ得ラルベキモノナリキ

肝臟ニ關シテハ之ニ一致スル經驗アレドモ稍〻稀ナリ、キヤリー Chiari 氏ハ髓樣結節ヲ滿敷セル肝臟ノ破裂ガ臨床中身體ヲ轉向セルトキニ發生セシ一例ヲ報告シ、ハインツェルマン Heinzelmann 氏 (Friedreich's Bl. 1886, pag. 360) ハ胸膜肺炎及心臟外膜炎ノ經過中急性實質的變性ガ破裂ヲ促進スルノ原因ヲナセシ類似ノ一例ヲ記載セリ、タマッシア Tamassia 氏モ亦脂肪變性ニ罹リ且ツ「エヒノコックス」包囊ヲ含有セル肝臟ガ僅微ナル衝突後ニ破裂ヲ來タセシ一例ヲ見タリ、而シテ其破裂ハ正ニ一ノ「エヒノコックス」包囊上ニ位セシト云フ

心臟及大血管ノ破裂、或ハ肺肝及脾ノ廣大ナル破裂ハ失血ニ由テ即時ノ死亡ヲ起スヲ常トス※、其出血若シ裂傷ノ範圍僅微ナルガ爲メ或ハ當該器官ノ血液ヲ含有スルヿ少ナキガ爲メ直チニ夥多ナラサリシカ或ハ特別ノ局處的狀況ニ由テ遲延セラレタルトキハ其死亡ハ少時ヲ經タル後初メテ內部出血ニ由リ又ハ續發的病機ニ由テ來ルヿアリ、其佗時宜ニ由リテハ內臟ノ稍〻甚タシキ破裂後其人體ハ尙ホ自カラ起立シ更ニ行步シ得ルヿナキニアラス

※各箇器官ノ一般血液含有量ノ外、亦個人的ノ血液含有量ニモ注目スヘシ、是レ殊ニ肝臟ニ關シテ然ルモノトス、「リンチ」ヲ受ケタル酗酒漢及竊盜ニ關スル一例ニ於テ剖見者ハ頭蓋骨折傷ノ外長サ數「センチメートル」深サ單ニ三「センチメー

トル」ニ過キサル肝臓ノ一二裂傷アリテ腹腔内ニ僅微ノ出血ヲ來セルコトヲ發見セリ、爾後諮問セラレタル他ノ醫師ハ其出血ノ少ナキガ爲メ此裂傷ヨリスル死因ヲ疑ヒ且ツ該裂傷ハ剖見ノ際其術ノ精巧ナラサルガ爲メニ生シタルナラント推想セリ、然レトモ出血ノ僅微ナルハ裂傷ノ深サ少ナキト殊ニ第二回ノ醫師等ガ全ク看過シ去リタル肝臓全體殊ニ其周圍部分ノ高度ナル脂肪變性及之ニ因スル著シキ肝臓貧血就中其周圍部分ノ貧血トニ由リテ充分ノ説明ヲ得ヘシ、是レ常習性酒客ニ於テ通例發見セラレ且ツ當該剖檢記事ニ於テモ亦記載セラレシモノナリ

内臓破裂後直チニ致命セザル實例

例之バチューリン Zühlin 氏 (Virchow's Jahresb. 1874, I, 291)※ ノ報告セル一例ニ於テハ梁材ノ墜落ニ由テ脾臓ノ破裂及左腎ノ完全ナル破裂ヲ受ケタル一人尚ホ自カラ起立シ二十歩進行スルヲ得而メ七時間半ノ後ニ死亡セリト云フ、吾人ハ又三十歳ノ强壯ナル鐵道工夫列車ヨリ一ノ障壁ニ對シテ壓迫セラレ直チニ昏倒セシニ醋液洗灌法ノ後更ニ回復シ自己ノ要求ニ從テ病院ニ送ラレ運搬中初メテ死亡セシ者ヲ剖見シタルトキ其結果トシテ脾臓ノ完全ナル破裂、多般ノ肝臓破裂其一ハ長サ十一「センチメートル」深サ一「センチメートル」、右腎ノ完全ナル横裂肺ノ表面的被傷ヲ兼ヌル左側第六肋骨ノ折傷ノ存在スルヲ見タリ、又腹部ニ一ノ馬蹄打撲傷及之ニ由テ肝臓左葉ノ右葉ヨリスル殆ント完全ナル斷裂并ニ高度ノ腎臓破裂ヲ受ケタル一馭者尚ホ或ル家ノ第一階ヲ登リテ厠房ニ赴キ得タルモ同處ニ於テ初メテ倒仆セシ一例アリ、終リニ尚ホ吾人ハ心臓破裂アリシニ拘ハラス十時間ノ後初メテ死ヲ致セシ一例ヲ見タリ、是レ十七歳ノ馬丁ニ關スルモノニシテ同人ハ午前九時ニ於テ腦部ニ馬蹄ノ打撲ヲ受ケ爲メニ一ノ牆壁ニ抛着セラレタリキ、即時ニ招致セラレタル醫師ハ其被傷者ガ人事不省ニ陷リ脈搏亡絶、「チアノーゼ」ヲ呈シ、四肢厥冷シ、不隨意的ノ泄便アルヲ見タリ、然ルニ其死亡ハ始メテ午後七時半ニ於テ成レリ、剖見ノ結果胸骨ノ下端ニ於テ大豆大ニ超ユル二箇ノ皮膚乾燥部アリテ互ニ三横指隔離シ且ツ廣サ半「センチメートル」ノ乾燥線條ニ由テ相聯結セラルヽヲ認メタリ、心囊中ニハ一部液狀ニシテ一部凝固セル多量ノ血液ヲ有シ、心臓ハ收縮シ上行靜脈開口ノ直下ニ當レル其下面ニ於テ長サ一「センメチートル」ニ超ユル横形罅裂狀ノ溢血性穿孔アリテ心壁中ニ入リ右心房ト連通シ斷裂セル邊緣ヲ有スルヲ見タリ、此穿孔ハ初メ恐クハ尚ホ小ナリシモ爾後茲ニ壓迫シ來ル血液ニ由テ擴大セラレシモノナラン長時ニ渉ンル瀕死狀態ハ之ニ由テモ説明スルヲ得ヘシ

※仍ホ之ニ類スル二例アリ即チ一ハ肝臓破裂ノ後四十八日間生存シ、一ハ脾臓破裂後四十三日間生存セシモノナリ、Wr. med. Wochenschr. 1879. Militärarzt. Beilage zu Nr. 2 ヲ見ヨ

内臓破裂ノ治癒セシ實例

腺性器官ノ淺表性裂傷ハ治癒スルコトヲ得、是レ殊ニ肝臓ノ淺表性裂傷就中比較的屢〻發見スル如ク單ニ腹膜ノミヲ侵スモノニ於テ然リトス、吾人ハ硬腦膜ヨリスル出血ノ爲メ死亡セシ一酒客ニ於テ同人ガ死亡二日前階段ヨリ墜落スル際ニ得タル肝臓裂傷ニメ長サ八「センチメートル」深サ單ニ〇・五「センチメートル」ニ達スルモノヲ發見セリ、此裂傷ハ已ニ合着シ一ノ炎性反應現症ヲモ其周圍ニ示サス、之ヨリ溢出セル血量モ亦極メテ僅微ニメ腦出血ノ發生セサリシナランニハ肝臓裂傷ハ恐ラクハ全癒シタルヘシト想定シ得ヘキ充分ノ理由アルモノナリキ、クロップ Klob 氏 (Sitzungsbericht der K. K. Gesellschaft der Aerzte in Wien vom 26. Jan. 1877 u. Wr. med. Blätter. 1878. Nr. 13)※ モ亦肝臓破裂ノ深サ實ニ六乃至八「センチメートル」ナルモノ治癒ノ進行

中ニ在リシ一例ヲ報告セリ、吾人ノ標木室ハ治癒ノ進行中ナル脾臟破裂ノ二標木ヲ保貯ス、此二例ハ非常ノ高處ヨリスル顚墜ニ屬スルモノニシテ共ニ頭蓋骨折傷ヨリ死ヲ致シ、一ハ十日ノ後、他ハ十一日ノ後絕命セルモノナリ、時トシテハ肝臟破裂並ニ脾臟破裂ノ後多少著大ナル部分ノ貧血性壞疽ヲ見ルコトアリ

皮表上ニ痕跡ヲ呈セザル內臟ノ損傷

※曾及腸ノ破裂ニ關シテハ腹部損傷ヲ論スルノ際記述スル所アルヘシ

全上ノ理由

玆ニ注目ヲ要スルハ皮膚表面ニ於テ其原因タル暴力ノ痕跡ヲ止メルコトナクシテ內臟ニ於ケル頗ル廣大ノ挫傷ヲモ生起シ得ルノ事實ナリ

※其他ホーフマイエル Hofmeier 氏ノ說 (Virchow's Jahresb. 1876, I. 286) ヲ見ヨ

吾人ハ壓死者、高處ヨリ顚落セル者、或ハ「アッフエル」間ニ於テ壓死セルモノト屍體ヲ剖見シ內部ヲ檢査シテ內臟ノ多般ナル破裂、纖肋骨ノ破折等ヲ見タルニ拘ハラス皮表上ニハ剝脫或ハ溢血ノ痕跡ダモ認メザリシ例歷々之アリ、殊ニ家屋ノ第三階ヨリ街路ノ敷石上ニ墜落シ一時間ノ後死セシ二十歲ノ女子ヲ檢査シタルニ初メハ注目シ得サリシ一個銀貨大青色ノ局部ヲ左側ノ腿腎襠襞ニ於テ發見セシ外、外傷ノ極微痕跡ダモ認メサリシニ左肺、脾及一腎ノ破裂其他腰椎ノ折傷及骨盤ノ廣キ挫擂アルヲ見タリ、外傷ノ缺亡ハ此場合ニ於テ其死亡ガ實際顚墜ニ由テ成リシヤ否ヤノ疑ヲ誘起セシメ爲メニ剖見ヲモ行フニ至リシナリ

斯ノ如キ所見ハ皮膚ノ强大ナル抵抵力ヨリ說明シ得ヘキモノニシテ之ガ爲メ皮膚ヲ經由シテ臟器ノ挫擂セラルヽニ恰モ布片ニ包裹セル林檎ヲ其布片ヲ破ラスシテ壓碎シ加之ノミナラス甚タ銳利ナラサル小刀ヲ以テスラ能ク之ヲ制截シ得ルニ異ナラサルモノナリ、其他多數ノ場合ニ於テ即時ニ發起スル失血ハ皮下組織ニ於ケル溢血ノ形成ヲ妨ケ得ルモノナラン、何トナレハ此種ノ死亡ニ於テハ皮下溢血ヲ形成スル時間トモ覺ヘル(ヘ)骨ノ斷裂及轉位 *Continuitätstrennungen und Lageveränderungen der Knochen.*

骨ノ折傷及脫臼ハ鈍器ノ暴力作用ヨリ來ル頻繁ノ結果ナリ、其法醫學上ノ價値ニ關シテハ各身體部分殊ニ頭首及四肢ノ損傷ヲ論スル際ニ讓ル

(ト)局處全部ノ摧爛及扯裂 *Zermalmungen und Abreissungen ganzer Körperteile.*

此種ノ損傷ヲ起スモノハ極メテ非常ノ暴力ナルヲ常トシ、鐵道遭難ノ際列車ニ由テ轢殺セラレタル者、器械中ニ墜落セル者等ニ於テ之ヲ見ル、又火藥製造場及「ダイナマイト」製造場等ノ破裂ニ由テ變死セル者ニ在テハ最モ劇甚ノ身體破壞ヲ來スコトアリ、蓋シ此等ノ場合ニ於テハ身體ノ殘部分ヲ發見シ其人體ノ異同ヲ確定スルダモ困難ナルニ至レルコトアリ(マシュカ Maschka 氏著 Bericht über die Explosion der Dynamitfabrik bei Prag. Vr. med. Wochenschr. 1871. Nr. 8 ヲ見ヨ)然ルニ斯ノ如キ非常ノ暴力ニ對シテモ亦皮膚ノ强大ナル抵抗力ヲ失ハス其力時トシテハ極メテ現著ナルコトアリ

吾人ニ報告セラレタル一例ニ於テ二列車ノ衝突ニ由テ變死セル一男子ノ全頭顱一ノ平坦ナ

全身體ノ破壞

ル餅塊狀ニ壓着セラレ且ツ全身ノ骨格及軟部ハ粥狀ニ挫爛セラレタルニ拘ハラス、頭部及顏面ノ皮膚ハ全ク損傷セスシテ止マリ只一二狹小ノ罅裂ヲ遺スニ過キサルコトアリキ、吾人ハ屢〻鐵道列車或ハ佗ノ重キ車輛ノ直チニ頭部ヲ輾過セシ人體ヲ檢査スルノ機會ヲ得タリ、此事例ノ一二ニ於テ頭首ハ全ク體軀ヨリ斷離セラルニ、佗ノ場合ニ於テハ其皮膚處々剝脫セルモ尙ホ其全連續ヲ失フコトナク恰モ頭首ト體軀トヲ聯絡スル寬縱ノ袋囊ヲナシツヽ頭ノ椎骨及軟部ハ糜爛狀ニ挫碎セラレシヲ見タリ

皮膚ニ斯ノ如キ強大ノ抵抗力アルニ由テ觀レバ高處ヨリスル頓落、重物下ニ於ケル埋壓、其佗類似ノ暴力ヲ受ケタル際體腔ノ特離的破裂ヲ見ルノ稀ナル所以ハ亦自ツカラ明白ナリトス

吾人ハ此種ノ破裂ヲ實見スルコト三回ニ過キサリキ、就中一回ハ土塊ニ由テ埋壓セラレタル協合ニシテ其腹皮ハ全橫徑ニ沿テ破裂シ腸ハ之ヨリ壓出セラレタリ、他ノ一回ハ精神病ニ罹レル一婦人三階ヨリ街路ノ敷石上ニ墜落シ垂直ニ頭首ヲ以テ地ニ達シタル者ナリキ、其頭首ハ矢狀徑及完全ナル正中方向ニ於テ著シク破裂シ之ヲ一見スルニ恰モ刀傷ニ由テ頭顱ヲ兩側半ニ割截シタルカノ觀ヲ呈シ、其顏鼻及上唇ヲ經過シテ中央ニ破裂セル顏面皮膚並ニ破裂セル頭皮ノ全部ハ只微細ノ鋸齒狀緣ヲ呈セシカ故ニ愈〻然リシナリ、破裂ノ後部ニ於ケル邊緣ハ多般ニ蹙裂セラレ頭蓋ハ無數ノ細片ニ破碎シ腦ハ唯僅微ノ殘留物ヲ有スルノミナリキ、第三ノ一例ハ十九「クラフテル」ノ高サヨリ有スル建築場ヨリ墜落シタル日雇勞働婦ナリキ、茲ニハ

頭蓋ノ破碎及四肢ノ多般ナル骨折ノ傍ラ腰椎柱ノ中央ヨリ肛門ニ達スル皮膚ノ矢狀破裂ヲ存シ、此破裂口ヨリハ多數ノ溢血斑ヲ帶ビテ破綻セル全空腸S字狀係蹄ノ一部分經徑ニ沿テ破折セル薦骨及大人頭大ノ塊ヲナセル子宮ノ突出スルヲ見タリキ、此等ノ場合ト雖モ亦身體皮膚ノ本然ニ破裂セシヨリモ寧ロ唯銳キ骨稜ニ由テ內部ヨリシテ其破綻セラレタルモノナルヤヲモ知ル可カラサルナリ

(二)切創及割創　Schnitt- und Hiebwunden.

純粹ノ切創ハ大抵直線的ノ徑行ヲ取リ、鋸齒裂ヲ爲サヾル銳キ邊緣ヲ有シ、創ノ長徑多クハ佗ノ廣袤ニ超過スルト、之ニ由テ生シタル組織斷離ガ深部ニ向テ楔狀ニ狹隘トナレル橫截面ヲ有スルトヲ以テ其特徵トナス

直線的徑行ハ頭蓋穹窿部ニ受ケタル切創ニ於テハ缺如スルコアリ、而シテ創緣ノ性質ハ器械ノ性質ニ由テ變化セラルヽコヲ得、例之ハ當該ノ小刀鈍キカ或ハ全ク缺潰セルモノナルトキハ之ニ由テ生シタル創傷ノ邊緣ハ多少鋸齒裂性ヲ呈スルコアリ、斯ノ如キ創緣ノ鋸齒裂性ハ皮膚上斜メニ斫截ヲ受ケタルトキニモ亦形成セラルヽコヲ得、此場合ニ於テ人若シ其皮膚ヲ伸展スルトキハ皮膚ノZ字形斷裂ヲ見ルヘシ、而シテ其邊緣ヲ吻合セシメザルカ若クハ玆ニ生起セル裂片ヲ適當ニ嵌合セサルトキハ二箇時トシテハ三箇ノ創傷ナルカト誤認スルコトアラン、是レ殊ニ頸部ノ切創ニ就テ注目スヘキ

砭截ノ方向ト切創トノ關係

切創ノ深淺、開閉及輕重

狀況ナリ、切創ニ於テモ亦皮襞ノ谷部ヲ殘シ一回ノ砭截ニ由テ二箇時トシテハ數箇ノ創傷ヲ生スルコトナキニアラズ

當該ノ局部ニ對シ垂直ニ砭截ヲ受クルトキ切創ノ內面ハ均等ナレドモ其斜メニ來襲セルトキハ一ノ創緣ハ斜向シ他ノ創緣ハ銳薄トナリ而ノ銳薄ナル創緣ハ其砭截ノ愈斜メニ來リシニ隨ヒ愈銳角性ヲ呈スヘシ、其佗又刀刃ノ平面的ニ來襲セル場合ニハ完全ナル瓣片ヲ形成スルコトアリ、突出セル殊ニ狹小ナル身體部分例之バ鼻、指節ノ如キハ全ク切離セラルヽコトヲ得而メ其切創ハ多少平坦ナル面ヲ呈シ銳キ邊緣ヲ具フヘシ

切創ノ深淺ハ砭截ノ際應用セル力ト器械ノ銳利性トニ由ルノ外亦其局部ガ擾入ヲ許スノ程度如何ニ關ス、骨ハ屢深キ擾入ヲ妨止スト雖ノ比較的切創殊ニ最モ深キ切創ヲ受クルコト多キ頸部ニ於テハ骨化セル喉頭軟骨モ亦此作用アリ、巨大ナル體腔ヲ切開スル所ノ切創ハ稀ナレドモ關節腔中ニ擾入スル切創ハ殆ト全ク哆開セズ然レドモ頭蓋板ヲ合セテ切離セラレタルトキハ哆開ヲ來ス、負傷體部ノ伸展或ハ屈曲セル位置モ亦切創哆開ノ大小ニ影響スルハ看過ス可カラサルノ件トス、是レ殊ニ前頸部及關節屈曲部ノ創傷ニ於テ然リトス

切創ノ輕重ハ主トシテ其深淺ニ關ス、單一ナル皮創ハ唯例外ノ場合ニ於テノミ特別ノ價値ヲ有ス、治癒ハ通例其創傷ヲ怠慢ニ附セサリシトキノ外ハ第一癒合ヲ以テ成功シ、細キ線狀ノ瘢痕ヲ止メ其直線的ノ徑行及移動性ハ容易ク其由來ヲ認知セシムルモノトス、深キ切創ハ殊ニ大血管ノ損傷ニ由テ危險ヲ來シ若クハ死ヲ致ス、而メ此關係ニ於テハ殊ニ頸部ノ切創ニ注目スヘシ是レ屢自殺ヲ行フガ爲メ、往々又他殺ヲ犯スガ爲メニ生セラルヽ所ノ創傷ナリ、其他又深キ切創ハ瀰久性ニ或ハ永存性ノ官能障害ヲ誘起シ、殊ニ頸部ニ於テハ言話障害、四肢ニ於テハ當該手足ノ使用妨害若クハ全癈ヲ繼起セシコトアリ

割創ノ生起及之ト切創トノ區別

割創ハ切創ニ等シク刀及ヲ具フル器械ニ由テ生起セラルヽモノナリ、然ルニ切創ハ身體部分ニ直抵セラレタル砭截器械ノ引曳的使用ニ由テ生起セラルヽノ際割創ハ通例其器官ニ對シ垂直ノ方向ニ襲撃セラルヽヨリ成ル、常ニ強大ノ力ヲ以テ行ハル、此種ノ侵擊法並ニ(一層甚タシク)當該器械ノ巨重性ハ割創ヲシテ切創ニ比シテ比較的巨大ナル深サヲ有スルノ特性ヲ得セシメ、又切創ハ通例骨骼等ニ由テ抑止セラルヽノ際割創ハ屢之ヲ透過シ去リ正ニ之ガ爲メ平均上切創ニ於テ見ルヨリモ遙ニ危險ナル性質ヲ具フルノ結果ヲ呈スルモノナリ

割創ノ外形

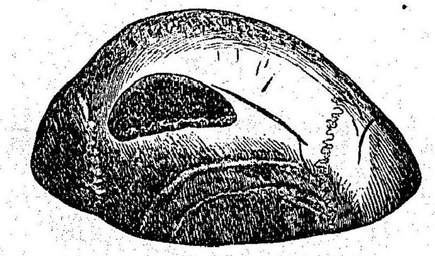
割創ノ外形ハ第一ニ其創傷ノ生起セラレタル方向ニ關ス、身體器官ニ對シ垂直ノ方向ヲ取レルモノナルトキハ平等ニ楔狀ヲナシ深部ニ向テ狹隘トナレル線狀創傷ヲ生シ、斜メニ或ル器官ヲ侵ストキハ多少斜向セル瓣裂ヲ形成シ、加之ノミナラス此瓣片ハ全ク割創ニ由テ斷離セラルヽコトアリ、割創ノ純雜ハ刀及ノ銳鈍ト其刀及ヲ形成スル楔狀部ノ厚薄トニ關ス、其佗又武器全體ノ重量ニ關係アリ、銳ク輕量ナル刀劍ハ(例之バ)斧鉞ヨリモ遙ニ純粹ナ

骨ノ割創

ル割創ヲ生ス、殊ニ斧鉞或ハ之ニ類スル器械ヲ以テセル割創ハ通例創緣ノ挫壓及骨折ヲ兼ネ且ツ骨碎片ノ破裂及壓陷ヲ併起ス、是レ多クハ骨ノ披裂狀分離ニ由テ追蹤セラルヘキモノナリ、甚タ重カラサル鋭利ノ器械例之バ輕刀ニ由テ生シタル骨創ニ於テハ負傷セル骨ノ碎裂ヲ見ルコト稀ナリ、但シ頭蓋骨硝子板ノ碎裂ハ斯ノ如キ塲合ニ於テモ亦通常見ル所ノ結果ナリトス

骨ノ割創ハ斫截器械ノ側面ト刀刄トガ愈〻鈍角ヲナシテ湊合スルニ從テ愈〻甚タシク哆開ス、然ルニ刀刄楔狀部ノ愈〻厚キニ從テ骨緣ヲ開離セシムルヿ愈〻多ク、骨ノ碎裂ヲ來シ或ハ割創開裂ノ終端ヲ骨裂ニ聯續セシムルヿ愈〻容易ナルモノトス、第四十七圖ハ所謂伐柴刀ニ由テ生起セラレタル二個ノ割創ヲ有スル頭蓋ヲ示ス、其割創ノ一ハ右側ノ顱頂骨突起ヲ切離シ、佗ノ割創ハ定型性罅裂ヲ呈シ其前端ヨリ一ノ骨裂アリテ進行ス、割創ノ判定ニ於テハ只負傷部分ノ性質ト其創傷ガ體腔中ニ攙入セルヤ否ヤノ狀況ノミナラス其佗武器ノ輕重ト其影響ニモ注目スヘシ、是レ殊ニ頭部ノ割創ニ於テ必要ナルモノトス、何トナレバ斧鉞ノ如キ巨重ナル器械ニ由テ割創ヲ生シタルトキハ器械ノ刀刄ニ由テ當該部分ノ斷裂セラルヽ

第四十七圖



頭蓋ノ割創、伐柴刀ヲ以テ生シタル者

刺創ノ生起及之ニ使用セラレタル器具

ヨリ生スル危險ノ外、亦腦震盪ニ由テ誘起セラルヽ危險ヲモ參加スヘキヲ以テナリ

(三)刺創　Stichwunden.

刺創ハ其長徑トノ比例ニ於テ狹隘ナル尖鋭ノ器械ガ長軸ノ方向ニ突入セラレタルヨリ生スルモノナリ、玆ニ注目スヘキハ殊ニ小刀樣ナル一刄性ノ器械トス、即チ多クハ尋常ノ袖囊小刀、稀ニハ懷劍狀ノ二刄性或ハ多刄性若クハ圓錐形ノ器械※是ナリ

※吾人ノ教室ニ於テハ七年以内ニ五十八箇ノ刺創屍體ヲ剖見セリ、其七回ハ自殺、三回ハ不虞ノ負傷、其佗ハ總テ謀殺或ハ故殺ニ關スルモノナリキ、其創傷ヲ生シタル器械ハ四十回ハ袖囊小刀、一回ハ鉛筆小刀、一回ハ移動性ノ刀刃ヲ有スル懷劍狀ノ小刀、三回ハ肉舖刀、五回ハ庖丁、各〻一回ハ歩兵ノ帶劍、外科刀(大腿動脈ニ於ケル刺創ヲ以テセシ一醫師ノ自殺)靴工刀、指物師用小刀、鑿子、殊ニ「ミルテン」葉狀磨滑器械ニシテ、其佗ノ一回ニ於テハ袖囊小刀ヲ以テ負傷セシヤ或ハ所謂斫擊銃劍ヲ以テセシカハ不明ニ附シ去ラサルヲ得サルモノナリキ、最後ニ強キ四稜形ノ彫像刀ヲ以テ頭部及頸部ニ向テ來襲セル刺創ノ爲メニ殺死セラレタル一婦人ヲ剖見シタリキ

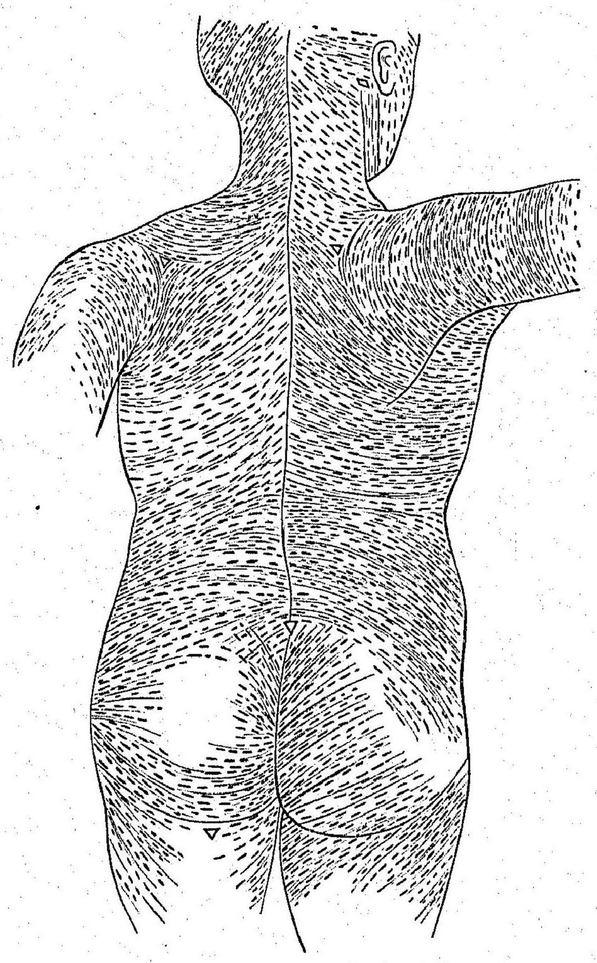
刺入口ノ形狀

定型性ノ刺創ニ於テハ一ノ刺入口ト之ヨリ深部ニ聯續スル刺創管トヲ區別スヘシ

皮膚ニ於ケル刺入口ノ形狀ハ當該器械ノ横斷面ノ形狀ニ一致スルヿ頗ル稀ニシテ唯二刄性ノ器械ニ於テ然ルノミ、何トナレバ此器械ニ在テハ實際兩側ニ於テ鋭角ヲナシテ通走スル刺入口ノ形狀ハ刺器ノ横截面ノ形狀ニ同一ナルベケレバナリ、然レ𪜈人若シ斯ノ如キ刺入口ノ形狀ヨリ其器具ハ二刄性ノモノナリシト判定シタランニハ大ナル誤謬ニ陷ルヘシ、何トナレバ尋常(即チ一刄性ノ)袖囊小刀ヲ以テセル刺創モ圓錐形ノ器械ヲ以テセル刺創モ或ハ加之ナラズ一定ノ稜角性器械ヲ以テセル刺創ニ於テモ亦正ニ斯ノ如キ披裂狀ニシテ兩端

同一鋭角ヲ形成スル刺入口ヲ生スルニ二及性ノ刺器ヲ以テセルニ異ナラサル可ケレバナリ、最モ著ルシキハ圓錐形器械ノ場合ニ於ケル狀態ナリ、已ニデュピュイトラン Dupuytren 及マルグーヌ Malgaigne ノ兩氏ハ斯ノ如キ器械ヲ以テハ人ノ豫想スヘキ如ク皮膚ノ圓形開離

第四十八圖

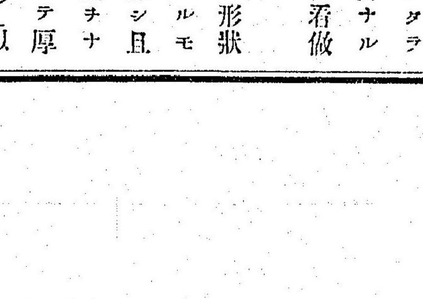


圓錐形刺刀ヲ以テ亂刺セル軀幹後面ノ皮膚（ランゲル Langer 氏ニ據ル）

披裂ノ方向ヲ生セスシテ披裂狀開離ヲ起スヘキコトヲ注意シタリ、而ノフヰルホー Fillos 氏（*Briand et Chaudé, Manuel de Médecine légale.* 1879. I, 473）ハ已ニ一千八百三十三年ニ於テ此披裂創ガ種々ノ身體局部ニ於テ種々ナル方向ヲ有スルコヲ確定シタリ、ランゲル Langer 氏（„ *Ueber die Spaltbarkeit der Cutis.* „ *Sitzungsber. der mathem-naturw. Classe der kais. Akademie der Wissenschaften.* 1861, XLIV）ハ更ニ進ンテ此關係ヲ究尋シ而ノ正規的ノ分裂性アルコヲ發見シタリ、即チ同氏ハ圓錐形ノ刺刀ヲ以テ生シタル刺入口ハ管ニ鋭角性ノ披裂ヲ生スルヲ常トスルノミナラス又此披裂ノ長軸ハ一定ノ體部ニ於テ常ニ一定ノ方向ヲ示スコヲ檢定シタリ、而シテ全皮膚ヲ摧碎シタランニハ整齊ナル圖象ヲ生シ其圖象ハ皮膚ノ整齊ナル纖維排列及之ニ基因スル正規的分裂性ノ標徴ト看做サヾル可カラスト論セリ（第四十八圖）

圓錐形ノ器械ニ由テ生起セラレタル皮膚披裂ノ形狀ハ小刀狀ノ器械ヲ以テ刺傷セルノ際通例生起スルモノト全ク同一ナリ、即チ其邊緣鋭ク弓形ニ開離シ且ツ其兩側一ノ鋭角ヲナシテ湊合スル所ノ披裂創ヲナス、披裂ノ長短ハ器械ノ廣濶ニ比例ス、即チ極メテ厚キ器械ヲ應用シタルキハ長サ數「センチメートル」以

第四十九圖



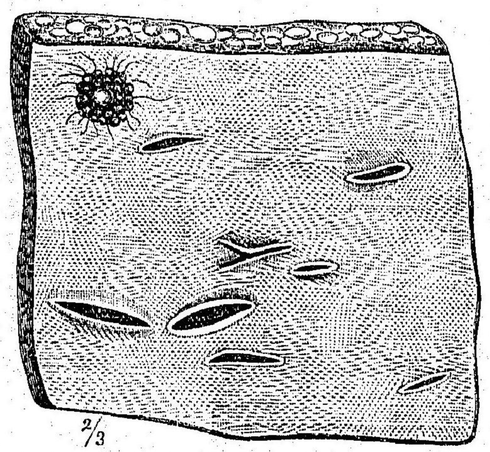
錐形器ニ由テ生シタル刺創ノ形狀

圓錐形ノ尖端ヲ有スル太サ二・五「センチメートル」ノ鐵梃ヲ以テ生シタル披裂狀刺口（自然大）

上ノ創裂ヲ生シ得ヘシ是レ其長サノ爲メ更ニ一層小刀ノ刺創ト誤認セラレ易キモノナリ（第四十九圖）

一及性ノ器械殊ニ尋常ノ袖嚢小刀ヲ以テセル刺創ニ於テハ其刺入口ハ唯例外的ニ（其背面正ニ當該ノ小刀背面ニ一致スル）狹隘ナル楔ノ形狀ヲ呈スルヿアレ圧殆ト通規トノハ一ノ披裂ヲ呈ス、即チ其創緣ハ平坦ナル弓狀ヲナシテ互ニ開離シ兩端ニ於テ銳角性ニ湊合スルモノナリ（第五十圖）、此現象ノ原因タルヤ總テ該刺入口ガ特トリ小刀及ノミヨリ生起セラレ畢竟只切創タルニ過キサルノ事實ニ在リテ存ス、人若シ一屍體ニ就テ一線ヲ劃シ幷ニ一小刀ヲ以テ其刀尖ガ正ニ該線上ニ中ル如ク刺入スルキハ容易ク此理ヲ證明シ得ヘシ、然ルキハ玆ニ生起セル創裂ノ一端ハ常ニ該線條中ニ來リ創裂ハ必ス刀及ノ向ヒアリシ側邊ニ來ルヲ見ルヘシ、是ニ由テ觀レバ皮膚創傷ノミヨリシテ小刀ノ刀背及刀及ノ如何ナル方邊ニ向ヒアリシカヲ知ルヿ全ク能ハサルヲ常トスルモノナリ、或

第五十圖



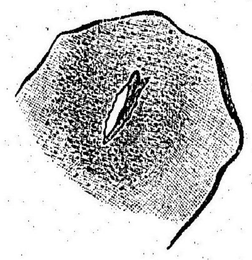
2/3
（三分ノ二）

讀誤劃截ニ使用セル一刃性ノ小刀ニ由テ心臟部ニ生シタル九箇ノ刺創（自殺ニ關ル）

一刃性器械ニ由テ生シタル刺創ノ性狀

袖嚢小刀例之ハ殊ニ爭鬪者ノ屢〻使用スル所ニシテ此器械ハ三稜性器械ノ如ク作用シ其背稜モ亦少シク皮膚ニ切入スルニ由テ矢尖狀ノ刺入口ヲ生スルモノナリ（第五十一圖）

第五十一圖

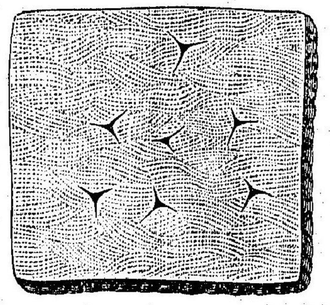


刃棟ノ刀背ヲ有スル小刀刃ニ由テ生シタル刺口（自然大）

稜角性器械ニ由テ生シタル刺創ノ性狀

「スヤレット」、鑢子或ル銃劍等ノ如キ稜角性ノ器械ニ於テハ刺入口及皮膚ノ形狀ハ主トシテ稜角ノ性質ニ由テ定マルモノトス、其稜角若シ有刃性ナルキハ皮膚ハ垂直ニ刺入セル器機ニ由リ其刃數ト同數ナル方向ニ截裂セラレ、之ガ爲メ通常星狀ノ創傷ヲ生シ、其星芒ノ數ハ刃稜ノ數ニ一致ス（第五十二圖（、然レ圧試驗ニ由レバ容易ク銳稜性ノ刺器ニ於テモ亦前記ノ關係ニ或ル一定ノ界限アルヿ（即チ刃稜ノ數ニ由テ然ルヿ）ヲ證明シ得ヘシ、即チ側面相湊合シテ刃及ヲナス所ノ角度ハ（其側面若シ凹陷ヲ有セサルキハ）愈〻鈍角トナルガ故ニ及稜ノ數ト共ニ其劃截力ヲ減少スルヲ以テ各箇ノ刀及ヲ以テスル皮膚ノ劃裂ハ愈〻不明トナリ而メ遂ニ全ク休止シ、爲メニ多稜性ノ刺器ハ結局劃截シ能ハス唯分裂方向ニ於テ

第五十二圖



三面形銳稜性ノ刺器ヲ以テ生シタル刺口

第五十三圖

八面形銳稜性ノ刺器ヲ以テ生シタル刺創其各箇ハ已ニ皮膚ノ分裂性ニ一致スル單一ノ縫裂ニ移行セントスルノ狀ヲ呈ス

皮膚纖維ヲ開離セシメ以テ圓錐形ノ器械ニ於ケルト同一ノ方法ニ於テ單一ノ披裂ヲ生スルニ至ルヘシ（第五十三圖）、其器械若シ鈍稜若クハ圓稜ヲ有スルトキハ稜數僅少ナルトキニ於テモ唯圓錐形器械トシテ作用スヘシ、即チ單一ノ披裂ヲ生スヘシ、然レ𪜈屢、其披裂ノ邊緣ニ彎入及壓入アルヨリシテ後日ニ至リテモ多稜性器械ノ作用セシコトヲ認識シ得ルモノナリ

前文ニ記スル刺入口形狀ノ定型的關係

刺入口形狀ノ破格

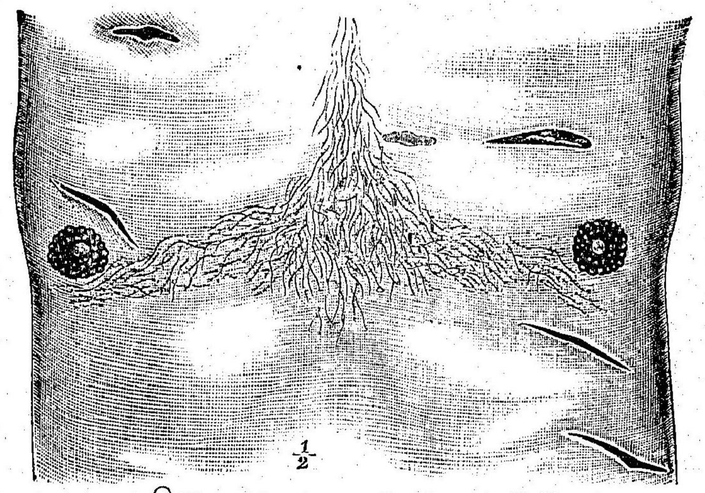
ニハ破格アリテ存ス、例之ハ圓錐形器械ヲ以テハ皮膚ノ分裂性曲線ノ數多相逢會スルニ由テ多クハ「パラボール」狀三角（旋渦）ヲ殘留スル皮膚部分ニ於テ單一ノ披裂ヲ爲サス三角形或ハ矢尖形ノ披裂創ヲ生起スヘシ（第四十八圖ヲ見ヨ）

小刀ノ刺創

小刀ノ刺創モ亦單一ノ披裂創形ヲ生スルヲ常トセリ、而ノ此刺創ハ角狀ヲナシテ現ハルヽヿ稀ナラス、是レ小刀ヲ抽出スルノ際初メ割裂セル方向ニ異ナル他ノ方向ニ於テ皮膚ヲ傷ツクルヲ以テナリ、而ノ其原因ハ更ニ小刀ノ輕微ナル轉向或ハ又皮膚自己ノ移動若クハ收

刺創創裂ノ長短及大小

第五十四圖



強大ノ袖麗小刀ヲ以テ生シタル前胸廓壁ノ角狀刺入口、左方ノ上部ニハ一ノ靡木狀刺口アリ、故殺ニ因ス（二分一大）

縮ニ在テ存スルモノトス、之ニ等シク厲木狀ノ刺入口ハ其刺創ガ斜メニ皮膚ニ中リシヿニ形成セラルヽヿアリ、第五十四圖ハ此兩形ヲ示ス

創裂ノ長短ハ其刺入セラレタル位置ニ於ケル刺器ノ廣狹ニ一致スルヲ必セズ、狹キ圓錐形ノ器械ニ於テハ稍、大ナルヲ常トシ、厚キ器械ニ於テハ之ニ反シテ著シク小ナリ、何トナレバ皮膚ノ分裂性ハ一定ノ界限ヲ有シ而ノ刺入ノ際初メ生シタル創裂ノ擴大ヲ來スヲ以テナリ

小刀ヲ以テハ唯注意シテ刺入シ且ツ抽出スルトキニ在テノミ其長サガ刺入セラレタル位置ニ於ケル刀及ノ廣サニ一致スル所ノ創裂ヲ生シ得ヘシ、多數ノ場合ニ於テハ其創裂之ヨリモ

長シ、是レ其刺入或ハ抽出ニ際シ更ニ廣ク切開セラルルニ由ルモノトス、時宜ニ由テハ此方法ニ由リ過大ノ創傷ヲナスコトアリ

然ルニ法醫學上重要ナルハ小刀樣ノ器械ニ於テモ亦其刺入口時トシテハ小刀ノ幅ヨリモ短キコトアルノ事實トス但シ其誤認ニ過キサルコトハ屢之アリ、而ノ創裂ノ短キハ單ニ（殊ニ中央ニ於テ）相開離スル創緣ノ收縮ニ依テ起リ隨テ斯ノ如キ裂口ハ決シテ哆開セル狀態ニ於テセス其創緣ヲ接合セシメテ後測定スヘキモノトス、然レ𪜈時宜ニ由テハ其創裂絕對的ニ短キコトアリ、殊ニ小刀ノ鈍及ヲ有スルキハ往々著シク短小ナリ、元來各箇ノ定型性刺創ハ小刀及ノ愈鈍ナルニ從テ愈弱ク而シテ遂ニ全ク消滅スルニ想及スルトキハ之ヲ理會スルコト敢テ難カラストス、然ルキハ該器械ハ其尖端ニ依テ生シタル創裂ヲ單ニ擴開シ其際皮膚ハ漏斗狀ニ陷入シ刀ヲ抽出スルノ後再ヒ收縮スルモノナリ、鈍稜ヲ有シ幅廣キ小刀狀ノ器械例之ハ磨光セサル斫撃銃創ニ於テハ創裂ノ長サト刀及ノ幅トノ間ニ於ケル不權衡ハ最モ著明ナリ、其稜緣若シ尖端ニ至ル迄鈍キキハ斯ノ如キ小刀樣ノ器械モ亦遂ニ圓錐狀器械ノ如ク作用スベシ即チ唯皮膚ヲシテ局處的分裂方向ニ於テノミ開離セシムルナリ、然ルキハ其刀及ガ局處的分裂方向ト併行セスノ斜メニ或ハ橫サマニ襲來セル場合ニ在リテモ其生起セル創裂ハ小刀ノ幅ト全ク異ナル方向ヲ取ルヘシ、而ノ最後ノ場合ニ在テハ小刀稜ニ因スル壓痕ハ創裂ノ邊緣ニ於テ現ハルヽモノトス

刺入口ト刀幅トノ關係

創緣皮膚收縮ノ刺入口ニ及ホス影響

*本件ニ關スル細說並ニ之ニ一致スル圖畫ハエー・ホフマン E. Hofmann 氏ノ著„Ueber Stichwunden in Bezug auf das verletzendes Werkzeug und dessen Erkennung.“ Oesterr. med. Jahrb. 1881. Nr.2, pag. 261 ヲ見ルベシ

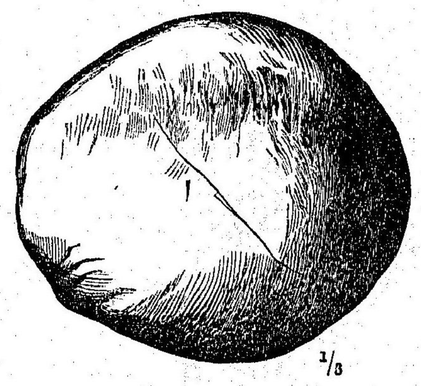
斷裂セル皮膚ノ收縮ガ刺入口ノ形狀ニ及ホス影響ニハ常ニ注目セサル可カラス、之ニ由テ生スル創傷ノ甚タシキ收縮ハ殊ニ皮膚ガ其基底上ニ容易ク移動セラレ得ヘキ局處ニ於テ起ル而メ或ル皮膚部分ノ纖維列ガ斷裂セラレシ方向モ亦之ニ關係アリ、故ニ四肢ノ縱軸ニ垂直ナル所ノ刺創ハ概子併行ニ通走スル所ノ刺創ヨリモ著シク哆開スルモノナリ、其他例之ハ關節上或ハ頭部ニ於ケル如ク其局部ノ運動ニ由テ皮膚ノ移動セラルヽ位置ニ於テモ收縮ヲ來スコトアリ、治癒機能、化膿等ニ由テ刺口ノ原形ヲ多般ニ變化セラルヘキハ更ニ詳說スルヲ要セス

骨ニ於ケル刺創口ノ性狀

骨ニ於ケル刺創口殊ニ比較的屢、刺創ヲ受クル所ノ頭蓋骨ニ於ケル刺入口ハ他ニ比シテ遙ニ單一ノ形狀ヲ有ス、茲ニハ其骨組織或ル一定ノ度ニ至ル迄可塑性ヲ有スルガ爲メ刺入口ノ形狀ハ使用セル器械ノ橫斷面ト精密ニ一致スルヲ常トス、故ニ通例其刺創ハ小刀或ハ圓錐形器或ハ有稜器ヲ以テ生シタルカ、又小刀ニ於テハ其刀及ガ如何ナル方向ヲ取リシカヲ決定シ易キノミナラズ、往々亦證據品トシテ示サレタル二箇若クハ數箇ノ小刀中何レガ其創傷ヲ致セルモノナリシカヲモ判斷シ得ヘキコトアリ、吾人ハ左顳顬部ニ於ケル刺創ニ因スル故殺ノ一事件ニ關シ、其創傷ヲ來セル器械ハ袖囊小刀ナルカ、或ハ縫匠鋏ノ尖枝ナリシカヲ決答スヘキ疑問ニ逢着シタルコトアリキ、茲ニ保貯セル顳顬骨片ニ於ケル刺口ノ形狀ト提出セラレタル器械トノ單一ナル比較ハ鋏ヲ以テ此刺口ヲ生シタルカノ疑察ヲ全ク排斥ス

ルニ足ルモノナリシナリ、前文第五十一丁ニ記載セル巨大ノ彫像刀ヲ以テセル謀殺事件ニ於テハ全ク該部ニ密合スル所ノ整然タル四角形ノ開口ヲ頭蓋上ニ發見セリ、頭蓋ニ於ケル刺創ニ在テハ（小刀刺創ニ於テモ亦）硝子板ノ破裂ヲ致スコト極メテ多シ而ノ外板ノ破裂モ亦稀ナラズトス、創裂ノ末端骨部ノ豐裂ニ聯續スルコアレドモ稀ナリ、第五十五圖ハ其著明ナル一例ヲ示ス、其細說ニ關シテハ後文『器械ヲ以テセル腦損傷』ノ章ニ讓ル

第五十五圖



1/3

強キ釉藥小刀ヲ以テ左顳顬骨上ニ生シタル刺口、其終端ヨリ進行スル骨裂ヲ有スル而ノ其前方ニハ破折セル小刀尖端アリテ骨中ニ嵌在ス（三分一大）

●軟部ニ於ケル刺創●

軟部ニ於ケル刺創口ニ關シテハ其形狀概シテ皮膚ニ於ケルト同一ナリ、茲ニ於テモ亦刺口ノ性狀ハ刺器ガ斫截力アルモノナリヤ或ハ然ラザルヤノ事情ニ關シテ異ナレリ、前者ノ場合ニ於テハ一及性及二及性ノ兇器ヲ以テセルトキハ銳緣性ノ披裂ヲ發見シ多及性ノ兇器ヲ以テハ星芒狀ノ創傷ヲ來シ其放線數ハ能ク及數ヲ認知セシム、其器械若シ圓錐形或ハ鈍稜性ノモノナリシトキハ設トヒ小刀狀ノ器械ナリシ場合ト雖モ被傷組織ノ纖維ハ單ニ其組織ノ局處的分裂方向ニ一致シテ壓開セラルヘシ、各異ノ組織ニ於ケル

組織ノ分裂方向ト刺創々裂トノ關係

裂方向ハ互ニ相異ナルモノナルガ故ニ左ノ如キ有趣的ノ現象ヲ呈露スヘシ、即チ同一ノ刺創ニ由リ其際毫モ移動ヲ來シタルコトナクシテ內部器官ニ於ケルト全ク方向ヲ異ニスル創裂ヲ皮膚上ニ呈スルノミナラス內部器官ノ各層ニ於ケル創裂ハ各異ノ位置ヲ取リ、甚タシキハ互ニ直角ヲナシテ相交叉スルコアルヘシ、例之ハ圓錐形器械ヲ以テ生起セル胃壁ノ穿透刺創ハ其腹膜被包ニ於テ其縱軸ガ胃ノ彎曲ニ併行シテ通走スル披裂ヲ生スルノ際胃壁ノ筋層ニ於テハ大抵前記ノ披裂ニ對シ橫徑ヲ取ル所ノ他ノ一披裂ヲ生シ、終リニ粘膜層ニ於テハ更ニ佗ノ方向ヲ有スル所ノ第三ノ披裂ヲ現ハスコアリ

片山國嘉氏（Viertelj. für ger. Med. 1887, XLVI）ノ一層深ク研究セル此事實ガ加害器械ノ本性實ヲ認識スルニ對シ如何ナル程度ニ迄利用セラレ得ヘキカハ多言ヲ要セスシテ明ナリ、而シテ吾人ハ佗ノ機會ニ際シ之ヲ左件ニ利用スルヲ得タリキ精神病ニ罹レル光學的器械師其妻ヲ刺殺シタル後逃走セシニ一日ヲ經テ其屍體ヲ「ドーナウ」河中ヨリ引キ揚ケタリ其婦人ノ屍體ヲ剖見スル際長サ十「ミリメートル」ヨリ十二「ミリメートル」ニ至ル三箇ノ披裂形刺創ヲ發見セリ、一ハ右胸鎖乳頭筋ノ上部ノ內緣ニ位シテ此筋ト併行シ他ノ二創ハ左鎖骨ノ內端ニ存シ共ニ鎖骨ノ縱軸ニ併行シタリ、第一創ハ內頸動脈ニ透入シ而シテ其一部保存セル脈管精內ニ於テ全ク橫形ニ斷離セラレ、又佗ノ二創ヲ以テハ鎖骨下動脈ノ完全ナル橫斷ヲ來シ且ツ之ヨリ〇·五「センチメートル」ヲ隔タリ斷離セル脈管ノ中膜部ニ於テ前壁及後壁ニ等シク橫裂形ナル穿孔アリキ斯クシテ皮膚ノ裂口ハ其下ニ位スル動脈ノ斷離ト相交叉スルガ故ニ茲ニ應用

全上ノ法醫學的利用

セラレタルハ有刃性刺器ニ非スシテ圓錐形或ハ鈍稜性ノ器械ナリシコト明白トナレリ、實際調査ノ結果ヨリ其刺創ハ一ノ鑢子(所謂烏舌)ヨリ變成セル「ミルテン」葉形ノ磨滑器械ニシテ稜橢圓形ノ横斷面ヲ有スルモノニ由テ生起セラレタルコトヲ證明シタリキ

刺創管ノ性狀

刺創管ノ經過ハ必スシモ其突撃ノ行ハレタル方向ニ符合セス蓋シ其兇器ハ他ノ方向ニ滑轉スルコトナキニアラサレハナリ、其他刺創管ハ殊ニ胸廓内ノ臟器或ハ腸管ノ如キ移動性器官ニ中レル場合ニ在テハ刺管ヨリ直接ニ聯續スルヲ必ス可カラス、是レ殊ニ多數ノ刺創同時ニ存在スル場合ニ於テ注目スヘキ狀態ナリ、各側全ク閉鎖セル本然ノ刺創管ハ往々缺如スルコトナキニアラズ、例之ハ一ノ刺創單ニ身體部分ヲ觸線的ニ傷害シ皮膚或ハ又深在部分ヲ溝狀ニ披裂セシメ之ニ由テ恰モ切創ト誤認セラル、場合ノ如シ、即チ吾人ハ第七及第八肋骨間ニ於テ腋腺ニ擾入セル一ノ小刀刺創ヲ見タリ、此刺創ハ横膈膜ノ左穹窿及左肺ノ下緣ヲ割裂シ心臟ノ下面ニ於テ兩心室ヲ截開シ而ノ心臟中隔ヲ創離セシモノニシテ被傷内臟ノ何レニ於テモ本然ノ刺創管ヲ有セス唯溝狀ノ斷離ヲ發見シ得タルノミ、一ノ身體部分ヲ完全ニ透通スル刺創ハ稀有ナリ、吾人ノ剖見セル此種ノ一例(其刺創ハ斜メニ上膊ヲ透過セルモノ)ニ於テハ其生活間出口ヲ以テ第二ノ刺創ナリト認取シアリシコトアリ

終リニ吾人ハ腦ニ中レル小刀刺創ノ二例ニ於テ固有ノ刺創管ニ換ヘテ一ノ出血性空洞ヲ發見セリ、是レ明ラカニ被傷セル巨大ノ腦動脈ヨリ流出セル血液ニ由リ恰モ腦質中ニ穿堀ヲ行フガ如キ方法ヲ以テ生起セシモノナリ、此ノ如キハ血管ノ自然的破裂ノ後ニ來ルヲ常トス、而ノ又破折セル刃及或ハ其尖端ノ骨中ニ滯留スルコト屢之アリ殊ニ頭蓋ニ於テ然リトス、是レ往々損害ナシテ治癒スルコトナキニ非サレ𪜈殊ニ久シキヲ經タル後屢軟化、膿瘍形成等ヲ誘起シ以テ死ヲ致スコトアルモノナリ

銃創射入口ノ性質ト發射距離トノ關係

(四)銃創 射創 Schussverletzungen.

銃創ニ就テハ通例射入口ト丸道(銃創管)トヲ區別ス、而ノ丸道ハ或ハ盲囊狀ニ終止シ或ハ射出口ニ開口スルモノナリ

射入口ノ性質ハ主トシテ其射撃セラレタル距離ニ關ス、直接ノ近處ヨリスル射撃ニ於テハ彈丸及銃栓ノ外又爆裂瓦斯直接ノ侵襲及火藥焰ノ作用ヲモ受クルモノナリ

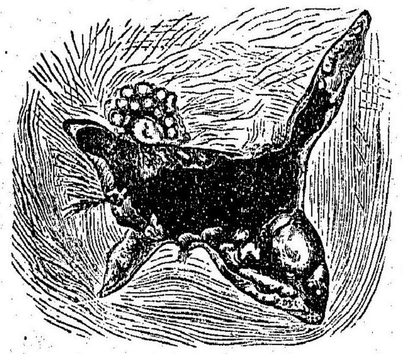
彈丸ト火藥瓦斯直接ノ侵襲トノ合併作用ノ結果トシテ射入口ハ不權衡ニ巨大ナルヲ常トシ其火藥ノ裝塡量愈〻多キニ隨テ愈〻著大ナリ、故ニ吾人ハ小銃或ハ短銃ヨリスル射撃ニ由テハ拳銃ヨリモ遙ニ著大ナル(時トシテハ非常ニ廣大ナル)射入口ヲ發見スルコトアリ、而ノ所謂袖珍拳銃ヨリスル射撃ニ由テハ其大口徑ノ拳銃ヨリ

第五十六圖

直接ノ近位ヨリ心臟ニ向テ發火セラレタル拳銃射撃ノ圓形射入口(自殺)(自然大)

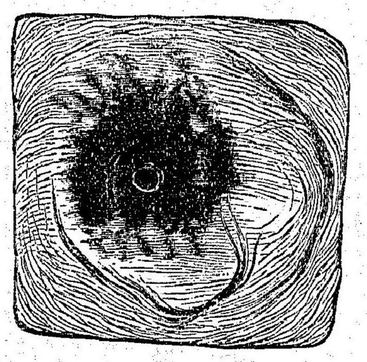
銃創射入口ノ種々ナル形狀

第五十七圖



拳銃射撃（自殺）、星芒狀ニ綻裂セル射入口（三分二大）

第五十八圖

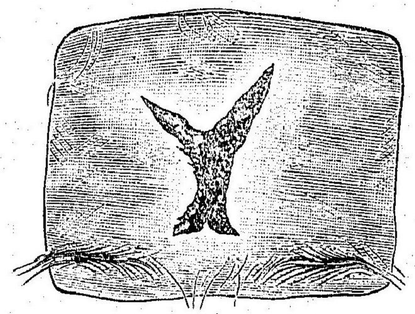


心臟部ニ於ケル中等大ノ拳銃ヲ以テセル射撃（自殺）、圓形ノ射入口（自然大）

發シタル射撃ヨリモ狹小ナル射入口ヲ呈スルコトアリ

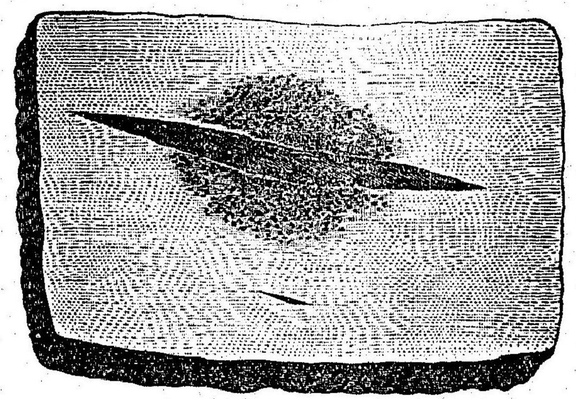
射入口ハ或ハ實質缺損トシテ多クハ全ク圓形ニ現ハレ恰モ鑿子ヲ以テ穿取セルガ如キ狀ヲ呈シ（第五十六圖及第五十八圖）、或ハ不整星芒狀ニ破裂セラル（第五十七圖及第五十九圖）、第二ノ形狀ハ拳銃射撃ニ於ケルヨリモ小銃又ハ短銃射撃ニ於テ適ニ屢〻發見セラレ、皮膚ガ骨上（頭蓋骨、肋骨）ニ密接シテ存スル局處ニ銃丸ノ命中セル場合ニ於テハ最モ多シトス、斯ノ如キ瓣裂及豐裂ノ形成ハ恐ラクハ彈丸ニ由テ皮膚ノ穿孔セラレタル後直チニ爆裂瓦斯ナノ抵抗ノ僅少ナルニ乘シ皮膚ト其便固ナル基底部トノ間ニ擴布セシメ以テ皮膚ヲ擡上シ穿孔ヨリシテ破裂ヲ來スニ由テ現ハルヽモノナラン、之ニ一致スル事實ハ瓣狀ニ破裂セル射入口幷ニ圓形ノ射入口ノ邊緣ハ殆ンド

第五十九圖



前額ニ向テ發火セル拳銃射撃ノ星芒狀射入口（自殺）（自然大）

第六十圖



小短銃ヲ以テ心臟ヲ射撃セル自殺者ニ於ケル披裂狀銃創、其下ニハ開後圓錐形刺刀ヲ以テ生シタル披裂狀開口アリテ之ト射撃ニ由テ生起セル創裂トノ並行的徑路ハ此銃創ニ於テモ皮膚ノ破開ガ其局處的分裂方向ニ於テ成リシコトヲ證明スルモノナリ（自然大）

常ニ多少穿隧セラレ而ノ此穿隧的部分ニ一致シテ皮下組織ハ廣キ範圍ニ於テ火藥ヨリ黑染セラルヽヿ是ナリ、稀ナル場合ニ於テハ皮膚ニ單一ノ線狀破裂ヲ來スヿナキニアラズ、玆コハ皮膚ノ分裂性モ亦其一因ヲナスモノヽ如シ（第六十圖）

火藥焰ノ作用ハ射入口ノ最近圍ニ於ケル毛髮或ハ毳毛ノ焦燥ニ由リ時トシテハ又衣服部分

火藥焰ノ作用及之ニ由テ生シタル變化

火傷緣

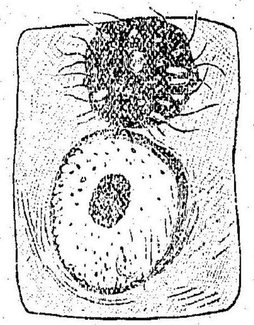
射入口近圍ノ黑變

ノ焚燒ニ由テ知ルヿヲ得、其佗又死體上通常皮革樣ニ乾燥セル周緣ヲナシ射入口ヲ匝リテ存スル帶輪ハ火藥焰ニ因スル皮膚ノ火傷ト原因的ノ關係ヲ有スルヿアリ而メ之ヲ『火傷緣又燒暈』„Brandsaum" ト名ク、然レ𪜈此帶輪ハ啻ニ火傷ノミナラズ亦射入口ヲ經界スル皮膚部分ノ挫壓及剝脫ニ原因スルヿアリ、斯ノ如キ火傷緣ハ殊ニ類圓形狹小ノ射入口ニ於テ發見セラル、然ル𪜈ハ第五十八圖ニ示ス如ク多クハ明ラカニ相分離セル二箇ノ帶輪ヲ判視シ得ルヿアリ、內輪ハ比較的狹隘ニシテ且ツ暗色ヲ呈シ、外輪ハ迥ニ廣濶ナリ、外輪ハ明ラカニ當該皮膚部分ニ中リシ氣壓圓錐若クハ火焰圓錐ノ基底ニ一致シ、之ニ反シテ內輪ハ皮膚ヲ圓錐形ニ內陷セシメ其圓錐ノ尖端ニ於テ之ヲ穿破セル彈丸ノ周緣ニ一致スルモノナリ、此火傷緣ハ護謨板ニ向テ射擊スルノ際極メテ明白ニ其形成ヲ追蹤シ得ヘキモノニシテ純ラ當該皮膚部分ノ挫壓及剝脫ニ由テ生起シ而メ遠距離ノ射擊ニ於テモ亦發起セラルヽコトアリ

火藥焰ノ其佗ノ作用ハ射入口近圍ノ黑變ニシテ一部ハ火藥烟(硝烟)ニ由リ一部ハ嵌入セル半燒ノ火藥炭(火藥粒)ニ由テ生スルモノトス、甲ハ之ヲ拭去スルヿヲ得レ𪜈乙ハ然ラス、嵌入セル火藥分子ハ多クハ已ニ肉眼ヲ以テ認メ得レ𪜈「ルーペ」或ハ顯微鏡ヲ以テ檢視スレバ一層著明ナリ（第六十一圖）、此黑色ハ裸出セル身體部分ニ銃器ヲ直觸セシメタル際最モ顯著ナルヿ固ヨリナレ𪜈此塲合ニ於テモ亦往々不明ニ形成セラルヽヿアリ、即チ銃口ヲ密ニ身體ニ壓着セシメ爲メニ全射擊物ノ即時ニ內部ニ侵入セル𪜈ニ於ケルガ如シ、然ル𪜈ハ皮

多少ノ距離ヨリスル射擊ノ作用

第六十一圖



左乳嘴下ニ於テ袖珍拳銃ニ由テ生起セル銃創ノ射入口、火藥烟ヲ拭除セル後ノ狀嵌入セル火藥粒ヲ見ル（自然大）

ニ於テ黑變ヲ來シ其色銃創管ノ前部ニ於テ愈〻著ルシ、常該ノ部分若シ衣服ニ由テ蔽ハレタリシ𪜈ハ其衣服層ノ愈〻厚カリシニ從テ射入口ノ入變ハ愈〻不充分ナリ、此黑變及所謂燒暈ハ其彈丸垂直ニ當該部分ニ向テ射擊セラレシ𪜈ハ射入口ヲ匝リテ集心的ニ排列セラレ、銃器若シ斜位ヲ取リシ𪜈ハ之ニ反シテ離心的ニ排列ス、此塲合ニ於テハ黑變及ヒ『燒暈』ハ多少延長セラレタル橢圓形ヲ呈シ其橢圓ノ大部分ハ射入口ヲ越エタル側邊ニ位シ而シテ火藥ノ嵌入ハ多少「コンマ」狀ヲ呈シ其厚端ヲ以テ銃器ノ口ニ向フモノトス（ポア Poix 氏著 *Etude médico-légale sur les plaies d'entré par coups de revolver. Lyon* 1885.）

終リニアー、パルタウフ A. Paltauf 氏（„*Ueber die Einwirkung von Pulvergasen auf das Blut und einen neuen Befund beim Nahschusse. Wiener klin. Wochenschr.* 1890. *Nr.* 51）ノ報告セル如ク火藥焰ノ酸化炭素含量ハ炭分ニ富メル殊ニ上品ノ火藥ニ於テ著大ナルモノニシテ皮下溢血ノ赤色ト酸化炭素「ヘモグロビン」ニ特有ナル分光像反應ニ由テ之ヲ徵知スルヲ得ヘシ

多少ノ距離ヨリスル射擊ニ於テハ之ヲ發射セシ距離ノ愈〻大ナルニ從テ彈丸ノミヲ以テ射

距離ト關係消失スル射撃作用

入口性狀ノ原因トナスヿ愈〻多ク且ツ前文ニ記スル佗ノ諸因ノ作用ヲ受クルヿ愈〻少ナキモノナリ

爆裂瓦斯ノ直接作用ハ第一ニ距離ト共ニ消失スルモノニシテ其壓力ハ僅微ノ距離ヲ隔ツルモ亦其力ヲ逞ウシ得ス且ツ火藥ノ裝塡愈〻少ナカリシニ從テ愈〻早ク（故ニ拳銃ニ於テハ短銃ニ於ケルヨリモ疾ク）其力ヲ失フモノナリ、次ニ消失スルハ火藥煙ニ因スル拭去スヘキ黑變幷ニ火藥焰ノ焦烘及點火作用ナリ、而シテ此諸作用モ亦拳銃ニ於テハ短銃ニ於ケルヨリモ早ク、短銃ニ於テハ前裝銃ニ於ケルヨリモ早ク消失ス、ツールド Tourdes氏（„*Observation de blessure mortelle fait au moyen d'un revolver avec quelques remarques médico-légalessur ce genre de blessure.*" *Strassburg*, 1870）ハ短銃（馬上短銃）射撃ヲ以テ猶ホ半「メートル」ノ距離ニ於テ一ノ紙片ヲ點火シ得タリキ、而シテ吾人ハ九「ミリメートル」口徑ノ連發銃ヲ以テセル射撃ニ由リ十乃至十五「センチミリメートル」ノ距離ニ於テ毛髮ノ焦烘ヲ實驗シ得タリ、短銃及小銃ニ於テハ共ニ射出セラレタル燃燒銃栓ニ由テモ亦火傷作用ヲ誘起スルヿアリ而シテ小銃ノ射撃ニ於テハ頗ル廣大ノ距離ニ於テモ尚ホ然リトス、最後ニ焚入セラレタル火藥粒ヨリ來ル皮膚ノ黑變ハ消失スルヿアリ、此火藥粒ハ恰モ微小ナル彈丸ノ作用ヲ呈シ頗ル遠處ニ射送セラル、霰彈ニ於テ其大規摸ヲ見ルガ如ク一ノ分散的圓錐ヲ形成スルモノナリ、ツールド *Tourdes* 氏ハ尋常ノ馬上短銃ヲ以テ射撃セシ際尚ホ二「メートル」ノ距離ニ於テ火藥粒ノ嵌入セシヿヲ發見シ、稍〻大ナル米國製ノ拳銃ニ於テハ一「メートル」

遠距離ノ射撃ニ由テ得タル射入口ノ形狀ト彈丸トノ關係

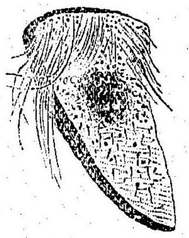
ノ距離ニ於テ之ヲ見タレ𪜈一「メートル」半ノ距離ニ在テハ又之ヲ發見シ得サリキ、尋常ノ六連發拳銃ニ於テハ黑變ヲ生スルヿ唯四十「センチメートル」ノ距離ニ止マレリ、吾人ノ試驗モ亦能ク前記ノ報告ニ符合セリ、而シテ小銃ヨリスル射撃ニ關シテハ其火藥粒ノ遙ニ遠ク射送セラルヽヿヲ認知スヘシ

*ロムブロゾー Lombroso、クレスピー Crespi、タツオン Tazon ノ三氏（Rivista clinica di Bologna, 1875, Maggio, pag. 136 及 Rivista sperim. di freniatr. e med. leg. 1876, pag. 148）並ニカセルリー Cesselli氏（ibid., pag. 6）及ヂュ、メニール Du Mesnil氏（Ann. d'hyg. publ. 1877, pag. 465 圖畫ヲ附ス）等ノ類似ノ試驗ヲ見ルベシ

稍〻大ナル距離ニ於テハ唯彈丸ノミ作用ス、而シテ銃創口ノ形狀如何ハ設トヒ一二ノ破格ナキニアラサルモ通例ハ彈丸ノ形狀ニ關ス、彈丸ノ射撃ハ大抵實質ノ損失ヲ伴フ所ノ類圓形創傷ヲ生スルノ際尖丸ヲ以テ射撃セラレタル𪜈ハ披裂狀ノ創口ヲ見ルヿ屢〻之アリ、此形狀ハ殊ニ連發拳銃ニ於テ見ル所ニシテ就中其彈丸ノ細小ナリシ𪜈ハ往々皮膚ノ極メテ僅微ナル披裂狀斷離ヲ來スヿアリ、加之ノミナラズ此創傷ハ刺創トノ類似ヲ呈スルヿナキニアラズ、實際人ノ知レル如クペーテルボナパルト Peter Bonaparte ガ連發銃ヲ以テセル射撃ヲ受ケタルウ𪜈クトル、ノアル Victor Noir ノ創傷ハ初メ刺創ナリト看做サレタリ、而シテブラウン Braun 氏ハ其創口恰モ搔創ノ如キ觀ヲ呈シ第一癒合ヲ以テ治癒セシ所ノ尖丸銃創ニ就テ報告シ Friedreich's Blätter. 1873, pag. 361. ○前同誌ノ 1879. pag. 145 ニ於テクビー Kuby 氏ハ更ニ刺創ナルコト明白ナル創傷ヲ銃創ト誤認セシ一例ヲ報告セリ 且ツ又同氏ガ試驗ニ由テ尖丸ノ生起スル創傷ハ間〻「ランセット」ヲ以テ生セラレタルガ如キ外觀ヲ呈スルヿヲ記述

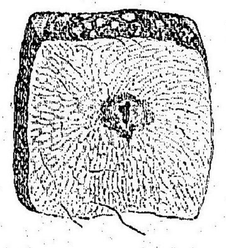
全上ノ實例

第六十二圖



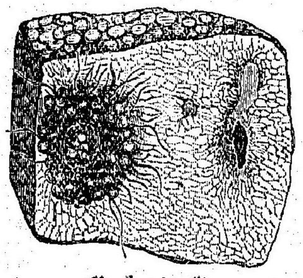
拳銃創ノ連環狀射入口（自然大）

第六十三圖



拳銃創ノ推擠セラレタル帶輪ヲ以テ周匝セル三角狀射入口（自然大）

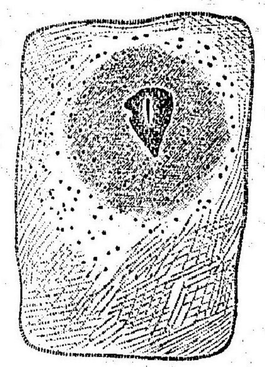
第六十四圖



拳銃創ノ廣キ披裂狀射入口（自然大）

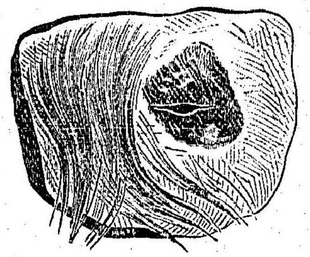
セリ、カスペル、リーマン兩氏（Casper-Liman l. c. pag. 281）モ亦尋常ノ彈丸ヲ以テセル射撃ト尖丸ヲ以テセル射撃トニ於ケル創口ノ差異ヲ論ジ且ツ尖丸ニ由テ生ジタル創口ガ刺創ノ如ク現ハレシ所ノ一例ヲ記載セリ（前文第五十二丁ヲ見ヨ）、吾人ハ屢斯ノ如キ實例ヲ發見シ幷ニ又神珍拳銃ニ由テ有髮頭皮ニ生ジタル創傷ガ其細小ナル爲メ全ク看過セラレ剃見ノ際初メテ之ヲ發見シタル一例ヲモ知レリ、第六十二圖乃至第六十七圖ハ連發銃創ニ於ケル創口ノ種々ナル形狀ヲ示ス、就中第六十五圖第六十六圖及第六十七圖ハ刺創ト誤認セラレ得ヘキ創口ノ例ヲ現ハス、尋常彈丸ノ射撃ニ於テモ尖丸ノ射撃ニ於テモ皮膚ノ擴展性及分裂性ハ共ニ參照ニ供スヘキモノニシテ其創口ガ何故ニ彈丸ヨリモ小ナルヲ常トスルカノ原因タルモノナリ、此關係ニ於テハ又ブッシュ Busch 氏（*Arch. für klin. Chirurgie.* XVIII, 201）ノ護謨板ニ對スル射撃ノ試驗ニ由テ知ルヘキ如ク凡ソ

第六十五圖



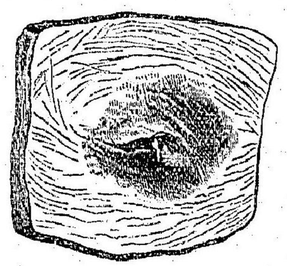
拳銃ノ細微ナル披裂狀射入口ヲ推擠セル帶輪ニ由テ周匝セルモノ者（自然大）

第六十六圖



拳銃創ノ刺創ニ類スル射入口（自然大）

第六十七圖



拳銃創口ノ火傷緣ヲ以テ周匝セル、狹キ披裂狀ノ射入口ニシテ小刀刺創ニ類スル者（自然大）

彈丸ハ初メ先ツ皮膚ヲ前方ニ向テ圓錐形ニ逐進シ而ノ彈丸ノ尖端ニ當リテ之ヲ穿破シ、然ル後皮膚ハ自ラ再ヒ收縮スルモノナリト想定スベシ、ブッシュ氏ハシャセッポー銃ヲ以テ護謨板ニ射撃セシトキシャセッポー彈丸ノ直徑三分ノ一ニモ足ラサル一ノ細孔ノミヲ生シ而ノ彈丸ノ口徑ニ一致スル類黑色ノ暈輪ヲ有スルヿヲ發見セリ、此發見ハ已ニ上文ニ記載セシ如ク

銃創管ノ性狀ト射擊距離トノ關係

全上ト射擊ヲ受ケタル體部織質トノ關係

皮膚剝脫及挫創ニ一致スルモノニシテ最內帶輪トシテ彈丸並ニ尖丸銃創ノ創口ヲ周匝スルヲ常トスルモノナリ

銃創管(丸道)ノ性質モ亦直接ノ近處ヨリ射擊セラレタル際ニハ遠距離ヨリ射擊セラレタル時ト異ナレル形狀ヲ現ハスヲ常トス、第一ノ場合ニ於テハ彈丸ノ外火藥焰及爆裂瓦斯ノ破壞力アリテ作用ス而シテ其火藥焰ハ漸次求心的ニ減少スル銃創管ノ黑變ヲ誘起スルモノナリ、而ノ爆裂瓦斯ノ破壞力ハ大抵皮膚上ニ於ケルヨリモ一層劇シク働作スベシ、何トナレバ破壞力ハ圓錐形ニ擴布シ且ツ偶〻共ニ攙入セル物體(殊ニ多キハ最初侵襲セラレタル局部ヨリ來ル骨片)ガ同シク其作用ヲ逞ウスレバナリ、概シテ初メ負傷セル局部ノ基礎質ハ直接ノ近處ヨリスル彈射ニ由テ得タル銃創ノ性質上ニ著シキ影響ヲ呈スルモノトス、此基礎若シ頭部ニ於ケル如ク骨ヨリ成ルトキハ骨ノ碎片ハ穿孔狀ニ剝離セラレ且ツ前方ニ逐進セラレ或ハ骨ハ破壞的壓力ニ由テ箇々ニ破碎セラルヘシ、而シテ其射擊頭蓋腔ニ向テ發セラレシトキニハ突然左右ニ排開セラレタル頭蓋腔內容物ノ水壓的側壓ハ之ニ加ハリテ作用ス、此諸力ノ相協同シテ作用スルヤ其銃器ニ裝塡セシ火藥ノ量愈〻大ナルニ從テ愈〻甚タシキ荒蕪ヲ來スモノトス、故ニ短銃ノ射擊ニ在テハ最モ屢〻頭蓋軟部ト共ニ全頭蓋ヲ破壞セシメ加之ノミナラズ全頭蓋頂ヲ剝離スルヲ見ルヿアリ、斯ノ如キ狀況下ニ於テハ固有ノ銃創管ハ全ク之ヲ判視スルヿヲ得ス、而ノ往々初メ其彈射ニ中ラレタル局部ヲ認定スルニ困難ナルヿアリ、拳銃ヲ以テハ斯ノ如キ荒蕪ヲ來スヿ稍〻稀ニノ唯稍〻大ナル口徑ヲ有ス者ルヲ使用セ

銃擊ニ關スル骨ノ碎裂

ヲ使用セシ時ニ於テ然ルノミ、小ナル袖珍拳銃ハ設トヒ頭蓋ニ向テ發射セシ時ト雖モ唯穿孔銃創ノミヲ生スルヲ常トス但シ此場合ニ於テモ屢〻骨中ノ穿孔ヨリスル釁裂ノ波及ヲ見ルヿ屢〻之アリ

胸部ニ對スル近距離ノ射擊ニ於テモ其彈丸拳銃或ハ大ナル拳銃ヨリ來レルトキハ內部器官ノ著大ナル荒蕪ヲ見ルヿナキニアラズ、然レ𪜈其力ハ屢〻最近圍ノ器官ニ於テ用ヰ盡サレ終リニ唯彈丸ノミ作用シ多少長キ銃創管ヲ形成シツヽ或ハ一ノ局處ニ嵌留シ或ハ穿通シ去ルコトアリ

多少ノ距離ヨリスル射擊ノ銃創管ハ唯彈丸ニ由テノミ生起セラルヽモノトス、然ルニ斯ノ如キ場合ニ於テモ其作用ノ結果ハ決シテ同一ナルヲ必ス可カラス

單ニ軟部ノミ侵サルヽトキハ通例單一ノ銃創管ヲ生シ其管ハ或ハ盲嚢ヲ成シテ終リ或ハ一ノ射出口ヲ生ス、骨ノ侵害セラレタルトキハ間〻單一ノ穿孔銃創ヲ來スヿナキニアラサレ𪜈穿孔創ヨリ波及スル骨ノ破裂及釁裂ヲ發見シ、或ハ其骨多少碎粉シテ其碎片ヲ隨伴セシメ之ニ由テ著シク銃創管ノ佗ノ性狀ヲモ變化スルヿアリ

骨ノ著大ナル碎裂ハ主トシテ近時ノ後裝銃就中現今ノ軍用銃ニ由テ生起セラル、獨佛戰爭ニ際シシヤセッポー銃ニ就テ得タル經驗ハ初メ佛蘭西人ニ負ハシムルニ爆裂彈丸ヲ以テ彈射セシカノ罪責ヲ以テセントシタルハ世人ノ知ル所ナリ、然ルニシヤセッポー銃幷ニ佗ノ後裝銃ヲ以テブッシュ Busch (Archiv für klin. Chirurgie. XV II, Heft 2 und XVIII, Heft 2) ワール Wahl (Mechanik der Schussverletrungen. Ibid. XVI u. XVII) キュステル Küster (Ueber die Wirkungen

銃擊ニ因スル骨破壞ノ原因

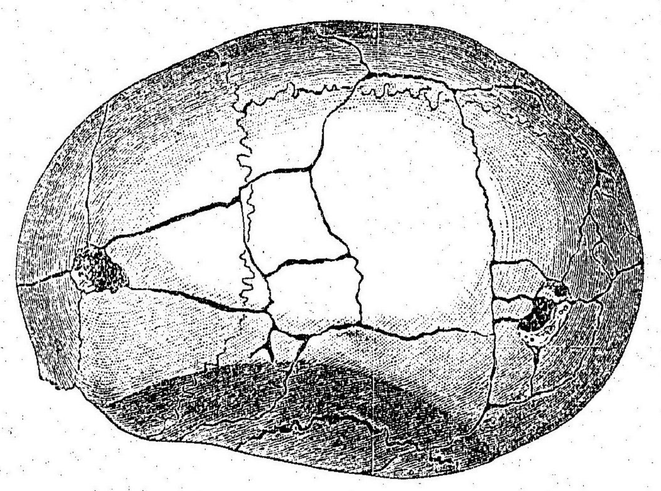
der neueren Geschosse. Berliner klin. Wochenschr. 1874. Nr.15) リヒテル Richter (Chirurgie der Schussverletzungen. Med Centralb. 1874. pag. 601) ヘップテル Heppner, ガールフヰンケル Garfinkel (Untersuchungen über die Wirkungen der modernen Kleingewehrprojectile, Centralbl. f. Chir. 1874. Nr. 14 u. 15) ノ諸氏及最近時ニ至リコッヒェル Kocher 氏 (Virchow's Jahrb. 1881, II. 319) ノ擧行セル試驗ハ斯ク特別ニ强キ逐進力ヲ有スル諸銃器ノ射擊ハ若シ甚ダ遠大ナル距離ヨリ射擊セラレズ(二十歩)(ブッシュ Busch 氏)且ツ其彈丸猶ホ完全ノ活力ヲ以テ着射セラレタル際ニハ往々非常ニ大ナル荒蕪例之バ頭蓋骨ノ破壞ヲ來スコトアルヲ實見セリ

斯ノ如キ破壞ノ原因ニ關シ或ル學者(ブッシュ Busch)氏ハ左ノ如キ意見ヲ抱持セリ、即チ多クハ柔軟ナル鉛ヨリ成ル所ノ彈丸ハ其速力ノ爲メ固形體(骨)ヲ通過スルノ際ニ煖熱セラレ、現ニ銃身中及空氣中ニ於ケル摩擦ノ爲メニ熱ヲ受ケツヽ到達シ、一ノ分散圓錐ニ開離スル所ノ細分子トシテ熔散スルモノナリト、又或ル學者ハ斯ノ如キ分子ガ器械的ニ碎裂ヲ來スト認ムルノ際他ノ學者殊ニコッヒェル Kocher 氏ハ彈丸ノ非常ニ急速ナル回轉ニ由テ荒蕪ヲ起スナラント說明シ、其遠心的作用ハ殊ニ腦中若クハ骨髓中ニ於テ働キ、而シテ頭蓋骨及管狀骨ヲ急劇ナル水壓力ニ由テ碎裂セルモノナラントセリ、レーゲル Reger 氏(Die Gewehrschusswunden von Neuzeit. Strassburg. 1884)ガ伯林府萬有學會ニ於テ報告セル多趣深意ノ試驗幷ニベック Beck 氏(Ueber die Wirkung neuerer Gewehrprojectile &c. Leipzig 1885)ノ確認セルコッヒェル Kocher 氏ノ想說及破壞ハ彈丸材料ト比例スル事實ノ如キ諸般ノ觀察ハ殊ニ斯ノ如キ著大ノ荒蕪ヲ見テ其彈丸ガ直接ノ近圍ヨリ發セラレタルヿヲ輙スク決定シ得ベカラシムルガ爲メ法醫學上ノ價値ヲ有スルモノナリ、然レトモ他ノ一方ニ

近世式小口徑銃ニ由テ生スル創傷ノ性質

於テ斯ノ如キ荒蕪ガ唯近世式ノ銃器ノミニ由テ生スルト考フルハ誤レリ、舊式ノ銃器ト雖モ往々頗ル遠大ノ距離ニ於テ非常ノ破碎例之バ頭蓋ノ開裂ヲ來スコトアリ、其證左ハ第六十八圖ニ示セル實例ニ於テ之ヲ得ベシ即チ殆ンド榛實大ナル圓形彈丸ヲ有スル舊式ノ滑澤ナル馬上短銃ヨリスル彈射ノ爲メ三十歩ヲ隔テタル決鬪ニ於テ甚シキ頭蓋ノ破碎ヲ來セシヿアリ

第六十八圖



三十歩ノ距離ヨリ發射セル短銃射擊ニ因スル頭蓋骨ノ甚ダシキ破壞

特別ニ高度ノ穿透力ヲ有スルハ新式ノ小口徑銃トス、即チペー、ブルンス P. Bruns 氏 („Die Geschosswirkung der neuen Kleinkaliber-Gewehre". Tübingen. 1889) ニ據レバ白耳義軍隊用ノマウゼル銃ノ如シ、幅八「ミリメートル」ニシテ一ノ軟鉛核及一ノ銅「ニッケル」片外套ヨリ成レル彈丸ハ百「メートル」ノ距離ニ於テ一隊中ノ四乃至五名、八百乃至千二百「メートル」ノ距離ニ於テ二乃至三名ヲ透

射スルコトヲ得、此際最モ強厚ナル骨ニ中レル時ト雖モ亦然リ、然レトモ其爆裂作用ノ現象ハ從前ニ比スレバ稀ニ且ツ輕微ナルコト確實ニシテ頭蓋ニ中レル彈射ハ高度ノ空洞的壓陷ヲ現ハスモノトス、射入口ハ圓圓形ニシテ近位射撃(十二乃至百「メートル」)ニ在テモ亦彈丸ノ直徑ヨリハ小ナリ、而シテ射出口ハ多クハ一ニ達スルコトアリ、墺國軍醫「ドクトル」ハーバルト Hubart 氏(維也納千八百九十二年)ハ墺國軍隊用八「ミリメートル」ノマンリヘル鋼套彈丸ニ關スル同樣ノ觀察ヲ報告セリ*

*マンリヘル銃ノ射撃力ニ關シテハボグダニック Bogdanik (Wiener Klinik. 1890, Heft 12) ハーベルト Hubart („Die Gesclossswirkung der 8-Millimeter-Handfeuerwaffen an Menschen und Pferden". mit 5 Lichtdrucktafeln. Wien. 1892) 兩氏ノ報告及智利戰爭ノ報告、(Wiener klin. Wochenschr. 1892. pag. 108)アリ

銃創管ノ方向　銃創管(丸道)ノ方向ハ必スシモ彈射ノ方向ニ一致スルモノニアラス、何トナレバ彈丸ノ骨ニ命中スルヤ或ハ一ノ角度ヲナシテ反回シ、或ハ弧線ニ於テ傾斜セラレ、加之ナラス之ニ沿フテ全身體ヲ匝行スルコトアレバナリ(弧線狀銃創、周匝銃創、帶狀銃創)、斯ノ如キ傾斜ハ直チニ射入口下ニ於テ或ハ亦銃創管ノ經過中ニ於テ起ルコトアリ、後者ハ頭蓋ノ內部、其腔室中ニ於テ屢〻之ヲ見ル、其他又或ル射撃ハ當該ノ人體ニ向テ發射セラレス、其彈丸或ル塲處ヨリ反射セラレ而シテ後身體ニ向テ射來スルコアルハ看過ス可カラサルノ事實トス、其他亦彈丸ハ其固有ノ重量ノ爲メ爾後身體中ニ於テ沈下スルコアリ

右ノ外頭蓋ニ於テハ、直接ノ近位ヨリスル射撃ト遠距離ヨリスル射撃トニ論ナク、銃創管ノ範圍外ニ在テモ亦所謂反撃ニ由リ軟部並ニ骨ノ損傷ヲ生スルコアルヲ知悉スルハ均シク緊要ノ件トス、軟部ノ損傷中殊ニ考察ヲ要スルモノハ(例之バ)橫ニ顳顬骨ヲ經テ前額葉或ハ後頭葉ノ尖端ニ存スル銃創ニ於ケル如キ腦ノ淺表性挫創、間接性骨傷中ニハ殊ニ眼窠穹窿ノ間接性及特離性骨折等ナリ、斯ノ如キ特離性ノ損傷ハ頭蓋內部ニ於ケル側壓ノ增昇ニ由テ形成セラル、モノニシテ其側壓ハ遠距離射撃ニ在テハ彈丸ノ遠心的回轉作用ニ由リ、近位射撃ニ在テハ右ノ外火藥瓦斯ノ側邊的膨脹ニ由テ起ル、メッセレル Messerer 氏(*Centralbl. für Chirurgie.* 1884. *Nr.* 19) ハ頭蓋ニ於ケル此間接的銃創性骨折ニ關シテ記載シ現ニ載籍上ニ存スル十七例ニ加フルニ一ノ新例ヲ以テセリ、吾人ノ實驗ニ據レバ少ナクモ近位射撃ニ於ケル此種ノ骨折ハ敢テ稀有ナルモノニ非ストス

銃創管ノ盲端ニハ彈丸ヲ存ス、其負傷者若シ久シク身體中ニ彈丸ヲ存留セシムルトキハ其彈丸ハ沈下シ而シテ全ク舊位ニ異ナレル他ノ位置ニ於テ發見セラルヽコアリ、但シ亦新鮮ノ塲合ニ於テモ之ヲ見ルコトアリ、例之バ吾人ハ既ニ腦ヲ橫過セル拳銃射撃ノ二例ニ於テ其彈丸ハ丸道中ニ存セスシテ其終端ニ近キ腦室ノ後角ニ存スルヲ發見シタリ、斯ク發見セラレタル彈丸ハ其舊形ヲ保ツコト稀ニシテ多少變形セルヲ常トス骨ヲ穿通シタルトキ或ハ骨中ニ收留シタルトキハ必ス然リ(銃身ノ施條ニ由テ生シタル彈丸ノ線條モ亦時トシテハ注目ノ價ヲ有スルコアリラカツサヌ Lacassagne 氏(Arch. de Panthrop. crim. 1889, p.pg 70)ノ檢査セル一例ニ於テ被殺者ノ死體中ニ發見セラレタル彈丸ニ七個ノ線條ヲ現ハセリ、而シテ武器鑑定者ハ犯罪者ヨリ得タル拳銃ノ銃身ハ他ノ銃種ニ異ニシテ七線ヲ有スルコトヲ確定セリ、更ニ他ノ一例ニ在テ身體中ニ發見セラレタル彈丸ノ各個ニ於テ(其一ハ唯軟部ノミヲ穿過セシニ拘ハラス)著シキ縱溝ヲ呈スルヲ見タリ而シテ差押ヘ)、彈丸ハ骨ニ觸ルヽヤ否ヤハ所謂反撃ニ因スル軟部及骨ノ損傷

身體中ニ留止セル銃丸ノ所在及形狀

銃丸ノ分裂ヨリ來ル結果

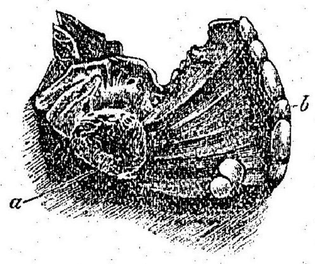
ヤ壓扁セラル是レ頭蓋骨ニ於ケル射入口ガ殆ト常ニ彈丸ヨリ大ナル所以ナリ、即チ吾人ハ亦一ノ拳銃射擊ニ因スル標本ヲ所有セリ、其標本中餅狀ニ壓扁セラレタル彈丸ハ前頭骨上ニ存シ、前頭骨ハ其彈丸下ニ於テ同一ノ直徑ヲ有スル外板ノ圈圓形釁裂ヲ現ハシ尚ホ一倍大ナル硝子板ノ圈圓形破裂アリテ之ニ一致セリ、他ノ場合ニ於テハ其彈丸管ニ壓扁セラルヽノミナラス、折半セラレ或ハ數片ニ分裂セラルヽヿアリ、依テ其各片ノ深ク侵入スルニ隨テ一射擊ヨリ二個或ハ數個ノ銃創管ヲ生シ之ガ爲メ幷ニ碎裂セル骨片ノ爲メ著大ノ荒蕪ヲ來スヿアリ

千八百七十七年ニ剖檢ヲ行ヒタル一例ハ其情人ガ窓ヲ透シテ發射セル短銃ニ由テ殺害セラレタル酌婦ニ關スル者ナリシニ、其彈丸ハ左側前額部ニ透入シテ頭蓋骨部ヲ破碎シ彈丸自己ハ同時ニ二片ニ分裂シ其一半ハ頭蓋被ノ軟部ト前頭骨トノ間ニ於テ左前頭突起ニ迄攙入シテ皮下ニ留マルノ際他ノ一半ハ頭蓋腔中ニ進入シ斜メニ兩前頭葉ヲ穿過シテ右前頭骨ノ內面ニ發見セラレタリ、之ニ等シキ他ノ一例ニシテ其現景上ヨリ二個ノ射擊ニ因スルコトヲ認メラレタルモノハ Ann. d' hyg. publ. 1887. pag. 465 ニ掲載セリ、單一ノ彈丸ニ由テ數個ノ射入口ヲ生起スルハ其彈丸ガ或ル身體部分ヲ穿通セル後更ニ他ノ部分ニ進入セル場合ニ在リ、是レ始メ四肢ニ中レル際最モ屢〻起ルモノトス、其夫ノ爲メ遠距離ヨリセル單一ノ拳銃射擊ニ由テ射殺セラレタル一婦人ニ就キ吾人ハ心臟部ニ於テ三個ノ開口ヲ發見セリ、即チ其彈丸ハ低垂セル乳房ヲ經テ後チ胸廓中ニ進入セシモノナリキ

彈丸變形ノ丸種鑑定ニ及ボス影響

未ダ完全ノ彈丸分裂ニ達セサル移行的階級ヲ見ルヿ稀ナラス、例之バ一部分割裂セラレタル彈丸或ル骨稜上ニ『騎跨スル』ヿアルガ如キ是ナリ、此關係ニ於ケルノ外彈丸ノ形狀變化ハ左ノ理由ニ依テ價値ヲ有ス、即チ此變形ノ爲メ其射擊ガ或ハ圓形丸ヲ以テセラレ、或ハ尖丸ヲ以テセラレ、或ハ裁斷セル鉛片ヲ以テセラレタルカノ(往々重要ナル)斷決ヲ困難ナラシムルヿアルヲ以テナリ、但シ尖丸ハ甚タシク變形セル時ト雖𪜈輙スク認識セラルヽヲ常トス是レ多クハ其基底ノ凹窩ト周圍ノ輪環ヲ保存スルニ由レリ(第六十九圖)、其他發見セラレタル彈丸ガ或ル一定種ノ銃器ヨリ發射セラレタルヤ否ヲ決定セントスルトキニ於テモ亦射入後ニ起レル彈丸ノ形狀變化ニ注目セサル可カラス

第六十九圖



大腿骨ヲ破碎セシメタル軍用銃ノ變形セル尖丸(ヨットバース J. Baas 氏ニ據ル(W. med. Presse 1881. pag 44)、a ハ凹窩 b ハ卷回セル邊緣

*フューレル Führer 氏 (Vierteljahrsschr. f. ger. Med. 1877 XXVII. 222) ハ一ノ奇異ナル銃創及特異ナル彈丸變形ニ就テ報告セリ、其際該銃創ハ直接ノ射擊ニ由テ生シタルカ或ハ彈丸ノ反射ニ由テ起リシカノ重要ナル疑問アリテ起リキ、茲ニ又注目スヘキハ一ノ銃創中ニ尖丸ヲ發見セルガ爲メ其彈丸ハ必ス後裝銃ヨリ發射セラレタルモノナルヘシト決定シ難キコト是ナリ、何トナレバ吾人ガ尋常ノ短銃ヲ以テセル自殺者ニ於テ己ニ二回實見セシ如ク斯ノ如キ尖丸ハ舊式ノ銃器ニ於テモ亦裝用セラレ得ヘケレバナリ、其第二例ニ於テハ右顳顬部ノ甚シキ破壞アリテ且ツ銃創管中一ノ紙栓ノ傍ラ一ノ小尖丸ヲ發見シタレバ警察ノ報告ニハ二連發短銃ヲ以テセル霰丸銃創トナセリ、即チ其第二銃身ハ實際霰丸ヲ以テ裝塡セラレシコト明カナリトセリ

丸道中ニ發見セラルヽ火藥粒及ヒ栓

射出口ト射入口トノ鑑別

銃創管中ニ發見セラレ得ヘキ佗ノ物體中銃丸ト共ニ導入セラレタル衣服片等ノ外、近距離射擊ニ於テハ散嵌セル火藥粒及栓ニ就テ考察スヘシ、栓ノ發見ハ殊ニ重要ナリトス蓋シ其存在ハ最近位ヨリ射擊セラレタルコトヲ證明スルノミナラス栓ノ物質及之ニ附存スル或ル特別ノ徵候ハ犯者ノ發見ヲ助クルコトアル可ケレバナリ、是故ニ何レノ塲合ニ於テモ其發見セラレタル栓ハ彈丸ト同シク明細ニ之ヲ記述シ而シテ後裁判所ニ引渡サヾル可カラス

一ノ銃丸或ル體部ニ侵入シタルトキハ其銃創管ヲ聯續スル二箇ノ開口中何レガ射入口ナルヤ何レガ射出口ナリヤヲ判定スルノ必要ヲ生ス、此關係ニ於テハ左件ニ注目スヘシ、直接ノ近位ヨリスル射擊ニ於テハ射入口ハ通例近位部分ノ焦烘及燃燒ニ由リ周圍ノ黑變殊ニ散嵌火藥粒ニ因テ其特徵ヲ呈スルモノニシテ已ニ此現景中ニハ之ニ反對セル開口ハ射出口ナルノ證左アリテ存スルモノトス、此塲合ニ於テハ射出口ハ射入口ヨリ迥ニ大ナルヲ常トス何トナレバ射入口ハ啻ニ彈丸ノミナラズ亦直接ニ作用スル爆裂瓦斯ニ由テ生起セラルヽノ際射出口ニ於テハ單ニ彈丸ノミカ或ハ彈丸ノ外唯共ニ導出セラレタル骨片ノミ其作用ヲ逞ウシ得レバナリ、此關係ヨリ破格ヲ示スモノハ固ヨリ直接ノ近圍ヨリセル銃傷ニシテ之ガ爲メ全身體部分ヲ斷離セシメ或ハ不整ニ破碎セラレ其際各〻廣大ナル破壞ト眞正ノ銃創口ヲ缺如スルトニ由リ若シ火藥ノ黑變ニ因テ證明セラレサレバ何レノ處ニ其彈丸ノ侵入シタルカヲ撿定シ難キヿ往々之アルモノナリ

銃種ニ關スル射入口及射出口大小ノ差異

射入口及射出口ノ邊緣

遠處ヨリノ射擊ニ於テハ射出口ハ大抵射入口ヨリモ大ナリ是レ彈丸ノ骨ニ中レル際殆ト常ニ見ル所ニシテ一部ハ骨ノ碎片ヲ合セテ導出シ一部ハ其彈丸ノ壓扁セラレ或ハ佗ノ形狀ニ變化セラルヽガ爲メ其幅ヲ增加スルヨリ來ルモノトス

殊ニ軍用後裝銃ノ如キ强大ノ逐進力ヲ有スル小銃ヨリスル射擊ニ由テハ極メテ巨大ナル射出口ヲ生スルコトアリ、然ルトキハ銃創管ハ彈丸ガ骨ニ中レル局處ヨリメ圓錐狀ヲナシテ擴大スヘシ、而メ其圓錐ノ基底ハ正ニ射出口ヲナスモノトス、然ルニ單純ノ軟部銃創ニ於テモ前記ノ小銃ヲ以テ近距離ヨリ射擊セラレタルトキハ亦銃創管ノ圓錐狀擴大ヲ見タルヿアリ、前裝銃ヨリスル射擊ニ於テハ其骨ニ中ラサリシトキハ射出口ハ射入口ト同一ノ廣サヲ有シ然ノミナラス之ヨリモ小ナルコトナキニアラス、何トナレバ射入口ハ殆ト常ニ物質ノ損失ヲ併起スルノ際射出口ハ單ニ破裂ニ因テ起リ物質ノ損失ニ由テ生スルモノニアラサレバナリ

（ピロゴッフ Pirogoff 氏 *Schmidt's Jahrb.* 1850. II. 116）

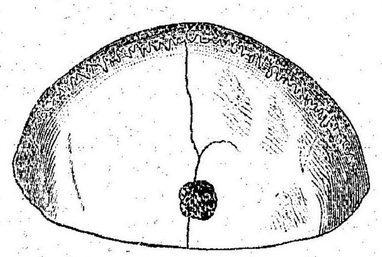
射入口ノ邊緣ハ陷沒シ射出口ノ邊緣ハ外方ニ向フト稱スルドヴェルジー Devergie 氏ノ說ハ多數ノ塲合ニ於テ適中スルコトアレトモ必然ナリト云フヲ得ス、即チカスペル Casper リーマン Liman 兩氏 (l. c. II. 280) ハ挺出スル脂肪質ニ由リ幷ニ腐敗作用ニ由テ射入口ノ邊緣モ亦外方ニ向フコトアルヲ記セリ、吾人ハ自己ノ經驗上ヨリ之ヲ確認シ尙ホ且ツ直接ノ近位ヨリスル射入口ノ邊緣ハ殆ト常ニ外方ニ向フコトヲ附言スベシ、是レ彈丸ヲ受ケタル局部ノ下ニ骨アルトキニ於テ然ルモノトス蓋シ上文已ニ記載セシ如ク此塲合ニ於テハ皮膚ト硬固ナル基底(骨)

ノ間ニ破裂瓦斯ヲ擴布セシメ之ニ因テ皮膚ヲ外方ニ壓排シ加之ノミナラス往々之ヨリ破裂ヲ來スコトアレバナリ

骨殊ニ頭蓋ニ於ケル穿孔的銃創ニ於テハ其彈丸何レヨリ射入セラレ何レヨリ射出セラレタルカヲ認識スルニ比較的ニ容易ナリ、此疑問ハ頭蓋ニ於テ生シタル開口ノ唯一箇ノミナル場合ト雖モ亦能ク解答スルコトヲ得ヘシ、即チ斯ノ如キ開口ノ各箇ハ彈丸ノ初メ命中セシ側邊ニ於テハ反對ノ側邊ニ於ケルヨリモ小ニシテ之ニ於テハ全ク銳快ナル邊緣ヲ有シ乙ニ於テハ甚シク斜向セル邊緣ヲ有ス、何トナレバ容易ク理會セラルヘキ原因ヨリシテ彈丸ノ爲メ平坦圓錐形ノ骨片ヲ刮取セラルヽヲ以テナリ（第七十圖乃至第七十二圖ヲ見ヨ）

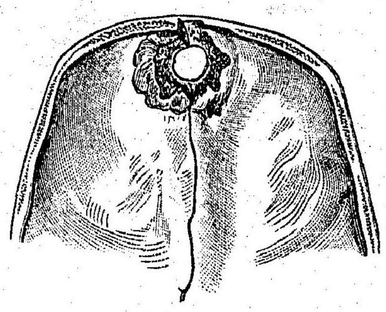
骨ニ於ケル射入口及射出口ノ鑑別

第七十圖



前頭骨ニ於ケル連發拳銃創ノ射入口（三分一大）

第七十一圖

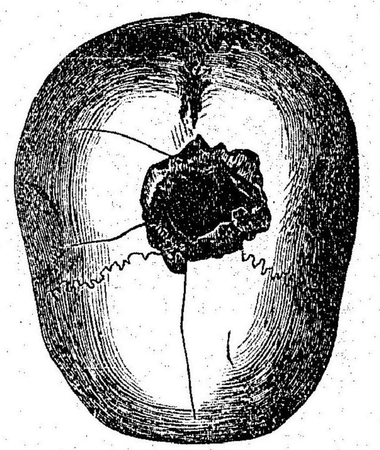


上圖ニ現ハシタル射入口ノ後側（三分一大）

前文ニ論述セル所ハ主トシテ銃丸ノ射撃

霰丸射撃ニ因スル丸道ノ性狀

第七十二圖



口中ニ於テ發射セル短銃射撃ノ顱頂骨ニ於ケル射出口（三分一大）

ヤ長延形ノ分散圓錐ナナシテ互ニ離散シツヽ進ムガ故ニ之ヲ發射シタル距離ノ愈〻大ナリシニ隨ヒ其佗ノ狀況同一ナル場合ニ於テハ霰丸ノ射撃トス、霰丸ノ相隔離スルヤ知ルヘキナリ、但シ此關係ハ遠大ノ距離ヨリスルモ數多ノ霰丸尚ホ相密接シテ來ルヿ全ク之ナシト斷定セシムル者ニアラス、即チ彈丸ノ離散ハ分散圓錐ノ周邊部分ニ於テ中心部分ニ於ケルヨリモ適ニ著シキヿヲ看過ス可カラサルナリ

異種ノ射撃材料及或ル一定ノ非定型性銃創ニ就テハ後文銃撃自殺ノ章ニ於テ論究スヘシ

玆ニハ尚ホ唯反跳銃創ト擦過銃創トニ就テ記載セントス、前者ハ挫傷ヲ誘起スヘキ弱力彈丸ノ多クハ鈍角度ヲナシテ命中スルヨリ生ス、少ナクモ小形銃器ノ彈射ニ於テハ粗大ナル外傷ヲ起スヿ極メテ稀ナレ𪜈大ナル彈丸ニ於テハ屢〻實見セラルヽモノナリ

反跳銃創

（ヴァール Wahl'氏 *Langenbeck's Archiv. XV u. XVII*）之ニ反シテ銃創口ノ近圍ニ於ケル內臟ノ反跳銃創ハ敢テ稀ナラズ、之ニ屬スル者ハ心臟及肺臟ニ於ケル挫傷ノ外殊ニ反復吾人ノ實見セル巨大ナル動脈殊ニ大動脈ノ內膜破裂シテ彈丸ガ殆ウク走過セシ脈管ノ局部ニ於テ生起セル者ナリ、是レ動脈ノ結紮ニ際シ又ハ絞縊ニ由テ顯動脈ニ來ル所ノ裂傷ト著シク區別ス可カラサル大小種々ナル單一若クハ數多ノ橫裂ヨリ成ルモノナリ

擦過銃創

擦過銃創ハ或ハ單一ノ皮膚剝脫ナルコアリ、或ハ開裂狀銃創口ナルコアリ、是レ其彈丸ガ觸線的ニ一ノ身體部分ニ中レル際形成セラルヽモノトス、斯ノ如キ開裂狀ノ銃創口ハ間〻裂創或ハ然ノミナラス切創ト誤認セラルコトナキニアラス、所謂空氣擦過銃創ニ關シテハ、グロッスマン Grossmann ペリカン Pelikan ノ兩氏（*Schmidt's Jahrb.* 1858, 97, *pag.* 265）ハ重大ノ彈丸ヲ以テ試驗ヲ擧行シタレトモ全ク其成績ヲ得ス或ハ之アルモ唯僅微ニ過キサリキ、故ニ小銃丸ニ於テハ全然價値ナキモノナルコト言ヲ俟タズ

爆裂藥ニ因スル創傷

爆裂藥殊ニ硝基倔里證林及其製品（ダナミット「ダナミット」Dynamit, 「ヴアリン」Dualin 等）ニ由テ生シタル創傷モ亦廣義ニ於ケル銃創ニ屬ス、此等ノ物質ヲ以テハ管ニ偶然ノ損傷若クハ死亡ノミ誘起セラルヽニ非サルコトハブレーメン市ニ於ケルトーマス Thomas ノ著名ナル事變及露國、英國等ニ於ケル暗殺ノ外、ブルーメンストック Blumenstok 氏ノ報告セル諸例（Friedreich's Blätter für ger. Med. 1877, pag. 171）ニ由テ之ヲ證明シ得ヘシ、其一ハ「ジアリン」ノ藥筒ヲ胸上ニ置クニ由テ謀殺ヲ遂ケ作ノ一ハ恐クハ故意ニ竈燭中ニ挿入セル「ダナミット」ノ藥筒ニ由テ死亡ヲ來セシモノナリ、其他

非致命的損傷ノ區別ニ關スル法醫ノ責務

「ダナミット」ヲ以テセル自殺ノ一例アリテ報告セラレ吾人モ亦斯ノ如キ一事實ヲ知レリ、近時吾人ハ藥包製造所ニ於テ爆鳴水銀ノ破裂ニ由テ變死セシ一婦人ヲ剖見セリ、此婦人ハ破裂ノ起リシ際其爆鳴水銀ヲ一ノ亞鉛盃中ニ於テ携持シタリト云フ、其前額髮及睫毛ハ焦燒シ顏面ノ前部ハ煙ニ由テ黑變セラレ、之ヲ拭除セルニ多數散點狀ノ類黑色散嵌傷ヲ發見セリ、右手ハ殆ト全ク斷離セラレ斷端ハ黑色ヲ呈セリ、右鼠蹊部ニ於テハ手掌大ノ創傷アリテ其中ヨリ多發ニ綻裂セラレタル小腸縮ノ一塊及亦手掌大凹曲銳緣性ノ亞鉛片アリテ摘出セリ、此亞鉛片ハ固ク創傷中ニ刺入シ而シテ股輪ノ直前ニ於テ外腸骨動脈ヲ橫ニ離斷シタリ、右大腿ノ前面ニ於テハ幅及長サ共ニ一指大ナル溝管部アリテ其盲端ニハ一ノ亞鉛片ヲ存セリ、斷離セラレタル手ハ大約三十箇ノ黑色ナル碎片トシテ散亂セリ、水ヲ以テ洗滌セシニ黑色物質ノ一部分ハ顯微鏡上一ノ水銀球ヲ發見セサリシモ化學的ニ水銀ヲ證明セシ所ノ黑色粉トシテ沈降セリ

（乙）刑法上ノ意義ニ於ケル損傷ノ種別　Qualification

der Verletzung im Sinne des Strafgesetzes.

非致命的損傷　Nicht tödtliche Verletzungen.

死亡ヲ來タサヾリシ損傷ノ法醫的判定ニ際シ其損傷ニ繼起スル一時的或ハ永久的ノ結果能ク單純ナル醫學上ノ論點ヨリ解明セラルヽニ足ルヘキ場合ナラン、ニハ法醫ノ任務ハ比較的ニ容易ナルモノナリト雖モ、其實際ニ於テハ遺憾ニモ然ルヲ見ズ、即チ刑法ハ或ル損傷ノ

種類ト結果トニ隨テ一定ノ損傷種類ヲ區別スルガ故ニ（此區別タルヤ普通刑法的ノ原由幷ニ訴訟的ノ原由ヨリ必要ナルガ如キモ其性質上常ニ醫師ノ協力ヲ要求スル者ナリ）、法醫ハ或ル實在ノ損傷ニ就テ單ニ之ヲ純粹ノ醫學的立脚點ノミヨリ鑑定セス亦刑法的區別ノ意義ニ於テ分類スルノ必要アリトス、此要求タルヤ損傷ノ法醫的判定ヲシテ全ク特種ノ性質ヲ具有セシメ、著シク單純ノ臨床的診斷トノ區別セシムルモノナリ

損傷ヲ刑法的ニ區別スル基礎タル原則

損傷ヲ刑法的ニ區別スルノ原則ハ隨處同一ナルモノニアラズ例之バ佛國刑法（*Code pénal*）ハ單ニ健康障害或ハ職業不能ノ長短ニ隨テ損傷ノ等差ヲ附シ、獨逸刑法ハ殊ニ損傷ノ結果ヲ以テ種別ノ基點ニ取ルノ際、目下墺國ニ在テハ其現行刑法及改正刑法草案ニ於テ此兩原則ヲ適用セリ、玆ニ吾人ハ或ル損傷ガ事實上現呈セル作用ノ外亦恐クハ生起シ得ヘキ作用ヲモ考察セサル可カラス、何トナレバ其損傷ヲ來シタル器械及此器械ノ使用ト關聯セシムヘキ生命ノ危險モ亦損傷ノ刑法的區別ニ影響ヲ有スルヲ以テナリ

重傷ナル語ノ新意義

墺國刑法及其改正草案ト獨逸刑法ト相一致スル點ハ此諸刑法中皆『重傷』（*„Schwere körperliche Verletzung“*）ナル文字ヲ用ユルニ在リ、是レ恰モ損傷ノ全刑法的分類ノ基礎タル大小的原位ヲ形成スル者ナリ

然ルニ現行墺國刑法ニ於テハ『重傷』ナル語ハ單ニ『重キ身體傷害』（*„Schwere körperliche Beschädigung“*）ノ刑法的意義ノ一成分ノミヲナシテ精密ニ定義セラレズ隨テ其意義ハ比較的廣汎ニ渉リ經界不明ノ應用ヲモ許スノ際墺國改正刑法草案及獨逸刑法ニ於テハ適ニ狹隘ナル文義ニ於テ『重傷』（*„Schwere körperliche Verletzung“*）ト指稱セラレサルヲ得サレバナリ、但シ此輕傷中ニハ如何ナル法醫モ現行墺國刑法ノ意義ニ於ケル『重傷』ト宣言スルニ躊躇セサルヘキ多數ノ損傷ヲモ包有スルモノナリ

重キ身體傷害ノ因由タル狀態、加重的情狀

此關係ニ隨テ觀レバ先ツ現行墺國刑法ノ當該規定ヲ論述シ之ニ次クニ墺國改正刑法草案及獨逸刑法ノ規定ヲ論述スルヲ以テ便宜トスルニ似タリ

墺國刑法ノ意義ニ於ケル非致命的損傷ノ法醫學上判定　Gerichtsärztliche Beurtheilung der nicht tödtlichen Verletzungen im Sinne des österr. Strafgesetzes.

墺國刑法ノ規定中第百五十二條第百五十五條及第百五十六條ハ最モ重要ナルモノニ屬スル法律上ノ規定ニシテ第百五十二條ハ恰モ『重キ身體傷害』（*„schwere körperliche Beschädigung“*）ノ刑法的定義ヲ含有シ、而ノ第百五十五條及第百五十六條ハ傍ラ情狀殊ニ其結果ニノ若シ之ヲ存スルヤハ之ヲ缺如スル單一ノ『重キ身體傷害』ヨリモ墺國刑法上高度ノ刑名ヲ擬スヘキモノヲ包有ス、吾人ハ單簡ヲ欲スルガ爲メ之ヲ加重的情狀（*die erschwerenden Umstände*）ト名ク

ヘシ

重キ身體傷害　Die schwere körperliche Beschädigung.

重キ傷害ヲ成立セシムル要因

『重キ身體傷害』ノ事實成立ハ墺國刑法第百五十二條ニ從ヘバ或ル人體ニ對スル敵意ヲ以テ犯シタル行爲ヨリ、或ハ(A◎)少クモ二十日以上ノ健康障害又ハ操業不能、或ハ(B◎)精神變動、或ハ(C◎)其重キ損傷ヲ來スノ塲合ナリ

健康障害ノ意義

(A◎)少クモ二十日以上ノ健康障害或ハ操業不能　健康障害ノ刑法的意義ハ決シテ治癒ノ遲速ト同一ナラス、即チ刑法ハ健康障害ヲ操業不能ヨリ分ツト雖モ操業不能ハ器官的障害ノ存在ナクシテ想像セラレ能ハサルガ於ニ若シ立法者ハ健康障害ノ下ニ治癒ノ遲速ヲ理會シタリトスレバ健康障害ノ傍ラ操業不能ヲ特別ニ揭擧スルハ剩贅ニメ全ク蛇足ニ屬スルナラン、(ヘルブスト Herbst 氏 *Commentar. pag.* 317)是故ニ健康障害ハ『疾病』,,*Krankheit*" 即チ熱、違和、疼痛等ニ由テ徵知セラルヽ全身容體ノ障害ト同一義ナリト看做サヾル可カラス、蓋シ其反對ノ塲合ニ於テハ或ル僅微ノ損傷例之バ單一ノ溢血ノ如キ其全ク消失スルニ至ル迄屢〻二十日以上ヲ費スモノヲモ已ニ健康障害トナサヽルヲ得サルヿアリ、是レ法律ノ本旨ニモ『健康障害』,,*Gesundheitsstörung*" ナル定義ノ通俗的理會ニモ反對スル者ナルノ際比較的僅微ノ損傷ニシテ一ノ疾患ヲモ誘發スルヿナク其存在中操業不能ヲ兼併スルノ塲合アルヿ敢テ想像シ難キニアラストス、例之バ細密ノ手工(裁縫、筆記、電信、「バイオリン」演奏者等)ニ手指ヲ要スル人體ニ於ケル或ル一定ノ手指損傷ノ如キ是ナリ

操業不能ノ意義

『操業不能』,,*Berufsunfähigkeit*" ノ下ニハ習行的或ハ責務的操作ノ不能殊ニ當該者ガ從來生計ノ爲メニ行ヒタル操作ノ不能ヲ理會ス、是故ニ操業不能ハ作業營爲一般ノ不能ニアラズシテ該人體ノ地位及從來ノ營業ニ從ヒ種々不定ナル特種ノ操作(ナポレオン法律ニ所謂箇人的作業)ニ對スル不能ヲ指スモノトス

操業不能ニ關スル法醫ノ判定

是ニ由テ之ヲ觀レバ或ル人體ノ操業不能ヲ疑題トナスノ際一面ニハ其操業ノ種類及之ニ必要ナル器官若クハ肢節ヲ參照シ、一面ニハ當該ノ損傷ハ該器官若クハ肢節ノ使用ヲ全ク妨害セルヤ或ハ必要ノ體力逞發若クハ忍耐ヲ以テモ其作業營爲ヲ成シ遂ゲ得サル迄妨害ヲ來タセル者ナルヤ否ヤヲ考察セサル可カラス、故ニ完全ナル操業不能ト單ニ局部的ナル操業不能トノ別アリ、然ルニ法律ノ語意ヨリシテハ其法律ハ單ニ前者ノミヲ目的トスルカ或ハ又後者ヲモ含有スルカヲ曉知スルヲ得ス、是レ經驗上當該事件ニ關スル鑑定ヲ困難ナラシムルノ事情ナリトス、但シ法醫ハ當該作業營爲ノ著ルシキ困難ヲ以テ毎回操業不能ナリト宣言スルヿ能ハサルヘシ、何トナレバ其人若シ努力ト甚タシキ勞苦トヲ以テスレバ仍ホ其職業ニ從ヒ得ヘキヤ否ヤノ疑問ヲ解釋スルノ塲合ニアラズ又絕對的ノ操業不能ハ比較的稀ニ存在スヘキモノナレバナリ、稍〻輕易ナル塲合ニ於テハ實在事件ニ於ケル操業能力ガ如何ナル程度ニ迄妨碍セラレタルカヲ裁判官ニ申明シ而シテ刑法ノ意義ニ於ケル操業不能ト認定スルカ然ラサルカハ全ク同官ニ一任スルノ外途ナキナリ

若シ其原因タル行爲ヲ重キ身體傷害トシテ取扱フヘキ時ニハ少クモ二十日ノ健康障害或ハ操業不能ノ存在セサル可カラサル規定ニ於テハ、一面ニハ重キ身體傷害及輕キ身體傷害ノ間ニ於ケル境界線ノ確定ヲ要スル純粹ナル法律的ノ理由アリテ之ガ標準タル「恰モ竊取セル金額ガ法律上ニ規定セル定限ニ達スル時(第百七十一條)初メテ其竊盜ヲ重罪犯ト認ムルニ均シク、而シテ佗ノ一面ニハ或ル重要度ノ損傷ハ通常之ニ由テ生起セラレタル疾病若クハ操業不能ノ消失スル迄ニ大約三週日ヲ要スルノ外科學的經驗モ亦其標準ヲ與フルモノナリ

損傷ニ因テ受ケタル損害殊ニ其『營業能力』(Erwerbsfähigkeit)ノ損害ニ關スル被害者ノ民事的訴求ハ、一ニハ墺國民法第千三百二十五條乃至第千三百二十七條ニ據リ、一ニハ勞働者災害保險ニ關スル千八百八十七年十二月二十八日ノ法律(千八百八十八年一月一日ノ墺國官報)ニ由テ規定セラルヽ者トス、勞働者災害保險法ノ重要ナル規定ハ左ノ如シ

第六條　身體損傷ノ場合ニ於テ其損害ノ賠償ハ該災害ノ起リシ後第五週ノ初メヨリ起算シ營業不能ノ持續中給與スヘキ日當ヨリ成ルモノトス

日當ノ額ハ

日當ノ計算ニ關シテハ第一ニ被傷者ガ最後ノ年度中該災害ノ起リタル工作場ニ於テ其作業ヨリ得タル勞働賃ヲ檢査スヘキモノトス……

(a)完全ナル營業不能ノ場合ニ於テハ其持續中年度勞働賃ノ六十「プロセント」ト定メ

(b)一部的營業不能ノ場合ニ於テハ其持續中a項ニ規定セル日當ノ分數ト定メ殘餘ノ營業能力ヲ標準トシテ之ヲ算定ス但シ準度勞働賃ノ五十「プロセント」ニ超ユル可カラス

第七條　工作場ノ災害ヨリ死ヲ致シタル場合ニ於テハ其損害賠償ハ第六條ニ從ヒ死亡前ノ時期ニ適當スル功程ノ佗尙ホ(一)埋葬費……(二)死亡者ノ遺族ニ與フヘキ日當ヨリ成ルモノトス

第二十九條　凡ソ保險ノ責任アル工作場內ニ起レル災害ノ爲メ其內ニ勞働セル一人死亡若クハ三日以上ノ勞働不能ヲ繼起セル身體損傷ヲ受ケタルトキニハ每回工作場主或ハ管理者ヨリ五日以內ニ於テ初級警察署ニ届書ヲ提出スヘシ

第三十一條　被保人死亡スルカ或ハ豫測上死亡若クハ四週日以上ノ營業不能ヲ繼起スヘキ身體傷害ヲ受ケシメタル災害ノ届出アリタルトキハ警察官ハ適當ノ取調ニ由リ成ルヘク猶豫ナク特ニ左ノ條件ヲ確定スヘシ、(一)災害ノ原因及種類、(二)被殺或ハ被傷人名、(三)其勞働賃、(四)生起セル傷害ノ種類、(五)被傷者ノ住處、(六)其災害ニ因テ死亡セル者ノ遺族ニシテ第七條ニ據リ賠償要求ノ權利アル者

此取調ノ費用殊ニ必要ノ場合ニ於テ招致セル鑑定人ニ由テ生シタル費用ハ每回保險組合ニ於テ負擔スヘシ茲ニ執行セル取調ノ結果ハ其保險組合ニ報告スヘキモノトス

営業不能ニ關スル民法上ノ規定

第三十三條　被保人災害ノ爲メニ死亡セシ時ハ保險組合ハ直ニ取調ノ結了後(第三十一條)或ハ爾後死亡ヲ來セルトキハ其通知ヲ得タルヤ否ヤ第七條ニ從テ支出スヘキ損害賠償ヲ確定スヘシ

被保人災害ノ爲メ身體傷害ヲ受ケタルトキハ災害ノ起リシヨリ四週日ノ經過後其時尚ホ完全或ハ一部營業不能ニ罹レル被傷者ニ對シ第六條ニ從テ給與スヘキ日當ヲ確定スヘシ

傷害ヲ治癒セシムル爲メ四週日ノ經過後尚ホ醫師ノ治療ヲ受クル所ノ被傷者ニ對シテハ先ツ治療終結ニ至ル迄ニ給與スヘキ日當拂渡ノ確定ニ止メ其佗ハ治療終結ノ後初メテ日當ヲ確定スヘシ

第三十八條　此規則ニ從テ設立シタル保險組合ニ對シテハ其所在地ニ於テ一ノ陪審裁判所ヲ設立シ其保險組合ニ提出セラレ該組合ノ認可セサル賠償要求ニ就テモ裁定ヲ爲サシムヘシ

陪審裁判所ハ常置裁判長一名陪審官數名及必要數ノ代理員ヲ以テ組成ス

其佗陪審裁判所ノ組織及裁判進行手續並ニ陪審官ノ報酬ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

營業不能ニ關スル獨逸災害保險法ノ規定

千八百八十四年七月六日ノ獨逸帝國災害保險法ハ之ニ均シキ規定ヲ含有ス、豫審ニ關シテハ(第五十一條以下)明カニ左ノ如ク明言セリ、即チ『其佗若シ做シ得ヘクハ佗ノ關係人並ニ組合ノ請求及費用ニ由リ鑑定人ヲ呼出スヘシ』但シ鑑定人ノ呼出ハ設トヒ其要求アルモ決シテ必遵的ノ者ニアラストス、エル、ベッケル L. Becker (伯林、千八百八十八年)ハ獨逸災害保險法ニ關スル『負傷後勞働及營業不能ノ檢定法初歩』 „Anleitung zur Bestimmung der Arbeits-und Erwerbsunfähigkeit nach Verletzungen" München 1889. ナル一書ヲ著シ此關係ニ於ケル多數ノ重要ナル言論ヲ記載セリ、アー、クレッケ A. Krecke 氏ノ小冊子『災害保險及醫師鑑定』ト題スル一書 „Unfallversicherung und ärztliches Gutachten" ハ外科專門家ノ立脚點ヨリ論述シタルガ故ニ尚ホ一層有要ナル者ナリ、多數ノ保險組合ハ完全若クハ一部的營業不能ノ判定ニ際シ所謂賠償額表ニ從テ計算スレ𪜈ベッケル Becker 氏ハ斯ノ如キ價額表ハ屢〻反復スル或ル損傷ノ塲合及其結果ニ對スル概畧ノ憑據トナスニ足レリト雖モ(設トヒ少ナカラサル補修ヲナスモ)一切ノ塲合ニ對スル標準トナス可カラサルヿヲ切論セリ、玆ニ實在ノ塲合ニ對シテ其權利ヲ讓ルノ佗ニ途ナク而シテ帝國保險局モ亦從前ノ裁定ニ於テモ同一ノ原則ニ依遵セリ

精神變動ノ意義

(b)精神變動　墺國刑法ハ其第百五十二條ニ於テ唯一時的ノ精神病ノミヲ目的トセリ、何トナレバ第百五十六條ニ於テ恢復ノ望ナキ精神變動ヲ特別ノ加重的損傷結果トシテ故トサラニ明言シタレバナリ、然レ𪜈玆ニハ精神變動ノ兩種類ヲ一項ノ下ニ論述スルヲ適當トスルニ似タリ

第一ニ『精神變動』 „Geisteszerrüttung" ナル刑法上ノ用語ハ『精神病』 „Geisteskrankheit" ナル意義トシテ之ヲ取ルノ外途ナキヤ明カナリ、是故ニ精神變動ナル語ヲ以テハ啻ニ多般ノ損傷後ニ發見スル(決シテ腦ノ損傷後ノミニ發見スルヲ常トセサル)意識ノ一時的障碍、

人事不省等ヲ指稱セズ狹義ニ於ケル精神病即チ或ル損傷ノ急性症候ノ經過後、或ハ直チニ之ニ繼續シテ貽留シ、或ハ後日ニ至テ發生スル症チモ包括スル者ナリ*

*此急性症候ハ固ヨリ亦急性精神障碍ノ狀ニ於テ存スルコアリ、是レヴヰルレ Wille ゲーデル Guder ノ二氏(„Geistesstörungen nach Kopfverletzungen." „Jena. Ztschr." 1886)カ原發的損傷性癲狂ノ急性症ト名ツケ且ツ七名ノ患者中六名ハ治癒スルチ見タルガ故ニ佳良ノ預後ヲ微スルモノナリ、意識ハ一時的ニ恢復シ、之ニ亞ク嗜眠ヲ以テシ、患者ハ此狀態ヨリ抗敵性ヲ有スル强劇ノ錯覺性恐怖狀態ニ移行シ、爾後徐々ニ靜穩トナリ尙ホ頭痛及種々ノ神經障碍ヲ呈スレトモ遂ニ治癒ニ赴ク、然ルニ其患者ハ逢着セル事實ニ對シテ記臆ノ缺乏ヲ存留シ或ハ後日ニ至リ他人ノ說示ニ依テ是ヲ補充シ得ルモノナリ

精神病ハ啻ニ頭部ノ損傷ノミナラス亦遠隔器官ノ損傷、加之ナラス虐待ニ關聯セル精神的衝動ニ由テモ誘起セラルヽモノナリ

頭部(腦)損傷ヨリ精神病ヲ誘起スルコ稀ナラサルハ一般認識セラレタル事實ナリ、シュラーゲル Schlager 氏(*Zeitschr. der k. k. Gesellschaft der Aerzte in Wien*, 1775, *pag.* 454)ハ五百名ノ癲狂者中精神病ノ發生ト纏ニ得タル頭部損傷トノ間ニ原因上ノ關係アルコト疑無キ者四十九名アルコトヲ檢出セリ、グリーシンゲル Griesinger („*Psychische Krankheiten.*" 3 *Aufl.* 1871, *pag.* 182)ニ據レハ精神病ヲ續發セシムルハ必スシモ重劇ノ頭部損傷ニ限ラス雖モ頭蓋骨ノ損傷ハ單一ナル軟部ノ損傷ヨリモ精神的障碍ヲ繼起セシムルノ虞適ニ大ナリトセリ、斯ノ如キ續發症ヲ起スハ第一ニ前腦ノ直接的或ハ間接的損傷ナルコト論ヲ俟タス、而ノ比較的僅微ナル原發的若クハ續發的腦皮質傷害ハ既ニ之ヲ誘起スルニ足ル者ナリ、屢〻發見スル前頭葉、顳顬葉及顱頂葉ノ穹窿部分ニ於ケル挫傷、次ニ腦膜間ノ溢血及骨碎片ノ壓入ヲ以テ癒着セル頭蓋骨折ハ特別ニ重要ノ關係ヲ有スルニ似タリ、其他又注目ノ價アルハ限廓的腦損傷ノ潛伏性ニ經過スルコト即チ著シキ現象ヲ來サズシテ存留シ且ツ外科學的ノ意義ニ於テ治癒シ得ルコ是ナリ

精神病ハ往々著明ノ方法ニ於テ損傷ノ直後ニ發生スルコアリ、クラフトエービング Kraft-Ebing 氏(*Vierteljahrsschr. für ger. Med.* 1874, XXI, 56)*ニ據レハ此際必ス常ニ原發的癡狂ヲ來スト云フ、此症ハ概シテ甚タ重ク且ツ治癒セサルヲ通例トス、然レ圧鑑定上ニハ一ノ困難ヲ呈スルコナシ、蓋シ損傷ト精神病トノ間ニ於ケル原因的關係ハ明白ニ呈露セラレ毫モ疑ヲ容ルヘカラサル者ナレハナリ

*前記諸家ノ外ハルトマン Hartmann 氏(Archiv für Psych. XV, pag. 98)及ルグランヂュソール Legrand du Saulle (*Les traumatismes cérébraux. Gaz. des hôp.* 1885. Nr. 103—112)ヲ見ヨ

其精神障碍後日ニ至リ始メテ生起セシキハ其鑒定適ニ困難ナリ、此關係ニ於テ注目スヘキハ頭部損傷ト其直接ノ結果及精神病ノ發生トノ間ニ經過スル時日中全ク何等ノ微候ヲモ呈セサルコト稀ニシテ常ニ其前驅的症候ト認ムヘキ或ル一定ノ腦官能障碍ヲ呈スルヲ常トスルコ是ナリ、シュラーゲル Schlager 氏及クラフトエービング Kraft-Ebing 氏ガ斯ノ如キ前驅的症候トシテ指示セル、五官作用ノ障碍(眼ノ知覺過敏、耳鳴、難聽)、眩暈、頭痛、腦充血ノ傾向、飮酒不能、麻痺及感覺亡失ノ存留或ハ加之ナラス其蔓延(是レ損傷ニ由テ

精神病ノ原因トノ頭部損傷

損傷ノ直後ニ發スル精神病

損傷後時日ヲ經テ發スル精神病

誘起セラレタル持續的病竈アルノ徴）ニシテ全病候ナシテ麻痺癡狂トノ類似ヲ呈セシムル者ナリ、マイネルト Meynert 氏 Wr. med. Blätter. 1879. pag 667)、中風樣或ハ癲癇樣發作ノ持續或ハ反復、精神的ノ關係ニ於テハ亦記臆減弱、精神急速ノ倦怠、精神興奮、被傷者感情及性格ノ變換等是ナリ、最後ノ症候殊ニ其進行的發生ハ道德狂ノ症狀下ニ發生スルヿアルガ故ニ特別ノ注目ヲ要スル者トス（ギーズレー Maudsley 氏„Physiologie und Pathologie der Seele." 1870. pag. 335.、アー、ピック A. Pick 氏„Drei Fälle traumatischen Irrsinns." Prager med. Wochenschr. 1879. Nr. 40 u. s. f. Insbesondere pag. 402)而シテ此者ハ該患者ノ被傷前ニ於ケル感情狀態及性格ト比較スルトキハ最モ著明ニ發見セラレ得ルモノトス

何人ト雖モ吾人ノ如ク放蕩流離ニ陷リ且ツ酒客トシテ知ラレタル多數ノ人體ヲ剖見スルノ機會ヲ得タラン者ハ必ス此種ノ人體ニ於テ慢性硬腦膜炎性及軟腦膜炎性病機、中風的襲腫等ノ外、比較的屢種々ナル腦損傷殊ニ前頭葉及顳顬葉挫傷ノ殘痕アルヲ認ムヘシ、依テ斯ノ如キ場合ニ於テハ道德的沈湎及其他酒客ノ性質ト當該ノ損傷トノ間ニ原因的ノ關係アルヿヲ思考スルニ至ルベキヤ自然ノ勢ナリ、即チ吾人ノ證認セル如ク前記ノ慢性硬腦膜炎性及軟腦膜炎性病機ハ決シテ亞爾箇保爾濫用ノ結果タルヿヲ必セス或ル場合ニ於テハ此諸病ハ寧ロ原發性ニシテ道德上及精神上ノ荒癈ハ却テ緩發性ニ屬シ其際人ノ知ル如ク腦缺損ニ於テ通常見ル所ノ亞爾箇保爾飲料ノ濫用モ亦其一原因タリシヤモ知ル可カラス、重キ頭部損傷ヲ經過シタル人體ノ容易ク精神興奮ニ罹ルハ診斷上重要ノ徴候ニシテ亦斯ノ如キ人體ノ責任能力ニ關スル疑問ニ對シ緊要ナル症候ヲナスモノトス、吾人ハ近時三名ノ男子ニ剖見シタルニ其二名ハ心臟脂肪變性ニ由テ斃レ、一名ハ偶然ノ燈用瓦斯中毒ニ由テ死亡シタル者ナリキ而シテ

損傷後ノ精神障害ニ由テ斃レタル人體ノ解剖所見

何レモ剖見ノ結果トシテ重キ頭部損傷ノ治癒セル痕跡アルコトヲ見タリ、其一ニ於テハ兩前額葉及顳顬葉ニ挫傷ノ治癒セル痕跡ヲ發見シ、第二例ニ於テハ治癒セル眼窩蓋ノ骨折ト共ニ左前頭葉ニ治癒セル挫傷ヲ認メ、第三例ニ於テモ殆ド半手掌大ノ骨質損傷ヲ兼ヌル左顳頂骨ノ刀傷ノ痕跡ヲ檢出セリ、此三例ノ病機ヲ調査セシニ當該ノ人體ハ平素極メテ喜怒ヤ易キ性質ヲ有シタレモ一ノ著明ナル症候ヲ呈セサリシト云フ、最後ノ例ハ二十年前ニ刀傷ヲ受ケタル憲兵ニシテ死亡數年前ヨリ其精神興奮ハ明カニ增劇セリト云フ、此關係ニ於テハゴルツ Goltz 氏(Med. Centralbl. 1882, pag. 962)ガ報告セル如ク犬ニ於テモ亦顳頂葉ノ破壞後喜怒ノ變化ヲ存留セシ事實ハ最モ興味アルモノナリ

損傷後ニ成ル精神病ノ種類

此前驅症ノ持續ハ自然ニ又ハ偶因ノ影響下ニ於テ明白ナル精神障害ノ發現ヲ來スニ至ル迄數週及數月ニ亘ルヿアリ

爾後發生スル精神障害ハ種々ノ方法ニ於テ呈露セラルヽヿヲ得、或ル場合ニ於テハ癡狂ノ增劇ヲ以テ主徴トシ、佗ノ場合ニ於テハ著シキ鬱憂ヲ來シ、或ハ殊ニ追跡狂ノ症狀下ニ於テ一部的精神錯亂ノ發生ヲ見ル、然レトモ多クハ一時性ニシテ發作的ニ反復スル精神障害ヲナシ癲癇狂ノ症狀ヲ以テ經過ス、即チ痙攣性（類癲癇性或ハ著明ニ癲癇性ナル）發作ニ次キ、或ハ少ナクモ前兆症ヲ伴ヒ來ル法醫學上特別ニ重要ナル此精神障害ヲ佗ノ篇章ニ於テ論スルノ際特ニ講究スヘキ特徴ヲ呈スルモノトス

法醫學上極メテ重要ナルハ末梢的損傷ノ後ニ於テモ亦精神病ノ發生シ得ヘキ事實ナリ、是

末梢的損傷ニ因スル精神病

レ時トシテハ比較的輕微ノ損傷後ニ來ル者ニシテ損傷自己就中損傷ヨリ形成セラレタル瘢痕ニ由テ末梢的神經端ノ刺戟ヲ致スノ時ニ於テ然リトス

斯ノ如キ精神病ハ屢〻實見セラレタル『末梢性癲癇』ニ類シ反射的障害ニ屬ス、此精神病ノ多數ハ大抵僅微ノ損傷ニ因スルモノニノ既ニグリーシンゲル Griesinger 氏 (*l. c.* 183) ハ之ヲ蒐集シ而ノ氏ハ亦單ニ外表ニ止マレルガ如キ多數ノ頭部損傷モ亦唯此方法ニ於テ精神病ノ發生ヲ誘致スルモノナラント論セリ、其佗此種ノ觀察ハキョツペ Koeppe ウェント Wendt ノ兩氏 (*Virchow's Jahrb.* 1874, II, 104.) ニ由テ記述セラレタリ、吾人ハ仍ホ多數ノ經驗ヲ頭部損傷ノ章ニ於テ報告スヘシ、玆ニハ醫愛性並ニ興奮性ノ症狀ヲ實見シ殊ニウェント Wendt 氏ノ記述セル場合（頭皮軟部ノ銃創）ノ如キ一二ノ症ニ於テ精神的障害ハ刻期的ニ且ツ發作性ニ發生シ以テ著シキ類癲癇徵候ヲ具有セリ、是レ能ク斯ノ如キ場合ノ認識及鑑定ニ利用セラレ得ヘキ所ノ現象ナリ

貫傷ノ際ニ起レル精神激動ニ因スル精神病

其他或ル場合ニ於テハ精神病發生ノ動機タル者ハ損傷自己ヨリモ寧ロ負傷ノ時ニ於ケル精神激動ナリトス、恐怖及驚愕ガ精神病ヲ生起シ得ヘキハ已ニ確認セラレタル事實ナリ、此種ノ情思衝動ガ身體虐待ニ伴フテ現ハレシキハ尚ホ一層之ヲ是認セサル可カラズ、斯ノ如クシテ生起セラルヽ精神障害ハ智慮ヨリモ寧ロ情感ニ關スル者ニシテ屢〻比私的里性或ハ類癲癇性ノ偶發症ヲ合併シ又ハ後文ニ記載スヘキ『損傷性神經病』 *traumatische Neuro sen,* ノ症狀ヲ以テ經過スル者ナリ

損傷後ニ來レル各種精神病ノ豫後

凡ソ損傷或ハ虐待ノ後ニ精神障害ヲ生起セル場合ニ於テハ玆ニ精神病ヲ發生セシムヘキ佗ノ原因ヲ發見シ得ヘキヤ否ヤ、或ハ既ニ斯ノ如キ精神病ノ素因アリシガ爲メ損傷或ハ虐待ニ由テ之ヲ誘起セシニアラザルヤ否ヤヲ考察スヘシ、此目的ニ對シテハ極メテ精密ニ病歷ヲ調査シ經驗上ヨリ或ハ精神病ノ發生ニ對スル原始的誘因ヲナシ或ハ之ニ對スル素因ヲナスト知ラル、所ノ一切ノ事由ニ注目セサル可カラス

上文既ニ記載セル如ク法律ハ一時的ノ精神障害ト回復ノ望ナキ精神障害トノ間ニ區別ヲ立テタルガ故ニ箇々ノ事件ニ於テ亦精神病ノ豫後ヲ辯明スルヲ要ス、前記ノ如キ重キ頭部損傷後ノ原發的癡狂ハ殆ト常ニ不治ナリ、然レ𪜈頭部損傷後晩ク發生スル所ノ精神病モ亦甚タ不良ナル豫後ヲ徵ス、シュラーゲル Schlager 氏ノ實見セル諸症ハ殆ト皆其不治ナルコヲ證明セラレ七回ハ其轉歸ヲ癡狂及麻痺狂ニ取レリ、或ル場合殊ニ治癒セル限局的頭蓋骨折ノ碎片壓入ニ由テ誘起セラレタル癲癇樣狂ニ於テハ穿顱術ヲ施シタル後治癒ヲ得タルコトアリ、末梢性損傷ニ由テ反射的ニ誘起セラレタル精神病ハ其豫後稍〻佳良ナリ、殊ニ亦キョツペ Koeppe 氏 (*l. c.*) ノ得タル經驗ニシテ末梢神經端ニ刺戟ヲ逞ウスル瘢痕ノ切除後精神病狀態ノ著シキ輕快、加之ナラス其治癒ヲ得タル件ニモ注目スヘシ、精神激動ガ精神病發生ノ主因タリシ場合ニ於テハ其豫後不良ナルヲ常トス、何トナレハ此精神激動タルヤ多クハ精神病ノ遺傳的素因ヲ有シ一度之ヲ發生スヘキ動機ヲ得タルトキハ進步性、加之ナラス急進性ノ經過ヲ取ルヘキ人體ニ於テ現ハル、者ナレハナリ、クラフト エービング

重キ損傷ナル語ノ意義

Kraft-Ebing 氏モ亦其記述セル實例ニ於テ此事アルヲ證明シタリ

(c)**重キ損傷**　此語ハ法醫ナシテ最モ著大ナル困難ヲ感セシメ且ツ往時ヨリ最モ種々ナル爭議ヲ誘起セシモノナリ、而シテ其困難タルヤ一部ハ『重キ身體傷害』"*schwere Körperliche Beschädigung*"ナル語ト『重キ損傷』"*schwere Verletzung*"ナル語トハ共ニ普通ノ用語法ニ於テ同一ノ意義ヲ有スルニ基ツキ、他ノ一方ニハ法律文中未ダ曾テ『重キ損傷』ナル語ヲ以テ何事ヲ理會スヘキカヲ確定セル所アラサルニ基ツクモノナリ

吾人ハ姑ク此法律上ノ規定ヲ左ノ如ク解釋スルヲ得、即チ『重キ身體傷害』"*schwere körperliche Beschädigung*"ナル語ハ墺國刑法第百五十二條ニ於テ目的トセル重罪ノ總體ニ對スル稱呼ト看做シ、『重キ損傷』"*schwere Verletzung*"ナル語ヲ以テハ之ニ因テ誘起セラレタル健康障害又ハ操業不能ノ長短ニ拘ハラス純粹醫學的ノ立脚點ヨリ一ノ重傷トシテ宣言セラルヘキモノヲ指稱スヘシ

醫師ト雖モ實際一ノ損傷ガ既ニ『輕傷』"*leichte*"ヲ越エテ『重傷』"*schwere*"ノ區域ニ入ルヘキ經界線ヲ確定スルヲ能ハサルナリ、而ノ斯ノ如キ區別ハ本來醫學ノ知ル所ニアラサル者トス、然レ𪜈一面ニハ尋常ノ用語法ヨリ『重キ』"*schwere*"ナル語ハ『重要』"*wichtig*"ナル語ト同一ト看做サレサルヘカラサルニ由リ、他ノ一面ニハ刑法第百五十二條ノ關係ト『重キ損傷』ハ二十日ノ健康障害及操業不能并ニ精神變動ト同一位ニ列スルトニ由リ、**重キ損傷**ト宣言セラレ得ヘキハ唯(設トヒ短キ經過ヲ有スルモ)重要ナル健康障害ヲ來シ或ハ一時性若クハ永久性ノ重要ナル結果ヲ來セシモノニ限レリトナサヽル可カラサルナリ

重要ナル損傷ノ語意

『重要』"*wichtig*"ナル語モ亦齊シク精密ノ經界ヲ有セサルガ故ニ法醫各箇人ノ見解ガ廣大ノ範圍內ニ異動スルハ敢テ怪ムニ足ラズ、或ル一醫ノ重傷ト宣言セシ創傷ハ他ノ一醫ヨリ單ニ輕傷ニ過キスト鑑別セラルヽアルガ如キハ日常逢着スル所ナリ、斯ノ如キ牴牾ハ法文ノ不定ナルニ際シテ免レ難キ所ニシテ實際上亦屢〻現ハルヽニ由テ觀レハ墺國新刑法案ガ『重キ損傷』ナル語ヲ以テ何ヲ理會スヘキカヲ可成的精密ニ確定シタルハ最モ喜フヘキノ件ナリトス

重キ損傷ニ關スルヘルブスト氏ノ見解及之ニ對スル駁議

現行刑法ノ卓絕ナル注釋者ヘルブスト Herbst 氏 (l. c. 318) ハ重キ損傷ナル語ノ下ニ『或ハ生命上重要ナル器官若クハ器官系統ヲ傷ケ且ツ其官能ヲ障害スル所ノ損傷或ハ人體ノ全系ヲ保ツニ必要ナル被傷身體部分ノ亡失或ハ使用不能ヲ起セシ所ノ損傷』ヲ理會セントシタリ、此定義ハ其第二部分ニ於テハ吾人ノ定義ト一致スレトモ吾人ハ其第一部分ニ對シテハ全キ同意ヲ表スル能ハス何トナレハ吾人ノ意見ニ從ヘハ損傷ノ『重キ』"*schwere*"ヲ致スモノハ被傷器官ノ重要ナルト否トニアラスシテ只其損傷若クハ官能障害ノ度ニ於テ存スレハナリ、即チ茲ニハ先ツ輕キ損傷アリヤ或ハ重キ損傷アリヤノ疑問ノミニ答フヘキガ故ニ其損傷ハ如何ナル結果ヲ來スヘキヤヲ問フヲ要セス只事實上如何ナル損傷ナルカヲ知ラントスル者ナリ、之ニ反シテ或ル一定ノ場合ニ於テ刑法第百五十五條 a 項ニ於テ殊ニ明言セル事情ヲ疑問トナストキハ初メテ第一ノ問題即チ如何ナル結果ヲ來スヘキカヲ考察スルノ要アルモノトス、其

重キ損傷ノ鑑定ニ關スル注意

他設トヒ極メテ重要ナル器官ノ官能障害ト雖モ毎回之ニ重要ノ性質ヲ歸スル可カラザルハ明白ナル事實ナリ、例之バ眼中ニ投入セラレタル砂粒ハ固ヨリ重要ナル五神器官ノ官能障害ニ外ナラスト雖モ何人タリトモ之ヲ重キ損傷ト宣言スル者ナカルベシ、之ニ均シク吾人ハ屢〻損傷後ニ發見スル昏倒ヲ以テ毎常直チニ重キ損傷ト看做サス、加之ナラス所謂腦震盪ニ關メモ自ツカラ區別アリテ存セサル可カラス蓋シ斯ノ如ク瞬時的ニ經過スル所ノ官能障害モ亦耳打ノ如キ極メテ輕微ノ侵襲ニ由ル官能障害モ只其最低度ニ於テノミ發見スルヿアレバナリ

終リニ臨ミ仍ホ吾人ノ注意ヲ要スルハ、或ル一ノ損傷ヲ重キ損傷トシテ鑑別センガ爲メニハ當ニ之ニ由テ直接ニ誘起セラレタル現象（負傷ノ際ニ於ケル或ハ損傷ノ經過中ニ來ル所ノ疼痛モ亦之ニ屬ス）ノミナラス續發的ノ事變並ニ亦此際偶〻必要トナレル外科手術ヲモ併テ觀察セサル可カラサルノ件ナリ

凡ソ或ル損傷ニ於テ重篤ノ徴候著明ニ存在セザル場合ニ於テハ其損傷ニ原發的或ハ續發的ニ誘起セラレタル現象ガ墺國刑法第百五十二條ニ於テ『重キ身體傷害』ノ特徴トシテ掲ケタル創傷ノ結果即ヲ二十日以上ノ健康障害或ハ精神變動ト同一ノ度ニ推定セラルヘキヤ否ヤヲ考察スルヲ佳トス、是レ或ル場合ニ於テ法文ノ不明ナルガ爲メ屢〻法醫ヲノ困難ノ位置ニ陷ラシメタル際最モ之ヲ救濟スルニ適スル所ノ比較法ナリ

墺國刑法第百五十五條ノ加重情狀　Die erschwerenden Umstände des §155.

墺國刑法第百五十五條

加重情狀ノ第一

此加重情狀ト看做スヘキ者ハ左ノ如シ

（a項）『傷害自己ハ輕易ナリト雖モ通常致命ノ虞アリトスル器械或ハ手段ニ依リテ犯サレタル時或ハ他ノ方法ニ於テ第百五十二條ニ記載セル重キ結果ノ一ヲ招致スヘキ意ニ出テタルヿヲ證明セラレタル時、而メ其行爲只豫備ニ止マリシ時ト雖モ亦同シ』

此規定ニ由テ觀レバ法律ニ於テ加重情狀ト認ムルハ當ニ概シテ『敵意』ヲ以テ *mit, feindseliger, Absicht* セルノミナラス第百五十二條ニ掲クル結果ヲ來サントスル意志ヲ以テ其損傷ヲ與ヘ、且ツ之ニ對スル證左ノ確取セラレタリト認ムベキ時就中『通常』致命ノ虞アリトスル器具及手段ヲ以テ之ヲ犯シタル場合ニ在リトス

斯ノ如キ場合ニハ二箇ノ疑問ニ答フルノ要アリ、即ヲ第一ニハ當該ノ器械ハ一般ニ致命ノ虞アリシ者ナリシヤ否ヤ、第二ニ其器械ハ亦通常致命ノ虞アリシ手段ニ於テ應用セラレタルヤ否ヤ是ナリ

第一ノ疑問ニ關シテハ概シテ當該ノ器械ヲ以テ生命ノ危險アル（致命ノ虞アル）損傷ヲ與ヘ得ヘキカヲ決定スルニアラスシテ寧ロ其器械ハ通例生命ノ危險ヲ伴フモノナルヤ否ヤヲ決定スルヲ要ス、此語法タルヤ上記ノ規定ノ文字上ヨリ見ルヘキ如ク唯左ノ如ク理會セラレ得ルモノトス、即ヲ其器械ハ之ヲ所持スル人物ガ已ニ該器械ノ性質ニ由リ或ル人體ニ對シテ之ヲ用ユレバ通例若クハ容易ニ其生命ノ危險ヲ致スコヲ知リ得ベク且ツ知ラサルベカラ

損傷ヲ加フルノ際使用セラレタル器械ノ性質ニ關スル疑問

ザルガ如キ特性ヲ有スル者ナルヤ否ヤヲ決定スルニ在リ、故ニ凡ソ殺人ノ目的ヲ以テ特ニ製造セラレタル器械即チ狹キ意義ニ於ケル武器ハ皆之ニ屬ス、其中ニハ種々ノ銃器、刺器及斫割器ノ外、亦所謂殺棍(自衛器)ヲモ算入ス、其佗亦平和ノ目的ニ調製セラレタル器械ト雖モ極メテ能ク危險ノ兇器トシテ利用セラレ得ベク實際亦屢〻利用セラレタルモノ例之バ袖珍小刀、斧鉞等ノ如キモノヲモ包括スベシ

然ルニ全ク佗種ノ器械タリトモ凡ソ普通ノ理會力ヲ有スル者ニハ或ル一定ノ方法ニ於テ應用スレハ生命ノ危險ヲ來スコト全ク明白ナルヘキ性質ヲ有スルトキハ亦之ニ算入スベキヿ疑ヲ容レズ

例之バ吾人ハ或ル一男子ガ長サ一「メートル」半、太サ三「センチメートル」ノ四稜形鐵棒ニ由テ重キ頭部損傷ヲ受ケタル一事件ニ於テ其器械ヲ通常致命ノ虞アル者トシテ宣言スル躊躇セサリシナリ、之ニ反シテ大約二「キログラム」ノ礫石ヲ一ノ說教師ニ向テ投擲シ唯僅微ノ損傷ヲ帶ハシメタル佗ノ一例ニ際シ吾人ハ此礫石ガ通常致命ノ虞アル器械ト看做サレ得サルコトヲ宣言シタリ

小刀及佗ノ尖銳ナル器械モ亦如何ナル狀態ニ論ナク通常致命ノ虞アル器械ト宣言セラレ得ヘキ性質ヲ具有スル者ニアラス、例之バ一ノ徒役場ニ引渡サレタル酔客ガ一尼僧ニ對シテ袖靈小刀ヲ以テ頸創ヲ與ヘ前額ニ輕微ノ聾裂ヲ來シタル例ニ於テ、其袖靈小刀ハ極メテ陳舊不全ナル者ニ屬シ刀刃并ニ把柄ハ皆ニ五「センチメートル」ノ長サニ過キス、刀刃ハ把柄中ニ甚シク遊動シ、加之ナラス極メテ鈍ノ、殊ニ當時ノ尖端ハ久シキ應用ノ爲メ鈍却シテ圓形ヲ呈スル者ナリキ、吾人ハ此性質ニ注目シテ該小刀ハ其應用上通常致命ノ虞アル器械ニアラサルヿヲ明言シタリ、其他亦或ル人物ニ腹皮上輕キ刺傷ヲ受ケタル陳舊靴工鋲ニ關シ同一ノ疑問ヲ提出セラレタル際吾人ハ右ト同樣ノ鑑定ヲ與ヘタリ

兇器ノ性質ニ關スル鑑定ノ例

銃器ニ關シテモ亦其致命ノ危險ニ關スル疑問ヲ生シ得ヘキハ左ノ一例ニ由テ之ヲ證明スヘシ、即チ三十六歲ノ一男子唯三橫指ノ幅ヲ有スル六條ノ藥道ヨリ成レル極メテ細小ノ拳銃ヨリ二回其情婦、爾後一回巡査ニ發射シタリシニ、其丸ハ中レルモ其人體ハ負傷セラレズ、而シテ其佗ノ彈藥ハ自己ノ頭顱ニ向テ發射シタリ、之ヨリ後傷人ハ窓外ヨリ同人ガ尙ホ一回火藥ヲ裝塡スルヲ認メ且ツ數回ノ發射ヲ聽取セリ、戶扉ヲ破開シテ之ヲ見タルニ該男子ハ人事不省ニ陷リ居タレ共速ニ醒覺セラレ爾後亦其狀態ニ止マリキ、檢視病院ニ於テ同人ノ右頭側ニ五箇ノ銃創口アルヲ發見シ、亦第六ノ銃創口ヲ左顳顬部ニ第七ノ正中線ニ於テ後頭部檢出セリ、而メ全ク淺表ニ存セシ四箇ノ彈丸ヲ拔取シタルニ佗ノ創傷ハ一ノ彈丸ヲ含有セサリキ、腦障害ハ發見スメ、唯負傷ヨリ八日ノ後其男子ハ黃色ヲ見ルト訴ヘタルモ此現象ハ已ニ翌日ニ於テ消失セリ、而メ公判ノ際武器鑑定者并ニ法醫ニ對シ當該ノ武器ハ概シテ致命ノ虞アル者ナルヤ否ヤノ疑問ヲ提出セラレタルニ武器鑑定者ハ三步乃至五步ノ距離ニ於テハ已ニ確實ナル命中性ヲ有セス命中力モ亦微弱ニシテ其彈丸柔軟ナル木板中ニモ透入スルニ足ラス故ニ亦此距離若クハ其以上ノ距離ニ於ケル人體ハ此武器ヲ以テ著シク負傷セラレ能ハサルヿ

ヲ宣言セリ

法醫モ亦之ニ齊シク明言シ且ツ其七發ハ最近位ヨリ頭部ニ向テ發射セラレタレ𪜈無効ナリシヿ明白ニシテ斯ノ如キ拳銃ヨリスル發射ハ唯特訓ナル事情ノ下例之バ其彈丸カ正ニ眼ニ中レル時ニ於テ有効ナレ𪜈然モ尚ホ通常生命ノ危險ヲ來シ得サルヿヲ特擧セリ是レ適切ノ陳述ナリシナリ然レ𪜈犯者ハ謀殺未遂ノ罪ヲ以テ處刑セラレタリ

兇器ノ應用法ニ關スル疑問

致命ノ危險アリトシテ認識セラレタル器械ガ『通常致命ノ處アル方法ニ於テ應用セラレシカ』ノ第二疑問ニ關シテハ、其解答ハ一面ニハ其器械ヲ使用セル力ノ觀察ニ基ツクヘキモノトス、吾人ハ殊ニ生命ニ關シテ重要ナリト一般首肯セラヽト所ノ器官即ヲ頭部、頸部、胸部、腹部等ニ對シテ直接ニ割截、鑽刺、打擊ヲ與ヘタルトキハ此疑問ヲ可答スヘシ、而シテ斯ノ如キ關係ヲ確定スルニハ當ニ其損傷ノ位置ノミナラズ亦創管ノ徑路及其佗割截、鑽刺等ノ行ハレタル方向ヲ決定スルニ足ルヘキ創傷ノ徴候ニ注目セサル可カラス、而シテ其際吾人ハ該器械ガ本來ノ方向ヨリ變移セラレ得ヘキコト、殊ニ方向ノ變移ニ由テ生命ニ危險ナル損傷ノ妨止セラルヽコトアルト、之ニ反シテ初メ生命上ニ重要ナル器官ニ向ケラレザリシ損傷ト雖モ變移ノ爲メ却テ此方向ヲ得ルコトアルヘキトヲ看過ス可カラス、第一ノ作用ハ迥ニ廣實際ニ發見セラレ隨テ特ニ注目ヲ要スル者ナリ、而シテ迎擊、退避幷ニ衣服ニ屬スル或ハ偶然ニ其局處ニ存セシ堅硬ノ物體(扣鈕、帶鈕、袖嚢中ニ携帶セル物品等)或ハ又骨(肋骨、頭蓋骨)ニ中リテ器械ノ滑走スルニ由テモ亦此變移ヲ來スコアリ

兇器ヲ使用セシ力ノ強弱ニ關スル鑑定

其器械ガ或ル一定ノ力ヲ以テ當該身體部分ニ使用セラレシハ損傷自己ノ性質ヨリ察知スルヲ得ヘシ、例之バ其器械ガ骨ニ侵入シタル時ノ如シ、其佗亦器械ガ身體表面ニ達セシ前ニ偶ゝ穿破スルヲ要セシ所ノ物品若クハ其深キ透入ヲ妨ケタル所ノ物品ヲ考察スルニ由テモ之ヲ知リ得ヘシ、而シテ斯ノ如キ物品ニ於ケル偶然ノ損害ヨリシテ往々巨大ノ力ヲ以テ衝突打擊等ヲ與ヘタルヿ幷ニ此物品ニ中リシガ爲メ衝突或ハ打擊ヲノ深キ損傷ヲ起シ能ハザラシメタルヿヲ極メテ確實ニ決定シ得ルコアリ

吾人ノ知レル一例ニ於テハ心臟部分ニ向テ與ヘラレタル小刀ノ刺創被害者ガ偶然其上衣左側ノ袖嚢中ニ携帶セシ文書ノ一束ニ中リシニ其文書甚タ厚カリシニ拘ハラス其下ノ衣服ヲモ併セテ穿通シ更ニ一「センチメートル」皮中ニ侵入セリ此事情ノ下ニ於テハ器械並ニ其應用ノ方法ハ致命ノ處アルモノナリシヿ亦疑フ可カラス、之ニ類スル佗ノ一例ニ於テハ鋼鐵ノ時計鏈鎖更ニ他ノ一例ニ於テ厚キ革製ノ銃帶ハ衝突ヲ防止セリ、亦帽子ノ類ガ頭部ニ向テ來襲セル割創或ハ刺創ノ重キ結果ヲ防止シタル例ハ極メテ多數ナリ

尚ホ茲ニ記載スヘキハ墺國刑法第百五十五條α項ノ法文ニ據テ見ルヘキ如ク、前記ノ疑問ハ重傷ト輕傷トニ論ナク、加之ナラス一ノ損傷ヲ來サヽリシ時ト雖モ法醫ノ鑑定ニ附セラルヘキヿ是ナリ

ラインスベルク Reinsberg 氏 (Zeitschr. d. königl. Aerzte. 1879. pag. 19) ハ此種類ノ有益ナル一例ヲ報

告セリ、即チ二名ノ農夫劇シキ爭鬪ヲナシタル際、其一名ハ敵手ヲ侵撃シ其所持セル重キ鉈ヲ以テ其頭部ニ劇シキ斫割ヲ加ヘントセリ、其時正ニ梨樹ニ沿フテ立チシ所ノ被害者ハ此襲撃ヲ避ケタルニ鉈ハ單ニ頭頂ヲ擦過シ之ガ爲メ梨樹皮ノ一大片加之ナラス其白木質ノ大部分モ剥取セシ如キ強大ノ力ヲ以テ樹中ニ斫入シタリ、茲ニ法醫ハ適切ニモ其損傷ハ輕微ナレトモ一般ニ致命ノ虞アリシ器械及手段ヲ以テ加ヘラレタルコトヲ宣言セリ、終リニ直接ノ損傷ノ外致命ノ虞アルヘキ或ル一定ノ行爲ヲモ之ニ算入スヘシ例之バ高處ヨリノ墜落深キ水中ヘノ濟落ノ如シ但シ恐クハ殺死ヲ目的トセス唯損害ヲ與ヘントシテ當該ノ行爲ヲ犯シタル場合ニ限ル

一ノ人體ニ對シテ小刀ヲ投擲スルハ一般ニ生活ノ危險ヲ伴フ所ノ行爲ナリヤ否ヤノ疑問ハ或ル一事件ノ機會ニ就テ提出セラレタリ、即チ一男子割木小刀ヲ以テ肝臟中ニ致命的ノ刺傷ヲ加ヘラレタル、ニ犯者ハ直接ニ之ヲ刺入セス唯怒リニ乘シテ其小刀ヲ大約一「メートル」ノ距離ニ在リシ被害者ニ投擲シタリト主張セリ、茲ニ吾人ハ斯ノ如キ場合ニ於テ小刀ノ性質ノ外殊ニ小刀ノ投擲セラレタル方法若クハ投擲セントスル際其小刀ヲ把持シタル狀態ニ關係アルコトヲ明言シタリ即チ其小刀恰モ命中ヲ期シツヽ被害者ニ其尖端ヲ向ケテ投擲セラレタル時ハ其臨用タルヤ斷然通常致命ノ虞アル者ト看做サヽル可カラス、然ルニ投擲ノ際其小刀ヲ横ニ把持シ或ハ刀柄ヲ前方ニ向ケテ投擲シタルトキハ唯破格ノ場合ニ於テノミ重キ傷害ヲ來スベキモノナリ

兇器使用法鑑定ノ例

墺國刑法第百五十五條ノ加重情狀ノ第二及第三

（b項）『損傷ノ爲メ三十日以上ニ渉ル健康障害或ハ操業不能ヲ招致セシ時』斯ノ如キ狀態ヲ判定スルニハ第百五十二條ニ若クハ二十日間ノ健康障害又ハ操業不能ニ就テ論スルノ際辯明シタルト同一ノ原則ニ注目セサル可カラス

（c項）『被害者ノ特ニ痛苦ヲ感スヘキ所爲アリタル時』　法律ハ玆ニ或ル被害者ガ損傷ノ經過中始メテ後日ニ至テ受クヘキ所ノ痛苦、例之バ炎症或ハ偶〻必要ヲ生シタル疼痛性ノ手術ニ因スル痛苦ヲ指スニアラスシテ其所爲ト隨テ損傷ヲ加フルト同時ニ招致セラレタル痛苦ヲ意味スルモノトス、其他亦法律ハ『特別ノ痛苦』ト明言セルガ故ニ如何ナル損傷ニ論ナク必ス併起スヘキ苦痛ヲ云フニアラスシテ反復且ツ持續スル虐待ニ因スル故意ノ苦痛增劇及或ル損傷ニ伴フ所ノ苦痛ノ故意ナル延長ヲ指スモノトス

前者ハ殊ニ所謂リンチ」ニ於テ生スル者ニシテ間〻小兒ノ虐待ニ於テモ之ヲ見ル吾人ハ本類ノ一事件ヲ鑑定シタルコトアリキ、此事件ハ或ル麵麭製造者ガ其徒弟ノ一人ナル極メテ强力ノ男子ト爭鬪セル際齒ヲ以テ拇指ヲ緊咬セラレ其叫喚シ且ツ哀求スルニ拘ハラス、亦多數ノ佗人ガ被害者ヲ加害者ヨリ引放タント試ミシニ關セズ、尙ホ數分時間斯ノ如ク敵手ヲ抑止セシ場合ニ於ケルモノニシテ其際拇指ハ爾後壞疽ニ由テ之ヲ失ヒタル如ク甚タシク挫碎セラレタリ、ブルーメンストック Blumenstok 氏(Leiire von den Verletzungen in Maschka's Handb. I. 121) モ亦左ノ事件ニ於テ同一ノ宣言ヲナセリ即チ一男子或ル夫婦ノ爲メニ床上ニ投擲セラレ、夫ハ其胸上ニ跨キテ頸部ヲ絞扼シ婦ハ被害者ノ陰部ヲ露出シ兩手ヲ以テ睾丸ヲ絞扼シ、被害者ニ云フヘ

カラサル痛苦ヲ與ヘツヽ數分間此行爲ヲ持續セリ、六日ヲ經タル後檢查セシニ尙ホ頸部ニ於ケル絞扼ノ痕跡ノ外左側睾丸炎及陰囊皮膚ノ黃變ヲ發見シタリト、慘酷ナル拘禁故意ニ與ヘタル飢餓劇シキ寒熱ニ於ケル曝露及其他斯ノ如キ虐待モ亦特ニ痛苦ヲ伴フ所ノ行爲ト看做シ得ヘク而シテ時宜ニ因リテハ精神上ノ困苦モ亦此名稱中ニ包括シ得ヘキコト疑ヒナシ

墺國刑法第百五十五條加重情狀ノ第四

（e項）『重キ損傷ガ生命ノ危險ヲ來セシ（危篤ニ陷リシ）時』、此規定ハ法醫ナシテ少ナカラサル困難ヲ感セシムル者ナリ、ヘルブスト Herbst 氏（l. c. 322）ハ左ノ如ク之ヲ敷演セリ、即チ曰ク『或ル重キ損傷ガ生命ニ危險ヲ來スハ、之ニ由テ損害セラレ且ツ其官能ヲ障碍セラレタル器官若クハ器官系統ガ生命ニ對シ其官能ノ重要ナルノミナラズ必須闕ク可カラザルモノナル場合ニ在リ』ト、但シ此定義ハ敢テ解釋ノ困難ヲ除クニ適セズ何トナレバ一面ニハ生命ニ對シ重要ナラサル器官ノ損傷ト雖モ生命ノ危險ヲ來シ遂ニハ生命ヲ奪フニモ至ルヘク而シテ人ノ知レル如ク極メテ僅微ノ損傷タリトモ往々斯ノ如キ經過ヲ取リ（例之ハ手指ノ挫創ガ破傷風ヲ併起スルニ由ルガ如シ）、佗ノ一面ニハ生命上必須闕ク可カラサル器官ノ損傷タリトモ敢テ生命ニ危險ナル症狀加之ナラス重キ症狀ヲ起スニ限ラサルモノナレバナリ

吾人ハ玆ニ法律ノ嚴正ナル言辭ニ注目シ唯其結果ニ由リ生命ノ危險ヲ來セシ所ノ損傷即チ被害者ノ生命ヲ危慮スヘキ症候ヲ誘起セシ所ノ損傷ノミヲ生命ニ危險ナル者ト宣言スヘキ意見ナリ、若シ斯ノ如キ症候ノ發見セサリシ時ハ設ヒ生活上必須闕ク可カラサル器官ニ損傷ヲ受ケタル時ト雖モ之ヲ生命ニ危險ナリト宣言スヘキ一ノ理由ヲ存セス蓋シ生命ニ危險ナル症候ナキ生命ニ危險ナル損傷ハ自家撞着タルヲ免レサレバナリ

損傷ガ生命ニ危峽ヲ來セシ場合ノ定義

此法律ノ規定ハ斯ノ如キ解釋ヲ爲スノ時ニ於テモ亦法醫ヲシテ困難ヲ感セシムルノ場合少ナカラズトス、何トナレバ『生命ニ危險ナル症候ガ生命ニ危險ナリト看做サルヘキカハ精密ニ確定セラレ得サレバナリ、茲ニ於テモ亦鑑定者個々ノ解釋ヲ與フヘキ廣大ノ餘地アリテ存シ且ツ從來ノ經驗上凡ソ醫師ガ豫後不定ノ場合ニ當ル每ト二種々不快ノ意見齟齬ヲ來セシコアルモノトス

法醫ハ概シテ臨床上ノ經驗ヲ以テ其指導トナサヽル可カラス、而ノ此經驗ニ從ヒ死亡的轉歸ヲ見ルノ虞アル症候ヲ認メタルトキハ玆ニ始メテ其損傷ガ生命ニ危險ナルコヲ宣言スヘシ、但シ此關係ニ於ケル豫想ヲ一々詳說スルハ實際爲シ能ハサル所ニシテ且ツ法醫ハ特ニ臨床的醫學ノ智識ヲ具フル者ト豫定シ得ベキガ故ニ亦之ヲ說クノ必要ヲモ存セサルナリ

第百五十六條ノ加重情狀　Erschwerende Umstände des §. 156.

墺國刑法第百五十六條ニ於テハ最重ノ刑科即チ五年以上十年以下ノ重禁錮ヲ宣告スルノ原因タルベキ永存的ノ損傷結果ヲ列擧セリ

即チ斯ノ如キ損傷ノ結果トシテ揭ケラレタルハ左ノ諸項ナリ

（a項）言●話●、視●覺●或●ハ●聽●覺●ノ●喪●失●若●ク●ハ●甚●シ●キ●不●具●若●ク●ハ●醜●容●ノ●誘●致●ニ●因●リ●永●久●的●ニ●滅●衰●シ●生●殖●機●能●ノ●喪●失●シ●タ●ル●ト●キ●ハ●一●ノ●眼●ノ●ミ●ノ●喪●失●ニ●在●リ●テ●ハ●一●年●ノ●禁●錮●ニ●處●シ●二●ノ●眼●ノ●喪●失●ニ●在●リ●テ●ハ●二●年●ノ●禁●錮●ニ●處●ス●

言話ノ喪失ハ一モ詳細ノ解釋ヲ要セス其人體若シ困難ニモ多少理會セラレ得ヘキ二ノ音聲ヲ發シ得ヘキトキハ言話ノ存在ヲ疑フヘキニアラス、然レ𪜈言話ノ滅衰ナル語ハ其範圍極メテ汎シトス何トナレハ言話ノ滅衰ヲ以テ著明ナル談話ノ困難ト同意義ナリト看做スキハ、例之ハ前齒ノ亡失ニ由テ生起セラレタル症ト雖モ亦之ニ算入シ得ヘキヲ以テナリ、然レ𪜈法律ハ斯ノ如キ輕微ナル且ツ除却セラレ得ヘキ言話障害ヲ意味セサルコト明白ニシテ已ニ言話ノ喪失其他第百五十六條ニ揭クル危重要ナル結果ト共ニ之ヲ併列セシメルニ由テモ知ルヘキ如ク唯重要ナル言話障害ノミヲ目的トスルコトヲ論ヲ俟タスト𪜈此言話滅衰ハ第一ニ音聲形成器官ノ直接的損傷即チ舌、口蓋、一般ニ口腔、就中喉頭ノ廣大ナル破壞ニ由テ誘起セラレ、其他言話形成ヲ分擔スル神經殊ニ舌下神經（言話神經）及反回神經ノ損傷ニ由テ起ルモノナリ

＊ベーアルンス P. Bruns 氏（Die Laryngotomie. Berlin, 1878）ハ氣管切開術ノ最モ頻繁ナル且ツ最モ不快ナル（五十「デロセンドレノ瘻合ニ發見スル結果ハ音聲ノ障害ヲ全キ喪失ニシテ此不結果ハ已ニ甲狀軟骨ノ破開ノミニ由テモ續起スルモノトセリ、斯ノ如キ言話障害ハ倘ホ一層容易ニ喉頭ノ損傷後ニ殘留スルモノニシテ劇烈ニ由テモ亦之ヲ見ルニトアリ、例之バシニッツレル Schnitzler 氏（Wr. med. Presse. 1874, Nr. 42u. 44）ハ縊死ヲ企テ後チ其喜ヒ失フレタル男子ニ於テ披裂軟骨ノ折衝ト右聲帶ノ麻痺ヲ發見シタルコトヲ記載シタリ

＊＊巳ニガーレン Galen 氏ハ此反回神經ガ音聲ノ形成上重要ナル神經ナルコトヲ知レリ蓋シ同氏ハ豚ニ試キ爾御ニ於テ此神經ヲ切斷シタル際其豚ノ亦叫鳴シ能ハサリシコトヲ發見セリ（アリュッケ Brücke 氏著生理學講義 Vorlesungen. II. 93）

吾人ハ自ラ此種ニ屬スル一事件ヲ觀察セリ、即チ從前有力ナル低音ヲ具有セシ所ノ一歲夫有胸鎖乳頭筋ノ內側ニ當ル頸部ニ一ノ小刀刺傷ヲ受ケシニ其創傷ハ環狀軟骨ノ右半下大約三「センチメートル」ノ位置ニ於テ氣管ヲ切開セラレ、被害者ハ其手術中言話スルヲ得ザリシニ由リ是レ氣管ノ切開ト關聯スル者ト看做サレタリ、然ルニ氣管創ノ治癒後ニ至ルモ倘ホ其言話ハ困難ニシテ且ツ嘶啞シ、爾後其狀態稍〻恢復セシトハ雖モ九ケ月ノ後其事件ヲ裁判ニ附セシトキ倘ホ著シキ音聲ノ嘶啞ヲ發見シ、爾後喉頭鏡檢查ヲ行ヒタル際右聲帶ノ麻痺アルヲ認メタリ、吾人ハ之ヲ反回神經ノ損傷ニ歸シ且ツ此症狀ノ輕快スルヲアルヘキヲ首肯セリト雖モ其音聲ノ完全ナル恢復ハ能ハサルヲ𪜈ト宣言シ從テ裁ニハ言話ノ永久的減殺アルコトヲ認定セリ

腦損傷後ノ失語症及其例

其他注目スヘキハ腦損傷殊ニ左前頭葉ノ損傷後ニ來ル所ノ失語症ナリ（ルゲアロリ順序認氏ニ橋由テ延髓ニ於テ生起セルケ）（直接ニ又ハ反撃ニ因スル損傷的出血ガ亦然リ（デュレー Duret 氏）ナラン Bonafont 氏（*Schmidt's Jahrb.* 1847. LVI. 10）ハ斯ノ如キ事例ノ多數ヲ蒐集シ、又ヴェルンヘール Wernheer 氏（*Virchow's Archiv.* 1872, *pag.* 289）ハ他ノ一例ヲ記載シ其他クラルス Clarus（„*Ueber die Aphasie bei Kindern*“. *Jahrb. f. Kinderhlk.* 1874. VII, 369）ハ頭部損傷後ニ來ル小兒失語症ノ五例ヲ揭擧セリ、其一ハ完全ニ治癒シ他ノ一ハ不完全ノ治癒ヲ得タリ、亦ブルーメンストック Blumenstok

言話ノ永久的喪失及減弱ノ解釋

(*Friedreich,s Blätter*, 1878, *pag.* 363 *u. Maschka's Handb. l. c. pag.* 125)スールーウヰアッ ク Soulouwiac(*Wr. med. Bl.* 1884. *pag.* 306)及フォン、リムベック v. Limbeck(*Aphasie nach Schuss. Prag. med. Wochenschr.* 1890 *Nr.* 45)ノ三氏ハ失語症ノ法醫的判定ニ關スル經驗ト共ニ其佗ノ實驗ヲ報告シタリ

終リニ記載スヘキハ俄然タル驚愕等ニ由テモ亦言話ノ亡失及減弱ヲ誘起シ得ヘキコト是ナリ

凡ソ斯ノ如キ塲合ニ於テハ言話障碍ノ階級ノ外言話ノ喪失或ハ減弱ガ永久的ノ者ト看做シ得ヘキヤ否ヤヲ考察スルヲ要ス、蓋シ此塲合ニ於テノミ言話ノ喪失或ハ減弱ヲ第百五十六條α項ノ下ニ算入スヘキヲ以テナリ、其佗前記ノ言話障碍ハ通常唯從前ヨリ神經病ニ罹リシ人體殊ニ比私的里性ノ婦人ニ於テ來ルヲ常トシ且ツ亦詐病セラレ得ル者ナルガ故ニ之ヲ『永久的』ト指稱シ得ヘキハ稀ナリ シュランゲンハウゼン Schlangenhausen 氏(„Ueber transitorische Aphasie". Psych. Centralbl, 1876, pag. 26)及シドロー Sidlo 氏(Ueber simulirte Stimmlosigkeit und ihre Bedeutung für den Militär- und Gerichtsarzt. Wr. med. Presse. 1877. pag 1611)ノ說ヲ見ヨ 然ルニ佗ノ原因ヨリ發生スル者ニ於テモ亦其言話障碍ガ永久性ノ者ナリトノ宣言ハ之ヲ爲スヿ速斷ニ過ク可カラス、何トナレバ言話障碍ノ原因タルヘキ多般ナル病機ノ本性上ヨリ觀レバ其全體ノ恢復ハ久時ヲ要スルヿ勿論ナレバナリ

視覺ノ喪失或ハ永久的減弱　此規定ノ文意ハ左ノ關係ニ於テ意見ノ齟齬ヲ來スニ至レリ、即チ或ル人ハ曰ク是レ兩眼ニ於ケル視能ノ喪失或ハ永久的減弱ニ關スル者ナリト、然ルニ

視覺ノ喪失及永久的減弱

佗ノ人ハ以爲ラク單ニ一眼ニ於ケル視能ノ廢滅或ハ障碍ト雖モ已ニ本項ノ下ニ包括セラルヘキ者ナリト、吾人ハ唯一眼ニ於ケル視能ノ喪失或ハ重キ障碍ヲ『視覺ノ減弱』ト看做スガ故ニ後者ノ意見ヲ贊成スル者トス、何トナレバ單純ナル醫學上ノ立脚點ヨリ論スレバ一眼ニ於ケル視能ノ全滅シ若クハ著シク障碍セラレタルトキハ『視覺』ハ一般ニ比較的不良トナルヿ即チ『減弱セル』ヲ免カレズ、其佗亦同一項中ニ使用セル一眼ノ喪失ナル語ハ『或ハ佗ノ不具若クハ醜容ノ形成』ナル後段ノ文ヨリ見ルベキ如ク全眼球ノ喪失及之ニ因テ起レル醜貌ヲ指スモノナラサル可カラサレバナリ、況ンヤ法律上ノ方面ヨリモ亦單ニ一眼ニ於ケル視能ノ亡失或ハ障碍タリトモ已ニ刑法ノ意義ニ於ケル『視覺ノ減弱』ト看做サヽル可カラスト論スルヿ屢〻之アルニ於テオヤ、*此考說タルヤ獨逸刑法ニ於テモ墺國改正刑法案ニ於テモ兩眼或ハ一眼ノ視能ノ喪失セラレシニ論ナク『重キ損傷』ノ新意義ヲ採用セルニ由リ亦其追加的ノ證明ヲ得タルモノナリ

*ブルーメンストック Blumenstok 氏ノ說(*Gerichtshalle*, 1873. *Nr.* 35 *n.* 39)ヲ見ルベシ、但シ氏ハ此論文ニ於テハ法律家ノ方面ヨリ提起セル說ヲ排駁セント試ミタリ

『減衰』„*Schwächung*" ナル語ノ意義ハ極メテ伸縮セラレ易キ者ナルガ故ニ、視覺ノ減弱ヲ以テ其完全ナル亡失及第百五十六條ニ揭クル佗ノ重キ結果ト同位置ニ列セシムルニ由テモ知ルヘキ如ク、玆ニハ唯視能障碍ノ高度ナル者ノミヲ算入スヘキヿヲ忘ル可カラス

聽覺ノ喪失或ハ永久的減衰　唯一側ニ於ケル聽覺ノ喪失或ハ高度ノ障碍タリトモ既ニ全聽

覺ノ減衰ヲ形成スルヿ亦疑ヲ容レズ、然リト雖モ斯ノ如キ損失ニ對シテハ一眼ニ於ケル視能ノ亡失ニ同シキ重大ノ價値ヲ與フヘカラス

聽覺ノ亡失及永久的減弱

立法者ハ聽覺全體ヲ目的トシ而メ墺國新刑法案ニ於テモ獨逸刑法ニ於テモ亦單ニ聽覺一般ニ就テ云ヒ彼ノ視能ニ關シテナセシガ如ク一耳或ハ兩耳ニ於ケル聽覺ノ區別ヲナサヽルモノナリ

玆ニモ亦著大ナル聽覺障碍ノミヲ當該法律ノ意義ニ於ケル聽覺ノ減弱トシテ鑑定スヘク且ツ視覺減弱ニ關シテ推奬セシ如ク疑ハシキ場合ニ於テハ單ニ當該五官器官能障碍ノ本性質及程度ノ辯明ヲナスノミニ止ムルヲ忘ル可カラス、而ノ此辯明ニ基ツキテ當該事件ヲ第百五十六條ノ a 項ニ入ルヘキヤ或ハ否ラサルヤハ裁判官若クハ陪審官ニ一任スヘキモノナリ

生殖機能ノ亡失

生殖機能ノ喪失　法律上ニハ唯生殖機能ノ喪失トノミ掲ケ、言話視覺及聽覺ニ於ケル如ク此機能ノ單純ナル永久的障碍ヲ掲クルヿナシ、其佗交接能力ノ亡失ト授胎若クハ受胎能力ノ亡失トノ間ニモ一ノ區別ヲ爲サヽルヲナリ、然レ𪜈以上兩能力ノ亡失ハ何レニ論ナク生殖機能力ノ喪失トシテ鑑定セラルヘキヿ疑ヲ容レズ、經驗上ヨリ見レバ斯ノ如キ損傷ノ結果ハ稀ニ發見スルニ過ギサルモノニノ尚ホ男子ニ於テハ間〻之アリ、蓋シ圍毆ノ際或ハ粗暴ナル戲謔ノ際其生殖器ガ侵襲ノ物體トナルヿハ屢〻見ル所トス、然レ𪜈例之バ陰莖ノ亡失、兩睾丸ノ脫失若クハ挫傷ノ如ク生殖機能ノ喪失ヲ現ニ繼起シ或ハ繼起シ得ヘキ如キ重キ損傷ヲ起スハ唯破格ノ場合ニ於ケルノミ、或ル少年男子ガ其放棄セル一情婦ノ爲メニ陰莖ヲ其根基ヨリ全ク切除セラレタル一事實近時維也納ニ於テ現ハレタルニ其損傷ハ固ヨリ生殖機能ノ喪失ヲ繼起シタル者トシテ宣言セラレタリ

女子ニ於テハ損傷ノ結果トシテ生殖機能ノ喪失ヲ疑問トナスヿ尚ホ一層稀ナリ、而ノ膣ノ破裂或ハ佗ノ損傷後ニ來ル其強度ナル不治的癒着ハ生殖機能ノ喪失ヲ來スニ足ルモノトスベシ

全上ノ事例

カスパル Casper リーマン Liman 兩氏(L. c. I. 362)ノ報告セル唯一ノ事例ニ於テ一少女三名ノ下僕ニ由テ誤ハレ生殖器中ニ手指ヲ穿入シ幷ニ砂石ヲ嵌入スルニ由テ會陰及膣口ヲ破裂セシメ久シキ疾患ト成形的手術施行ノ後會陰ニ巨大ナル瘢痕ヲ遺シテ治癒シタレトモ膣口及膣自已ノ開通ニ妨ケアルコトナカリキ、カスパル Casper 氏ハ陪審裁判所ノ公判ニ於テ該被害者ハ交接幷ニ受胎ノ能力ヲ有スレトモ尚ホ其損傷ニ由テ廣キ意義ニ於ケル生殖能力ノ喪失ラレタル者ナルコトヲ宣言シタリ何トナレバ女子生殖能力ノ一ノ主要ナル要素ヲ形成スル所ノ分娩能力ハ幷ニ妨害セラレ若シ分娩ヲナスノ際瘢痕ヲ結ベル會陰ハ再ヒ破裂シ本人ハ畢生ノ間更ニ憐ムヘキ不具ニ陷ルヿナキヲ保ス可カラサレバナリ檢事及陪審官ハ生殖能力ノ意義ニ關スル辯論ヲ是認シ而シテ加害者ハ十二年ノ懲役ニ處セラレタリ

一眼一臂若クハ一手ノ喪失或ハ其佗顯著ナル不具若クハ醜容ノ形成　廣キ意義ニ於ケル不具 *Verstümmelung* ヲ以テハ全肢或ハ肢節ノ亡失ヲ指ス者トス、然レ𪜈墺國刑法第百五

一眼一臂若クハ一手ノ亡失

十三條α項ノ意義ニ於テハ此語ヲ狹ク認取セサル可カラス、即ヲ實例トシテ揭ケタル一臂或ハ一手ノ喪失ヨリ明知スヘキ如ク唯身體中重要ナル肢節殊ニ全肢若クハ其大部分ノ亡失ノミヲ之ニ算入スベク例之バ手指或ハ加之ナラズ各箇指節ノ亡失ノ如キハ之ニ屬セサルモノトス、法律ハ喪失ナル語ヲ以テ唯當該肢節ノ身體ヨリスル完全ノ斷離或ハ又其使用不能トナリシコヲ指スヤ否ヤハ尙ホ疑問ニ屬ス、但シ何人モ了解スヘキ如キ一臂一脚等ノ使用不能ハ被害者ニ對シ其完全ナル喪失ト殆ト同一ノ價値ヲ有スル者ナルガ故ニ醫師ノ方面ヨリモ亦以上兩態ノ損傷結果ヲ同一視シ若クハ其一致ヲ裁判官或ハ陪審官ニ辯明スルヲ正當ナリトスルニ似タリ

醜容形成ノ定義

ヘルブスト Herbst 氏 (*l. c.*) ハ醜容形成 *Verunstaltung* ヲ人體姿容ノ不快ナル變化ト定義シ、ガイエル Geyer 氏 („*Zur Revision der Bestimmungen des Reichs-Strafgesetzbuches über Körperverletzungen*" *Gerichtssaal.* 1874. *Heft 4*) ハ人目ニ觸レ易キ身體部分ノ著大ナル形狀變化トナシリーマン Liman 氏 (*l. c.* I, 311) ハ或ル身體部分ノ治癒ス可カラサル形狀變化ニシテ嫌惡スヘキ不快ノ感銘ヲ與フル者ト定義セリ

故ニ醜容形成ナル語即チ是ト同意義ナル *Entstellung* ナル語ハ損傷ノ結果トシテ貽留スル美容ノ缺損即チ純粹ニ『審美學的ノ要因』ニ外ナラス其判定ハ本來復タ純然タル醫學的ノ性質ヲ有スル者ニアラスシテ俗人殊ニ陪審官ニ一任シ得ヘキ者ナリ、是レ已ニ其人體ガ損傷ノ結果トシテ其身體ノ外徵ニ受クル所ノ一般ノ感銘ノミニ歸スヘキ者ナルガ故ニ益ニ

法律上加重情狀トノ論スヘキ醜容及不具ノ形成

之ヲ適當トスル所以ナリ

醜容幷ニ不具ノ形成ハ第百五十六條α項ニ屬スル者ト看做スヘキハ最モ人目ニ觸ルヽ者ナラサル可カラス、而シテ何レヨリ以上ヲ醜容トシ何レヨリ以下ヲ醜容ニアラサルヤヲ確定スルヿ固ヨリ能ハスト雖モ法律解釋者ノ辯明（ヘルブスト Herbst 氏 *l. c.* 322）ニ從ヒ當該ノ人體ヲ被覆セル狀態即チ裸體ナラサルニ於テ判定シ且ツ其損傷ニ由テ誘起セラレタル身體ノ變化ハ被覆セル場合ニ於テモ直チニ當該人體上ニ認視セラレ得ル者ナルヤ否ヤヲ考察スルヲ佳トス、何レノ場合ニ論ナク容易ク隱匿セラレ或ハ矯正セラレ得ヘキ所ノ缺損ハ玆ニ算入スルヲ得サルモノナリ

全上識定ノ例

人目ニ觸ルヽ醜容形成ノ一例トシテ法律ノ方面ヨリ擧クヘキハ一眼ノ喪失ナリ、而シテ吾人ハ同一ノ意義ニ於テ鼻ノ喪失顏面ニ於ケル廣大ナル瘢痕、殊ニ火傷及腐蝕ノ後ニ發現スル者幷ニ又甚タシキ火傷後ニ見ル如キ軀幹ノ高度ナル移動其他下肢ノ損傷後ニ貽留スル著明ノ跛行等モ亦人目ニ觸ルヽ醜容形成ト宣言スルコトヲ得

醜容形成一般殊ニ人目ニ觸ルヽ醜容トシテ損傷ノ結果ヲ鑑定スルノ際ニハ其人體自己ヲモ亦參考ニ供セサル可カラサルハ決ノ疑ヲ容レス、即チ男子ニ於テハ敢テ著ルシキ醜容ナリト宣言スルヲ要セサル顏面ノ瘢痕ト雖モ年少ノ女子ニ於テハ本圖ノ醜容ヲ形成シ得ルコト固ヨリ明カナリ何トナレバ少女ニ於テハ瘢痕ニ因スル顏面ノ變容ハ當ニ人目ニ觸ルヽノミナラス、民法ニ於テ此狀態ヲ重要視スル如ク男子ニ比スレバ重大ナル意義ヲ有スル者ナレバナ

リ、即チ民法第一千三百二十六條ニ於テハ當該ノ人體若シ虐待ニ由テ變容セラルヽノ際殊ニ其人體女性ナルトキハ之ガ爲メ將來ノ生活上妨害ヲ受クルコトアリトシテ特別ノ注意ヲ與ヘサル可カラサル者トセリ少女及年少ノ婦人ニ於ケル臍及胸部ノ變容ハ第百五十六條a項ノ意義ニ於ケル人目ニ觸ルヽ醜容ヲ形成スルコトナキニアラス

加重情狀トシテ瀰久的病羸不治ノ疾患等

合ニ由リ單ニ輕度ノ變容ト看做スヲ得ヘキコトナキニアラス

病羸又痼疾ナル語ノ定義

其他殊ニ顏面ノ變容ニ關シテハ其顏面ノ從前ノ狀態ニモ注目スルヲ要ス而シテ年少ナル人體ノ顏面ニ於ケル瘢痕ハ老婆或ハ從前已ニ顏面上著シク變容セラレタル人體ノ顏面ニ於ケル瘢痕トハ全ク別異ノ判定ヲ爲サヽル可カラス

(b項)瀰久的ノ病羸或ハ不治ノ疾病或ハ治癒ノ見込ナキ精神變動　法上若シ上記ノ如キ區別ヲ爲サスシテ單ニ不治ノ精神的或ハ身體的疾患ヲ特別ノ加重的損傷結果トシテ揭擧シタランニハ其解釋適ニ單一ナリシヤ必然ナリ、何故ニ斯ノ如クセサリシヤノ原因ハ恐クハ法律ガ瀰久的ノ病羸及不治ノ精神障碍ヲ特別ニ揭擧スルニ由リ本項下ニ於テハ區別ナク一治ノ不治的疾病ヲ包括セス唯高度ノ價値ヲ有スル不治ノ疾病ノミヲ含有スルコヲ表明セント期スルニ在リシナルヘシ

『病羸又痼疾』"Siechthum" ナル語ハ尋常ノ用語法ニ隨ヒ曾ニ慢性疾患ノミナラス亦衰脫及低弱幷ニ之ニ因スル充分ナル勞作及娛樂享受ノ不能ヲ包括スル者トス、法律ハ單ニ瀰久的ノ病羸 "immerwährenden Siechthum" ナル語ヲ用ユルガ故ニ唯前文ニ記スル如キ不治ノ狀態ノミニ注目スヘキモノトス、之ニ屬スルハ殊ニ全體或ハ身體半部ノ痲痺、即チ頭部及脊髓ノ損傷ニ由テ來リ或ハ中毒後ニ貽留スル如キ症、幷ニ癲癇狀態、氣管或ハ食道ノ狹窄即チ或ハ損傷後或ハ腐蝕後ニ來ル如キ症、糞便瘻管及尿瘻管等ノ如キ即チ是ナリ

『病羸又痼疾』"Siechthum" ハ明白ニ之ヲ區分ス可カラス且ツ又不治ノ疾病ニ精密ノ定義ヲ與ヘ能ハサルハ固トヨリ多言ヲ要セズト雖モ一千八百五十四年一月十八日ノ大審院宣告ハ(ヘルブスト Herbst 氏 l. c. 322)不治ノ疾病ナル語ニ關シ其疾病ノ下ニハ通常ノ如ク內科病ノミナラス外科病ヲモ包括スルコヲ明言セリ

永久的操業不能ノ意義

『治癒ノ見込ナキ精神障碍』"Geistesstörung ohne Wahrscheinlichkeit der Wiederherstellung" ニ關シテハ既ニ上文ニ論述スル所アリキ

(c項)永久的ノ操業不能モ亦特別ノ辯明ヲ要セス蓋シ吾人ハ既ニ第百五十二條及第百五十五條ヲ論スルノ際操業不能ノ意義ヲ解明シ且ツ操業不能ノ永久的性質若クハ其不治ノ確定ハ敢テ特別ノ辯論ヲ要セザレバナリ

墺國現行刑法ノ意義ニ於ケル生活體損傷ノ法醫的判定ヲ論スルニ次キ、吾人ハ尙ホ墺國刑事訴訟法第百三十二條ノ規定ヲモ論述セサル可カラス、是レ當該鑑定人ガ『現在ノ身體損傷若クハ協同作用ニ由リ、絕對的ニ若クハ其場合ノ特別事情ニ由リ輕易、重劇又ハ危篤ナリト看做スヘキカ』ノ宣言ヲ要求スル所ノ條項ナリ

數創傷合同作用ノ結果

創傷ノ輕重及危險ノ程度ノ判定

或ル損傷ノ各箇ハ輕傷ト看做スヘキモ其協同作用ニ由テハ重傷若クハ危篤ナル損傷ヲ形成シ得ヘキコト固ヨリ言ヲ俟タス、シテ實際上ニ於テモ亦往々發見セル所ナリ、之ニ屬スルハ殊ニ擬杖、棍棒、鞭笞等ノ打擊傷ニシテ其各箇ハ通例重要視ス可カラスト雖モ之ヲ總合スレハ往々重劇ナル現象、加之ナラス危篤ノ症狀ヲ起スニ足ルモノナリ、其他各箇ノ創傷ヨリスル出血ハ決シテ危險ノ性質ヲ有セサルモ數多ノ創傷ヨリスル同時ノ出血ハ重篤ノ症候ヲ來スコト間〻之アリ、而メ又或ル一創傷ノ經過ガ同時ニ受ケタル他ノ一創傷若クハ數創傷ニ由テ著シク影響セラルヽコトアルハ復タ辯論ヲ俟タスメノ明カナリ

斯ノ如キ數損傷ノ合同作用ハ或ル一人體ノ與フル虐待ニ由テ來ルコトアレ𪜈同一ノ人體ニ對シ數人ガ虐待ヲ與ヘタル場合即チ「リンチ」ニ於テ比較的屢〻發見スル所ナリ、

墺國刑法第百五十七條モ亦之ニ關スル規定ヲナシ、多數人ノ間ニ起レル毆鬪等ニ於ケル重キ身體傷害ガ純ラ多數人ノ加害若クハ虐待ノ協力ニ由テ成レルトキハ……其被害者ニ手ヲ下シタル者ハ總テ重キ身體傷害ノ重罪ヲ犯セル者ト宣言スヘシトセリ

絕對的ニ或ハ其場合ノ特別事情ニ由リ輕易、重劇又ハ危篤ナル損傷ノ解釋ハ更ニ一層ノ困雖ヲ呈スル者ナリ

今同條ニ於テ立法者ガ『此種ノ傷害ガ通例如何ナル作用ヲ繼起セシムルカ、又各當該事件ニ於テ之ヨリ如何ナル作用ヲ發起シタルカ』ヲ知ラント要求スルコトニ注目シ、而シテ致死的損傷ニ關スル第百二十九條ニ於テモ亦明ラカニ同一ノ目的ヲ以テ醫師ガ左ノ如キ宣言（即ヲ『致死的損傷ノ原因タル行爲ハ（a）既ニ其一般ノ性質ニ隨ヒ或ハ（b）固有ノ個人的性質若クハ被傷者ノ特別ナル狀態ニ據リ、或ハ（c）損傷ヲ與ヘタル時ノ偶然ノ事情ニ由リ、或因ニ由テ其死ヲ招キタルヤ否ヤ、終リニ（e）其死ハ時ニ晚レサル適當ノ救助ニ由テ免レシメ得ヘキ者ナリシカ』ノ宣言）ヲ要求セラルヽヲ併セ考フルトキハ、『絕對的ニ』重劇或ハ危篤ナル損傷ノ下ニハ唯其『一般ノ性質ニ從ヒ』斯ク成リ來レル所ノ傷害ヲ理會シ、『絕對的ニ或ハ唯特別ノ事情下ニ重劇若クハ危篤ナル損傷』トシテハ唯墺國刑法第百二十九條b項乃至c項ノ下ニ揭ク事情ニ由テ此性質ヲ得タル所ノ損傷ヲ指稱スヘキコト明白ナルガ如シ

此情狀ノ酌量ハ屢〻避忌セラレタリ、蓋シ此等ノ情狀タルヤ幸ニシテ經過セル當時ノ『致死程度』"Letalitätsgrade"ノ記憶ヲ喚起スルヲ以テナリ、而シテ殊ニ『特異ナル身體狀態』ニ關シ英國ノ或ル裁判官ハ適切ニモ左ノ如ク發言セリ曰ク『何人タリトモ第三者ニ由テ受ケタル身體傷害ノ不幸ナル結果ヲ悉ク防禦シ得ヘキ狀態ニ於テ已レノ健康ヲ保持スヘキ義務ヲ負ハシメラルヘキ者ニアラズ』ト（テーロル Taylor 氏著 Med. Jurisp. 1865, pag. 495）、然ルニ實際ニ於テハ全ク之ヲ遵クルコトヲ得ス例之バ獨逸刑事訴訟法ニ於テハ同一ノ規定ヲ含有セスト雖モ*尙ホ經驗上ヨリシテ法醫ハ其鑑定ニ際シ斯ノ如キ情狀ヲ參酌シ若クハ特異シ而シテ裁判官モ亦或ル一定ノ範圍內ニ委任セラレタル擬律ニ際シ之ヲ酌量ノ中ニ加フルヲ常トセリ

＊獨逸帝國法院ノ裁決（ツァルレンスタイン Wallenstein 氏 V. f. ger. Med. XXXVII. 353）ニ曰ク『刑法第二百二十四條

ニ於ケル判決ヲ下タスハ設トヒ被害者ノ疾病的素因之ニ作用セルモノアリシモ其重劇ナル結果ヲ擧ゲテ原因タル故意的行爲ニ歸スベキ時ニ在リ』ト

吾人ハ今生活體ニ就テ判決ヲ要スル損傷ト致死的損傷トニ關スル此等ノ情狀ヲ併セテ一項ノ下ニ論述セントス

損傷ヲ來タセル行爲ノ一般的性質

前文ニ記スル法律ノ條項ニ據リ幷ニ一般ノ經驗ニ據レバ茲ニ觀察ヲ要スル二般ノ事項アリ即チ(一)其損傷ヲ來セル行爲ハ一般ノ性質ニ隨ヒ(絶對的ニ)損傷ヲ起サヽルヲ得サリシ者ナリヤ否ヤ、(二)損傷ノ經過若クハ結果ハ純ラ其一般ノ性質ニ根基スル者ナリシヤ、或ハ佗ノ事情ニ歸スヘキ者ナリシヤ是ナリ

損傷ノ結果ヲソ重劇ナラシムル特異ノ身體狀態

(一)强大ナル力ヲ用ヰ、且ツ其普通ノ性質上ヨリ之ヲ應用スレバ生命ノ危險アル重キ損傷ヲ生起スルヿヲ其犯者ガ知リ得ヘク且ツ知ラサル可カラサル所ノ器械ヲ以テ(即チ殊ニ兇器又ハ極メテ重大ナル器械ヲ以テ)其損傷ヲ加ヘタルトキハ本題ノ疑問ニ然可ノ答辭ヲ與フヘキコト論ヲ待タス、之ニ反シテ耳打、空拳ヲ以テセル衝突ノ如キ比較的輕微ニ且ツ一般ニ無害トシテ知ラレタル暴力ヲ以テ重劇或ハ危篤又ハ致命的損傷ヲ來シ而シテ殊ニ其犯者ノ知ラサリシ身體狀態ガ此非常意外ナル結果ヲ來スノ原因タリシトキハ本題ノ疑問ニハ否斥ノ答辭ヲ與ヘサル可カラス、此種ノ關係ハ即チ特異ナル個人的ノ性質或ハ慣用ノ語ヲ以テ言ヘバ刑事訴訟法ノ意義ニ於ケル特異ノ身體狀態ト看做シ且ツ特ニ其辯明ヲナスヘキモノナリ

全上ノ定例

斯ノ如キ特異ノ身體狀態ハ例之バ手或ハ拳ヲ以テセル打擊、加之ナラズ反擊ノ爲メ、頭顱ノ輕微ナル震盪ガ間〻不幸ノ轉歸ヲ取ルコトアルノ原因タル者ナリ、ヴェルヲル Werner 氏 (Vierteljahres schrift f. ger. Med. 1863. XXIV, 117) ハ或ル爭鬪ニ因リ一男子其後頭ニ拳打ヲ受ケ直チニ卒倒シテ斃レタル一例ヲ報告セリ、其死體ヲ剖檢セシ時硬腦膜ノ肉腫アリテ宛モ拳打ヲ受ケシ位置ニ於テ頭蓋骨ヲ消耗セシコトヲ發見セリ、其佗屢〻酒客ニ於テ見ル所ノ脉管性硬腦膜炎モ亦特異ナル身體狀態ト看做スヘシ、此症ニ於テハ其疾患ノ性質已ニ僅微ノ震盪ト雖モ善ク硬腦膜炎皮膜ヲ成ス所ノ柔嫩ナル脉管ヲ破裂セシムルニ足ルモノナリ、吾人ハ之ニ關スル一例ヲ維也納醫事新聞 (Wr. med. Presse. 1876, Nr. 45) ニ於テ報告シ又近時尋常ノ耳打ノ後出血ヲ來タセシ佗ノ一名ヲ剖檢シ而ソ、之ト同日ニ於テ吾人ハ亦高度ノ麻痺性癡狂ニ罹レル一名ヲ剖檢シタリ、該患者ハ癲狂院ニ於テ佗人ノ臥床ニ近ツカントセシ際看護者ノ爲メニ推排セラレタルニ同人ハ劇シク顚倒シ爲メニ鼻骨ヲ碎キ、上唇ニ於テ挫創ヲ受ケ、直チニ昏睡ニ陷リ、其翌日死亡セシ者ナリキ、剖檢ノ結果ハ上記ノ損傷ノ佗一モ佗ノ傷害アルヲ徵セス唯吾人ノ通知セル麻痺狂者ノ腦消耗ノミヲ發見シタリキ、茲ニ特異ナル身體狀態ハ主トシテ單一ナル推排ガ斯ノ如ク劇甚ナル顚倒ヲ起シタル原因ヲナシ、兼テ佗ノ一方ニ於テハ單純ノ腦震盪タリ𪜈能ク死亡ヲ起スニ足ルノ因由タルヲ見ルベキナリ、尙ホ此關係ニ於テ觀察スヘキハ水腦狀態幷ニ過早ノ縫合癒着ニ因テ來レル腦發育ノ妨碍ニソ、是レ亦往々實際ニ見ル如ク學校教師ガ多少生徒ヲ虐待セル際(頭打、頭髮及耳ノ牽引)意外ノ重キ傷害ヲ來スノ時屢〻其原因ヲナス者ナリ、吾

人ガ嘗テ剖見セシ一例ハ高度ノ腦水腫ヲ有シ且ツ先天性ノ盲目ニ罹リシ十四歳ノ一男子ニ
ソ同人ハ床板上殆ド一「メートル」ニ位スル階段ニ坐シタリシニ佗ノ男兒ノ爲メニ其盲兒ハ(唯
臀部ヲ擊シノミニソ毫モ頭部ニ觸ルヽ「ナカリシニ直チニ人事不省ニ陷リ痙攣ヲ起シ一時
間後ニ死亡セリ、然ルニ剖檢ノ結果ハ高度ノ腦水腫ノ佗一モ見ル所ナカリキ、又佗ノ一例ニ於
テ癲癇性ノ一少年戯レニ其朋友ヨリ帽子ヲ以テ覆フタル顱頂上ニ手掌ヲ以テセル一擊ヲ受
ケタリシニ直チニ痙攣ヲ起シテ卒倒シ陸續癲癇發作ヲ起シ、翌日ニ於テ死亡セリ、剖檢ノ結果
ハ左顱頂骨ニ於テ一圓銀貨大ノ穿孔ヲ發見シ、其邊緣一部ハ腸詰肉狀ニ圓却セラレ、一部ハ不
整ニ口徑内ニ挺出シ其缺損上ニハ腦膜ト癒着セル厚皮狀ノ瘢痕アリキ、病歴ノ檢査上此被害
者ハ幼少ノ際投石ニ因リテ頭部ニ負傷シ、其際久シク人事不省ニ陷リ、爾來癲癇ヲ患ヒタルコ
トヲ發見シ得タリ、而ソ該手掌ノ打擊ハ其少年ガ常ニ極メテ鋭感性ナリト稱スル前記ノ瘢痕
部ニ中リシモノナリキ

所謂特異ノ身體狀態ニ算入スヘキ種々ノ症例

右ノ外輕微ノ衝擊ガ現在セル動脉瘤或ハ腸潰瘍ヲ破裂セシメタルトキ、其佗骨ノ異常的脆碎
性、血友病、幷ニ結核、亞爾箇保爾中毒ノ如キ佗種ノ急性及慢性疾患アル時モ亦是レ特異ノ身體
狀態ト擧稱スヘキ者ナラン、近時吾人ハ乘合馬車ヨリ推落シ一二瞬時ノ後(其警察届書ニ記述
セシ如ク)下肢ノ大ナル裂挫創ヨリスル失血ノ爲メニ死亡セシ所ノ一老婦ヲ剖檢シタリ、而ソ
其剖見ノ結果ハ只一ノ巨大ナル厚皮性足潰瘍ヲ發見シ其基底ニ於テ一ノ靜脉瘤ヲ破開セシ
メタルニ二「センチメートル」ノ横裂アルノミニシテ毫モ佗ノ損傷ヲ認メ得サリキ、其推落セラ

レタルト該裂傷トノ間ニハ原因的ノ關係アルコト明カナレトモ其推落ハ敢テ一般ノ性質上
ヨリ不幸ノ結果ヲ來セシニ非スシテ特異ナル身體狀態ノ爲メニ之ヲ致セシ者ト知ルヘシ

所謂被害者ノ特別狀態ノ實例

第百二十九條2b項ニ掲クル『被害者ノ特別狀態』ノ意義ハ常習性ノ狀態ニ反シ只其人體ガ事件
ノ時ニ當リテ發見セル一時的ノ狀態ニ關スルコト明カナリ、場合ニ由テハ姙娠モ亦之ニ算入
スルコトヲ得ヘシ、例之バ喇叭管姙娠ニシテ其喇叭管ガ恐クハ下腹上ニ於ケル輕微ノ衝突或
ハ之ニ類スル侵襲ニ由テ破裂セラルヘキ者ノ如キ殊ニ然リ、而シテ酩酊狀態モ亦之ニ屬ス、即
チ我醫科大學ニ依托セラレタル一事件ニ於テ甚タシク酩酊セル一男子屢〻自ラ顚例シタル後
再ヒ起立シ或ル佗人ヲ襲フタルニ其人ヨリ捕住且ツ投擲セラレタリキ、其際同人ハ一ノ織機
ノ挺出セル横杆上ニ倒レテ直チニ昏迷シ僅々數時間ノ後死亡セリ、其剖檢ノ結果トシテ腦膜
間ノ出血及多般ナル腦挫創ヲ發見シタルモ頭蓋骨折ヲ存セサリキ、此現景ト横杆ニ於ケル頭
顱ノ打擊若クハ此横杆上ニ於ケル投擲トノ間ニ原因上ノ關係アルコト毫モ疑ヲ容レズ、而シ
テ其行爲自己ハ生命ノ關係アル者ト看做ス可カラサルモ被害者ノ甚タシキ酩酊狀態ハ斯ノ
如キ不幸ノ結果ニ對シ重要ノ關係ヲ有スル「明白ナリトス、何トナレバ被害者ハ酩酊ノ爲メ
自體ヲ直立及平均ノ位置ニ保ツコト能ハズ且ツ平素ヨリ强大ナル力ヲ以テ顚倒セサル可カ
ラザリシヲ以テナリ

所謂偶然狀態ノ解釋

『偶然ノ狀態』„Zufällige Umstände" トハ法律ノ意義ニ於テ平素ハ輕微ナルヘキ損傷ヲシテ重キ
結果ヲ起サシムル所ノ外部ノ偶發事故ヲ指ス者ナリ、例之バ打擊ニ因テ一時昏迷セル者ガ尖

損害ノ結果ヲ增惡スル個人的要素

全上ノ傍存的要素

銳ナル物體上或ハ深キ低處或ハ液體中ニ墜落セル場合ノ如キ是ナリ

(二)損傷ノ不良ナル經過殊ニ健康障害或ハ操業不能ノ永キ持續ノ原因ヲ個人的ノ要素若クハ傍存的ノ要素ニ索ムヘキ場合ハ敢テ稀ナラズトス

個人的要素ニ屬スルハ已ニ汎發的若クハ局發的疾患ノ多數ニシテ前キニ特異ノ身體狀態トシテ揭記セシ者ナリ、殊ニ人ノ知ル如ク損傷ノ經過上常ニ不良ノ影響ヲ來ス所ノ慢性亞爾箇保爾中毒就中酒客譫妄症ヲ發生セシムル場合ノ如キ是ナリ、酒客譫妄症ノ爲メ通常佳良ノ豫後ヲ徵スヘキ損傷ヲシテ死ニ陷ラシメタル例ハ一ニメ足ラズ、然レ𪜈斯ノ如キ事例ノ判定ハ決シテ容易ノ業ニ非ズ、何トナレバ其際酒客譫妄症ノ發生ハ損傷自己ニ歸スヘキヤ或ハ多クハ損傷ノ爲メニ常習性亞爾箇保爾飲用ヲ休止スルニ歸スヘキヤ否ヤノ疑問ハ人ノ知レル所ナレ𪜈未ダ明白ニ解釋セラレ得サルヲ以テナリ、若シ亞爾箇保爾飲用休止ノ爲メニ生スルトスレバ左ノ駁議ヲ來スヲ免レス即チ之ニ亞爾箇保爾ノ飲用ヲ許シタランニハ酒客譫妄症從テ其不幸ナル結果ハ能ク之ヲ防止スルヲ得タランカ、而シテ亦一ノ損傷ヲ受ケサリシ時ト雖モ亞爾箇保爾飲用ヲ止メタランニハ酒客譫妄症ヲ發生シ而シテ死亡ヲ來スニ至ルヘキカト云フ者是ナリ、其事件ノ實在的關係ハ茲ニ亞爾箇保爾飲用ノ休止ニ重キヲ措クヘキヤ或ハ損傷ノ影響ニ重キヲ措クヘキヤヲ決定セサル可カラサルナリ

傍存的要素ニ屬スルハ第一ニ所謂偶發性創傷病ナリ、此關依ニ於ケル學說ノ近時如何ニ甚ダシク變化セラレタルカハ世人ノ通知スル所ナリ、數年前ニ至ル迄吾人ハ此種ノ疾患ヲ天

偶發的創傷病及創傷療法ノ變革ト法醫學トノ關係

然ノ病機即チ創傷自己ニ存スル病機ナリト看做セシモ現今此等ノ諸病ハ皆當該ノ創傷(設トヒ重劇ナルモ)ト一ノ緊要ナル關係ヲ有セス常ニ外部ヨリ創傷中ニ來ル所ノ害因ニ存スルヿヲ知レリ、殊ニ重要ナルハ適當ノ療法(制腐的創傷療法)ニ由テ此害因ノ防制セラレ得ヘキヿ是ナリ、ベルヒマン Bergmann 氏ハ其伯林大學ニ於ケル就職演說ニ於テ論シテ曰ク『現今外科學ノ認定ニ據レバ如何ナル損傷ト如何ナル創傷トニ論ナク其生命上ニ重要ナル器官ノ官能ヲ廢絕セシメサル以上ハ生命ノ危險ナク、加之ナラス著シク健康ヲ障害スルヿナクシテ治癒セサル可カラス而シテ其治癒セザルヤ創傷ニ因セサル佗ノ要素アリテ茲ニ其勢力ヲ逞ウスル者ナラサル可カラス』ト又曰ク『凡ソ皮下創傷ト開放創傷トニ論ナク其如何ニ著大ナルニ拘ハラス一ノ身體部分ノ斷裂アルノ際該患者ノ生命ハ只所謂偶因ニ於テ危險ヲ受クルニ過キサル者ナリ』ト、往時已ニヌッスバウム v. Nussbaum 氏(„Sonst und Jetzt; Einfluss der modernen Wundbehandlung" Ann. der städt. allg. Krankenhäuser zu München. I.1878. u. „Einfluss der Antiseptik auf die ger. Med." Aerztl. Intelligenzbl. f. Bayern. 1880, Nr. 19 u.20)ハ創傷病ノ理會ニ關シテ現今著シク變化セラレタル關係ヲ言明シ且ツ法醫學モ亦此外科學ノ大發見(制腐的創傷療法)ヲ空シク看過スルヲ許サス宜シク之ヲ關係者ノ幸福ニ利用ス可シト論セリ

是ニ由テ之ヲ觀レバ吾人ハ現今凡ソ丹毒、蜂窠織炎、淋巴管炎、敗血症、膿毒症等ヲ發生シ若クハ死ヲ致ス所ノ場合ニ於テ此等ノ病機ヲ墺國刑事訴訟法第百二十九條ノd項ニ於テ

偶發的創傷病及其防止シ得ラルベキヤ否ヤノ法醫學的鑑定

記載セル『偶然之ニ併起シ來リタレ𪜈之ニ由テ誘起セラレ或ハ之ヨリ發生シタル中間的原因』ノ中ニ算入スヘキ而ノ亦此意義ニ於テ吾人ノ鑑定ヲ與ヘサル可カラサルナリ、然レ𪜈直ニ之ト共ニ前ノ第百二十九條e項ニ揭ケタル第二ノ疑問ナモ解答セサル可カラス、其疑問ハ即チ其死亡『若シハ偶發性ノ創傷病』ガ時ニ晩レサル適當ノ手段ニ依テ回避スルヲ得ベキ者ナリシヤ否ヤト云フニ在ル者ナリ、此疑問ノ解答ニハ困難ノ事態アリ、然レ𪜈近時外科學ノ富饒ナル經驗ニ基ツキ、當該ノ創傷若シ正當ニ制腐法ヲ以テ治療セラレタランニハ偶發性創傷病及其結果ハ決シテ發起セサリシナラント宣言シ得ベキ場合ハ蓋シ多々ナルベキナリ、之ニ屬スルハ容易ク到達シ得ヘキ末梢的身體部分ノ創傷ニノ殊ニ往時ハ容易ク併起スル『丹毒及腦膜炎』ノ爲メ甚ダ危惧セラレタルモ現今ハ最短時ニ於テ完全ニ治癒セラレ得ヘキ頭蓋軟部ノ創傷ナリ、但シ斯ノ如キ場合ニ於テモ最モ精確ノ制腐療法ヲ以テ應用セサリシトキハ遂ニ其發生ヲ免カレサルノ場合アリトス、是レ正ニ法醫學的ノ事件ニ於テ比較的容易ク且ツ亦被傷者或ハ或ル他人ノ過失ナクシテ發起シ得ル所ノ事態ナリ、加之ナラズ𪜈ニ其損傷ヲ來セシ器具ニ因テモ創傷中ニ傳染病毒ヲ攙入セシムルコトナキニ非ズ、而ノ他ノ種々ナル創傷殊ニ體腔中ニ達スル者ハ現今尚ホ制腐法ノ及ヒ難キ所ナリトス、其他已ニ受傷ノ瞬間ニ於テ得タル或ル一定ノ合併症ニ由テモ傳染病芽ヲ輸入スルコトアリ、例之ハ消化管中ニ穿通スル創傷ニ於ケル如シ、今各種制腐藥及制腐繃帶法ノ價値ニ關シテハ外科專門家ノ間ニ於テ尚ホ多少ノ異見アルヲ顧慮スルトキハ（設ヒ外科學ガ制腐法ヲ以テ占取セル功績ノ極メテ巨大ナルニセヨ）實際ノ場合ニ於テ往々當該偶發的創傷病ノ發生ヲ防禦シ得ヘカリシヲ積極的ニ言明スルヿ頗ル困難ナルカ或ハ全ク能ハサルコトナキニアラズ、此場合ニ於ケル疑問ハ當該創傷ノ結果ガ一般ニ防止セラレ得ヘカリシカヲ言フニアラスメ當該事件ノ實在的關係下ニ於テ其防止セラルヽヲ得タリシヤ殊ニ若シ之ヲ防止シ得ヘカリシトスレバ之ニ必要ナル方法ノ怠慢ハ被傷者自己或ハ或ル*他人ノ積極的過失ニ由テ起リシカヲ問フニ在リトス、何トナレバ只最後ノ場合ニ於テ上文ノ言明ハ加害者爾後ノ行爲若シハ之ヲ審判スル裁判所ノ擬律ニ影響アル者ナル可ケレバナリ

制腐法怠慢ハ醫師ノ罪責ナルヤ否ヤノ疑問

*制腐法ノ怠慢ハ之ヲ治療スル醫師ニ對シ一ノ罪責即チ『醫療失誤』ニ算入ス可キヤ否ヤ、近時ノ學業ヲ修メ且ツ其制腐的原則ヲ熟知セル醫師ニ對シテハ固ヨリ然リトス、然レ𪜈今一定ノ繃帶法若シハ一定ノ制腐藥ノ應用ニ關シテ義務ヲ負ハシメントスルハ是レ過大ノ要求ナリトス、蓋シ吾人ノ知レル如ク各箇制腐法及制腐藥ノ價値ハ今日尚ホ種々ニ論爭セラレ且ツ又其種々ナル方法及藥物ニ由テ同一ノ功績ヲ占メ得ラルヘキカ如キ觀アレバナリ、意派ノ醫師ニ對シテハ制腐法用ヒサリシモ其他ノ療法適正ニシテ殊ニ如何ナル事情ノ下ニ於テモ必要ノ清潔法ヲ保持セル點アルトキハ直チニ之ヲ以テ醫療失誤ト看做スヿヲ得ス宜シク其醫師ガ學術ノ進歩ヲ絕エズ注目スルノ義務ヲ果スヲ得タルカ果ノ然リトスレバ如何ナル程度ニ迄之ニ應シ得タルカヲ參考セザル可カラス、並ニ注目スヘキ個アルハ或ル一醫師ガ制腐療法ヲ怠リシニ由リ誤殺ノ爲メニ處刑セラレタル帝國法院ノ判決是ナリ（ウェルレンスタイン Wellenstein 氏 Viertelj. f. ger. Med. XLIII. pag. 365）此場合ハ或ル一僕男アリ胸部ニ小刀ノ刺傷ヲ得タルヨリ後チ第二十五日ニ當リ胸膜炎ノ爲メニ死亡セシ實例ニノ醫師ハ創口ノ氣密的閉鎖ヲモ制腐的療法ヲモ怠レリ、依テ帝國法院ハ此怠慢的ノ爲メ致死的ノ胸膜炎ヲ發起シタル者ト認定シタルナリ、其判決書ニ曰ク『制腐療法ハ醫術ニ於テ認識セラレタル定律ナリ、實地醫家ハ斯ノ如キ定律ニ關シ綿密ノ智識ヲ有シ且ツ之ヲ履行シ得ヘキ程度ニ於テ學術ノ進度ニ伴ハサル可カラス、此事件ニ於ケル如ク醫師

中間原因ニ關スル法律家ノ意見

者シ之ヲ意慮スルトキハ之ヨリ起レル失誤ハ其罪責ニ歸セサル可カラス」ト言人ノ意見ニ從ヘハ其醫師ハ制腐的繃法ヲ怠リシ故ニ罪責ヲ免レサルコト固トヨリナリ、然レトモ之ヲ「誤殺」ト定ムルニハ其致死的胸膜炎ガ實際單ニ制腐法ノ怠慢ノ爲メニ起リシヤ否ヤノ證左ヲ缺如セリ、即チ凡ソ膿血性的創ハ即時且ツ充分ニ制腐的繃法ヲ行ヒシニ拘ハラス仍ホ胸膜炎ニ因テ死ヲ致スコト比較的屢之アルカ故ニ此場合ニ於テ其證跡ヲ發見スルコト能ハサル固ナリ、檢査ヲ行フ所ノ法醫ガ制腐的ノ注意ヲ怠リシト已ニ施設セル制腐的繃帶ニ變證セサリシガ爲メ不快ノ爭議ヲ來セシコトナキニアラス(Virchowa's Jahrb. f. 1880 I. 465. ヲ見ヨ)言人ノ意見ニ從ヘハ已ニ繃帶ヲ施シタル以上尚ホ該損傷ノ法醫的檢査ヲ行フヲ可キヤ否ヤハ各箇ノ場合ニ於テ法醫ノ意見ヲ用キタル後裁判所ノ決定スル所ト爲サル可カラス、若シ實行シ得ヘクンハ常ニ主治醫ヲ招致スルヲ適當トス、法醫ハ新鮮ナル創傷或ハ已ニ繃帶ヲ施セル創傷ヲ檢査スルノ際共ニ嚴密的檢査ノ注意ヲ制腐法ヲ遵守シテ行フヘキハ言ヲ俟タサル所ノ要求ナリ

法律家ノ方面ヨリ如何ニ此非作ヲ理會スルカ、千八百八十一年十月二十五日獨逸帝國法院ノ裁定ニ據テ之ヲ明知スルヲ得ヘシ、即チ此事件ハ湯傷ニ因テ一小兒ヲ誤殺セシ場合ニ地方裁判所ハ直ニ制腐法ヲ用ヰタラシニハ其小兒惡クハ生命ヲ保チ得タルナラントノ臆云ヘルニ鑑定者ノ嘗言ニ據リ湯傷ト死亡トノ間ニ爭フ可カラサル原因的關係ノ存在スルヿヲ認定セサリキ、帝國法院ハ此無罪ノ宣告ガ「原因的關係」„Causalzusammenhang“ナル語ヲ誤解スルニ基クルヲ以テ該判決ニ曰ク「原因的 Causal トハ凡ソ或ル一定ノ成果ヲ來スニ與リテ力アリ、効アリ、且ツ直接ニ成果ヲ來スヲ謂フ、其行爲ノ所爲ハ必ス其行爲カ能ク自ラ成果ヲ來スヲ要ス、寧ロ其行爲カ如キ關係ニ於テ成果ヲ來スヲ要ス、寧ロ其行爲カ如キ關係ニ於テ生起セサルコト確實ナルヲ以テ上ハ此事實ニ關シ血液中毒ガ其小兒ノ火傷ナクシテ生起セサルコト確實ナルヲ以テ上ハ此事實ニ關シ血液中毒ガ其小兒ノ火傷ニ因テ

ノ際墺國刑法草案及獨逸刑法ニ於テハ其身體傷害ガ墺國刑法草案第二百三十二條及獨逸刑法第二百二十四條ニ明記セル或ル一定ノ結果ヲ繼起シタルトキニ於テノミ刑法上ノ意義ニ於ケル『重キ』身體傷害ナリト認定スヘキヲ見ルベシ、故ニ亦此規定アリテヨリ後ハ醫師タル者從前ノ如ク一ノ損傷ガ重キ者ナリヤ或ハ然ラサルヤヲ明言スルヲ要セスシテ只刑法上其損傷ヲ『重キ』身體傷害ト認定シ且ツ擬律スベキ所ノ結果ガ玆ニ發起シタルヤ否ヤヲ宣言スルノミノ必要ヲ有スル者ナリ

此種ノ結果ニシテ一般ニ現行墺國刑法第百五十六條ニ於テ發見スル者ト一致スルハ左ノ諸件ナリ

法律上重キ身體傷害ヲ構成スベキ結果

(其一)身體中ノ重要ナル肢節ノ亡失

(a)身體中一ノ重要ナル肢節ノ亡失、獨逸ノ法律ニ應用セラレタル『重要』ナル語ハ疑似ノ見解ヲ許スガ故ニ墺國刑法ノ文字ハ適ニ佳良ナル明白ナリ、玆ニ於テハ特ニ其亡失ヲ重要視スル肢節ノ目ヲ掲ケ臂、手、脚、足及鼻ノ名稱ヲ列擧セリ

墺國刑法草案ニ明記セル肢節ノ亡失ハ獨逸刑法ノ意義ニ於テモ身體中重要ナル肢節ノ亡失ト爲スヘキヲ疑ヒナカラン、然レ圧佗ノ肢節例之ハ或ル一手ノ數指若クハ其手指殘ラズヲ亡失セル場合ニ於テハ其實在的ノ關係ニ從ヒ、或ハ均シク之ヲモ『重要ナル肢節ノ亡失』ト宣言スルカ、或ハ『永存的醜容』(墺國刑法草案)若クハ『著大ナル永久性ノ變容』(獨逸刑法)ノ中ニ列セシムヘキモノナラン、但シ一二ノ手指或ハ一二ノ肢節ノ亡失ニハ斯ノ如キ價値ヲ措クヲ能ハサルベシ

全上ニ關スル法律的ノ解釋

右示指ノ二節ヲ亡失シタル一事件ニ於ヲ帝國法院ハ是レ決シテ重要ナル肢節ノ亡失ニアラズト認定シ且ツ之ニ附言シテ曰ク『重要ナル語ノ意義ニ關シテハ被傷者ニ對スル或ル身體肢節ノ具有或ハ亡失ニ就テ存スル相關的ノ價値ヲ認ムルコトナシ而シテ其肢節ハ或ル一二ニ對シテ假値ヲ有シ佗ノ一二ニ對シテ假値ナシト云フ能ハサル者ナリ刑法第二百二十四條ノ意義ニ於テモ亦各箇ノ身體肢節ニ對シ其價値ノ關係ヲ決定セサル可カラス、即チ其身體肢節ハ重要ノ度ニ從ヒ尚ホ全身體ニ如何ナル關係ヲ有スルヤ殊ニ其一肢節或ハ數肢節ノ缺亡ニ因テ全身體諸器官ノ整規的官能ガ概シテ妨害或ハ休止セラルヽ多少ノ程度ヲ考察セサル可カラス』ト

一千八百八十年十一月十五日ノ第一刑事許定官ノ宣告ニ從ヘハ(ウェルレンスタイン Wellenstein 氏著 „*Die für den Gerichtsarzt interessanten Erhauntnisse des Reichsgerichtes in Straf-sachen.*" *Vierteljahrsschr. f. ger. Med.* XXXVI, *pag.* 49)第二百二十四條ノ適用ハ人身ニ於ケル或ル肢節ノ實體的亡失アルヲ必要トスル者ニシテ若シ其肢節ガ人身ノ一部分トシテ實體的ニ存續スルトキハ設ヒ官能上ニハ全ク或ハ著シク使用セラレサルニ至ルモ此場合ニ包括セラレサル者トス、例之ハ三箇ノ手指便直ヲ繼起セシ損傷ノ如キハ之ニ屬セサルモノナリ※

※凡ソ一般的名稱ノ伸縮隨意ナルニ關シテ好例タル者ハウェルレンスタイン Wellenstein 氏ノ記載セル事件中地方裁判所ノ見解トシテ頭蓋骨ノ一片ヲ亡失セル者ヲモ『重要ナル肢節ノ亡失』

ト認定シタル事情是ナリ、第二百二十四條ノ詳細ナル論述殊ニ其弱點ニ關スル議論ハウエーハウゼル W. Hauser 氏(Vierteljahresschr. für ger. Med. XXXVIII. pag. 93)ノ說ヲ見ヨ

(b)一眼或ハ兩眼ニ於ケル視能ノ亡失、此精細ナル記法ハ偏ニ歡迎スルニ足ル者トス、何トナレハ從來墺國刑法當該ノ規定ニ關スル上記ノ如キ困難ハ之ニ由テ消滅スレバナリ、然ルニ『一眼或ハ兩眼ニ於ケル視能ノ亡失』,*Verlust des Sehvermögens auf einem oder beiden Augen*" ナル語ト雖モ決シテ明白ナル分界ヲ有スル者ニアラス但シ如何ナル醫師ト雖モ當該者ガ尙ホ巨大ナル物體ヲ困難ニモ判視シ得ルトキニハ視能ヲ失フタル者ト宣言セサルヘカラス、蓋シ若シ斯ノ如キ意見ナシテ成立セシメンニハ分量的光感ノ外一ノ視能ヲ損傷セサルトキト雖モ最モ嚴正ナル意義ニ於ケル視能ノ亡失ヲ非認セサルヲ得サル可ケレバナリ、或ル場合ニ於テ視能ノ妨碍ヲ其亡失ト指稱スヘキヤ否ヤノ疑ヲ生シタルトキハ法醫ハ斯ノ如キ妨碍ノ階級及輕重ヲ裁判官若クハ陪審官ニ辯明シ且ツ實在的損傷ノ其他ノ區別ハ擧ケテ之ヲ同官ニ一任スヘシ、是レ法醫ガ左ノ理由ヨリシテ一層容易ニ行ヒ得ヘキ所トス蓋シ裁判官ハ其損傷ノ『重キ身體傷害』ト宣言セラレサルトキト雖モ法律上ノ規定ニ從ヒ重カラザル身體傷害トノ宣言セラレ得ル者ニ對シテ尙ホ最高刑ヲ科シ得ベケレバナリ

(c)聽能、言話或ハ生殖機能ノ亡失ニ關シテハ現行墺國刑法ニ於ケル同一規定ノ說明ニ際シテ論シタル所ヲ見ルベシ(第百十二丁已下丁ヲ見ヨ)

(d)病羸或ハ痲痺ニ陷ル　吾人ハ上文已ニ『病羸』ナル語ヲ定義セント試ミタリ、而シテ玆ニモ亦同一ノ定義ヲ應用スヘキヤ疑ヲ容レス、然ルニ墺國刑法(第百五十六條ヲ)ハ『永存的ノ病羸』,*immerwährendes Siechthum*" ナル語ヲ用ユルノ際改正墺國刑法案幷ニ獨逸刑法等ニ於テハ此前置形容詞ヲ存セス、故ニ此等ノ法律ハ病羸ナル語ヲ以テ上文說明セル如キ不治ノ疾病ヲ指スヤ或ハ只久シク持續スル疾患即ヲ慢性病態ヲ(其治癒全ク望ナキニアラサル者ヲモ)目的トセルカハ不明ナルニ似タリ而シテ最後ノ見解ハ恐クハ適正ナル者ナラン、何トナレハ伯林學術委員ノ提議セル『持久的』,*anhaltendes*" ナル語ノ附加ハ獨逸刑法中ニ採用セラレス且ツ其理由トシテ『病羸ノ狀態ハ已ニ久シキ持續ノ意義ヲ含ミ而シテ持久的ナル語ノ附加ハ容易ク不定ノ見解ヲ來タスノ虞アリ』ト論シタルヲ以テナリ

普魯西王國學術委員ハ一千八百七十七年ニ於テ『病羸ニ陷リタル負傷者ニ關スル裁定書』中ニ左ノ如ク論述セリ提議者スクルツコスカ Skrzeczka 氏 (Vierteljahrsschr. f. ger. Med. N. F. XXVII. 385)

『適切ニ病羸ト指稱セラル可キ慢性病ハ幾許ノ時日ニ渉ルヘキヤノ疑問ニ關シテハ先ツ『病羸』ナル語中必スシモ不治ノ意義ヲ存スルノ要ナキコトヲ特舉セサル可カラス、何トナレハ設ト七多クハ例外ノ事ニ屬スルモ、世人ハ『永キ病羸後或ル人ガ治癒セリ』ト云フコトナキニアラサレハナリ病羸ト名クヘキ疾病狀態ノ最少持續ニ關スル一定ノ年月數ハ固ヨリ之ヲ指定ス可カラスト雖モ之ガ爲メ敢テ法醫學上病羸ナル語ヲ用ユ可カラスト云フヲ得ス、損傷ノ結果トノ發生セル疾病狀態ガ法醫ニ其鑑定ヲ委托セラレタル時已ニ除却セラレタルル場合ニ在テハ殆ト嘗テ之ヲ病羸ト看做ス能ハサルナリ、或ル病症ヲ病羸ト名ク可キヤ否

病羸ナル語ニ關スル普國學術委員ノ見解

ヤノ疑問ハ專ラ鑑定者ノ豫後的判斷ヲ其答辭中ニ要スル場合ニ於テノミ提出セラルヘシ、斯ノ如キ場合ニ於テ法醫カ當時存在セル重キ慢性病ニ就キ多少確實ニ其治癒セラルヘキコトヲ明言シ得ル時ニハ其法醫ハ亦事ノ性質上ヨリ何時其治癒ヲ豫期シ得ヘキカヲ言述スルコトヲ得而シテ此期限ハ決シテ特別ニ永キ者ナルコト能ハス、蓋シ斯ノ如キ狀態ニ在テハ長キ時期ニ向テ其判決ヲ豫言スル可カラサル者ナレバナリ、適當ノ時日內ニ於ケル其治癒カ(此期日ハ亦數月ニ渉ル者ナルヘシ當初ヨリ少ナクモ蓋然的ニ豫知セラレ得ヘキ所ノ疾患ニ對シテハ『病氣』ナル語ヲ應用スル可カラサルモ亦其病カ何時カハ除却セラレ得ヘキコトヲ多少確實ニ豫言シ難ク若シ治癒ヲ來ストスレバ如何ナル期日內ニ其治療ノ行ハルヽカヲ前言シ得ザル所ノ重キ慢性病ニノミ限ルヘクレバナリ

「麻痺ニ陷ル」ナル語ノ解義

最モ困難ヲ感スルハ墺國刑法草案幷ニ獨逸刑法中ニ發見スル『麻痺ニ陷ル』"*Verfall in Lähmung*"ナル語是ナリ、何トナレバ玆ニハ嚴正ナル生理學的ノ意義ニ於ケル麻痺ヲ指ス者ナリヤ、或ハ亦身體ノ一部分若クハ數部分ニ於ケル佗ノ運動能力ノ妨碍若クハ消滅ヲモ指ス者ナリヤ、而メ亦其狀態ヲ『麻痺ニ陷ル』ト看做スヘキ時ニハ如何ナル身體部分ガ麻痺セルカ若クハ運動不能トナラサル可カラサルカ總テ不明ナレバナリ、帝國法院ハ頭部ノ刺傷ノ爲メ左脚ノ麻痺ヲ起シタル一事件ニ際シ左ノ判決ヲ下スニ由テ此困難ヲ除却シタリ(ウェルレンスタイン Wellenstein 氏 *l. c.* 1885, XLIII. *pag.* 365 u. f.)、即チ曰ク『一脚ノ

「精神病ニ陷ル」ナル語ノ解義

麻痺ノミニシテ之ヨリ全身體ニ對スル甚シキ運動障碍ヲ來サヽリシ場合ニ於テハ刑法第二百二十四條ノ意義ニ於ケル「麻痺ニ陷ル」ヲ發見シ能ハサル者トス何トナレバ第二百二十四條ハ「麻痺ニ陷ル」ナル語ヲ以テ人身體中或ル一肢節ニ於ケル使用能力ノ減少若クハ完全ナル消滅ヲ指スニアラスシテ唯廣汎ナル方法ニ於テ身體ヲ侵シ廣大ノ作用ヲ以テ生體器官ヨリ其天然的機能ノ自由ナル發動ヲ奪却スル疾患ノミヲ指ス者ナレバナリ、但シ或ル肢節ノ麻痺ト雖モ人身全體ノ運動能力ニ關シテ深重ナル結果ヲ呈スル者ナルトキハ「麻痺ニ陷ル」ナル語ニ適當スルヿ之レ無キニアラス』ト

又『麻痺ニ陷ル』ニ關シテハ唯不治ノ麻痺ノミヲ指スカ或ハ單ニ久シク持續スル麻痺ヲ指スカハ明白ニ確定セレラス、故ニ此場合ニ於テモ亦『病氣ニ陷ル』ニ關シテ論シタル所ヲ適用シ得ヘシ

(e)『精神病ニ陷ル』"*Verfall in Geisteskrankheit*"ニ關シテハ現行墺國刑法第百五十二條及第百五十六條ノ項ノ意義ニ於ケル損傷ノ結果タル一時性及永久性身體障害ニ就テ論述セシ所ニ讓ルヘシ(前文九十三丁已下ヲ見ヨ)、近時ノ法律的規定ハ只一時性ノ精神障碍ト『治癒ノ望ナキ精神障碍』トノ間ニ區別ヲナサヽルノ點ニ由テ之ニ異ナレリ、是レ即チ上文ノ說明ニ由テ見ル可キ如ク充分ノ正理ヲ有スル者ニシテ又一方ニハ立法者ガ『病氣或ハ麻痺ニ陷ル』ナル語ヲ採用スルニ際シ純ラ不治ノ狀態ノミヲ目的トセサリシヲ證明スル者ナリ

(f)永存性ノ醜容 *Bleibende Verunstaltung*(墺國改正刑法草案)、著シキ持久性ノ變容

「輕キ身體損傷」ナル語ノ適用及解義

erhebliche und dauernde Entstellung（獨乙刑法）、此規定ニ關シテモ亦上文（前文百十七丁已下）ニ記述シタル所ノ外復タ附言スヘキモノアラス

（乙）獨乙刑法及墺國改正刑法案ノ意義ニ於ケル輕キ身體損傷 Die leichte Körperverletzung im Sinne des deutschen St. G. und des österr. St. G. Entwurfes.

刑法ノ意義ニ於テ『重キ身體損傷』„*schwere Körperverletzung*" トノ種別スヘキ結果ヲモ來ザズ又死亡ヲモ致サヽル所ノ『身體損傷』ハ單ニ『身體損傷』„*Körperverletzung*" ト名ケ若クハ『輕キ身體損傷』„*leichte Körperverletzung*" ト稱ス、新刑法草案中ニハ嘗テ使用セラレスト雖モ『輕キ身體損傷』ナル語ハ墺國法醫學ノ實際ニ於テモ亦之ヲ適用スルヲ可ナリトス、何トナレバ『重キ身體損傷』ニ對シ『輕キ身體損傷』ナル語ヲ併立セシムルハ論理上適正ナルノ觀アレバナリ

是故ニ凡ソ死亡ヲ來サス又墺國刑法草案第二百卅二條及獨乙刑法第二百廿四條ニ明言セル結果ヲ來サヾリシ所ノ損傷ハ總テ之ヲ『輕キ身體損傷』ト名クヘキガ如シ、之ニ因テ觀レバ將來『輕キ損傷』ナル語ハ全ク其意義ヲ異ニシ殊ニ現今即チ現行墺國刑法ノ行ハルヽ間ヨリモ迥ニ廣キ意義ヲ有スルニ至ルヿ自カラ知ルヘシ、但シ斯ノ如ク『輕キ損傷』ナル語ヲ廣キ意義ニ應用スルニ由テハ多少通常ノ用語法ト衝突ヲ來スヲ免カレス、何トナレバ『輕キ損傷』ナル語ヲ以テハ將來全ク輕微ナル損傷ノミナラヅ亦通俗的及醫學的ノ見解ニ從フテハ決ノ

獨墺兩刑法ニ於ケル「輕キ身體傷害」ニ關スル規定

輕微ト名ク可カラス通例寧ロ重劇ト稱スル多數ノ損傷ヲモ包括スルニ至ル可ケレバナリ

獨逸刑法ハ其元來ノ文義ニ於テ一モ『輕キ身體損傷』ナル種類ヲ設ケス其事件ノ情狀ニ從ヒ禁獄三年以下或ハ罰金三百「ターレル」以下ノ宣告ヲ裁判官ニ一任シタリ、然ルニ實際ニ於テハ『輕キ損傷』ノ間ニ就キ亦刑法上ニ明言スヘキ區別ヲ立テ若クハ其一定ノ種類ニ對シ高度ノ刑名ヲ定ムルノ必要ヲ見ルニ至レリ、故ニ一千八百七十六年ニ於テ第二百二十三條ト第二百二十四條トノ間ニ第二百二十三條 a ヲ挿入セルヿ左ノ如シ

『兇器殊ニ小刀或ハ其他ノ危險ナル器具ヲ以テ又ハ詭計ヲ以テ又ハ數人協同シテ又ハ生命ヲ危フスル行爲ヲ以テ身體損傷ヲ加ヘタルトキハ二ケ月以上ノ禁錮ニ處ス』

墺國刑法改正案ハ初メヨリ斯ノ如キ區別ノ必要アルヿヲ看破シ第二百三十一條ニ於テ或ル一定ノ情狀ヲ指定シ此情狀アルトキハ如何ナル場合ニ論ナク禁錮刑ニ處スルモ此性質ナキ所ノ身體損傷ニ對シテハ唯六ケ月ノ禁錮或ハ五百「フロリン」以下ノ罰金ニ處スヘキヿヲ規定セリ

其條項ハ左ノ如シ

左ノ身體損傷ハ禁錮ヲ以テ處刑ス

（一）損傷ノ結果一週間以上持續スル健康障害若クハ操業不能ヲ繼起シ又ハ特ニ痛苦ヲ受ケタル時

（二）生命ノ危險ヲ來スヘキ器具ヲ用ヰ或ハ斯ノ如キ情狀ニ於テ犯シタル時

(三)第系親關ニ對シテ犯シタル時

墺國刑法草案第二百三十一條ノ規定ハ一モ詳細ナル說明ヲ要セス、何トナレハ現行刑法第百五十六條ニ於テ之ト同一ノ規定ヲ存シ前文百六丁己下ニ於テ已ニ之ニ論及シタレハナリ

獨逸刑法第二百二十三條αノ規定ハ墺國改正刑法案ノ同一條項ヨリ左ノ點ニ於テ異ナレリ、蓋シ已ニ『危險ナル器具』"gefährliches" *Werkzeug* ノ應用ヲ以テ加重情狀ト看做シ其『生命ニ危險ナル行爲』*das Leben gefährdende Behandlung* ハ特ニ之ヲ揭記セルヲ以テナリ

「危險ナル器具」ノ解釋

『危險ナル器具』ナル語ヲ以テハ、『兇器及殊ニ小刀』ナル語ヲ特擧セルト『生命ニ危險ナル行爲』ナル語ト併立セルトニ由テ想像スヘキ如ク、專ラ其應用上生命ノ危險ヲ伴フ所ノ器具ノミヲ指サヽルコハ帝國法院ヨリ宣告セル數回ノ裁定ニ據テ明カナリ、其裁定ハ即チ曰ク『危險ナル器具トハ之ヲ身體損傷ノ手段トシテ應用スルノ際其客觀的性質ト其利用ノ方法トニ從ヒ著シキ身體損傷ヲ起スヘキ者ナリ』ト明言セリ、帝國法院ハ此見解ノ意義ニ於テ種々ノ裁定書中麥酒壺、閉收セル袖凾小刀、平常ノ性質ヨリスレハ損傷ヲ起スト認ム可カラサルモ刀及ヲ具フル一物體、鐵釘ヲ有セサル長靴ヲ穿チタル足ト、之ヲ以テナシタル應用法即チ床板上ニ橫臥セル人ノ頭顱ニ對スル衝突、反向セル玉突棒等ヲ刑法第二百五十三條αノ意義ニ於ケル『危險ナル器具』"*gefährliches Werkzeug*" ト指定シタリ(ヴェルレンス、タイン *Wellenstein* フリードリヒ *Fröhlich* 兩氏著 *Zusammenstellung der reichsgericht-lichen Entscheidungen* ヲ見ヨ)

「生命ニ危險ナル行爲」ノ解釋

故ニ玆ニモ亦一般ニ墺國刑法ノ判定ニ於ケルト同一ノ原則ヲ遵守スヘシト雖モ唯常該ノ器具ヲ以テ容易ニ或ハ恐クハ『生命ニ危險ナル』損傷ヲ加ヘ得ヘキカヲ問フニアラズシテ唯容易ニ或ハ恐クハ『著シキ』損傷ヲ加ヘ得ヘキカヲ問フモノトス

『生命ニ危險ナル行爲』"*das „Leben gefährdende Behandlung*" ナル語ニ就テハ、獨逸刑法ニ追加セル第二百二十三條αニ關スル裁決ノ爲メ獨逸帝國議會ハ左ノ如クノ之ヲ解釋セリ、即チ醫師ノ宣言ニ據リ犯者ノ行爲ガ生命ノ危險ヲ來セシモノナリシヤ否ヤ』ハ(リーマン Liman 氏 *l. c.* I. 386 及マイル Mair 氏 *Virchow's Jahresb.* 1885, I. 502)帝國法院ノ裁定ニ參照シテ之ヲ言明スルニ或ル行爲ヨリスル生命危迫ノ證左ヲ得ルハ唯直接及間接ニ確實ノ或ハ蓋然的ノ結果ヲ來スヘキ狀態ノ生起ヲ前知スヘシ且ツ極メテ之ヲ信憑スヘキ塲合ニ限ルヘシ、但シ其際犯者ノ豫期スル所ナラスシテ唯客觀的(生命)危險ノ普通ナル豫定ノミニ注目スルヲ要ス

墺國刑法改正案ノ第二百三十一條ハ前記ノ事項ノ佗亦『身體損傷ガ一週日以上ニ涉ル健康障害或ハ操業不能ヲ繼起セシムルカ或ハ特ニ痛苦ヲ受ケタルトキ』ハ刑科ノ加重ヲ爲スヘキノ規定ヲ含有セリ、此文意モ亦特別ノ辯明ヲ要セス蓋シ現行墺國刑法ニ於テモ同一ノ意義ヲ以テ此語ヲ使用シ且ツ前文ニ已ニ詳說シタレハナリ(前文百九丁ヲ見ヨ)、

「特別ノ病苦」ノ解釋

重キ身體傷害ヲ與ヘントセシ意思ノ判決ニ關スル法醫ノ責務

致死的傷害定義

獨逸刑法ニ於テハ特別ノ痛苦ヲ以テ明ニ加重情狀トシテ揭ケサルモ第二百五十一條ニ於テハ『強盜ヲ犯スノ際人ニ暴行ヲ加ヘタルトキ』„bei einem Raube einen Menschen gemartert und mißhandelt" ハ懲役ノ刑ニ處スヘキヿヲ規定セリ、然ルニ墺國刑法草案第二百五十一條ニ於テハ同一ノ場合ニ於テ『身體ニ痛苦ヲ與ヘタル』„körperlich gepeinigt" ナル語ヲ使用セリ、此語タルヤ一方ニハ立法者ガ虐待ニ伴フ所ノ『特別ノ痛苦』„besonderen Qualen" ヲ以テ如何ナルヿヲ意味シタルカヲ解釋スルニ適スル者ナリ

終リニ尙ホ記載スヘキハ墺國刑法草案第二百三十二條或ハ獨逸刑法第二百二十四條ニ揭クル結果即ヲ重キ身體損傷ヲ起サントス豫期シタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處スヘキヿヲ規定シタルヿ是ナリ、多數ノ場合ニ於テ前記ノ如キ結果ヲ生セシメントスル犯者ノ意志ヲ自白セシムルハ是レ裁判官ノ關カル所ナリトス、若シ此關係ニ於ケル疑問ヲ醫師ニ提出セラレタルトキハ墺國刑法第百五十五條αヲ論スルノ際已ニ記載シタル如ク(前文百三丁已下ヲ見ヨ)唯其暴力ガ必然生命ニ貴要ナル器官ニ向テ施セシ者ナリヤ、亦其器具ハ強大ノ力ヲ以テ使用セラレタリヤ等ノ事情ヲ確定スルニ止メ、此事實ヲ以テ犯者ガ犯罪ノ際前記ノ結果ヲ致サントスル意志ヲ有シタル證左ニ利用スルト否トハ之ヲ裁判官若クハ陪審官ニ一任セサル可カラス

致死的傷害　Tödtliche Verletzungen.

凡ソ死亡ヲ招來セル所ノ損傷ハ之ヲ致死的傷害トナス、竝ニ其損傷ヲ致死的ト名クルニ就テハ其死亡ガ直接或ハ間接ニ起リシカ、又之ト同一ノ損傷ガ或ル佗ノ場合ニ於テ致死的ノ轉歸ヲ取ラザルヿアリシカノ如キハ全ク無關係トス、飜言スレバ實在ノ場合ニ於テ其損傷ト死亡トノ間ニ原因上ノ關係ヲ有スルヿヲ注目スルノ要ナキモノトス、何トナレバ斯ノ如キ致死通的若クハ平均的致死數ハ姑ク之ヲ措キ、其際該損傷ノ普數ノ考察幷ニ實在事件ニ於ケル實在損傷ガ何故ニ死亡ヲ來シタルカノ理由ニ至テハ鑑定書中後段ノ部分ニ屬スルヲ以テナリ

暴力的死亡ノ鑑定ニ關スル三疑問

概シテ言ヘバ器械的損傷ニ因スル暴力的死亡ガ法醫ノ檢查及判定ノ物體タル場合ニハ三箇ノ重要ナル疑問ヲ解答スルヲ要ス、是レ殊ニ墺國刑事訴訟法第百二十九條ノ規定ヨリ導致セラレ得ヘキ者ニシテ次ニ揭クルガ如シ

(一)最近ノ死因ハ何ナリシヤ、即チ被檢者ハ最後ニ何ニ因テ死亡セシヤ

(二)此最近ノ死因ハ損傷ヨリ來リシヤ、且ツ孰レノ損傷ニ由テ誘起セラレシヤ、若シ然リトスレバ

(三)此損傷ハ或ル佗人ノ行爲ニ由テ與ヘラレシヤ或ハ如何ナル佗ノ方法ニ由テ受ケシヤ

(一)最近ノ死因　*Die nächste Todesursache.*

墺國刑事訴訟法第百二十九條ニ曰ク『鑑定書ニハ當該ノ場合ニ於テ其死亡ヲ直接ニ生起シタル原因ハ何ナリシヤ且ツ何ニ由テ之ヲ起シタルカヲ明記スルヲ要ス』ト、又普魯西法醫鑑定準則ニ規定シテ曰ク『如何ナル場合ニ論ナク鑑定ハ先ツ死亡ノ原因ニ注目シ而シテ容觀的現象ヨリ得

タル標的ニ從ヒ次ニ犯罪的原因ノ疑問ニ注目スルヲ要ス、茲ニ死亡原因ノ發見セラレサリシトキハ明カニ其事由ヲ擧ケサル可カラス、如何ナル場合ト雖モ死亡ハ內部ノ原因ヨリシ或ハ疾病ヨリ來ルト云フノミニテハ不可ナリ止ナクンバ寧ロ疾病ト擧示スベシ』ト

最近死因檢定ノ規準

最近死因ノ確定（即チ或ル人體ガ損傷ノ爲メニ死亡シタル原因ハ何ナルカノ檢定）ハ決シテ其容易ナルヲ必ス可カラス、該損傷ガ生命的重要ナル器官ノ實質的變化ニ基因セズシテ解剖上ニ證明ス可カラサル或ハ只困難ニ認知セラルベキ生命的重要ノ官能障碍ヲ生シタル時ニ於テ殊ニ然リトス、乙ノ場合ニ於テハ剖檢ノ成績ニ據テ得ルヨリモ寧ロ病歷ニ依リ若クハ病理學的及生理學的ノ經驗ニ參照シ當該損傷ノ性質ニ關聯シテ其最近死因ヲ確定スルノ必要ニ遭遇スルヿ稀ナラズトス、損傷ニ因スル最近死因ハ概シテ原發的即チ直接的ノ死因ト續發的即チ間接的死因トニ區別セラルレドモ其明白ナル分界ヲ設定シ得サルコト固トヨリ言ヲ待タズ

直接的最近死因ノ一貴要器管ノ潰滅

原發的即チ直接的ノ最近死因ニ屬スル者ハ左ノ如シ

（a）生命上必須缺ク可カラサル器官（例之ハ腦、脊髓、肺或ハ心臟）ノ一若クハ數箇ノ廢滅或ハ劇甚ナル傷害、其最高度ハ全身體ノ壓碎ニシテ爆裂及之ニ類スル非常ノ暴力ニ由テ來ルモノナリ

當該器官ノ破壞及直チニ之ヨリ生起スル其官能ノ歇止ハ之ヲ最近死因ト稱スルニ足ルヿ論ヲ俟タス而シテ嚴正ナル生理的ノ意義ニ於ケル精密ノ原因ヲ擧クルハ全ク蛇足ニ屬スルガ如シ

（b）生命上必須缺ク可カラサル器官ノ官能力ニ於ケル佗ノ器械的障碍即チ溢血ノ壓迫ニ因スル腦及脊髓ノ官能障碍、肺ノ損傷ヲ兼ヌ或ハ然ラサル胸廓破開ニ因スル肺ノ官能障碍、心囊中ニ溢出セル血液ヨリ來ル運動妨碍ニ因スル心臟ノ官能障碍等是ナリ

其二（貴要器官ノ器械的官能障害）

（c）失血　是レ器械的損傷後ニ來ル最モ頻繁ノ最近死因タル者ニシテ心臟或ハ大血管ノ損傷或ハ亦血液ニ富メル蜂窠織性器官殊ニ肝、脾及肺ノ損傷ヨリ來ル者ナリ

其三（失血）

失血ニハ內外ノ區別ヲ爲スコヲ得、即チ損傷ニ因テ流出スル血液體外ニ溢出スルヲ外失血ト云ヒ、其血液體腔中或ハ所謂血腫ノ狀ヲナシ皮下ニ於テ器官ノ破潰或ハ排開ヨリ形成セラレタル空間中ニ流入スルヲ之ヲ內失血ト云フ

失血ノ斷定

失血ヲ起シタリトノ斷定ハ一ニハ當該損傷ノ性質幷ニ該被傷者ノ體外若クハ或ル體腔中ニ溢流シタル多量ノ血液ノ證明ニ由リ、次ニ外部ヨリハ皮膚及目擊スベキ粘膜ノ著シキ蒼白色、其佗死斑ノ乏少若クハ全缺ニ由リ、內部ヨリハ心臟及大脈管中ニ於ケル血液ノ乏少殊ニ蜂窩織性器官ノ著明ナル貧血從テ其蒼白色及乾燥トノ徵視セラルヽ死體ノ甚タシキ貧血ニ由テ之ヲ得ベシ

著明ノ失血ハ之ヲ看過スルヿナシト雖モ如何ナル場合ヲ論セズ血液ノ全量ヲ擧ケテ身體ヲ辭謝スルヿナク毎回尙ホ多少ノ殘量ヲ存シ且ツ其量ハ極メテ不同ナルヿニ注目セサル可カラス、『外失血』ニ於テハ大抵著明ニ貧血ヲ現呈スルヲ常トス、而ノ數日死體ヲ放置セシニ拘

ハラス死斑ノ痕跡ダモ現出セサリシコトアルハ吾人ノ反復實見セル所ナリ、『內失血』ニ於テハ高度ノ貧血ヲ見ルコト少ナシ、蓋シ一方ニハ體腔ノ廣袤已ニ過大ノ血液ヲ集蓄スルニ足ラス且ツ斯ノ如キ場合ニ於テ溢出セル血液ハ屢〻佗ノ官能例之バ心臟ノ運動或ハ肺ノ擴張ヲ妨ケ之ニ因テ死亡ヲ急速ナラシムルヲ以テナリ、前記ノ事情ノ佗個人的ノ狀態モ亦此關係ニ於テ有力ナルニ似タリ、即チ大失血ノ後死亡者クハ心臟働作ノ休止ヲ起スハ蓋シ之ニ因由スルモノナラン、其佗經驗ニ據レバ久シキ時間ヲ費シテ徐々ニ發起スル失血或ハ間歇期ヲ以テ來ル所ノ失血ハ急性ノ失血ヨリモ一般ニ高度ノ貧血ヲ起スヲ知ルヘシ

* ビショフ Bischoff 氏ハ大人ニ於テ其體重ノ百分ニ付キ七・七分、ツェルクル Welker 氏ハ小兒ニ於テ五・二分ノ血液アルコトヲ發見セリ、故ニ體重七一・五「キロ」ノ一人間ハ五・五「キロ」ノ血液ヲ有スヘシ（ブリュッケ Brücke 氏著生理學講義 Vorlesungen, 1874. I. pag. 120）、ランドア Landois 氏（Ztschrb. d. Physiologie, pag. 73）ニ據レバ大人ハ其半量ノ血液ヲ失ヘバ生命ノ危險ヲ起スニ至リ、マイドル Meydl 氏ノ試驗（Anzeiger d. W. Gesellschaft d. Aerzte. 1884. Nr. 22）ニ從ヘバ動物ハ其血液ノ半量ヲ失フモ殆ト皆生命ヲ保續スルコトヲ得加之ナラズ試驗動物ノ半數以上ハ其全血量三分ノ二ノ亡失ニ堪ヘ得タリ、斯ノ如ク甚シキ失血ニ堪ヘ得ルハ脈管收縮筋ノ作用ニ歸スヘシ、之ニ由リ或ル血管殊ニ內臟神經區域ノ血管ハ其廣徑ヲ收縮シ爲メニ尙ホ殘留セル血量ヲシテ中樞的神經裝置ヲ養フヲ得セシムル者ナリ、脈管收縮筋ノ作用ハ急性失血ニ於テハ慢性失血ニ於ケルヨリモ確實且ツ有力ニ作用ス蓋シ慢性ノ場合ニ在テハ背髓ノ調節的機能已ニ消滅スルヲ以テナリ、是故ニ急性失血ナレバ設ヒ其失血量ハ大ナルモ久シク持續スル少量ノ失血ヨリモ之ニ堪ヘ易キヲ常トス（フォン、ベッシホ V. Basch 氏 „Ueber die Regulirung der Blutspannung und Blutvertheilung.“ Vortrag gehalten in der Jahresversammelung der k. k. Gesellschaft der Aerzte am 29. Miiiz 1878）失血ノ生理的作用ニ關スル詳說ハゲルゲンセンJürgensen 氏（in Ziemssen's Handb. d. ger Med. I, 699）ノ說ヲ見ヨ

失血ノ斷定ニ對シテ貧血ノ所見ヲ利用スルニ際シテハ其人亦從前ヨリ貧血性ナルヤアルヘキヲ看過ス可カラス、又高度ノ貧血ヲ生スル佗ノ多數ナル病症（癌腫、結核、白血病、慢黃病）アルヲヤ忘ル可カラス、但シ此諸病ハ通例之ヲ鑑別スルニ難カラサルモノナリ、ミッテンツワイグ Mittenzweig 氏（*Zeitschr. f. Medicinalbeamte*, 1889. *pag.* 159）ハ肝臟破裂ノ後八日ヲ經テ死亡セシ重キ貧血ニ於テエールリヒ Ehrlich 氏ガ惡性貧血ニ於テ發見シタル偉大細胞ニ類シ且ツ之ニ均シク染色シ得ヘキ所ノ有核性赤色ノ偉大血球ヲ發見セリ而ノ其發見ハ死因タル重症貧血ノ存在ヲ判定スルニ足ルモノトス

腐敗或ハ浸潰セル死體ニ對シテハ心臟及大血管ノ血液乏絕モ亦已ニ進歩セル腐敗或ハ浸潰ノ部分現象トシテ存在シ之ガ爲メ液化且ツ分解セル血液ガ脈管壁中ニ浸入シ之ヨリ近隣ノ組織ニ入リ若クハ種々ノ漿液嚢中ニ赴キ且ツ皮膚殊ニ被傷セル皮膚ヲ經テ外部ニ滲漏スルアルニ注目スヘシ、是故ニ進歩セル腐敗或ハ浸潰アルノ際心臟及大血管ノ血液乏絕ノミヨリシテ失血ノ診斷ヲ立ツルハ大過失タルヲ免カレス

(d) 所謂震盪 *Shok* モ亦負傷後ノ原發的最近死因ニ屬ス、震盪トハ知覺神經ノ末梢端ニ强烈ノ刺戟ヲ受クルニ因リ反射的ニ生起スル所ノ心臟休止（心臟麻痺）ヲ云フ（バルデレーベン Baldeleben 氏ノ檢閱ヲ以テ發行セルゲリヨーニンゲン Grönningen 氏ノ震盪ニ關スル詳細ノ批評的研究（一千八百八十五年ヴュルスバーデン市發行）ニ從ヘバ震盪ハ强烈ノ侵襲ニ由テ生起セラレタル延髓及脊髓ノ衰弱ナリ）殊ニ大負傷後震盪ニ因テ死亡ヲ來スヲアレ尼比較的最モ屢〻死ヲ致スハ微小且ツ多數ナル皮膚ノ疼痛性損傷ニシテ或ハ箇々分離シ或ハ急速ニ聯續シテ來ル者即チ持續セル挺擊、棍打等ヲ以テスル虐

全上ノ際ニ於ケル注意要件

失血ノ微タル貧血

非三（振盪）

待ノ後ニ來ル所ノ振盪ナリ

剖檢ハ此狀態下ニ於テ損傷ノ佗只消極的所見ヲ呈スルノミ、而シテ最近死因ノ性質已ニ斯ノ如クナルガ故ニ其解剖的證明ヲ索ムルヿ固トヨリ能ハス唯其事件ニ關スル諸狀態ノ參照ニ由テ之ヲ決定セサル可カラズ、此種ノ判決ハ殊ニ當該ノ人體ガ虐待或ハ創傷ヲ受クルノ際或ハ其直後ニ死亡シタル場合ニ於テ之ヲ得ベキノミ、後日ニ至テ死亡ヲ來セシキニハ其負傷ト死亡トノ間ニ愈ニ長キ比較的安怡ノ間期アリシニ從テ震盪ノ存在ヲ決スルヿ愈-困難ナラサル可カラス、何トナレバ經驗上最近死因ト認ムヘキ著明ノ所見ナキガ爲メ、曩ニ震盪ニ因スル死亡ト認メタル多數ノ場合ハ爾後精密ノ檢査ニ據リ佗ノ病機ヲ以テ其最近死因トナスヿヲ發見シタレバナリ

死因タリシ振盪ノ認定

震盪ノ存在ヲ認ムルヿ過度ニ流レシ弊害ヲ抑制シタルハ殊ニヌッスバウム Nussbaum 氏及其門弟（ワグネル Wagner 氏、ルッシュ Rusch 氏、ハルム Halm 氏）ノ功績ナリ、即チヌッスバウム Nussbaum 氏（„Ueber den Shok grosser Verletzungen". *Vortrag in ärztl. Bezirksverein in München. Wr. med. Presse.* 1877. Nr. 16 u. 17）ハ斯ノ如キ多數ノ事例ニ於テ最近ノ死因ヲ成スモノハ震盪ニ非ズシテ或ル場合ニ於テハ腐敗物質ノ强キ吸收ニ由テ生起セラレタル虛脫症、佗ノ場合ニ於テハ已ニウィルヒョー Virchow 氏※等ニ據テ骨質破碎後ニ檢出セラレタル毛細管殊ニ肺臟毛細管ノ「エムボリー」ニ骨髓脂肪ノ吸收ヲ兼ヌル者、次ニ廣大ノ腹部創傷ニ際シテハウェーグネル Wegner 氏ノ證明セル腹膜ノ冷却ナルヿヲ論セリ

※ベルヒマン Bergmann セルニー Czerny カッフホルヘン Uffelmann ヘッシホル Heschl 諸氏並ニリードル Riedl 氏（„Zur Fettembolie", Zeitschr. zur Chirurgie. VIII. 571）、スクリーバ Scriba 氏（Untersuchungen zur Fettembolie. ibid. 1879. XII. 118）及ウヰーネル Wiener 氏（„Wesen und Schicksal der Fettembolie". Arch. f. exper. Pathol. XI, 275）ノ說ヲ見ヨ、此脂肪栓ハ殊ニ骨折ニ於テ極メテ急速ニ形成セラルヽヿアリ、吾人ハ之ニ對シテ多數ノ實例ヲ掲擧シ得ヘシ、軟部ノ創傷ニ於テモ亦脂肪含有性ノ器官ニ關スルトキハ脂肪栓ヲ生スルヿトアリ、例之ハミルトン Hamilton 氏（Virchow's Jahresb. 1877 I, 227）ハ非常ノ高處ヨリ墜落スルノ後二三時間ヲ經テ呼吸困難及昏醉ノ下ニ倒レタル水夫ノ肺臟中ニ於テ脂肪栓ヲ發見セリ、尚剖檢ニ由テハ肝臟脂肪變性及肝臟中ニ於ケル小破裂アルヲ見タリ、其他吾人ノ剖檢セル一例ニ於テハ纖壓ノ爲メ肝臟破裂ヲ起シタルニ其破碎セラレタル肝臟實質ヨリ來レル肺ノ血栓ヲ以テ最近死因ト做スヘキヲ認定シタリ、其他頭蓋骨折ニ際シテモ亦肺臟中ニ脂肪栓ヲ目擊セルヿトアリ、然レトモ是レ唯同時ニ腦挫傷ノ存在セシ場合ニ限ル、是故ニ脂肪ハ人ノ知ル如ク脂肪ニ乏シキ板障ヨリ來ル者ニアラスシテ腦實自己ニ基因スルコトヲ察知スルニ足レリ、尙ホ之ニ附言スヘキハ靜脈中ニ於ケル空氣ノ攝入（吸入）ヨリ生起スル急死ハ恰モ震盪ナルカノ觀ヲ呈スルヿト是ナリ（フィッシェル Fischer 氏 „Ueber die Gefahren des Lufteintritts in die Venen". Volkmann's Samml. klin. Vortrüge, Nr. 113、其他クスマルスキー Kézmarsky 氏著 „Lufteintritt in die Venen des puerperalen Uterus". Arch. f. Gynäk. 1878, XIII, 200 及ベルヒマン Bergmann 氏（l. c.）ノ說ヲ見ヨ）

脾出血ニ因スル死亡

ツェンケル Zenker（*Deutsche Zeitschr. f. prakt. Med.* 1874. N. 41）氏ニ從ヘハ自然ノ原因ニ因リ並ニ震盪ニ由テ發起シ得ヘキ脾出血ヨリシテ亦急死ヲ起スヿアリ、是レ之ニ隣接スル太陽叢及半月狀神經節ノ共侵セラルヽヨリ來ルモノナリ、ロイボルト Reubold 氏（„Über Paralyt. vom gerichtsärztl. Standpunkte". *Aus der Festschrift für A. v. Kölliker.* 1887）ハ此說ヲ是認セズシテ曰ク急死ノ場合ニ於テ脾ニ特別ノ注目ヲ與フヘキハ唯此器官ガ容易ニ且ツ屢々（加之ナラス特離シテ）血液循環ノ障碍ニ對シ出血ヲ以テ反應シ、從テ血液循環障

碍ノ診斷ヲ幇助シ得ルノ理由ノミニ存スト、ギットリヒ Dittrich 氏（*Viertelj. f. ger. Med.* LII. 48）モ亦急死ニ對スル膵出血ノ影響ハ空想ニ過キサル者トセリ、斯ノ如キ出血ハ殊ニ酒客ニ於テハ自然ニ並ニ種々ノ偶因ニ由リ膵ノ蜂窠織性或ハ炎性變質ノ爲メ發見スルコアルガ如シ、吾人ハ一ノ縊死者ニ於テ其一例ヲ實見シタリ

振盪ノ誘因タル心臟麻痺

他ノ場合ニ於テハ心臟麻痺ノ素因ハ重要ノ關係ヲ有スルモノヽ如シ即ヲ崎形性動脈內膜炎後ニ屢、發生スル心臟ノ脂肪變性及顆粒狀變性ノ如キ殊ニ然リトス、而ノ玆ニ器械的（場合ニ由テハ精神的）侵襲ハ只斯ノ如キ病的心臟ヲ急速ノ休止ニ陷ラシムル種々ナル偶因ノ一チナスニ過キザルモノナリ、然ルニ心臟筋肉ノ實質的疾患ニ因スル心臟麻痺即ヲ『心臟卒中』ハ自然急速的死亡ノ最モ頻繁ナル原因ヲ爲スモノニシテ、劇シキ心臟ノ使役（困苦ナル勞働、重荷ノ扛舉、階段ノ攀登、疾走、精神的感動、人爲的麻醉、加之ナラス交接）ハ心臟麻痺ノ偶因タルコヲ證明セラレタル場合ニ屢之アリトス

其他亦法醫學上ニ注目スルノ價アル震盪ノ一症ハ損傷的震盪ニ因テ誘起セラレタル脈管神經（殊ニ內臟神經區域ニ屬スル者）ノ麻痺ニシテ之ガ爲メ急劇ノ下腹充血ヲ來レ且ツ之ニ繼起スルニ他ノ血行區域ニ於ケル急速ノ貧血ヲ以テスルモノナリ、此關係ニ於テ著名ナルゴルツ Goltz 氏ノ敲打試驗ハ反復蛙ノ腹部ヲ敲打スルニ由リ其心臟ヲ舒張期ニ休止セシメ得ヘキ者ニノ而シテ衝突、顚墜等ニ由テ人體ノ下腹ニ急劇ノ震盪ヲ受クルトキモ亦同一ノ結果ヲ來スコ疑ヒナシ、ゴルツ Goltz 氏ガ動物ニ就テ發見セシ如ク此際下腹ノ血管ハ其

震盪ノ原因敲打試驗ノ關係及試驗ニ類似スル實例

本來ノ內容物ノ十六倍ヲ攝取シ得ヘキガ故ニ人體ニ於テモ亦此種ノ震盪ハ解剖的ニ證明セラルヘキ變化殊ニ下腹血管就中腸血管ノ擴大及充血ヲ留遺セサル可カラス是レ亦事實上動物ニ於ケル敲打試驗ニ據テ發見セラレタル所ナリ（Wernich, „Ueper die als Neuroparalyse, Nervenschlag, Shok bezeichnete“ Todesart vom gerichtsärztl. Standpunkt. Viertelj. f. ger. Med. 1882, XXXVII, pag. 285 u. ff.）

吾人ハ此敲打試驗ガ廣大ノ度ニ於テ人體ニ行ハレ其幸福ニ經過セル場合ヲ目擊スル稀有ノ機會ヲ得タリキ即チ吾人ノ目前ニ於テ一ノ工夫ハインスブルック停車場ノ鐵道列車ヲ移動セシムルノ際衝突梃ノ間ニ陷リ胸廓ノ下部ヲ壓迫シタルトキ偶然之ヲ實見シ得タルナリ該工夫ハ其際一聲ノ叫喚ヲ放チ直チニ胃內容物ヲ吐出シタリ吾人ノ助力ヲ以テ即時ニ其身體ヲ抽出シタルニ容貌ハ屍白色ヲ呈シ、人事不省ニ陷リ心動及脈搏ハ之ヲ觸知スルヲ得サリキ、冷水ヲ灌漑シルタルニ被傷者ハ一二瞬間ノ後ニ蘇覺シ、數時ノ間倘ホ觸知シ且ツ聽取シ能ハサリシ所ノ心動ハ遂ニ再ヒ恢復シタレヒ其脈搏ト共ニ微弱ニ止マリ且ツ數分時ニ亘リテ不整ナリキ、而シテ該負傷者ハ自宅ニ搬送セラレタリシニ其翌日ハ全ク平常ニ復セリト、マシュカ Maschka 氏（Viertelj. f. ger. Med. 1879, XXX, 231）ハ胃部ニ向テ打擊ヲ受クルニ因リ急死ヲ起シタル二例ヲ記載セリ

其他亦死亡ヲ誘起シ得ベキ外傷的脈管運動性反射麻痺ニ屬スル者ハ後文頭部損傷ノ項ニ於テ論述スヘキ腦振盪ナリ

其五(窒息)

續發的即チ間接的最近死因四項

(e)窒息モ亦多數ノ損傷ニ於テ最近死因ト看做スヘキヿアリ、嚴正ニ論スレバ上文ニ揭クル震盪モ亦之ニ屬ス、蓋シ此震盪ニ於テモ並ニ其佗一切ノ急性心動休止ニ在テモ最後ニ死亡ヲ起スハ常ニ窒息ナルヲ以テナリ、胸腔ヲ破開セラレ之ガ爲メ肺臟ノ擴張ヲ營ミ能ハサル所ノ損傷モ亦均シク窒息ヲ以テ死ヲ致ス其他延髓ノ損傷モ亦然リ、而メ損傷ニ因スル殆ト一切ノ急死ニ於テ最近若クハ最後ノ死因ヲ窒息ニ歸スルヿ敢テ困難ナラス蓋シ例之バ失血ト雖モ亦單ニ一種ノ窒息症ト看做スヲ得ベケレバナリ、狹義ニ於ケル窒息ハ殊ニ屢〻自殺者ニ於テ發見セラルヽ如キ頸部ノ切創ニ於テ最近死因ト看做サレ得ルヿ稀ナラス、而シテ此塲合ニ於ケル窒息ハ切破セラレタル血管ヨリ流出スル血液ガ均シク切破セラレタル氣管中ニ陷リ若クハ吸入セラルヽヨリ來ルモノトス

續發的即チ間接的最近死因ニ屬スルモノハ左ノ如シ

(a)各箇器官ノ炎性病機即チ腦膜炎、腦炎、肺炎、胸膜炎、腹膜炎、骨髓炎等

(b)膿毒症、敗血病、尿毒症

(c)破傷風　近時ノ檢査ニ從ヘバ創傷強直症(破傷風)モ亦殊ニ園畎ノ土壤、(タマシヤ Tamassia 氏ニ從ヘバ蜘蛛網ノ塵埃中)、不潔ノ衣服等ニ發見スル特種ノ桿菌ヲ以テスル傳染ヨリ誘起セラルヽガ故ニ吾人ハ漸ク從前其原因不明ナリシ此偶發的創傷病ノ理會幷ニ其解剖的診斷ニ近ヅキ來リ殊ニ當該創傷液ヲ接種スルニ據リ試驗動物ニ於テ強直症ヲ生起シ得ルヨリシテ愈〻其診斷ヲ確定シ得ルニ至レリ、若シ現塲ニテ接種ヲ爲ス能ハサルトキハ其創傷液、時トシテハ創傷ノ近傍ヨリ採レル軟部ヲ或ル中央試驗塲ニ送致スヘシ

(d)衰弱殊ニ榮養缺乏排膿過多等ヲ伴フ久病ノ後損傷及一般貧血幷ニ全身羸瘦ノ外、最近死因ト看做シ得ヘキ一ノ病的現景ヲ呈スルヿナクシテ其人體ノ死亡セル塲合ニハ此名稱ヲ附セザル可カラス

損傷ガ最近死因タリシコトノ證明

(二)損傷ト最近死因トノ原因的關聯ノ證明 *Nachweis des ursächlichen Zusammenhanges der nächsten Todesursache mit der Verletzung.*

種々ノ最近死因ガ實際損傷ニ由テ(即チ暴力的ノ方法ヲ以テ)誘起セラレタルノ證明ハ左ノ如クシテ之ヲ得ヘシ、即チ第一ニ當該ノ損傷ハ本人ノ存命中已ニ之ヲ受ケタルコト、次ニ其損傷ハ最近死因トシテ認定セラレタル生體中ノ變化或ハ障碍ヲ起スニ足ルベキ者ナリシコトヲ證明シ、且ツ其死亡ハ天爲ノ死亡ニモアラズ佗ノ暴力ニ由テ來レル者ニモ非サルヿヲ確認スルニ勉メサル可カラサルナリ

或ル一定ノ損傷(虐待)ガ最近死因ト認定セラレタル變化ヲ起スニ足ル者ナリシヤ否ヤノ證明ニ關シテハ茲ニ細論スルヲ欲セス、何トナレバ其證明ハ唯普通ノ臨床的及病理解剖的原則ノミニ由テ行フヲ得ヘク亦後文各種ノ損傷ヲ論スルノ際各〻其局處ニ隨テ尙ホ必要ノ條件ヲ論スルノ機會アルベキヲ以テナリ、然ルニ茲ニ稍〻詳密ノ記述ヲ要スルハ第一ノ要點及最後ノ要點ナリトス

(a)生活時損傷及死後損傷ノ區別 *Die Unterscheidung vitaler und postmor-*

taler Verletzungen.

剖見ノ際發見セラレタル損傷ガ死後初メテ死體上ニ享受シタルモノナリヤ否ヤノ疑ニ就テハ常ニ其注目ヲ怠タル可カラス、小兒ノ死體ヲ檢査スル場合ニ於テハ殊ニ然リトス、蓋シ兒屍ニ於テハ之ヲ棄捨スル方法（厠窩内ニ投棄シ、狹隘ナル所ニ壓入シ、埋藏シ且ツ石塊ヲ以テ負重スル等）ニ由テ屢〻死後損傷ヲ起スノ機會アレバナリ、然ルニ大人ニ於テモ亦斯ノ如キ損傷ヲ發見シ且ツ誤認ヲ誘起スルコトナキニアラス、例之バ水ニ由テ浮送セラレタル死體ノ砒礫底上ニ摩擦シ、岩石、木材、氷塊ニ衝突スル等ニ因テ形成スル偶然ノ損傷幷ニ縱死者ヲ不注意ニ解卸スル際死體ノ墜落スルガ爲メ又ハ或ル一定ノ狀況下ニ於テ動物ノ爲メニ咬齧セラルヽヨリ生スル所ノ損傷ノ如キ亦之ニ屬ス、右ノ外剖見ノ際初メテ營爲セルタル損傷トナスコトナキニアラズ、之ニ屬スルハ殊ニ胸鎖乳頭筋ニ於テ誤認ヲ誘起シ易キ如ク（吾人ノ論説 „Ueber postmortale Rupturen des Sternocleidomastoideus“. *Wr. med. Wochenschr.* 1888 *Nr.* 39 *u. ff.*）死後强直ニ罹レル肢節ヲ伸張或ハ牽引スル際筋肉破裂ヲ起ス者ノ外、頭蓋骨ノ粗拙ナル除去ニ際スル頭蓋ノ破開及老人性骨質疎鬆ニ於テ容易ク生起スル肋骨破折等ナリ、然ルニ就中屢〻現ハルヽハ最大穹窿部ニ於ケル頸椎柱ノ破折ニノ吾人ノ反復實見セル如ク頭顱ヲ把持シテ死體ヲ牽引スルノ際或ハ頸部ノ剖開及檢査ヲ容易ナラシムルガ爲メニ行フ如ク已ニ內容ヲ除去セル頭蓋ヲ强ク屈曲スルノ際老人ニ於テ容易ク發現スル者ノ如キ是ナリ、右ノ外又故意ニ死後ノ損傷ヲ附スルノ

死後損傷及其種々ナル原因

故意ノ死後損傷

動物ニ由テ生スル死後損傷ノ例

塲合アリ、即チ被殺者ノ死體ヲ碎切スルトキ或ハ吾人ガ其一例ヲ見タル如ク主トノ自殺ト認メシメンガ爲メ被殺者タルコト殆ト疑ナキ一婦人ノ死體ヲ此目的ニ對シ鐵道線路上ニ橫ハラシメタル塲合ノ如シ、（テーロル Taylor 氏(l. c. I, 530) ハ初メ窒息ニ由テ殺死セシメタル一婦人ニ就キ明カニ上記ノ目的ヲ以テ頸部ヲ斷切シタル一例ヲ報告セリ、此際創口ヨリ流出セシ血液ノ不權衡ニ少量ナリシガ爲メ先ツ其被殺ニアラスシテ自殺ナランカトノ疑ヲ誘起シタリ）其佗亦或ル塲合ニ於テハ已ニ佗ノ方法ヲ以テ殺戮セシ人體仍ホ生活スルカノ誤念ヲ以テ再ヒ之ニ損傷ヲ附スルコトナキニアラザルベシ

＊鼠ニ由テ死後損傷ヲ受クルコト極メテ多シ殊ニ厠窩ヨリ抽出セラレタル小兒ノ死體ニ於テ然リトス、或ル下水暗渠ノ階段上ニ於テ風位ヲ取リ絞殺セラレテ發見シタル襤褸寃集婦ニ關スル一例ニ於テ（後文尙ホ之ニ就テ記載スヘシ）鼠ニ由テ生シタル手ノ廣大ナル實質缺損ヲ生活時ニ受ケタル創傷トナセシコトアリ、其佗極メテ細小ナル動物ニ由テ只表面的ニ生起セル咬傷ヲモ生活時ニ受ケタル皮膚剝傷ト誤視スルコトナキニアラス殊ニ頭部或ハ顏面ニ其咬傷ヲ發見スルトキハ重大ナル誤認ヲ來ス者ナリ、即チ彼ノ裏ムヘキハールバウム Harbaum 事件ニ於テ見ルカ如シ、即チ同人ハ其私生ノ小兒ヲ硫酸ニテ謀殺セリトノ嫌疑ヲ以テ八年間監獄ニ囚禁セラレシニ、後日ニ至リ是レ死後ノ胃軟化ヲ誤認セル者トシ且ツ圓形或ハ線狀ヲ爲セル腮部、頸部等ノ羊皮紙狀乾燥モ亦剖檢上ヨリ硫酸ノ作用ニ歸シタルニ實ハ蟻ノ死體ヲ咬齧スルヨリ來レル者ニ外ナラズ其蟻ノ一二ハ剖檢ノ際尙ホ口中ニ發見セラレシコト明白トナレリ（スクルツェスカ Skrzeczka 氏、Vierteljahrsschr. f. ger. Med. 1882, XXXVI, pag. 193）此裁判過失ノ發覺ハヤシュカ Masolka 氏(Ibid. 1881, XXXIV pag. 193) ノ報告セル同樣ノ一事實ニ據テ起レル者ニシテ、其塲合ニ於テハ或ル小兒死體ノ顏面及頸部ニ於テ發見セラレ一部ハ類黑色ヲ呈シ且ツ酸性反應ヲ微ス多數ノ皮膚剝脫部ヲ硫酸ノ作用ニ歸シタリシニ其事態ノ觀察ト口中ニ於ケル一死蟻ノ發見幷ニ送致セラレタル皮膚片中ニ於ケル蟻酸ノ檢出トハ此創傷カ蟻ニ原因スルコトヲ示セシモノナリ、其佗マシュカ Maschka 氏ハ庖厨油甕ニ關スル第二ノ事件ヲ報告セリ(Ibid. 1879. XXX. 238)其佗亦夏期寢室中ニ保貯セル死體ガ蜚蠊ニ由テ咬齧セラルヽハ屢〻吾人ノ經驗セル事實ニシテ之ニ對スル特別ノ防護ヲ與フルノ必要アリトス

吾人ハインスブルック伊太利人ノ死體ヲ剖檢シタリ、是レ頭蓋ノ破碎ニ由テ殺戮セラレタレ共尙ホ頸部ニ長キ小刀ヲ刺入シアル者ナリシニ此小刀ハ死後ニ至テ刺入シタルヿ明

種々ナル死後損傷ノ實例

白トナレリ、蓋シ稍〻大ナル動脈枝及靜脈枝ノ損傷セラレシニ拘ハラス其創傷上毫モ反應現象ノ痕跡ヲ發見セサリシヲ以テナリ、斯ノ如キ損傷ヲ死後損傷ト認識スルヿノ殊ニ重要ナルハ生活中ニ之ヲ受ケテ死ヲ來セシ者ナルカノ如ク或ル佗ノ犯者ガ之ヲ附シタル場合ニ在リトスマシュカ Maschka 氏ノ報告セル一事實(鑑定書第一)ハ死後損傷ノ發生ニ關シテハ如何ニ奇異ナル事件ノアリ得ヘキカヲ證明スル者ナリ、茲ニ癲癇發作中ニ死亡セシコト明白ナル一男兒ノ死體ヲ二三日間戸外ニ曝露シ、其際偶〻雪降アリテ唯突出セル頭顱ノミヲ殘シ雪ノ爲メニ埋沒セラレタルニ、或ル盜獵者ハ月夜其頭顱ヲ一頭ノ兎ト誤リ之ヲ射撃シタリ、而シテ頭蓋骨及腦中ニ於テ摧裂セル鉛丸ヲ發見シタルニ由リ其反應現象ノ極メテ僅微ナリシニ拘ハラス法醫ハ此剖檢死體ノ死因ハ銃創ニ在ル者ト認メタリ、然ルニ後日ニ至リ眞正ノ事情初メテ確實ニ發見セラレ其斷定ノ誤レルヲ知リ得タリキ、スペート Späth 氏 (Württemb. Correspondenzbl. 1890, N. 14 ハ或ル縊死者ノ死體樹上ヨリ墜落シテ灌木叢中ニ横ハレル者ヲ射撃シタル類似ノ一例ヲ報告セリ

佗ノ死因殊ニ天然ノ死因ノ爲メ其倒仆スル際ニ生起スル損傷ハ極メテ注目ヲ要スル者ニシテ宛モ生活時損傷ト死後損傷トノ中間階級ヲ形成スル者トス、其死因ニ由テ起レル意識亡失若クハ運動不能ガ愈〻急劇ニ且ツ愈〻充分ノ度ニ發起セルニ從テ其身體ハ愈〻強大ナル力ヲ以テ地上ニ仆レ、此倒仆ニ由テ愈〻容易ク損傷ヲ來シ得ル者トス、此際殊ニ頭部ニ損傷ヲ受ケ易キハ固ヨリ言ヲ俟タス、後頭、前額、及顱頂側部ニ於ケル單一ノ打撲傷或ハ挫創ハ屢〻發見スル所ナリ前

死者倒仆ノ際ニ受クル損傷

醫療的ノ操作ヨリ來レル損傷

ニ掲クル第四十六圖ハ其一例ヲ示スモノトス、其佗吾人ハ斯ノ如キ原因ヨリ來レル佗ノ損傷ノ多數ヲ經驗セリ、即チ鼻骨、左顴骨突起、切齒ノ骨折并ニ上膊ノ骨折二回(兩回トモ老人性骨質鬆疎ヲ有スル高老者ニ於テ發見シ、一回ハ肺炎ニ因スル急死ノ際、一回ハ腦出血ニ際シテ起レルモノナリキ)、急卒ナル天然死亡及銃撃ヲ以テセル自殺ノ際ニ於ケル上膊骨ノ脱臼、一回ハウアロリ氏橋出血ニ由テ厠房中ニ卒死セル一老人ガ其頭顱ヲ厠戸ニ撞着セシ時ニ起レル頸椎ノ骨折、終リニハ菌腫性心臟内膜炎及右冠狀動脈ノ血栓ニ由テ街路上ニ頓死シタル者ニ於テ起レル後頭骨破碎兼三角縫合開裂ノ如キ是ナリ、或ル不良ノ狀況例之バ死亡者ガ偶〻階段上ニ立チシ時或ハ其突出セル物體ニ墜落セシトキハ尚ホ重劇ナル損傷ヲ來シ得ヘキヤ論ヲ俟タス

蘇活ヲ試ムルガ爲メニ誘起セラレタル損傷モ亦死戰期或ハ死後ニ發起セル損傷ニ屬ス、此關係ニ於テ吾人ノ知レルハ摩擦ニ因テ起リ死體上ニハ羊皮紙狀ノ皮膚乾燥トナリテ現ハルヽ上肢屈折面、胸廓前面及腓骨上ノ皮膚剝脱、其佗胸廓上ニ燃燒封蠟ノ滴落ニ由リ又ハ刺烙ニ由テ生シタル損傷ニシテ殆ト其本性ト原因トヲ認識シ難キ者ノ如キ是ナリ、又依的兒ノ皮下注射或ハ同蘇ノ目的ヲ以テ施シタル佗ノ注射法ニ因テ生起セル當該皮膚部分ノ變化モ亦重要ノ關係ヲ有ス、蓋シ此變化ハ場合ニ由リ或ル佗ノ原因ヨリ來ル者ト誤認セラレ得ヘキヲ以テナリ、其刺入口ハ一圓銀貨大ニ至ル圓形或ハ緣邊彎凹セル灰色硬固ノ部位トシテ現ハレ之ヲ切開スレバ眞皮并ニ皮下細胞組織ハ多少煮熟セラレタルガ如キ觀ヲ呈シ、此狀態ニ由リ、又ハ寧ロ屢〻存在スル淡紅色ノ輪廓ニ由リ前記ノ部位ハ往々第三期ノ湯傷又ハ硫酸ニ因テ生起セ

ル變化ト驚クヘキ類似ヲ呈スル者トス、其他亦溢血ト誤認セラルヽコトアリ是レ實際上間〻注射器ノ刺入ヨリ其下ニ溢血ヲ來スコトアルニ由ルモノナリ、右ノ他或ル一定ノ皮膚病ノ誤認モ亦之ナキニアラズ、注射器ノ刺入口ハ殆ト常ニ離心的ニ位シ前記ノ如ク變化セル皮膚部分ノ最外端ニ位スルコト屢〻之アリ、而シテ其皮膚部分ハ切開ノ際多クハ注射液ニ固有ナル臭氣ヲ放ツモノニメ多少ノ注意ヲ與フレバ能ク其所見ノ誤認ヲ避クルコトヲ得ヘキナリ

吾人ハ上文已ニ(三十六丁已下)生活時及死後皮膚剝脫ノ狀況ヲ論述シ而メ又後文創傷ヲ論スルノ際溢血ニ關シテ記載スヘキガ故ニ玆ニ生活時損傷ヲ死後損傷ヨリ區別スルニ適スル要素ヲ論述スルニハ只軟部創傷及骨傷ノミヲ目的トスヘシ

此關係ニ於テハ第一ニカスペル Casper 氏(*Handb d. ger. Med.* 1864. 4. *Aufl.* II, 264)ノ初メテ揭擧セル事實ニシテ死體ニ於テハ軟部ト骨トニ論ナク生活時ヨリモ暴力殊ニ鈍性ノ暴力ニ對スル強大ノ抵抗力アルコニ注目スヘシ、此事實ハクラーメル Krahmer 氏(*Handb. d. ger. Med.* 18752 *Aufl.* 513)ノ疑難スル所トナリシモ其他多數ノ實驗者殊ニエフ、ファルク F. Falk 氏 („*Zur Frage der Widerstandsfähigkeit der Gewebe im Leben und nach dem Tode.*" *Viertelj. f. ger. Med.* 1873. XVIII, 18)及イビー Aeby 氏 („Ueber die verschiedene Widerstandsfähigkeit der Knochen im todten und lebenden Zustände." *Arch. f. Anat. u. Phys.* 1874. 510. 同氏ハ *Med. Centralbl.* 1878. pag. 181 ニ於テモ之ヲ揭ケ且ツ着射セル彈丸ハ新鮮ナル骨ニ於テハ主トシテ之ヲ擴開スルノ作用ヲ呈スレトモ乾燥セル骨ニ於テハ主トシテ孔穴狀及半管狀銃創ヲ生スルコトヲ論セリ)ハ試驗的ニ之ヲ檢査シ且ツ其事實ナルコヲ確證シタリ、吾人モ亦自ラ之ヲ擧行シ且ツ毎年學生ニ示セル多數ノ試驗ニ據レバ上記諸觀察者ノ說ヲ贊成セサルヲ得ス、

損傷ニ對スル死體組織ノ抵抗力

此現象ノ原因ハ吾人ノ意見ニ從ヘバ死亡組織ノ充實性僅微ナルト軟部ガ死體強直ノ爲メニ生スル寧ロ糊泥樣ノ硬度ト大ナル可塑性トニ存スルモノナリ

死亡組織ニ斯ノ如ク大ナル抵抗力ヲ有スルモ唯比較的ニ過キサルコト固ヨリ論ヲ俟タス、而シテ一方ニハ如何ナル外力ニ論ナク適當ニ之ヲ增強スルトキハ軟部非ニ骨ニ於テ斷裂ヲ起スコトヲ得ヘク、亦生活體ニ於ケル如ク一定ノ外力ハ或ル狀況下例之バ身體部分ノ佳適ナル位置ヲ取ルトキニハ他ノ位置ニ於ケルヨリモ容易ク此種ノ斷裂ヲ生シ得ヘキコト固トヨリナリ、是故ニクラーメル Krahmer 氏ガ振子狀ニ振動セル二十五「ポンド」ノ重錘ヲ以テ頭顱ヲ碎片セシメ得タルノミナラス、亦頭蓋底ノ破折ヲモ生シ得タリト、キュースステル Küster 氏ガ上文(前文七十三丁)ニ記載セルシヤセッポー銃ノ射擊試驗ニ際シ他人ニ由テモ證認セラレシ如ク死體ノ頭蓋ヲ破裂セシメタルニ據レバ此事實ハカスペル Casper 氏ノ揭擧セル原則ヲシテ一般ノ適用ヲ得セシムルニ何等ノ妨碍ヲモ與ヘサルモノナリ、但シ此原則ハ上文ニ記載セル方法ニ於テ變形セサルヲ得サルコト言ヲ待タズ

生活時損傷ノ徵證タル生活的反應現象

其他注目スヘキハ生活的反應現象ノ存在若クハ缺如ナリ、負傷ト死亡トノ間ニ久シキ時間ノ經過シタルトキハ通例著シキ炎性赤色、腫脹、化膿或ハ粘着若クハ肉芽形成ノ現象ヲ存スル者ニシテ此損傷ヲ生活時損傷ト看做スニ於テ何等ノ困難ヲ感スルコトナシ、但シ斯ノ如キ場合ハ大抵初メヨリ其生活時損傷ナルコト明白ナルヲ常トスルガ故ニ疑問ノ物體トナルコト極メテ稀ナリ、然レ𪜈其創傷經過ガ防腐性ナリシト否ラサルトニ從ヒ反應現象ノ階級及性質

生活的牽縮及其程度

ハ極メテ種々ナルヿアルト、毫モ疑ヲ容レザル如ク充分明白ニ存在セシ反應現象ト雖モ腐敗ニ由テ湮滅セラレ或ハ之ヲ判視シ難キニ至ルヿアルヲ忘ル可カラス

死亡ノ直前ニ生シタル死後損傷ヲ判別スヘキ場合ニ在テハ其事態迥ニ困難ナルヿアリ、斯ノ如キ場合ニ於ケル區別點トシテ取ルベキハ主トシテ生活ノ際斷起セル損傷ハ斷裂セル軟部ノ牽縮及多少甚タシキ出血ヲ伴フト雖モ死後損傷ニ在テハ全ク此兩現象ヲ存セサルカ或ハ少クモ極メテ僅微ニ形成セラルヽノ經驗ニ參據スルヲ要ス

生活的牽縮 *vitale Retraction* ハ殊ニ皮膚ニ於テ現ハレ以テ創緣ノ哆開ヲ誘起ス、生活中ニ受ケタル損傷ニ於テ此現象ヲ發起スルノ度ハ當該皮膚部分ノ局處的狀況ニ關ス、殊ニ纖維ノ方向(分裂方向)ノ外皮下ノ組織層ト皮膚トノ粘着力ガ多少ノ牽縮ヲ許スヤ否ヤニ關シテ差異アルモノナリ、故ニ當該局部ニ於ケル皮膚容易ク移動セラレ且ツ單ニ鬆疎大網眼性ノ結締織ニ由テ基底ト結合セラルヽ時ニハ最モ多ク牽縮ヲ來ス、殊ニ頭皮或ハ背部ノ如キ或ル局處ニ於テハ一ニハ皮膚自己ノ性質緻密肥厚ナルト、一ニハ皮下組織ノ短ク且ツ緊展セラレテ斷裂皮膚ノ甚ダシキ收縮ヲ許サヽルトニ依テ之ニ反ス、此局處的關係ハ死後損傷ニ於テモ亦適用セラルヘキヿ論ヲ俟タス、而シテ死皮ト雖モ或ル一定ノ度ニ迄ハ其彈力性及收縮性ヲ保持シ從テ死後創傷ト雖モ多少哆開スルヿアルヲ知ラサル可カラス、然レ𪜈一般ニハ生活中ニ受ケタル斷裂ニ就テ認視セラルヽガ如キ著明ノ度ニ於テセス、從テ亦死後創傷ニ於ケル皮創ノ原形ハ生活時ノ創傷ニ於ケルヨリモ其牽縮スルヿ著シカラサルヲ

生活的損傷ニ於ケル斷裂筋肉ノ牽縮

生活的損傷ノ一徵タル出血

セリ、其佗亦皮膚ノ生活時斷裂並ニ死後斷裂ニ於テ當該身體部分ノ局部ト位置トニ據リ創緣ノ開離ハ多般ニ變形セラルヽヿアルヲ看過ス可カラス

生活時損傷ニ於ケル筋肉ノ牽縮ハ强大ノ力ヲ以テ發現ス、然レ𪜈其牽縮性ハ死後尚ホ少時ノ間存在シ、死後强直ノ起リシ後始メテ歇止スル者ナルハ吾人ノ通知スル所ナリ、是故ニ斷裂セラレタル筋腹ガ收縮シテ發見セラルヽトモ其損傷ハ死後初メテ之ヲ得タル者ナルヤモ未ダ知ル可カラズ、損傷例之バ死體ノ碎截ガ死亡ノ直後或ハ筋肉牽縮ノ尚ホ發起シ得ヘキ少時後ニ行ハレタル時ニ於テハ殊ニ然リトス、但シ死後强直ノ一トタビ發起セルカ或ハ其已ニ經過セル後ハ筋肉ノ斷裂ヲ來スモ復タ其牽縮ヲ致サズ或ハ之アルモ僅微ニ過キサルモノナリ、其佗尚ホ茲ニ注目スヘキハ斷裂セラレタル筋ノ牽縮力ハ大ニ該筋抵止ノ方法ト近隣部分ニ接スル其關係トニ由テ影響セラルヽヿ是ナリ

本題ノ疑問ニ答フル重要ノ證據點ハ或ハ身體ノ外部ニ向フ出血、身體ノ內方即チ體腔又ハ近圍組織ニ於ケル出血(溢血)ノ證明若クハ其缺如ナリ

生活中ニ得タル創傷ハ多少出血ス、此故ニ死體ニ於テ創傷上及其最近位ニ於テ一部ハ流動性、一部ハ凝固若クハ乾涸セル血液ヲ發見スヘシ、則チ一方ニハ身體ノ外部例之バ衣服、一方ニハ其內部即チ斷裂セル組織層間若クハ體腔中ニ流出スルヲ見ル死體ニ損傷ヲ加ヘタルトキハ流動性血液ヲ充盈セル稍〻大ナル血管ヲ傷ツケタルトキニ非サレハ著シキ出血ナキヲ常トス、例之バ頭蓋骨ヲ除去スルノ際破開セラレタル靜脈等ヨリ、或ハ胸骨ヲ除去スルノ際無

死後損傷ニ於ケル出血ノ有無

名靜脈ヲ傷ツケルニ因リ間〻頗ル著大ノ血量ヲ流出セシメル場合ノ如シ其他亦死體中ノ血液流動性ナリシ時ニハ死後ニ多血性ノ蜂窠織性器官例之バ脾ニ損傷ヲ加フルノ際亦著シク多量ノ血液ヲ流出セシ毫モ出血ヲ呈セス或ハ之レアルモ極メテ僅微ニ止マル、蓋シ吾人ノ知ル如ク（且ツ皮膚ノ蒼白色トナルニ由テ見ルヘキ如ク）已ニ死亡ニ瀕スルカ（死後ニ至テハ勿論）毛細管及細小ナル末梢血管ヨリ血液ヲ排出シ殊ニ右心及大靜脈幹ニ集溜セシメレバナリ、是レ亦損傷ヲ受ケタル局處ノ異ナルニ從テ區別アルモノトス、即チ上向スル皮膚部分ノ創傷ハ全ク出血ヲ來サヽルノ際下向ナル身體部分ニ在テハ同時ニ生起シ若クハ爾後生起スヘキ沈墜的充血ノ爲メ出血ヲ見ルコトアリ、但シ此場合ト雖モ唯血液ノ滲透ヲ致スニ止マリ其創傷ノ深部ニ達シテ皮下組織若クハ他ノ軟部ノ稍〻大ナル靜脈小幹ヲ傷ツクルカ或ハ身體ノ適當ナル位置ニ據リ上方ヨリ流下スル血液ノ流出ニ充分ナル時間ヲ供スル時ニアラザレバ多量ノ出血ヲ見ルコトナキモノナリ

是故ニ前文ニ記述スル所ニ據レバ單ニ創傷ヨリ出血スルノミノ狀況ヲ以テハ該創傷ガ生活中ニ起レル者ナルヲ判定スルニ足ラス、且ツ斯ノ如キ判定ヲ爲サントスルニハ寧ロ先ツ創傷ノ位置、其淺深及當該部分ノ性質、當該死體ノ血液ノ性質幷ニ創傷ヨリ流出セル血液ノ量ヲ參考セサル可カラス、稍〻巨大ナル血管幹或ハ極メテ血液ニ富メル臟器ノ損傷ニ就テハ設ヒ血液ニ富メル巨大ノ臟器ニ死後ノ損傷ヲ受ケタルモノト雖モ決シテ實際失血ニ罹リテ

各種ノ生活時損傷ニ於ケル溢血ノ狀態

死亡セル者ノ死體ニ發見スル如キ一般現象ヲ起シ得サルヿヲ考察セサル可カラス

或ル損傷ガ生活中ニ起リヤ否ヤノ斷定ニ關シ當該損傷ノ下部或ハ近圍組織ニ於ケル溢血ノ現景ニ重大ノ價値ヲ措クハ往時ヨリノ慣行ニノミ亦正當ノ理由アルモノナリ、然ルニ此現景ニ關シテモ亦左ノ注意ヲ加ヘサル可カラス

第一ニ、生活時ノ損傷ニ在テモ亦其近圍ニ於ケル著ルシキ溢血ハ殊ニ唯挫創ニ於テノミ發見セラレ切創或ハ刺創ニ於テハ迪ニ僅微ニ止マルノ事實ニ注目スルヲ要ス、切創及刺創ニ在テハ血液ハ斷裂セラレタル血管ヨリノ自由ニ創傷中ニ侵入シ若クハ之ヨリ瀉出セラレ死後斷裂セル組織ト連結スルニハ亦其組織中ニモ侵入スヘシ、然レ𪜈緻疎ナル結締織ガ其近圍ニ存在スルヿ及稍〻大ナル動脈管ノ損傷セラレタルヿノミハ其關係之ニ由テ變化セラレ、逸出セル血液ハ周圍ノ細胞組織ノ網眼中ニ或ハ種々ナル器官ノ層積間ニ廣ク擴入シ、已ニ血液ガ斷裂セル血管ヨリシテ最モ抵抗少ナキ方向即チ創傷ノ裂口ニ流入スヘキハ自カラ明白ナリトス、此狀況若シ存在セサルニハ實際生活中ニ發起セル刺創ガ血液ノ內部ニ向テ流入セシガ爲メ毫モ創傷內ニ血液ヲ殘留セス、或ハ唯僅微ニノミ存シ時トシテハ何等ノ反應現象ヲモ呈スルコトナク、且ツ其蒼白色ナルガ爲メ殊ニ近圍ノ皮下出血ヲ缺如スルニ由リ、死後初メテ發起セルモノヽ如キ觀ヲ呈スルヿアラズトス、此事實ハ已ニカスペル Casper 及リーマン Liman 兩氏（l. c. II. 140）ノ擧示スル所トナリ、兩氏ハ適切ニモ左ノ言ヲ爲セリ、曰ク死亡ノ迅速ナルハ此際重要ノ關係ヲ呈スル者ナリ、即チ死亡ノ愈〻速ニ來ル

末梢的創傷ノ近圍ニ出血ヲ見サルノ因由

ニ從テ溢血ノ發生愈〻僅徵ナル者ナレバナリト、穿創ニ在テハ尚ホ內部出血ノ原因アリテ之ニ加ハルヿ少ナカラズ即チ之ガ爲メ外襲的ノ創傷ヲシテ宛モ溢血ヲ生スヘキ材料ヲ失ハシムルニ至ル、若シ又創傷ヲ受クルノ後直チニ急速ノ失血ヲ兼ヌル他ノ損傷ヲ得タルトキハ同一ノ結果ヲ呈スヘシ、吾人ガ剖檢シタル一婦人ハ犯者タル其夫ノ告白ニ據レバ一ノ鉈ヲ以テ腦ニ達スル多數ノ哆開性斫傷ヲ受ケ之ニ次ク所ノ斬首ニ由テ殺了セラレタル者ナリシニ其頭部ノ創傷ハ毫モ溢血ノ痕跡ヲ呈セズ頸部血管ノ悉トク斷切セラレタル頸部割創モ亦僅微ニ溢血ヲ呈スルノミナリキ、其他手術創モ亦溢血ヲ呈セサルヲ常トス

アー、パルタウフ A. Paltauf 氏(*„Ueber reactionslose vitale Verletzungen. Wr. klin. Wochenschrift* 1889. *Nr.* 37 *u.* 39) ハ末梢的創傷ノ近圍ニ於ケル出血缺如ノ原因ニシテ從前未タ人ノ注目ヲ惹カサリシ者及之ニ關スル二三ノ實例ヲ示シタリ、是レ即チ同時ニ發起スル腦震盪及之ニ關聯スル大ナル脈管運動中樞ノ强劇ナル影響ニ基ツキ爾後之ニ脈管及心臟ノ麻痺ヲ繼起スルノ場合ナリ即チ、パルタウフ氏ハ曰ク『吾人ハ創傷ノ後先ツ血管ノ收縮、加之ナラズ閉鎖ニ由テ血液ノ流出ヲ得サラシメ、爾後流床ノ擴大、壓ノ缺如及心臟作用ノ消失ニ由テ末梢的血管區域ニ於ケル血液流出ニ必要ナル壓力ヲ有セサルニ至ルト想像スベシ』ト、大抵腦震盪ニ伴フ所ノ腦壓迫ニ由テハ持久的ノ脈搏緩徐及血壓ノ斷エサル抵抗ニ由テ同樣ノ結果ヲ來スヿアリ、即チ或ル一定ノ震盪症ニ在テハ突然ノ心臟麻痺ニ因リ、內臟神經ノ損傷的麻痺ニ在テハ其麻痺ニ由テ之ヲ致スモノナリ

死後損傷ニ於ケル溢血ノ缺如並ニ其狀況ニ由テハ死後溢血ヲ生スベキ事由

死體ニ於テハ通例其部分ニ皮下溢血ヲ形成スル材料即チ血液ヲ缺如シ、設トヒ血液ヲ存在スルモ之ヲ排瀉スヘキ血液ニ於テ近圍組織ノ浸潤ヲ來スベキ必要ノ壓力ヲ缺クノ理由ヨリシテ斯ノ如キ溢血ヲ來サヽル者ナリ、但シ此溢血ヲ形成スルニ必要ナル狀況ハ時トノ死體ニ於テモ亦存在スルヿナキニ非サルハ明白ナリ、已ニエンゲル Engel 氏(*„Leichenerscheinungen." Wien,* 1854) ハ死體ヲシテ其頭顱宛モ最低位ヲ取ルガ如キ位置ヲ得セシムルトキハ管ニ頭蓋中著ルシキ低降的充血ヲ生スルノミナラス、亦其試驗ヲ充分長ク持續スルトキハ小血管ノ破裂從テ頭皮ニ於ケル皮下溢血ノ形成及結膜ニ於ケル溢血ノ形成ヲ起スヿアルヲ發見シタリ、吾人(*„Die forensisch wichtigsten Leichenerscheinungen". Viertelj. f. ger. Med.* 1876. XXV.) モ亦縊死者ガ久シク繩索上ニ止マリシ際或ハ血液ノ滲潤ニ由リ生活時ニ形成セラレタル細小溢血ヨリ或ハ皮膚毛細管ガ終ニ上方ヨリ低下スル血柱ノ壓力下ニ破裂スルヨリ、屢〻其下肢ニ於テ發見セラルヽ帽鍼頭大乃至麻仁大ノ表皮下溢血ニ就テ記述シタルヿアリ、然ルニ此機能殊ニ生活時ニ生シタル細小ノ溢血ガ瀕死期或ハ死後ノ血液滲出ニ由テ增大セラルヽノ事實ハ復タ佗ノ身體位置例之バ仰位、俯位或ハ側位ニ際シテ露出セル最低部ノ皮膚ニ於テモ亦稀有ナラサル現象ナリ、其佗亦低位ノ粘膜及皮下組織及他ノ細胞組織ノ當該部分ニ於テモ亦之ヲ發見シ得ヘシ、此現象ハ卒然窒息症狀ヲ以テ死亡シ久シキ間其全體或ハ亦單ニ頭部ノミヲ以テ一側ニ橫臥セシ多數ノ死體ニ於テ發見スル者ニシテ其因由ノ明白ナルガ爲メ最モ學術上ノ利益アル現象ナリ、定型的ノ實例ニ在テハ上方ニ位スル顏

面半部ハ蒼白色ヲ呈シ、他ノ半部ハ鉛青色ニシテ點々小豆大ノ血斑ヲ帶ヒ、結膜ハ上側ニ於テ微ニ充血シ通常細點狀乃至帽針頭大ノ溢血ヲ有スレ𪜈他ニ於テハ大豆大ノ（單ニ滲潤ニ由テ增大セラレタルニ非ザル）溢血ヲ帶ヒテ甚シク且ツ稠密ニ充血シテ現ハレ、而シテ頭蓋骨ヲ除去スレバ鉛青色ナル側邊ハ他側ヨリモ血液ニ富ミ鬆疎ナル細胞織層ハ頭頸筋ノ筋鞘下ノ者ト雖モ溢血斑ヲ帶ビ其大サ小豆大ヨリ大豆大ニ至ルモノアリ、其死體久シキ間俯位ヲ採リ、或ハ加之ナラズ上體懸垂シテ止マリシ場合ニ於テハ此現象尙ホ一層著明ニシテ顏面、前頸及胸廓皮膚ノ高度ナル鉛青色並ニ之ニ伴フ所ノ充脹ハ其天然的死亡ナルニ拘ハラス皮膚中、皮膚下、加之ナラズ（例之バ前頸部ノ）深部ニ位スル細胞組織層ニ發生スル多數著大ナル溢血ハ殊ニ絞扼若クハ壓扼ヲ以テスル暴力的窒息死トノ不幸ナル誤認ヲ來スコトアリ

死後ニ溢血ヲ增加シ又ハ生起スルノ因由及事例

以上ノ觀察ニ據レバ第一ニハ死亡ノ直前損傷的ニ發起セル溢血ト雖モ死後適當ノ體位ニ際シ血液ノ後續的滲出ニ由テ增大セラレ得ヘク、第二ニハ死後ノ損傷ト雖モ亦被傷血管ニ流動性ノ血液ヲ含有シ且ツ其死體宛モ負傷部分ニ壓迫ヲ受ルコトナクシテ上方ニ向フガ如キ位置ヲ取レルトキハ溢血ヲ形成シ得ルコトヲ豫期スヘシ、實際吾人ハ窒息ニ由テ殺死セシメタル犬ニ就テ死後數（二乃至四）時間ヲ經タル後鎚擊ニ由テ頭皮ニ損傷ヲ生シ、尙ホ甚クシキハ頭蓋骨ヲ碎シ、其動物ノ足ニ繩索ヲ繫キ懸垂セシメタルトキ、頭蓋軟部ニ廣大ナル溢血ヲ生起セシムルヲ得タリ、其他吾人ハ亦廣キ死後ノ腦膜內及腦膜外ノ溢血、加之ナラス腦自己ニ於ケル毛細管出血ヲモ觀察シ得タリ、其現象ハ人ノ通知セル腦挫傷ノ症狀ヲ呈シ尙ホ同症ノ如ク主トシテ前額葉及顳顬葉ノ尖端ニ於テ發生セリ、然ルニ此試驗ヲ變形シ犬ニ就キ鎚ヲ以テ下肢ノ骨ヲ打碎シ其死體ヲ頸部ニ於テ懸垂シタルニ吾人ハ破碎セラレタル骨ノ近圍及骨端ニ於テ廣キ溢血ヲ認視セリ、之ニ由テ觀レバ必スシモ單ニ溢血ノ所見ノミヨリシテ其創傷ヲ生活中ニ起レル者ト宣言スルノ理由ナク、且ツ其死體ニ於テハ死後溢血ノ發生ヲ促スヘキ或ル要因アリテ存セサリシヤヲ考察セサル可カラサルコト明白ナリ

生活時及死後損傷ノ區別ト血液凝固性トノ關係

往時ヨリ損傷ノ區域ニ於ケル血液ノ凝固性ニ特別ノ價値ヲ置キ、此狀況ヲ以テ生活時ニ受ケタル損傷ノ特徵ト指定シタリキ、凡ソ死體ノ血液ハ凝固スルコト能ハストナスガ如キハ斷然不當ノ言ナリトス何トナレバ剖檢ノ際每回血管中ニ存在セル流動性ノ血液ハ窒息性血液タルモ亦大氣ニ曝露シテ存スルトキハ比較的少時間內ニ凝固スルヲ實見シ得ベケレバナリ、此故ニ死後ノ創傷ヨリ流出或ハ滲出スル血液ト雖モ亦凝固スルコトナキニアラス、然レ𪜈吾人ハ試驗ニ據リ挫傷及一般ニ皮膚ノ斷裂セラレザル（從テ組織中ニ滲出セル血液ガ外氣ト接觸セサリシ所ノ）損傷ニ於テモ死後ノ溢血ハ亦凝固血液ヨリ成レルコトヲ證明シタリ、是レ此試驗ハ窒息死セシメタル（即チ心臟及脈管中血液ノ流動性ニ止マリシ所ノ）動物ニ於テ施行セラレシガ故ニ血液ノ溢出セル部分ニ於テ初メテ纖維素原（シュミット Schmidt 氏）ヨリ纖維素ヲ生成セシムルニ必要ナル要因（醱酵素）ニ逢着スルヲ證明スル所ノ狀況ニノミ、此狀況ハ亦血液ノ凝固ガ血流ト接觸スル部分ノ破壞若クハ變化ニ比例シテ多少アリ

ト稱スルツェー、ザイデル C. Seydel 氏(*Deutsche med. Wochenschr.* 1892, *Nr.* 7)ノ觀察ニ符合スル者ナリ、然レ𪜈炫ニ注目スヘキハ吾人ノ試驗ニ於テハ常ニ唯死後溢血中ニハ疎鬆ニ凝固セル血液ノミヲ發見シ、生活時ニ生シタル溢血ニ於テ(設ト𪜈毎常ナラサルモ多クハ)見ルガ如キ鞏硬ノ凝固物ヲ認メサリシコト是ナリ、斷裂セル組織ノ網眼中ニ生スル血液ノ凝固ハ死後滲出ニ因スル溢血ノ增大ニ對シ或ル定限ヲ附スルノ一原因ヲナスモノトス、凝固ヲ促進スル窒氣ノ作用ハ哆開創傷ニ在テハ身體若クハ血管中廣大ノ範圍ニ渉リテ其力ヲ逞ウシ得ヘシ即チ大ナル頸部脈管ノ創傷ヨリハ心臟ニ迄達スルコヲ得、又肩位ノ爲メ斷頭術ニ由テ分娩セシメタル大ナル胎兒ニ就キ吾人ハ其斷端ニ溢血ヲ呈シ他ノ身體部分ノ血液ハ流動性ナリシニ拘ハラス硬腦膜竇及心臟中ニ凝固血アルコトヲ發見シタリ

創緣ノ腫脹及反應性充血ハ其發生ニ(設トヒ極メテ短キモ)多少ノ時間ヲ要スル所ノ現象ナリ、故ニ凡ソ負傷後直チニ死ヲ致セシ場合ニ於テハ之ヲ缺如スルヲ常トス、其他創緣ノ腫脹ハ其創傷若シ沈墜性充血ノ爲メ多液性ノ觀ヲ呈スル局處ニ存スルトキハ死後ノ創傷ト雖モ亦之ヲ生起スルコアリ、一方ニハ實際存在セシ所ノ腫脹ハ死體上、一ハ蒸散ニ因リ、一ハ血液及他ノ液體ガ下部ニ低降スルニ因リテ消失スルコアリ。即チ死亡前ニ存シ在セ他ノ腫脹殊ニ水腫的腫脹ガ死後上部ニ位スル皮膚部分ノ血液沈降ニ由テ消失シ或ハ少ナクモ大ニ其強度ヲ減少スルハ人ノ知ル所ナリ、溢血部ノ近傍ニ於ケル漿液性浸潤ハ決シテ創傷ノ永ク死亡前ニ存在セシコヲ判定スヘキ反應的水腫ト看做ス可カラス、何トナレバ斯ノ如キ浸

生活時及死後損傷ノ區別ニ關スル腫脹及反應的充血

潤ハ死亡ノ直前ニ生起セル溢血ニ於テモ亦發見セラレ且ツグッセンバウエル Gussenbauer 氏及レッセル Lesser 氏(*„Ueber Lymphorrhagien in der Umgebung unmittelbar oder kurz vor dem Tode erlittener Verletzungen". Virchow's Arch. f. ger. Med.* 1888, 39. *Band.*)ノ說ニ從ヒ淋巴管ノ破裂ニ由テ生起シ且ツ挫傷ニ因リ溢血ナキモ亦形成スルコアル淋巴液溢出ノ結果ト認メラルヽ者ナレバナリ、ラヴァルレー Lavallée 氏及キョーレル Köhler 氏(*„Décollement traumatique. Deutsche Zeitschr. f. Chir.* 1889, XXIX, *pag* 44)ノ學グル所モ亦之ニ類ス、吾人ノ意見ニ從ヘバ大ナル溢血ノ近圍ニ於ケル此種ノ損傷ハ亦單ニ逸出セル血液ノ凝固作用及血餅ヨリスル血清ノ分離ニ由テモ亦生起シ得ヘキモノナリ

生活時及死後損傷區別ノ困難

上文記載スル所ニ由テ觀レバ生活時ノ損傷ト死後ノ損傷トノ區別ハ往々新鮮ノ死體ニ在テモ頗ル困難ナ感スルモノニシテ前文ニ掲グル各狀況ノ精密ナル注目ヲ要ス、就中死後ノ損傷ニ於テハ通例血液ノ容易ク洗除セラレ得ヘキカ或ハ否ラサルカヲモ檢査スルノ必要アルハ察知スルニ難カラズトス

腐敗ニ陷ルカ或ハ火傷、碎滅等ノ如キ他ノ方法ニ由テ變化セラレタル死體ニ在テハ此區別一層困難トナルヘシ、殊ニ腐敗死體就中腐敗性水死體ニ在テハ其困難最モ甚クシトス、蓋シ一方ニハ所謂浸潤性現象ハ溢血ト誤認シ易ク、他ノ一方ニハ腐敗ノ爲メ(場合ニ由テハ浸潤ノ爲メ)實際存在セシ凝固血ノ溢出モ亦認視シ得ヘカラサルニ至リ、之ニ加フルニ創傷及挫傷ヲ受ケタル部分ニ於テハ正ニ腐敗若クハ(水屍ニ於テ)浸潤ヲ始ムルト他ノ部分

ヨリ早ク且ツ速ニ經過スルヲ常トスレバナリ、然レ𪜈此事實ニ據レバ或ル死體ニ就キ甚シク腐敗シ若クハ其浸潤セルニ拘ハラス損傷ノ近圍ニ於テ凝血ノ溢出ヲ認ムルキハ已ニ此現象ノミヨリシテ其損傷ノ生活時ニ成レルヿヲ判決シ得ヘシ、蓋シ已ニ腐敗ニ陷レル死體ニ於テ生起シタランニハ其凝固ハ柔軟ニシテ且ツ腐敗ニ由テ容易ク液化シ得ヘキヲ以テナリ

（b）他ノ死因ノ除斥 *Der Ausschluss anderer Todesursache.*

他ノ死因トハ雖ニ他ノ暴力的死亡ノミナラス天然ノ死亡ヲモ指ス者トス、然レ𪜈單ニ天然ノ死亡（正死）ナルヤ否ヤヲ精密ニ檢査スルノ必要ハ唯特別ノ場合ニ於テノミ存在スルヿ論ヲ俟タズ蓋シ剖檢ノ際全ク健康ノ人體ナリシヿヲ證明シ且ツ重要ナル器官ニ於テ其通性ニ隨ヒ死ヲ來スニ足ルベキ粗大ノ損傷ヲ生活中ニ發起セルヿ明白ナルキハ天然死亡ノ疑ヲ存スルノ理由決メ之レ無ケレバナリ、之ニ反シテ損傷及其結果ノ外尚ホ夙ニ存在シ或ハ爾後創傷ニ關係ナク生起セル他ノ病的機態ヲ有シ其病機ニメ經驗上死亡ヲ致スニ足ル者ナルカ或ハ玆ニ最近死因トメ認識セラレタル現景ガ損傷（虐待）ニ由テモ狹義ニ於ケル疾病ニ由テモ一樣ニ生起セラレ得ヘキ者ナルキハ是レ天然死ナルカノ疑ヲ生スベキ必要アリトス

即ヂ衰憊セル一老人毆鬪ノ爲メ頭部ニ打擊ヲ受ケ或ハ頭髮ヲ扯斷セラレタル際倒仆シ且ツ即時ニ若クハ少時後ニ死亡スルヿアルヘシ是レ實際吾人ノ逢着セル事實ナリ、此場合ニ於テ腦或ハ其表面ニ於ケル卒中性出血ヲ最近死因トシテ證明セルキハ漿樣變性或ハ動脈瘤ニ

天然的死亡ナルカノ疑察及其鑑別

全上（殊頭腦損傷）ニ關スル實例

罹レル腦血管ノ破裂ガ虐待若クハ之ニ關聯スル頭部震盪ニ由テ來レルカ、或ハ毆鬪ノ際ニ於ケル精神衝動、同時ノ亞爾箇保爾酩酊等ニ由リ久シク破裂ノ素因ヲ有セシ血管ヲ破裂セシメタルカヲ判決スルヿ極メテ困難ナルヿアリ、其他亞爾箇保爾中毒者ニ暴行ヲ與ヘタルキモ亦同一ノ困難ニ逢着スヘシ、蓋シ慢性亞爾箇保爾中毒ニ繼起スル血管ノ脂肪變性ヨリ出血ヲ來スノミナラズ酒客ニ於テモ屢〻發生スル脈管性硬腦膜炎ヨリモ亦出血ヲ來スヿアレバナリ、而シテ此場合ニ於ケル出血ハ或ハ自然ニ*或ハ急劇ナル震盪ノ結果トシテ現ハルヽヿアルモノトス、此等ノ場合ニ於テモ亦其狀況ヲ種々ノ方向ニ隨テ精密ニ考察シタル後ニ非サレバ之ガ判決ヲ下ダス可カラズ、然レ𪜈其判決タルヤ多クハ單純ノ概定的判斷ノ以上ニ出ツル能ハス且ツ設ヒ出血ノ主因ヲ暴行ニ歸スヘキ理由アルキト雖モ尚ホ每回其暴行ガ（概シテ輕微ナル者ナリシ時ハ）致死ノ結果ヲ取リシ誘因タル特異ノ身體的性質ヲ明言セザル可カラザルハ自ツカラ明白ナリトス

*所謂硬腦膜血腫モ亦之ニ屬ス、是レ光像鏡ヲ以テ「メタヘモグロビン」ノ線條ヲ認視スベキ流動性褐赤色ノ血液ヲ充盈セル漿狀形成物ニメ當該腦半球ノ凹窪狀扁坦部ニ一致スル硬腦膜炎性洗積物ノ層積互ニ離開セル者ヨリ成ル、斯ノ如キ血腫ハ屢〻著シキ症候ヲ來スヿナクシテ驚クベキ長時日ニ存在スルヿアリ、シュリール Schlüter 氏ノ報告セル一例（Gehirndruck nach Schlägen auf den Kopf, Tod 12 Tage nach eilitener Misshandlung. Friedreich's Blätter f. ger. Med. 1882. pag. 393）ニテハ虐待ヲ受クルノ前已ニ斯ノ如キ血腫ヲ存在セシヿ明白ナルモノヽ如シ

殊ニ學校生徒ニ關スル場合ニシテ疾患前少時ニ受ケタル鞭打或ハ其他輕少ノ虐待又ハ損傷

ナメ腦膜炎トノ原因的關聯ヲ有セシメ得ヘキ事例ハ比較的ニ頻繁ナリトス、吾人ハ特別ノ論文ヲ著ハシ且ツ多數ノ實驗(*Wy. med. Wochenschr.* 1888, *Nr.* 7-9)ニ憑據シ正ニ此場合ニ於テ速了ノ見解如何ニ恐ルヘキカ且虐待ト腦膜炎トノ間ニ於ケル原因的ノ關係ハ外部或ハ內部ノ損傷アルコトヲ證明シ且之ヨリ膿性傳染ノ發起セルコトヲ表明シ得ル場合ニ非サレバ適切ナラサルコトヲ辨明シタリ、而ノ此等場ノ合ニ於テモ亦腦膜炎ハ單ニ偶發的ノ創傷病トシテ鑑定セサル可カラス、其疾患ノ經過ハ單獨ニテハ如何ナル方向ニ於テモ證明ノ効アルモノニアラス、殊ニ虐待ヲ受ケタル後極メテ少時ニ於ケル病候ノ發起ノミヲ以テハ決ノ其原因的關係ヲ證明スルニ足ラサルナリ、多數ノ場合ニ於テハ全ク結核性腦膜炎ト中耳炎ニ由テ誘起セラレタル腦膜炎トヲ除クノ外、自發的疾患トナスヲ以テ最モ其實ヲ得タルニ近キモノトス、自發性腦膜炎ノ屢〻發見シ且ツ其後決シテ愈タル可カラサル鼻咽頭腔及其腹腔ノ解剖的檢査或ハ病歷ニ據リ當該人體殊ニ小兒ガ此諸腔ヲ被覆スル粘膜ノ加答兒性炎加之ヲラス化膿性炎ニ罹リシコトヲ明知セシムル場合ニ於テハ殊ニ然リトス、其他遠隔セル局處ノ炎症ヨリ腦膜炎ヲ發起シ且ツ格魯布性肺炎ノ經過中往々腦膜炎ヲ起スコアルハ亦看過ス可カラサルノ事實ナリ(ワイクセルバウム Weichselbaum 氏)

吾人ガ最近死因ト認メタル現景ニシテ若シ之ヲ生起スルニ久シキ時間ヲ要シ且ツ其所見ハ

響ニ受ケタル虐待ト原因上ノ關係ヲ有スルカ或ハ天然的疾患ノ結果トシテ生起スルカノ疑

ヲ生シタルトキハ前文ニ論述セル原因ノ外殊ニ死因タリシ疾患ノ第一現象ガ何時發起セシ

小兒ノ損傷ト腦膜炎トノ關係

自然的疾患ト損傷ニ續起セル疾患トヲ鑑別スルノ注意

カニ注目シ、亦此現象ガ虐待ト同時ニ現ハレシカ、或ハ其少時後ニ來リシカ、或ハ之ニ反ノ久シキ時日ヲ經タル後始マリシカノ疑察タルヤ此虐待ト疾患ノ第一發症トノ間ニ愈〻長キ時間ヲ經過シ、其虐待ニ隨伴スル直接ノ結果愈〻輕微ニ過キス且ツ經驗上損傷(虐待)ニ由ラサルモ當該疾患ヲ誘起シ得ヘキ要因ヲ病歷上ヨリ發見スルコト愈〻多キニ從テ愈〻減少スヘキコト最モ親易キノ理ナレハナリ、斯ノ如キ病機ヲ判定スルニ際ノハ最モ大ナル注意ヲ施スヘキモノニノ、負傷部ヨリ遠隔セル器官中ニ存スルガ故ニ剖檢者ヲシテ其病機ヲ自發性ノ者ト認定セシメ易キモ實ハ損傷ニ由テ誘起セラレタル續發的ノ疾患ニ非サルカヲ每回精密ニ考察スルノ必要アリトス、而ノ吾人ハ殊ニ肺炎性疾患ヲ以テ直ヤニ原發的病機ト認メサル樣注意セサル可カラズ、蓋シ肺臟ハ正ニ損傷ノ經過中最モ屢〻疾患ニ罹リ易キ器官ニ屬スルコト吾人ノ通知セル所ナレハナリ、是レ即ヲ沈墜充血性肺炎ガ重キ損傷ノ經過中ニ於テ最モ通常發生セラレ、其他肺栗性(轉徙性)肺炎ガ充血性疾患ノ經過中ニ於テ最モ通常發生セラレ、其他肺栗性(轉徙性)肺炎ガ充血性疾患ノ經過中ニ於ケル神經麻痺性充血ニ由リ或ハ吸入セル口液ニ因テ肺患殊ニ頭部損傷ノ後或ハ肺臟中ニ來リ、一時性或ハ持久性ノ人事不省ヲ伴フ所ノ種々ナル疾炎ヲ發起スルヲ以テ察知スヘキ所ナリ(トラウベ Traube 氏)、故ニ或ル肺病ヲ以テ原發性ノ症ト認メ(頭部)損傷ト原因的ノ關係ナシト宣言スルニハ豫メ諸般ノ狀態ヲ精密ニ考察セサル可カラサルナリ、ロッス Rochs 氏(*„Ueber die Kopfverletzungen mit Berücksichtigung ihres Zusammenhanges mit consecutiver Lungenentzündung“. Vierteljahrsschr. f.*

全上ノ實例

gerichtl. Med. 1887, *pag.* 12)ハ定型性格魯布性肺炎ニ關シ適切ニ論シテ曰ク斯ノ如キ場合ニ於テハ肺炎ト頭部損傷トノ原因的關係ヲ證明スルヿ概シテ能ハサル者ナリト

此種類ニ屬シテ頗ル興味アル一例ハ左ニ掲クルガ如シ、年齢十三歳ノJ.T.ナル者其死前十四日ニ於テ其ノ主人ニ由テ虐待セラレ主人ハ同人ヲ扛擧シ而シテ之ヲ床上ニ投擲シ、足ヲ以テ蹂躙シ、其ノ喉頭ニ數多ノ拳擊ヲ加ヘタリ、翌日同人ハ頭痛及右膊痛ヲ訴ヘ、左前頭部ハ腫脹シ且ツ青色ヲ呈シタリト云フ、爾後八日間腫脹ハ增加シ頭部及他ノ體部ニ箇々ノ膿疱ヲ發生シ更ニ三日ヲ經ルノ間他ノ膿疱之ニ加ハレリ、然ルニ第十一日ニ至リ該被害者ハ神識ヲ失ヒ且ツ死亡ニ至ル迄此狀態ニ止マリ斯ク神識ヲ失ヒタル際初メテ醫師ヲ招喚シタリ、其裁判的剖見ニ於テハ身體甚シク痩削シ其皮膚少シク黃疸性ヲ徵スルヲ認メ、左前頭突起ニハ一圓銀貨大ノ腫脹セル局處アリテ表面乾燥シ且ツ波動ヲ呈セリ、左眼瞼ハ腫脹シ且ツ閉鎖シ、全體殊ニ顏面及四肢ニ於テ三十乃至五十箇ノ散點性膿疱ヲ存シ、豌豆大乃至榛實大ニシテ軟熟シ、一部ハ帶黃白色、一部ハ肉汁樣ノ液ヲ充塡シ、其近圍ニハ硬結ヲ見ルヿナカリキ、此膿疱ヲ剪取スレバ殆ド其全內容物ヲ排瀉シ且ツ萎縮セリ、更ニ此膿疱ノ變形物トメハ殊ニ顏面ニ於テ皮下細胞織ニ達シ痂層ヲ以テ蓋被セラルヽ類圓形ノ潰瘍ヲ存セリ、而メ左前頭ニ於ケル此ノ如キ局部ヲ切開シタルニ適ニ濃稠ナル黃色ノ膿ヲ漏シ其軟部ノ全體ハ骨ニ至ル迄膿ヲ含ムヲ見タリ、骨膜下ニハ顱頂(?)ニ於テ十錢銀貨大ノ膿竈ヲ有シ、頭蓋頂ハ非薄ニメ損傷ヲ認メス、其內面ニ於テハ左顱頂骨ノ前上額部ニ當リ一層ノ膿液ヲ有セリ、此位置ニハ腦膜中一圓銀貨大及較ヽ之ヨリモ小ナル壞蝕セル局處ヲ存シ濃厚ノ膿ヲ以テ掩ヘリ、內腦膜ハ漿液ヲ以テ浸潤セラレ腦ト共ニ淡色ヲ呈セリ、而シテ頭蓋底ニハ全ク損傷ヲ認メサリキ

兩肺ニハ類黃色ヲ有スル數多ナル榛實大楔楔ノ結節ヲ有シ、心臟ハ弛緩シ、肝臟ニハ脂肪變性ヲ呈セシモ其他ハ正常ノ狀態ヲ現ハセリ、此所見ニ基ツキ剖檢者ノ一名ハJ.T.ガ初メ左前頭部ノ頭蓋軟部ニ於ケル挫傷及化膿ノ爲メ膿毒症ニ罹リ、次ニ全體殊ニ皮膚ノ繼發性膿毒轉徙ヲ來シタルガ爲メ斃死セル者ナリト鑑定セリ、然ルニ第二ノ法醫ハ其皮疹ヲ以テ當時同地ニ流行シタル痘瘡ナリト宣言シ且ツ左前頭部ニ於テ存スル局處ヲ融合性痘瘡ニ由テ生起シタル壞疽性ノ腐化ナリトシ、而メJ.T.ハ天然痘及續發性膿毒症ノ爲メ天然ノ死亡ヲ遂ケタル者ニシテ虐待ノ結果ニ由テ斃レタルニアラスト鑑定シタリ

裁判所ハ醫科大學ニ此事件ヲ移シタルニ醫科大學ハ左ノ如ク宣言セリ、曰ク剖檢ノ所見ニ據レバJ.T.ハ腦膜ノ化膿性炎及前額腦瘍ニ繼起セル膿毒症ニ由テ死亡シ、此膿毒症ハ天然痘ニ由ルニアラズ挫傷ニ由テ誘起セラレタルヿ疑ヲ容レズト

該皮疹ヲ天然痘ナリトスルノ認定ヲ駁擊スルニハ多般ノ理由アリ、第一ニ膿疱ハ一頓ニ生起セスメ數日ノ經過中ニ發生セリト被害者母親ノ申立アレ𪜈天然痘ノ發疹ハ非常ニ迅速ニシテ決シテ緩慢性ニ來ル者ニアラス、其他膿疱ノ若干ハ已ニ乾燥シ或ハ尙ホ稀薄ノ液ヲ以テ充盈セラルレ𪜈天然痘ニ於テハ悉ク畧ヽ同時ニ發生スルガ故ニ爾後ノ變化モ亦殆ト同時ニ成立スルヲ常トシ大小不同ノ膿疱殊ニ榛實大ニ至レル膿疱ヲ存セシトノ申立ハ天然痘ノ現象ニ

一致セザル者ナリ終リニ或ル膿疱ハ類白色ノ内容物ヲ含ミ他ノ膿疱ハ肉汁様ノ内容物ヲ有シ之ヲ刺開スルノ後萎縮シタリトスレ𪜈天然痘ニ於テハ此事ナシ、已上ノ事實ハ皆其膿疱ヲ痘瘡ナリトスルノ説ヲ排駁スルニ足ルモノナリ、今ヤ剖檢前J.T.ノ皮膚ニ於テ發見セル如キ皮疹ハ實際(設トヒ例外ト雖モ)膿毒症ニ於テ發見セラレ且ツ明白ナル他ノ膿毒症現象ヲ存スルニ由テ觀レバ其醫師ノ一名ガ天然痘ト看做シタル膿疱ハ膿毒性皮膚病ナリシ事復タ疑フ可カラス其他又J.T.ガ已ニ自宅ニ歸着セル日ニ在テハ左前頭部ノ腫脹及青色、從テ此部分ニ於ケル挫傷ノ著シキ現象ヲ呈シ、當時已ニ身體違和并ニ頭部及右膊ノ疼痛ヲ訴ヘツヽ引續キ平臥シ、其他皮疹ノ發生ハ左眼上ニ於ケル腫脹ノ增大ト同時ニ來レルヲ以テ觀レバ左額膿瘍ノ發生、從テ硬腦膜ノ限廓的化膿性炎并ニ繼發的膿毒症ハ挫傷ト原因上ノ關係ヲ有シ從テ同人ハ暴力的死亡ニ罹リシヿ明白ナリトス、然レ𪜈當該ノ挫傷ハ明カニ鈍端ヲ有シ、堅硬ナル物體ヲ以テ打擊スルカ又ハ之ニ對シテ衝突スルノ結果ナルヿ明白ニシテ實際此被害者ガ申立シ如ク死亡前十二日ニ當リ頭部ニ受ケタル打擊或ハ投擲ノ際頭部ヲ以テ床上ニ打擲セシガ爲メ發生セシ者ナリトスルニ妨ケナキナリ

結核病ノ發生ト損傷トノ關係

結核ハ損傷ニ由テ發生シ得ベキヤノ疑問ハ法醫學ノ實際上敢テ稀有ナラサル者ニシテ且ツ容易ク解答ヲ與ヘ得ヘキ種類ニ屬セリ、義父ノ爲メ滿五ケ月間慘酷ノ方法ニ於テ虐待セラレタル三歳ノ女子ヲ剖檢スルノ際プラント Brand 氏(Viertelj. f. ger. Med. XXXII, pag. 259)ハ新舊不同ノ多數ナル挫傷及皮膚剝脫、粟粒結核及大豆大ノ膿性結節ヲ發見シタリ、茲ニハ膿竈或ハ乾酪竈ヲ存在セス之ニ反メ組織ノ崩壞、從テ血行徑路ヲ通シテ積屑ヲ流走セシムベキ機會ヲ與ヘタル多數ノ損傷ヲ認メ、傍ラ不良ノ衛生狀態ハ其傷害ヲ助長スルノ作用ヲ營ミ得ヘカリシガ故ニブランド Brand 氏ハ粟粒結核ト虐待トノ間ニ原因的ノ關係ヲ有シ得ヘキ者トシ、加之ナラス大ニ之ヲ信スベキノ理由アルヿヲ論セリ、而メ後其義父ハ死刑ノ宣告ヲ受ケタリキーレーベルト Lebert 氏(千八百七十二年及千八百七十七年)ブレーメル Brehmer 氏(„Die Aetiologie der chronischen Lugenschwindsucht". Berlin 1885)メンデルスゾーン Mendelssohn 氏(„Traumatische Phthise." Zeitschr. f. klin. Med. 1885, X, pag. 108. 同氏ノ詳細ニ解析セル九例ヲ掲ク)等ノ諸氏ハ肺ノ挫傷及創傷ノ後肺癆ヲ生起スルヿアルヘシト論シ、クラスケ Kraske 氏(„Ueber tuberculöse Erkrankung von Wunden". Centralbl. f. Chir. 1885, Nr. 47)ハ結核性傳染ガ創傷ヨリ起レルヿヲ信スヘキ數多ノ實例ヲ見タリ、爾後之ニ關スル多數ノ觀察ハ復タ此關係ニ於ケル疑ヲ存セサラシムルニ至レリ、本題ニ關メ特ニ重要ナルハレーマン Lehmann 氏(Deutsche med. Wochenschr. 1886, Nr. 9)及エルゼンベルヒ Elsenberg 氏 Berl. klin. Wochenschr. 1886, Nr. 35)ノ包莖切開ヨリスル結核接種ノ報告及アイゼルスベルク Eiselsberg 氏(Wr. med. Wochenschr. 1887. Nr. 53)ガ一方ニハ此事件ニ關スル多數ノ引用書ヲ列擧シ、他ノ一方ニハ不潔ノ器械(針、小刀、注射器)及結核患者ノ襯衣ヨリスル結核接種ノ實例四件ヲ掲クル報告ナリ、(又アー、ザーリス A. Sahlis 氏ノ著頭蓋創傷ト腦結核トノ關係 Die Beziehungen der Hirntuberculose zu Traumen des Schädels. "Bern. 1888 Diss. 及ラッヘル Lacher 氏ノ説 Friedreich's Bl. 1891 pag. 321 ヲ參看スヘシ)、結核ハ胸廓ノ損傷殊ニ穿刺性胸部創傷後ニ發生スルヿ最モ多キガ如シ、殊ニ吾人ハ屢〻穿

損傷ヨリ結核ヲ誘起シタル實例

刺性胸部創傷ヲ受ケタル後數週或ハ數月ヲ經テ結核性胸膜炎及其繼發症ヲ發起シタルガ爲メニ死亡セシ人體ヲ剖檢シタル□アリ、胸膜炎自己ト刺傷トノ原因前關係ハ通例明白ナル者ナレ□何故ニ其胸膜炎ガ結核性ヲ有スルカノ理由ニ至テハ稍□不明ナリ、其人體若シ負傷ノ時ニ當リ則カニ結核性ナリシカ或ハ剖檢ノ際結核性ノ硬結肺尖ニ於ケル陳舊ノ乾酪竈或ハ乾酪化セル氣管枝尖等ヲ發見シタランニハ已ニ存在セシ結核ノ爲メ、或ハ之ニ對スル素質ノ爲メ、從テ『被傷者ノ特異ナル體質』ノ爲メ、其胸膜炎ニ結核性ヲ具有シタリト認ムルノ理由ハ存立スルナリ、然ルニ斯ノ如キ原因ヲ發見セサルトキハ其負傷ハ『一般ノ性質ニ從ヒ』結核ヲ繼起セシメタリト主張スル「殆ント能ハス、寧ロ損傷ニ由テ誘起セラレタル炎症炎症自己ト雖モ固トヨリ斯ノ如キ損傷ノ絕對的必然ナル結果タラサル者ナリ」ハ吾人ニ不明ナル或ル偶然ノ狀況ニ由リ結核性ヲ享受シタル者ト宣言セサル可カラス、理論上ニハ原發的創傷幷ニ之ニ由テ誘起セラレタル炎性狀態ハ結核菌ノ侵入ヲ進促スル要因ヲ形成スル者ト認メサル可カラス、而シテ此結核菌侵入ハ其被傷者ノ親シク結核患者ト交通スルトキハ一層容易ク行ハレ得ヘキ者ナリ、故ニ前記ノ觀察者ハ肺部被傷者カ肺痨家ト同居スル□ヲ嚴重ニ戒止セリ

損傷殊ニ衝突等ヨリ癌●腫●ヲ誘起シ得ヘシトナスノ說ハ況ク俗人ノ間ニ行ハレタリ、學術上ニハ一般ニ此事ナシト言ヒ能ハサレ□實際ニ於テハ唯特別事情ノ輳合スル場合ニ於テノミ稀極的ニ斯ル原因的關係ノ存在ヲ明言シ得ヘキノミ近時クレーメル Cromer 氏 (Würzburger Diss. 1885) ハ背部ニ重キ材木ノ墜落シタル以來腎臟癌ヲ發シテ負傷後十ケ月ニ死ヲ致セル一例ヲ

損傷ト癌腫トノ關係

報告セリ同氏ハ又他ノ書篇ヨリ之ニ類スル十五件ノ實例ヲ列擧シタリ

致死的損傷ノ外同時ニ存在スル損傷ノ死亡原因上關係

致死的ト認メラレタル損傷ノ外尙ホ一若クハ數箇ノ損傷ヲ發見シタルトキハ第二或ハ第三以下ノ損傷ガ其死亡ヲ來セシモノニ非サル□ヲ決定スルノ必要アリ、而シテ又剖檢ノ所見或ハ其場合ノ特別事情ニ據リ狹義ノ損傷的暴力以外ニ或ル佗ノ暴力アリテ該死亡者ヲ侵シ其死亡ノ原因ヲ爲シタルトキハ右ト同樣ノ必要ヲ生スルモノトス

併存的死因及死類ノ先位

密ニ考察セサル可カラス、但シ此症候ハ後文特別ニ論述スヘキガ故ニ此關係ニ於テハ各□當該ノ章ニ讓リ且ツ其諸章ニ於テハ同時ニ數損傷ヲ發見スル場合ニモ論及スル所アルヘシ、故ニ茲ニハ唯スクルツェスカ Skrzeczka 氏* ガ適當ニ命名セシ所ノ併存的死因(集合死因) *concurrirende Todesursachen* ノ湊合ハ管ニ自殺ノ場合ノミナラス(自殺ニ於テハ固ヨリ最モ屢□之ヲ見ル)他ノ原因ヨリ來レル殺死ニ於テモ亦之ヲ發見スル□アルニ注目スヘシ

*千八百六十八年法醫學四半年報(Vierteljahrsschr. f. ger. Med. 1868 V, 284)ニ於テリーマン Limann 氏(l. c. II, 60)ハ併存的死因ニ代ヘ『死類ノ先位』Priorität der Todesart ナル語ヲ使用セリ、此名稱ハ全ク適正ナリト雖モ尙ホ民法上重要ノ疑問タル『死亡ノ先位』Priorität des Todes ト錯誤セラル□ノ虞アリ、是レ二人以上ノ死亡者中何レカ前キニ死亡セシカ(瑞國民法第二十五條)殊ニ二人以上ノ人カ同一ノ災害ニ由リ或ハ他ノ原因ヨリ同時ニ其生命ヲ失フタル際(普國普通國法第一篇第一章第三十九條)其何レカ先キニ死亡セシカノ疑ヲ生シタル場合ニ於テ來ル所ノ疑問ナリ、此故ニスクルツェスカ Skrzeczka 氏ノ使用シタル名稱ハ死類ノ先位ナル語ニ優レリ、此種類ノ一例ハ小船ニ乘リタル夫婦ノ溺死セシ際何レガ長ク生存セシヤノ疑問ニ關シラカッサイヌ Lacassagne 氏 (Question de survie. Consultation médico-légale dans l'affaire Rivoire", Lyon 1883)其鑑定ヲナシタル□アリ

數損傷ノ湊合ヨリ來ル死亡

死因ノ併存

仝上ニ關スル三疑問

一ノ屍體上數多ノ損傷ヲ發見シタルトキ玆ニ發見シタル損傷ノ一ダモ特自ニハ死亡ヲ起スニ足ラスト雖モ一切ノ損傷ヲ湊合スレバ能ク死ヲ致スニ足ルヘキ場合アリ、墺國刑法第四十三條幷ニ墺國改正草案第二百三十六條及獨逸刑法第二百二十七條ハ此場合ニ關シテ規定セル者ナリ、吾人ハ已ニ上文ニ於テ斯ノ如キ事件ニ注目シ且ツ其死亡ハ通例震盪ニ由リ若クハ失血ノ總加ニ由テ來ルヘキコトヲ記載シタリ

其他明カニ死亡ヲ來セシ所ノ損傷ノ傍ラ一箇若クハ數箇ノ輕傷或ハ重傷アレトモ其一ト雖特自ニ又ハ他ノ損傷ト湊合シテ生命ニ危險ナル損傷ト認メラレザル場合ナキニアラズ、斯ノ如キ場合モ亦稀ニ特別ノ困難ヲ來スコトアリ

然レトモ玆ニハ同一ノ人體上其各箇ノミニシテ能ク死亡ヲ致スニ足ルヘキ二箇以上ノ損傷アル場合ヲ目的トノ論述セントス、是レ嚴正ナル意義ニ於ケル『死因ノ併存』(死因ノ集合)ニシテ當該ノ諸損傷盡ト雖モ一名ノ犯者ニ由テ加ヘラレタルニアラズ各、他ノ犯者ニ由テ各箇ノ損傷ヲ受ケタル場合ニ於テ最モ重要ノ關係ヲ有スルモノトス

斯ノ如キ場合ニ於テハ通例三箇ノ疑問ヲ解釋スルヲ要ス

(一)現在ノ損傷中何レカ致死的ノ性質ヲ有スルヤ

(二)致死的ト認メラレタル損傷ハ皆同時ニ受ケタル者ナリヤ或ハ否ラサルヤ、若シ然ラズトスレバ何レヲ先キニ受ケタルヤ

(三)其損傷ノ何レガ先ツ生命ヲ絕ナシヤ

其一(數箇ノ損傷中何レカ死亡ヲ致シタルカノ疑問)

(一)第一ノ疑問ヲ答フルノ困難ナルハ、單一ノ損傷ニ於ケル如ク其損傷ガ實ニ當該事件ノ死亡ヲ來セシヤ否ヤヲ宣言スルニアラズシテ、二箇以上ノ現在損傷中其各箇ガ死亡ヲ致シ得ヘキヤ若クハ之ヲ致サヾルヲ得サリシヤヲ宣言スルノ點ニ在リトス、法醫ハ之ニ由テ單一ノ損傷ニ於ケル如ク單ニ原因ト結果即チ損傷ト死亡トノ間ニ於ケル關聯ヲ檢定スルニ止マラス寧ロ豫後鑑定ノ範圍ニ入ラサルヲ得サルモノナリ而ノ豫後鑑定ノ不確實ヲ感スルコト法醫ノ實際ニ於ケル如ク甚ダシキ者決シテ他ニ之レナカルヘシ

墺國刑法第百四十三條ハ數人間ニ起レル殿鬪ニ際シ或ル人ノ殺死セラレタルトキ其被害者ニ一ノ(二箇以上ニアラス)致死的損傷ヲ加ヘタル者ハ何人タリトモ故殺ノ罪ニ當ルヘキヲ規定セリ、此文義ニ據レハ法律ハ致死的損傷ナル語ヲ以テ從前吾人ノ確定シタル如ク實際死亡ヲ來セシ損傷ノミヲ指スニ非スノ偶然死亡ノ結果ヲ來セシ所ノ損傷ヲモ包括スルニ至ルモノナリ、而シテ〜ルブスト Herbst 氏(l. c. 308) モ亦同樣ノ意義ニ於テ第百四十三條ヲ注釋シテ曰ク『致死的傷害ナル語ニ由テハ唯特自ニ(即チ其他ノ損傷及暴行ニ關係ナク)死亡ヲ來スニ足ル者ノミヲ理會スヘシ』ト、氏ハ更ニ之ニ附言シテ曰ク『或ル損傷若シ此性質ヲ有スルトキハ其死亡ガ實際之ヨリ起ルト或ハ他ノ犯者ガ與ヘタル同樣ノ致死的傷害ヨリ起ルトニハ全ク關係ナキモノナリ』ト、致死的損傷ナル語ノ意義ヲ斯ノ如ク理會スルノ如何ニ不明瞭ナルカハ左ノ事實ニ由テ知ルヲ得ヘシ、即チ一方ニハ吾人ノ知ル如ク初メ佳良ノ豫後ヲ徵セシ所ノ損傷ト雖モ屢〻致死ノ結果ヲ來シ得ヘク、他ノ一方ニハ最モ危篤ナル損傷ト雖

モ亦治癒スルコトナキニアラスシテ絶對的ニ致死的ト名クヘキ損傷ハ本來實ニ僅々ニ過キサル者ナリ、果シテ然リトスレハ此刑法條項ノ意義ニ於ケル致死的損傷ト宣言スヘキ損傷ト雖モ其被害者ガ他ノ損傷ニ由テ殺死セラルヽニ非サレハ敢テ生命ヲ奪フニ至ラス從テ致死的トナラスシテ終ルノ虞固ヨリ之レナキニアラサルヘシ、此駁議ハ斯ノ如ク適切ナリト雖モ實際ノ場合ニ於テ吾人ハ學術上ノ嚴正ナル要求ヨリモ寧ロ刑法上ノ必要ニ注目セサル可カラス、而シテ死體上損傷ノ併存ヲ見ルトキハ經驗上其何レカ死亡ヲ來スヲ常トスルカ、從テ當該ノ場合ニ於テモ亦特自ニ死亡ヲ來スニ足ルモノナルカヲ定メ此意義ニ於テ其損傷ヲ致死的ト宣言スヘキノミ

(二)二箇以上ノ致死的損傷ヲ如何ナル順序ニ於テ受ケタルカノ疑問ニ關シテハ、第一ニ各箇ノ損傷上ニ見ル所ノ生活的反應現象ノ程度ヲ觀察セサル可カラス、何トナレハ健全ノ生體ニ受ケタル損傷ハ概シテ後ニ受ケタル者ヨリモ比較的强烈且ツ廣大ナル生活的反應現象ヲ呈スヘキヲ以テナリ、然レ𪜈此豫定ハ其他ノ狀況全ク同一ナル場合ニ於テ適當スルノミ蓋シ上文ニ記載セシ如ク新鮮ナル創傷ノ生活的反應現象ハ主トメ創傷ヨリノ出血及其近圍ニ於ケル出血ニ由テ誘起セラルヽ者ナルヲ以テ初メ受ケタル損傷ガ血管ニ乏シキ局部ニ當リ後ニ受ケタル者ガ多血性ノ組織或ハ加之ナラス稍ヽ大ナル血管ヲ破リシ場合ニハ後ニ受ケタルコト明白ナル損傷ト雖モ初メ受ケタル者ヨリ遙ニ强劇ナル反應症候ヲ現ハスコト必然ナレハナリ、第一ノ損傷ニ由テ生起セラレタル瀕死期ニ於テ第二ノ損傷ヲ受ケタルトキハ反應

其二(二箇已上ノ致死的損傷ヲ受ケタル先後ニ關スル疑問)

症候ニ於ケル差異ハ最モ明白ニ現呈セラルヘシト雖モ第一ノ損傷ニ由テ人事不省或ハ昏懵ノ狀態ニ陷リシ時ニ受ケタル他ノ損傷ハ曾ニ强劇ノミナラス第一ノ者ヨリモ一層劇甚ナル反應現象ヲ呈スルコトアルヘシ、是レ即チ下文ニ揭クル實例ニ由テ見ルヘキ所ナリ

或ル場合ニ於テハ二箇以上ノ損傷ノ順序ヲ確定セシムヘキ他ノ要因ヲ存スルコトアリ、例之ハ自殺者ニ於テ同人ガ已ニ一定ノ損傷ヲ來セシ後齊シク生命ニ危險ナル第二ノ損傷ヲ生スルニ足ルヘキ力ヲ逞發シ得タルヤ否ヤノ事情是ナリ、蓋シ自殺者ニ於テ即時ノ死亡或ハ少クモ他ノ行爲ヲ營ム可キ能力ノ即時廢絶ヲ誘致セシ所ノ損傷ハ最後ノ損傷ナルヘキコト毫モ疑ヲ容レサレハナリ

(三)發見セラレタル損傷中先ツ死亡ヲ致セシ所ノ損傷ハ何レナルカヲ區別スルニハ、第一ニ其何レガ他ノ損傷ヨリモ速ニ死ヲ致スニ適セシ者ナルカヲ觀察スルヲ要ス、普通ノ經驗ハ此關係ニ於ケル指導ヲ與フルモノニノ負傷セル器官或ハ器官部分ノ直接的致命性並ニ此器官ニ於ケル損傷ノ輕重及廣狹、次ニ上文詳論セシ所ノ最近死因ナルモノヲ觀察セサル可カラス

其最近死因例之ハ失血ガ最モ著明ニ現ハレ而シテ之ヲ一定ノ損傷ニ歸スヘカリシトキハ此疑問ノ解答ハ比較的容易ナリ

然ルニ數多ノ損傷アリテ其各箇ガ失血ヲ來スニ適スル者ナリシトキハ何レノ損傷ヨリシテ速ニ且ツ多量ニ血液ヲ流出セシメ、從テ其何レカ同一ノ狀況下ニ於テ各異ノ人體上早ク死亡

其三(現在ノ數損傷中何レカ先ツ死亡ヲ致セシカノ疑問ノ解答)

ナ來シ得タリシカナ明言シ得ヘキ固ヨリ少ナカラズ、然リト雖モ同一ノ人體ニ在テハ多量ノ出血ニ由テ直ナニ生命ノ危險ナ來スヘキ二箇以上ノ損傷ナ全ク區別シ能ハサルナ常トセリ、蓋シ一ノ創傷ハ他ノ創傷ニ影響シ、畢竟一切ノ創傷ヨリスル同時ノ出血ニ由テ失血死亡ナ來シ、從テ單一ノ損傷ヨリスル出血ニ由ルヨリモ早ク死亡ナ致スモノナレバナリ、之ニ反シテ(例之バ)一ハ比較的徐々ニ他ハ極メテ速ニ失血ナ誘起シ得ヘキ二箇ノ創傷ニ就キ乙ノ損傷ナ甲ノ損傷ヨリモ早ク或ハ之ト同時ニ或ハ其直後ニ受ケタル場合ニ於テハ乙ナ以テ最近死因ト宣言スルノ理由アリ、然リト雖モ乙ノ損傷ナ受ケタル時甲ノ創傷ニ由テ生起セラレタル失血現象ガ愈〻充分ニ進歩シアリシニ從テ乙ノ損傷ナ最近死因ト鑑定シ得ルノ理由ハ愈〻減少スル者ナリ

失血ニ關スル死因先後ノ疑問

仍ホ他ノ損傷ニ關シテ記載スヘキハ、正ニ最要且ツ最多ナル損傷即チ頭部損傷ニ於テ或ル一定ノ損傷ガ死亡ナ來セシヤ果シテ然リトスレバ何時死亡ナ來シタルカノ疑問ニ答フルナ極メテ困難ナルノ一事ナリ、吾人ハ後章ニ於テ頭部(腦)損傷ノ豫後ガ如何ニ不確實ナルカナ論スルナアルヘシ、即チ一方ニハ初メ何等ノ症候ナ呈セス或ハ唯僅微且ツ一時性ナル症候ナ呈スルニ過キサリシ損傷ト雖モ後ニ至テ致死的ノ轉歸ナ取リ、一方ニハ同樣ノ先例ニ於テ其多數死亡ニ終リシ所ノ腦損傷ニメ却テ治癒スルナ稀ナラサルノ事實ナ見ルヘシ、依テ吾人ハ一定ノ頭部損傷ガ實際必ス死亡ナ來スヤ否ヤナ絕對的確實ニ豫言シ能ハサルナ多キガ故ニ如何ナル時日內ニ於テ其死亡ノ起リシカナ明言シ得ルノ場合ハ愈〻少ナキモノナリ、故ニ斯ノ如キ場合ニ於テハ唯蓋然的ノ斷定ナ下シ此目的ニ對シ損傷ノ廣袤及性質若クハ當該腦部ノ生命ニ對スル重要ノ度ナ觀察スルノ外何事ナモ成シ能ハズトス、第一ノ關係ニ於テ吾人ハ廣大ナル腦損傷ハ限局的ノ損傷ヨリモ遙ニ早ク死ナ致シ且ツ腦部分ノ直接的離斷ノ外同時ニ脈管ノ離斷セラルヽヨリ來ル出血殊ニハ多數ノ損傷ニ際シ其負傷ノ時ニ現ハルヽ腦震盪モ亦頭部損傷ノ經過上著ルシキ影響アルコナ知レリ、是レ腦震盪ガ一ノ解剖的變化ナ徵セス唯他ノ損傷ノ性質ト場合ノ特別事情トニ由テ認定セラルヽ者ナルナ以テ一層深ク注目ナ要スル所以ナリ、第二ノ關係ニ於テハ中樞的腦部分ハ一般ニ外周的腦部分ヨリモ生命上遙ニ重要ニメ其損傷ハ他ノ腦部分ノ損傷ニ比スレバ甚タシキ生命ノ危險ナ有シ且ツ速ニ死ナ致ス者ナルハ人ノ知ル所ナリ、最モ速ニ死ナ致スハ、ヴァロリー氏橋及延髓ノ損傷ナリトス、然レトモ吾人ハ右岩樣骨稜錐狀部ニ沿フテヴァロリー氏橋右半ノ中央ニ至ル迄右耳後ニ小刀刺傷ナ受ケ即時ニ人事不省ニ陷リシモ三日半ナ經テ初メテ死亡セシ一男子ナ剖檢セシコトアリ、此男子若シ同時ニ或ハ其前後ニ他ノ致死的損傷ナ受ケ而ノ即時ニ死亡シタランニハ(實際他ノ損傷ガ死亡ナ來シタルナラン、ヴァロリー氏橋ニ於ケル自然的ノ失血ハ必スシモ即時ニ死亡ナ來サヽル事ハ吾人ノ屢〻實見スル所ニシテ薄キ皮質層ナ留ムルノミニシテヴァロリー氏橋ノ殆ト全ク破壞セラレタルニ拘ハラス出血後尙ホ十二時間生存セシ所ノ一婦人ナ剖檢シタル近時ノ實例アリ

頭部損傷ニ關スル死因先後ノ疑問

死因併存ノ際ニ於ケル觀察ノ必要及全上ノ實例

前文掲ク所ノ外尚ホ死亡ノ遲速ニ關シ種々ノ個人的關係殊ニ年齡及健康狀態モ亦之ニ影響アルヿヲ考フルキハ法醫ガ致死的損傷ノ併存ニ逢フノ際其發見セル損傷ノ一箇ノミガ正ニ其死亡ヲ起シタルヿヲ判決スルノ必要ナルカハ之ヲ證明シテ餘リアル多數ナル死因ノ併存スル實例トシテ吾人ノ經驗セル左ノ事件ヲ掲ゲヘシ

千八百六十七年十月維也納市ニ於テ一ノ貨幣入書狀配達人ガ殺害且ツ奪掠セラレタル事件アリキ剖檢ノ際左顳顬部ニ於テ一ノ銃創ヲ發見セリ、是レ其創口ノ直後骨中及腦皮質中ニ箝在シタル小尖丸ニ由テ判決セラレ得シ如ク小口徑ノ拳銃ニ由テ受ケタルモノニシテ、腦ノ損害ハ從テ廣大ナラサリシト雖モ其部位ノ腦膜間幷ニ頭蓋骨ニ滯フテ稍多量ノ出血層アルヲ認メ其他亦脊柱ニ達シテ哆開セル切創ヲ前頭部ニ發見セリ、而シテ其切創ハ喉頭ト舌骨トノ間ニ侵入シ悉ク頸部ノ大血管ヲ離斷シ右側ニ於テハ脊椎動脈管中ニ達セルモノナリキ、而シテ更ニ此切創下ニ於テハ著明ナル絞扼溝アリテ頭ノ左半ヲ右上方ニ向テ周匝シ一側ニハ喉頭ニ沿フテ頭部創右方ノ部分ニ上リ他ノ一側ニハ正ニ項ノ正中線ニ於テ有髮頭部中ニ進入スルモノナリキ

吾人ハ鑑定書ニ於テ此諸創傷ハ皆生活中ニ生シタル者ナレモ其死亡ハ第一ニ頭ノ切離ノ爲メ失血ニ由テ來リシヿヲ宣言セリ、是レ其屍體ノ甚タシキ貧血ヲ微スルト被殺者ガ夥シキ流血中ニ發見セラレシトニ據リ毫モ疑ヲ容ル可カラサル所ナリトス、其他吾人ハ絞扼溝ハ明カニ頸創ヲ受ケタル以前ニ生セシヿヲ確明セリ蓋シ既ニ切創ヲ生シタル後ニ在テハ頸ニ纏絡セル繩縮ハ其皮膚ニ於テ一ノ保支ヲ有セサルヘキヲ以テナリ、銃創ニ關シテハ其創傷生命ニ危險ナルヿ最モ甚タシト雖モ敢テ即時ニ且ツ必然死ヲ致スヘキモノニアラス之ニ由テハ先ツ人事不省ヲ來サヽル可カラスシテ頭部ノ切創ハ被殺者ガ銃創ノ爲メ昏倒シタル後之ニ加ヘタル者ナルヿヲ宣言セリ、何トナレハ何人ニ由テモ即時ノ死亡ヲ來スニ足ルヘシト認メラルヘキ斯ノ如ク廣大ノ切創ヲ頭部ニ加ヘタル後其加害者ガ何故ニ鳴響ニ由テ犯罪ヲ曝露スルノ虞アル頭部ノ銃撃ヲ加ヘタルカノ理由ヲ見出シ能ハス而シテ同人ハ被殺者ニ與ヘタル數般ノ暴行ヲ始ムルニ先ツ頭部ニ對スル銃撃ヲ以テシタルヿ自カラ想像スルニ足ルヘキヲ以テナリ、爾後直チニ捕獲セラレタル犯罪者ハ同人ガ實際先ツ拳銃ヲ以テ配達夫ヲ射撃シ次ニ繩索ヲ以テ絞扼シタルモ尚ホ生活ノ徵ヲ現ハセシガ故ニ遂ニ銃獵用小刀ヲ以テ頸部ヲ切離シタルヿヲ自白セリ

(三)致死的傷害ノ發生原因　Entstehungsursache der tödtlichen Verletzung.

墺國刑事訴訟法第百二十九條　損傷アルヿヲ認メタルトキハ殊ニ(一)其損傷ガ或ル他人ノ行爲ニ由テ死亡者ニ加ヘラレシヤ否ヤヲ檢明スヘシ……

普魯西國規則第二十九條　何レノ場合ニ於テモ先ツ死亡ノ原因ニ關スル鑑定ヲナスヘシ——

—但シ最初ニ犯罪的誘因ノ疑問ニ注目スルヲ要ス

上文已ニ如何ナル器具ヲ以テ且ツ如何ナル方法ニ由テ損傷ヲ與ヘタルカヲ認識スヘキ要點ヲ論述シ而シテ後章ニ於テハ局處ニ關シテ損傷ヲ論スルノ際更ニ此關係ニ於ケル證據點ヲ擧示スヘキガ故ニ茲ニハ唯自殺及自殺ト之ニ類スル他ノ殺死トノ區別ヲ記述シ而ノ其他醫學的ノ方面ヨリ被害者ヲ發見シ並ニ當該事件ノ特別事情ヲ解明スルニ適當ナル檢査法ヲ論述スルニ止ムヘシ

自殺　Der Selbstmord.

自殺ノ如何ニ頻々行ハルヽカハ日常ノ經驗ニ據テ明白ナリ、統計ニ據レハ自殺ノ數ハ斷ニズ增加ノ傾向アルヲ知ルヘク其原因ハ獨トリ人口ノ增加ノミナラス尙ホ諸他ノ事情ニ就テ之ヲ求メサル可カラス、例之ハ埃國（ライタ）河西地方ニ於テ千八百七十一年中軍隊以外ノ人民間ニ於テ千五百五十名、千八百七十二年中千六百七十七名、而シテ千八百七十四年中已ニ二千百五十一名ノ自殺者アリキ、人口稠密ナルビョーメン州ニ在テハ千八百七十一年中五百五十名、千八百七十二年中六百二十名、千八百七十四年中七百六十七名ノ自殺者ヲ出シ、維也納市ノミニ於テハ市醫ノ報告ニ據レハ千八百七十年ヨリ千八百七十八年ニ至ル各年度中各、九十九名、百三十二名、百四十一名、百五十二名、二百十四名、二百五名、二百八十名、百九十八名、百九十三名ノ自殺者ヲ出シ、千八百八十一年乃至千八百八十四年ニハ二百

三十一名、二百二十四名、二百二十名、二百四十八名、而シテ千八百八十八年ニハ三百四十五名、千八百八十九年ニハ三百六十六名ノ自殺者ヲ出スニ至レリ、其他ノ邦國ニ於テモ亦同樣ノ現象ヲ呈シ＊バイエルン國ニ於テハ千八百五十七年乃至六十三年ノ七年間ニ於テハ十名、千八百六十四年乃至七十年ノ七年間ニ於テハ已ニ九十名ノ自殺者ヲ各百萬ノ人口中ヨリ出セリ、普魯西國ニ在テモ亦各百萬ノ人口ニ付キ千八百二十年乃至三十四年ニハ八十八名、千八百三十五年乃至四十一年ニハ百三名、千八百四十九年乃至五十二年ニハ百八名、千八百六十九年ニハ百三十四名ノ自殺者ヲ出シ、佛國ニ於テハ千八百三十年乃至三十二年ニ六十一名、千八百四十一年乃至四十二年ニ八十一名、千八百五十二年ニ百三名、千八百五十八年ニ百十名ノ自殺者ヲ出セリ

＊ツェー、マイル C. Mejer 氏著 Statistische Studien über den Selbstmord in Bayern. Friedreich's Blätter f. ger. Med. 1872, 1550. ヲ見ヨ歐羅巴各國及歐洲外諸邦ニ於ケル自殺統計ノ最モ詳密ナル報告ハモルセルリー H. Morselli 氏ノ眞著中ニ揭載セリ此書ノ獨乙文譯ハ „Der Selbstmord. Ein Capitel aus Moralstatistik“ ナル書名ヲ以テ千八百八十一年ライプチヒ市ブロックハウス Brockhaus 氏出板所ニ於テ發行セリ

斯ノ如ク自殺數ノ漸次ニ增加スルハ法醫學的ノ關係ニ於テモ亦暴力的死亡ノ判決ニ際シ大ニ注目ヲ要スルモノトス、是レ實在ノ事件ニ際シ其自殺ナルカ或ハ第三者ノ手ニ成レル暴力的殺死ナルカノ疑問ヲ生スルノ場合比較的頻繁トナレルヲ以テ愈〻其緊要ノ度ヲ增加スルモノナリ

各國ノ統計ヲ見ルニ自殺者中著シク男性ノ者ヲ多シトス、即チ千八百七十一年中埃國ニ於